

---

# **新世纪エヴァンゲリオン～未来への案内人～**

鉢嶺来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン～未来への案内人～

### 【Zコード】

Z8253L

### 【作者名】

鉢嶺来

### 【あらすじ】

5／6 累計ユニーク43000突破ありがとうございます！

注意書き・人様の作品に似通つてしまつて いる部分がある そ うです。  
嫌悪感を抱く方は読むのをお控えください。

今度は被らないように他の作品などをじっくり見て、書きたいと

思います。

誤字について感想くださった方、ありがとうございます。  
6/12に修正いたしました。

ゼーレの計画通りにサードインパクトは起きた。

シンジは自らの行いを悔い、呪い、絶望して深い眠りへとつぶ。  
最後に残したアスカの言葉「シンジ」、あれはどういう意味だったのか？

そして目が覚めたとき、目の前には自分自身が立っていて…  
しかも自分の姿は碇コイそっくりな女の子になっていて！？  
TVアニメ版をベースに時代逆行、パラレルワールド、性転換といった物が含まれます。苦手な方は戻るボタン！

超絶短い後日談あります。

<http://ncode.syosetu.com/n3401m/>

## プロローグ（前書き）

TVアニメ版、旧劇場版をベースに時代逆行、パラレルワールド、性転換といった物が含まれます。苦手な方は戻るボタン！

## プロローグ

「サード発見、これより排除する」

「悪いな、これも任務でね」

少年に銃口を向ける3人の大人たち。

ドン！ドン！

銃声はその銃とは別の方から聞こえ、2人の大人が倒れる。

少年の下へと走る一つの影。

咄嗟に銃口を少年からその影へと狙いを変えた。

影は膝を上げ、残った1人の大人の顔面へと直撃させる。

そのまま銃口を大人へと向け。

「悪いわね」

そう言つてドン！と銃を放つた。

「さあ、行くわよ」

ドコへ…？

ボクハモウナニモシタクナイ…

「ぐずぐずしないー！」

やうひつと少年の手を無理やり引っ張り歩き出す。

イタイ兀…ミカトサン…

少年は抵抗もしなこまだ引かれていった。

「OK、アスカ、エヴァシリーズは確實に殲滅しなさい、直ぐにシンジくんも上げるわ」

Hレベーター内で携帯を耳に当ててミサトはアスカと話す。

アスカ…アスカガ…ブジ…?

ガーシと/or/とともにHレベーターの扉が開く。

それとともにミサトはシンジの手を掴み一回散へダッシュした。

「見つけたぞー！ サーデだー！」

「チルドレンは全員殺せー！ 生かしてこいを通すなー！」

ダンダンーダンー

浴びせられた無数の銃弾。

「ハハー。」

その他の一発がカトカトと墜たる。

しかしカトは止まらない。

初動機くと通じてこむコフロの前の防壁を降りる。

「これで…少しば、時間が稼げるわ…」

ジワっと、カトから血が滲み出る。

チ…チ…ダ…

「…カト…死んで…血が…」

そのシンジの声にカトがシンジの方を見て微笑む。

「んふ、やつと普通に喋つてくれたわね」

「は、早く戻してなこと…」

「ここによ、かへ、それよつ…」

カトの顔が厳しこものになる。

「シンジくん、最後の命令よ、ヒヅアに乗りなさい」

「……」

シンジの顔が曇る。

「……僕は、エヴァになんか乗らないほうがいいんです……  
トウジも傷つけた、カラル君も殺した。僕なんかが乗らないほうが  
が皆のためなんだ……」

「やうやつで、また逃げるの……？」

「……」

「あなたにはあなたにしか出来ないことがあるはずよ……、  
もう1回、エヴァに乗つて、そして全てにケジメをつけてきなさい、  
その後はあなたの好きなようにしなさい」

「でも……僕は……！」

シンジの言葉は途中で止まつた。

ミサトの唇がシンジの唇に重なつたからだ。

濃厚なキス。

鉄の味しかしない……キス。

「大人のキスよ、帰つてきたら続きをしましょ」

そう言つてミサトはシンジの右手に自分のロザリオを渡した。

「//サトさん…なり、//サトさんも一緒に…。」

シンジの言葉はまたも遮られる。

今度は防壁を破つてきた侵入者によつて。

ドン…と//サトの手によつてソフトに押される。

「アスカを…お願いね、シンジくん」

「//サトさん…」

上がつていいくつsoftの金縛を掴みながらシンジは叫んだ。

壁に背を向けて//サトの身はすれつと崩れていく。

「…こんな…ことなら、カーペット…替えて、おけばよかつた…かな、  
ねぇ…ベン…ベン…」

シンジはロザリオを握り締めていた。

僕がうじうじしていたからだ…。

また、一人、守れなかつた。

だから…せめて…せめて、アスカだけでも…。!

シンジの顔つきが変わった。

ジオフロントではアスカが最後の量産機を倒すところだった。

「これで…ラストオオオオオ！」

宙を舞い、最後の量産機の頭を両手で潰す。

「はあ…はあ…バカシンジの出る幕なんて、無かつたわね」

と、倒したはずの方向から攻撃が飛んで来た。

咄嗟に片手でA・T・フィールドを開き、攻撃を防御する。

しかし、アスカにとつては全くの意外に、その攻撃にとつては至極当然に。

A・T・フィールドは侵食される。

「ロングィヌスの槍！？」

ズンッ！

鈍い音が鳴り、式号機の胴体に風穴が空く。

「あああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああーーー！」

絶叫するアスカ。

アスカのシンクロ率は118%を超えていた。

体にかかるフィードバックもハンパではない。

痛みを堪えながらアスカは槍が飛んで来た方向を見る。

そこには倒したはずの量産機たちが再生を繰り返しながら立っていた。

翼を生やし、飛び、武装機へと群がりつくる量産機。

「ロロシテヤル… ロロシテヤル… ロロシテヤル…」

アスカの思念と叫びが武装機の手を伸ばす。

だが、降り注ぐ5本の槍は無残に武装機を貫いた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオン…

ほぼ同時にエルフ本部から光の翼を纏つた初号機が姿を現す。

シンジの視界に無残な姿の武装機に入る。

プリン、シンジの頭の中の何かが切れた。

「汚い手で…アスカに触るなああああああああ…！」

音速を遥かに超えたスピードで瞬時に5体の量産機を薙ぎ倒す。

そして一本、一本、式号機に刺さった槍を抜いていく。

最後に刺さっていた槍を抜き終わるとほぼ同時に違う槍が初号機に向かつて飛んで来た。

A・T・フィールドが展開される。

初号機は式号機を抱えその場を跳んだ。

初号機の展開したA・T・フィールドは侵食され槍は初号機が立つていた場所へと突き刺さる。

倒したはずの5体の量産機も復活していた。

「発令所！聞こえますか！？」

シンジの叫び。

「シンジくん！もう充分よ、逃げて！」

通信から聞こえたのはマヤの声だった。

「…もう、僕は…逃げません…！」

「シンジくん……」

「それより、ここいらを倒す方法は無いんですか！？」

「残念だけど、S2機関が搭載されたエヴァシリーズを倒すことには不可能だ……」

今度はシゲルの声。

「なら……時間を稼ぎます……その間に、アスカをお願いします……！」

発令所の3人はシンジのこの発言に驚きを隠せなかつた。

以前のシンジには考えられない発言だ。

シンジは言うと同時に地面に突き刺さつた槍を抜いてそのまま空へと力任せに投げた。

槍はそのまま大気圏外へと飛び、月まで到達する。

(槍さえなれば……少しは時間を稼げる………)

シンジの考えは間違つていなかつた。

シンジの現在のシンクロ率は200%を超えている。

このA・T・フィールドを破る方法はロンギヌスの槍を使うしかないのだから。

シンジは近づいてくる量産機を殲滅しながら次々へと槍を宇宙の

彼方へと放る。

「Jの死闘は3時間近くにも及んだ。

発令所ではシゲルとマコトが外へ行く準備をしていた。

「ちょっと2人とも、どこへ行くの！？」

マヤが叫ぶ。

「シンジくんの負担をちょっとでも減らさないとダメだろ」

「ああ、頼まれたしな、「アスカをお願いします」って

そう言つて2人は頷き。

「いいですね、副指令？」

「構わんよ……」

冬月のその言葉を聞くと、2人は発令所を飛び出した。

（ビリでいる碇……、お前の息子は今懸命に戦っているぞ……）

「ああ、一つになろう。」レイ

ゲンドウは右手を差し出しレイの体内へと侵入する。

…が、その田論見は崩れ去った。

ゲンドウの右手は跡形も無く消滅し、後ろへと後ずさる。

「碇くんが呼んでいた…」

そう言つとレイは巨大な白い人型になり上へ上へと昇つていった。

発令所のマヤにレイの白い手が憑き抜ける。

「…ひ…

声にならない声を上げ、マヤは体を震わせた。

「…何…今の…？」

シンジはよく戦っていた。

これから勝ち田のない戦いだ。

終わりの無い引き算。

9から何回引いてもそれは0にならなかつた。

頭を砕き、腕を挫き、足を切断しても、尚も再生を繰り返す。

シンジの疲労はピークに達していた。

唯一の救いは突然現れたシゲルとマコトが式号機からアスカを助け出したことだつた。

「……？」

数が足りない。

いつの間にか3体、量産機が消えている。

「はあ……はあ……ど二だ…？」

「ウー」と言つ音とともに空から凄まじいスピードで「何か」が飛んできた。

それはロンギヌスの槍。

しかもオリジナルだつた。

それは初号機のA・T・フィールドを容易く貫通し胸へと突き刺

۱۰۹

シンジの絶叫が轟く。

「オリジナル！？老人たちめ……ここで起こす氣か……！」

冬月が呴く。

初号機がゆっくりと空へと舞い上がる。

それに呼応するかの様に量産機も後へ続く。

初号機を中心に巨大な壁画のようなものが現れた。

ズン！ズン！

レプリカの槍が2本、初号機の両手に突き刺さる。

「約束の時は来たれり…」

「今こそ、初号機とそのパイロットを依り代として、計画の成就を

1

初号機の前に巨大なレイがゆっくりと現れる。

レイの姿は次第にカヲルになり、そしてまたレイへと変わる。

その手は初号機を包むように覆う。

瞬間、シンジの頭の中に膨大な知識が流れ込んだ。

人類補完計画の全容、ゲンドウの惑惑、ゼーレの惑惑、レイに芽生えた感情、カヲルの意思。

その容量は100MBのハードディスクに1TBの容量を無理やり詰め込むようなものだった。

結果、シンジの精神は砕ける。

全てはゼーレの予定通りに。

世界中から赤い十字架が立ち上がり、全ての動植物は赤い液体へと還元される。

人間という垣根を捨てて、全てが混ざり合つかの如く…

意識を取り戻したシンジの目の前にあるのは赤い「・」の海と横たわっている赤い髪の少女だけだった。

それから、シンジはアスカのためだけに生きていた。

アスカの口に無理やり「・＼・＼」を流し込む。

ただ、生かすためだけに。

アスカの口の両端からだらだらと「・＼・＼」が流れれる。

(アスカ…『めん』)

シンジは自分の口に「・＼・＼」を含むと血の味を我慢しながらアスカの口へと自分の口を運ぶ。

そう何日過ごしただろうか。

アスカの目が動き、シンジを捕らえる。

「…アスカ！」

シンジは思わず叫ぶ。

「……シン…ジ……」

これが赤い髪の少女の最後の言葉になつた。

シンジの目の前で少女の体が弾ける。

赤い赤い、＼・＼・＼へと。

それから数日、シンジはもう生きる氣力も失っていた。

(僕がもつと早く…しつかりしていれば…)

鈴原トウジとこの親友に怪我を負わせるとはよなかつた。

(僕がもつと早く…しつかりしていれば…)

綾波レイといつ少女を自爆させることはなかつた。

(僕がもつと早く…しつかりしていれば…)

渚カヲルという存在を殺すことはなかつた。

(僕がもつと早くしつかりしていれば…)

葛城ミサトといつ姉を見捨てるとはなかつた。

(僕が…しつかりしていれば…)

惣流・アスカ・ラングレーがこんな目にあわずに済むことはなかつた。

…

.....

.....

シンジは考えるのをやめた。

考えたって何も戻らない。

全てはこの赤い海に等しく溶けて混ざっている。

もう疲れた…

そのまま死のう、そうシンジは考え、画面を覗いた。

そして、そのまま意識は遠のいていった。

## 回帰（前書き）

Hector のアマゾンには正直あまりお勧めしません。  
色々細かなところが違つてると思いませんし^ ^ ;

じーわ、じーわ

蜩が鳴く。

まるで真夏の様な暑さの中、道路の真ん中で一人の少女が倒れていた。

「駄目か…仕方ない、ショルターに行こう」

電話ボックスの受話器を置くと少年はひらつと手元にある『写真を見る。

胸の辺りに「ここに注目」と書かれてあるその『写真の美女と待ち合わせしているはずだった少年はトボトボと歩き出した。

「やっほつ…来なきや良かったかな

数百メートルほど歩いたところで少年は少女に気付く。

「た、大変だ……！」

急いで少女に近寄る少年。

「脱水症状でも起こしたのかな？もしもーし、大丈夫ですか？」

その声に少女は「……うつ」と呻きを漏らし微かに目を開ける。

人の……声……！？

ガバッと起き上がる。

そして田の前の少年を見て、愕然とした。

僕が……いる……？

田の前に自分自身がいる。

夢だろつか……？

それにしても暑い。

世界が赤い海に満たされたあの日から暑さなんて感じなかつたのに……

赤い海……、そう、赤い海はどこに行つた？

辺りを見回す。

あるいは露のかかつた道路と遠くにある公衆電話。

そして田の前にいる「自分自身」。

何だ…？何が起きた…！？」にはビビだ…？

「あの…大丈夫…ですか？」

田の前の「自分自身」が話しかけてきた。

「あ、ああ、大丈夫…っ？」

今度は自分の出した声に驚いた。

明らかに声が高い。

「君、シェルターに避難しないの？僕はこれから向かおうと思つてたんだけど・・・」

シェルターに避難？まさか…まさか、これは…

「君！今は西暦何年！？」

「え…2015年だけど…それがどうしたの？」

自分が知ってる年代より1年違う。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

その時、遠くで爆発が起きた。

戦闘機がミサイルを撃ち込んだのだ。

「戦闘……！？」

少年が驚く。

少女が見るのはミサイルを撃ち込んだ先。

「……使徒……！」

「え？」

少女の咳きに少年が何事かと思う。

「（）はやばい……どこか他の場所へ……」

少女はどうやら少年の手を取り走り出した。

「ちょ……ちょっと待つて……」

少年は戸惑いつぶつに咳く。

瞬間、爆発が2人を巻き込んだ。

「「「うわ——————！」」

爆風で軽く4~5メートルは吹き飛ぶ。

そこに一台の青いルノーがドリフトを決めて現れた。

「の車…！」

少女の思ったとおりの人物がルノーから降りてくる。

「おまつたせー 待たせちゃつたかしらん?」

ルノーから降りてきたのは葛城ミサト本人だった。

「碇シンジくん、で、間違いないわね?…と、そっちの女の子は…?」

「いや、あの道端で倒れてて、それで…ってうわあーーー?」

少女は泣いていた。

顔面をくしゃくしゃにして、恩人の元気な姿がまた見れた」と。

「シンジくん? 女の子を泣かしちゃ、駄目でしょ?」

「ち、違うまよ、葛城さん…さ、君、大丈夫?」

「うん…だいじょ…」

そこで気が付いた。

『女子』といつも単語に。

そして思い出す、自分の声色が高っこ」と。

恐る恐る胸を触る。

「わ、わ、わ――――――――――――――

急に叫ぶ少女に思わず、3歩後退するカトシンジ。

「ほ、僕…お…女…の…?」

自分の顔をペタペタ触りながらその少女は言った。

「カトシンジはそんなの当然でしょ? と聞いたやうな顔をしていふ。

「まあ、こんな所に放つて置くことも出来ないか…

ミサトは溜め息をついた。

またリシコに小声で呟く。「

「あ、戦闘機が逃げてく…

シンジがぽつと呟く。

ミサトの言葉に反応し、振り返る。

「ちよっとおー。この地雷を使つわけえーーー?」

ミサトは2人に覆いかぶさつた。

「わっ」

「伏せて！」

一瞬の沈黙の後、大爆発。

ルノーは錐揉みしながら吹っ飛びミサトたちは地面を転がつた。

「やつたぞー！」

「じゅせう症君、君の出番は無かつたようだね」

「映像回復、映します」

「どうせあの爆発だ、何も残つてはいない」

「爆心地にエネルギー反応！」

「なんだとお！？」

回復した映像から映し出されたのは異形の形をした怪物。

「街一つ犠牲にしたんだぞ！」

「我々の切り札が……」

その映像を見ながら落胆する者たち。

「やはりA・T・フィールドか……」

「ああ、使徒相手に通常兵器じゃ歯が立たんよ

さう言ひとげンドウはサングラスの下に隠された笑みを作る。

映像の彼方へといる異形の怪物は仮面のよつな顔を再構築するかの様に2つ目の仮面を抉り出す。

「ほう、自己回復能力もあるのか

その刹那、映像が途切れた。

「おまけに知恵までついたようだ」

「はい…はい、わかりました」

今まで指揮を取っていた人物が受話器を置く。

「上からの御用達だ、君たちの出番だよ」

「碇君、我々ではあの怪物に何の対抗手段もなかつたのは認めよう」

「だが…君なら、勝てるのかね？」

ゲンドウは人差し指で軽くサングラスを上げると

「そのための、ナルフです」

と言つた。

シンジがミサトを呼ぶ。

「あの、 葛城さん」

「なら結構、 それじゃ やるわよ、 セーの！」

そう言つと3人は縦になつたルノーを力いっぱい背中で押す。

ドス・・・ンと言つ音と共にルノーは正位置に戻つた。

「大丈夫？」

「ええ、 口の中がしゃりしゃりますけど・・・」

「僕も、 大丈夫です」

「ミサト……でいいわよ、碇シンジへん、それと……」

ミサトが少女を見る。

「あなた……名前は?」

「ひやー!?

少女が固まる。

『前……ひりじゆう、シンジって名乗つていいのか!? いや、駄目だ、今は『ひりせり』『女』になつてゐみたいだし、それに田の前に紛れも無く』僕』がいる……

「どうしたの?名乗れない訳でもあるわけ?」

シンジは座しぶに少女を見た。

「あの、え~と、ひり、『シズク』です、僕の名前はシズク」

「なまはめ……」

「え?あの~碇ですか?」

「なんですか?」

〃サトが田を丸つゝべして言つた。

シンジも驚いてゐる。

「あ、あれ……そんな驚く」とですか?…でも、元でもある奴がじゅ  
ないですか?…は、ははは

「ま、まあ、確かにそんな珍しくなことだけ…でも本当に鈍然  
?」

「偶然ですよ、偶然…それよりも車ひつするんですか?」

「確かに…」れじや動きませんよ、〃サトさん

「ああ、それなら大丈夫よ」

ルノーは道路を走る。

落ちたバツテリーを使って。

「「こんなことして…いいのかなあ…」

シンジが不安げに呟く。

「いいの、いいの、私公務員だから」

「関係ない気がしますけど……」

「可愛いくないのねー」

いつも言ひながらミサトは携帯で電話を掛ける。

「ええ、彼の安全は確保したわ、あと成り行きで民間人を一名確保、事を急ぐから一緒に連れて行くわよ」

携帯の相手の声がよほど大きいのか耳から遠ざかる。

「仕方ないでしょ、あの状況で置き去りにするわけにもいかないし」

間違いない…これは『あの田』だ、あの田のあの時間にいる…

シズクは戸惑っていた、が、それ以上に自分の中には沸々と湧き上がる喜びの感情があった。

何が起こったのかはわからぬにけど…これで…もしかしたらあの未来を変えられる?

あの最悪な未来を…トウジをミサトさんをカラルくんを、みんなを、綾波を…そしてアスカも…救える…！？

シズクはカートレインに乗つかつたルノーの中から天井を見上げて微笑んだ。

「あ、そうだ、シンジくん、これ読んどいてね」

「ナートはやうこいつ『ムーリー、ゼルベ』と書かれた小端子をシンジに渡した。

「ネルフ……父のこぬ所ですね…」

「まあね~、お父さんの仕事、知ってる?」

「…人類を守るための、大事な仕事だと…先生からは聞いてます」

シンジとナートのやり取りを見てシズクは思つ。

「のまじや駄目だ、と。

何の因果かは知らないが自分は「」では、「碇シンジ」ではない。ところとは必然的にエヴァには乗れないといつてとなる。ならばどうしたらいいか?

答えは簡単だ、「」の「シンジ」を変えてこくしかない。

そしてそれをやれるのも自分しかいない。

幸い「自分自身」だ。

今、現在何を考えているのかは手に取るよつに分から。

「ねえ、シンジくん」

シズクはシンジに話しかけた。

「な……なに?」

「何か思いつめてるようだけど……?」

慎重にシンジの表情を読み取る。

「シンジ」は兎角壊れやすい。

些細なきつかけで殻に閉じこもることだってあり得る。

「わかる……かな、やつぱり……」

シンジは俯きながら言った。

「なんとなく……ね」

「父さんに呼び出されたんだ、『来い』って、ミサトさんも父さんの関係者みたいだし……」

やはりだ、とシズクは思う。

「の頃の自分にあるのは父親に対する、期待と、不安。

シズクの問いかにシンジは首を横に振った。

「お父さんは苦手?」

「わからない……、もう3年も会っていないから、突然呼び出されて戸惑ってるだけなのかもしれない」

少しの沈黙。

「あの…碇さん？」

「シズクでいいよ」

自分の名前がシズクである、という再認識の意味を込めシズクが言ひ。

「シ…シズクは、ヤ」

シンジは少し頬を赤く染めた。

シズクはそれを見て変な気分になつた。

他人から見ればそこにはいるのは間違いなく少女。

だがそこに存在する魂は紛れも無く少年なのだ。

目の前の男、それも「自分自身」が自分を見て頬を染める、という行為はなんだか訳の分らない気分にさせる。

「どうして、あんな所に倒れてたの？」

尤もな疑問だ。

だが生憎シズクにはその問い合わせに返せる答えを持ち合わせていなかった。

まさかサーディンパクトが起きて死のうと思つて田を殴つたら田の前は過去でした、

なんて言つても笑い話になるだけだ。

だから、とりあえず、の理由をつくる。

「わからない…倒れる以前の記憶が、ないから」

シズク自身、そこいらの小学生でももつとマシな理由が思いつくんじゃないかと本氣で思った。

「記憶が…ない？」

「うん、自分の名前と年齢以外は何も覚えてないんだ」

ミサトはさすがにシズクを険しい表情で見ていた。

「あ、ミサトさん」

シンジが何か話題を変えようとミサトに話しかける。

「なに?」

と、切り替えられたところで振る話題がないことに気が付く。

「あ、あの、これからこのネルフって所に向かうんですか?」

「まつね~」

「父のこどりひで行くんですよね…」

そしてまたシンジは俯く。

それセリフは横田で見ながら

「苦手なのね、お父さんのこと」

せつまつらうりと笑みを零して、

「私と一緒にね」と言つた。

一連のやつとつを聞きながらシズクは思い出す。

泣いてころぶ自分を。

逃げ出してころぶ自分を。

僕は…何をしてここに来たんだる?…

シンジが思つ。

「それを知るために、今、ここにくる」

シズクがぽつりと呟いた。

シンジはハツとなつてシズクを見る。

ミサトも眉を寄せてシズクを見た。

シズクは天井を見ていた。

「え？」

何故自分の考えていることが分かったのかシンジには理解できなかつた。

ミサトには呟きそのものの意味が分からぬ。

ますます眉間に皺がよる。

「やつでしょ、う？」

シズクは優しく微笑みながらシンジへと視線を移す。

「そう…だね、シズクの言つとおりだ」

「大丈夫、自分で決めたことなんだから、きっと、前へ進めるよ」

「そう…かな？」

「うん」

シンジはシズクの言葉に呑まれていく自分の感覚がなんのかわからなかつた。

他人の言葉をここまで素直に聞けたのは初めての経験だった。

僕でも…変われるんだ

そう思つたとき、シンジの顔には笑みが零れていた。

## 最初の日

- ネルフ司令室 -

「冬月、後を頼む」

そう言い残し席を立つゲンドウ

「3年ぶりの対面か…」

冬月は振り返り、ゲンドウが去った扉を見ていた。

自らの目的の為だけに生き、実の息子であり道具と言つ切る。

全ては計画のためだ。

深く、溜息が出る。

私も同類だな

それを認め、行動と共にしているのだから。

- ネルフ内部 -

「おつかしいわね~、確かにうちのはずなんだけど…」

頭をぽりぽりと搔きながらミサトが言ひ。

「もしかして、迷ったんですか?」

と、シンジ。

「『じめんねー、まだ慣れてなくつて』

「せつゝきも通りましたよ、――」

すばつとシンジの突つ込みが入りゲンナリするミサト。

そういえば『前』も迷つてたつけ

些細な事が戻つて来た事を再確認させてくれる。

苦笑しながらシズクはシンジとミサトのやり取りを見た。

「大丈夫、システムは利用ためにあるのよね」

やういつたミサトはゞいかへと連絡を取り始めた。

するとすぐにピンポンパンボーンと連絡の合図がなる。

『技術局一課、E計画担当の赤城リツコ博士、至急作戦部第一課、

葛城＝サト一尉まで」連絡ください』

「「それで大丈夫よん」

ミサトはウインク一つ、シンジとシズクに決めて見せた。

田の前のHレベーターが開く。

そこには金髪黒眉毛の女性が立っていた。

「あー、コソ」「…」

赤木リックはすこいとミサトを押すようにHレベーターを降りる。

「何やつてたの、葛城一尉？人手も無ければ時間も無いのよ」

「えへ…」めん…

そう言つてミサトは片手を顔の前にやり謝つた。

ふう、と呆れたようにため息をつくとコシロはシンジへと田をやる。

「例の男の子ね」

「わ、マルディックの報告書によるサードナルドレン

次にリック「はシズクへと田をやつた。

「「」の子は…？」

明らかに顔が怪訝になる。

「もうつき連絡したでしょ、保護した民間人、名前は碇シズクちゃん

リツコはマジマジとシズクを見る。

特に顔を念入りに。

シズクの顔は中学生の幼さは残るもの正に碇コイさんのものだつた。

(「の顔で、名字が碇…そしてサードチルドレンである彼と一緒にた…？これが全て偶然だとでも言つの…？」)

「あの…僕の顔に何かついてますか…？」

シズクはドギマギとした口調でそう言った。

リツコはすっと田線をずらして、

「いいえ、何でもないわ」

と言つた。

「よひしへ、碇シンジくん、E計画担当、赤木リツコよ、リツコでいいわ

「あ、あ、よろしくお願ひします」

「 イハアハ、つこて来なさい」

リッコが施す。

「あ、シズクちゃんは」の先は駄目よん」

ミサトがシズクを人差し指で制止した。

「問題ないわ、その子も一緒にいくわよ、葛城一尉」

リッコの思わず発言でミサトは皿をひん剥いて驚いた。

「何言つてんのよーリッコー民間人に機密見せる気ー…?」

(その子がただの民間人、なら見せないわ…)

リッコの耳打ち。

(どうこうことよ…?)

(今は詳しこことは言えないけど、もしかしたらこの子はただの民間人じゃないかもしない、ところどりよ)

(はあ…?まさか名字で判断したんじゃないでしょうね…)

(ミサトじやあるまいし、そんな軽率な判断はしないわ、もっと重要で危惧されることがよ)

ミサトさんのコッコの皿葉にボリボリと頭を搔き、

(わあかつたわよ、その代わり、後で訳、さしつ教えなさいよ)

と耳打ちした。

「あの……僕はどうすれば……？」

シズクは2人を見上げる。

「あ、ああ、いいわよん、ついて来なさい、こいつよ  
「みけひ」と

助かつた、とシズクは思つた。

すんなりシンジと共にエヴァのあるケージに入れるとは思つてなかつたからだ。

2人の耳打ちの内容は気にはなつたが、とりあえず第一段階、クリアといつたところか。

『繰り返します、総員第一種戦闘配置、対地迎撃戦用意』

暗闇のリフトの中、戦闘配置の通報だけがやけにほつきり耳に聞こえた。

「ですって」

「これは一大事ね」

二人とも他人事のように話す。

「で、初号機はどうなの？」

ミサトのその声にほんの僅かだけ反応するシズク。

尤もここにいる誰もが気づかない程度だが。

「B型装備のまま、現在冷却中」

「それ、本当に動くのか？まだ一度も動いたことないんでしょ？」

「起動確立は0・0000000001%、オーナインシステムとはよく言ったものだわ」

「それって動かないってこと？」

「あら失礼ね、0ではなくてよ」

二人の会話を聞きながらシズクは初号機のことを思っていた。

母さん…

-ネルフ本部、ケージ -

「うるさい

もう言つて立ち止まるリツコ。

バッと室内の照明が照らされる。

そこにあるのは巨大な紫色の顔。

「顔…巨大ロボット…？」

シンジの驚きの声を横にシズクはその紫色の巨人を見上げる。

久しぶり…、母さん

その顔には自然と笑みも零れる。

リツコは怪訝そうにシズクを見る。

初号機を見ても動じない…どころか、笑つてみせる…？

それはリツコの中でシズクの警戒を上げるのに充分な行為だった。

それはそうだろう。

いきなりこんなものを見せられれば100人中100人が驚く。

それを一目見て、驚くどころか笑つて見せたのだ。

ズズズ…

軽い振動がリツコを我に返す。

視線をシズクから初号機へと移す。

「正確にはロボットじゃないわ、人の作り出した究極の汎用人型決戦兵器。

人造人間エヴァンゲリオン、その初号機よ」

「これも…父の仕事ですか…」

「そうだ」

不意に響く声。

その声にシンジは顔を上げる。

父さん…か…

シンジに続きシズクも顔を上げる。

そこに笑みはなかつた。

絶対に止めてみせる…父さんも、ゼーレも…

シズクは右拳を堅く握つた。

ゲンドウはサングラスの奥からシズクを見る。

自分の計画の根底を成す女性に似たその少女を。

ゲンドウがシズクを見て何を考えているのかはその表情からは窺い知れなかつた。

ゲンドウは静かに口を開く。

「……出撃」

ケージ内に響く声。

「出撃！？零号機は凍結中でしょー！？」

ミサトが叫んだ。

そしてリツコの方に振り返る。

「まさか…初号機を使つてしまつなの?」

「他に道が無いわ」

リツコは淡々と声に出す。

「ちよつとい、レイはまだ動かせないでしょ? パイロットがないわよ」

「わざわざ届いたわ」

「マジなの…?」

おそれべりサトは全てを分かつた上で聞いている。

以前は何のことかもわからなかつたが、今はわかる。

「どうか…『シズク』である僕は部外者、部外者には田もくれないよね

隣のシンジを見る。

シンジは声を荒ながら叫んでいた。

周りの人間はシンジを物として見下す目をしていた。

シンジはビニが期待していた自分が心の中にいたことを忘れ、拒絶する。

「シンジくん、駄目よ、逃げちゃ、お父さんから…何よつ、自分から」

「わかつてゐよーでも…出来るわけ、なつよーー」

シズクがシンジの直ぐ隣に立った。

「なら、乗らなければいいんじやない？」

シンジはその声に顔を上げる。

「……え？」

「だつて、乗りたくないんでしょう？」

「ちよつ…部外者が口を挟むのは…」

ミサトが声を荒げる。

シズクはミサトを無視して言葉を続けた。

「でも、このままじゃ何も変われない」

「変われない…？」

「変わるために、来たんだしょ！」

「変わる、ために……」

会話の中、ガラガラとこう簡易ベッドが移動する音が聞こえた。

綾波……！

シズクはその簡易ベッドに誰が乗っているのかを思い出す。

「パーソナルデータをレイに書き換え、急いで！」

リツイの指示。

父さんか……

心の中で舌打ち。

瞬間、ケージ内に轟音が響き渡る。

使徒の攻撃によつてネルフ本部の真上がぐらついた。

「…！」に気が付いたか…」

ゲンドウが呟く。

もう一撃、本部そのものが大きな地震に襲われたような振動が来た。

激しい振動によつてライトが落ちる。

「うわーー！」

シンジが尻餅をつく。

ライトはシンジ田掛けて直撃のコースを取つた。

ガゴン…！

ライトはシンジに当たる前に初号機の手によつて弾き飛ばされた。

誰もが驚きに目を開いた。

シズク以外は。

「インターフォースもなしに反応している？…とこりよつ、守ったの？彼を？…いける！」

ミサトが微笑する。

シンジはレイの元へと走り、ベットから落ちたレイを抱き上げた。

「……………」  
「あ、はあ」

痛々しい包帯が全身に巻かれ、苦痛で表情が歪む。

「…こんな娘があれに乗るの…？」

シンジの掌には赤い血が広がる。

歯をぎゅっと食い縛る。

逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ…

そう思い込もうとした時、声が乱入した。

「逃げないと前に進むのは違つよ

シズクだった。

シンジは呆然とシズスクを見る。

「どうする？ その子を守るために前へ進む？」

微笑みを絶やすことなく聞いてくる彼女にシンジは何故か温かいものを感じた。

「逃げないだけでは… 何も変わらない…？」

シンジの問いに更なる微笑みで答えを返す。

「やつだ… そりだよね、やります… 僕が乗ります」

## **最初の日（後書き）**

いまだサキエルと戦つてないとか  
ww

## サキエル戦

「//サトちゃん」

シンジとリックが出て行った後にシズクが//サトに声をかけた。

「何?今、ちよつち忙しいんだけどね」

「あの……シンジくんが戦つてるとこ、見れませんか?」

「はい?」

何を言つているんだろ?、この子は…

まさか発令所に連れて行くわけには行かないし…

そんな//サトの表情を読み取ったのかシズクは僅かに微笑みを浮かべ

「あ、やつぱり無理ですね、いいです、外で見ますから」

と、爆弾発言を投げかけた。

「外お?あなた死に行くつもり!-?」

思わず声を荒げる//サト。

「でも、シンジくんが乗る決意をしたのは自分自身の選択かもしれませんけど、

暁けたのは僕ですから……責任は取りたいんです

。そう言つたシズクの顔に微笑みは無かつた。

シズクにあるのは責任でも義務でもない、一個の断固たる『決意』。

「この子……本気だわ……」

ミサトは顎に手をやり考え込む。

その時、一つの声が割つて入つた。

「構わん、発令所へ連れて來い、葛城一尉」

ゲンドウの声だった。

父さん……？

シズクはゲンドウの思惑がわからずゲンドウを見上げる。

「しかし……部外者を発令所に入れるのは……！」

「かまわん、と言つている、今は使徒撃退が最優先事項だ」

ミサトは少し沈黙したが、シズクの方を向き

「わかりました、シズクちゃん、じつちよ」

と言つた。

「第一次接続開始」

「エントリーフラグ、注水」

シンジは自分の足元からせり上がりつて来る赤い液体を見て思わず息を止める。

「大丈夫、肺の中の空気を全部吐き出して、  
肺が「・」で満たされれば直接酸素を取り込んでくれるわ、  
直ぐに慣れます」

シンジの息が限界に達し口を開ける。

「ふはっ、うつ…気持ち…悪、い…」

「我慢なさいー男の子でしょーー」

シズクは目の前のやり取りを見ながら最後の日を思い出していた。

真っ赤な「・」の海が寄せては返す、あの地獄の風景を。

だが同時に希望も持っていた。

なんの因果かは分からぬがこの時間に戻ってきた。

きっと未来を変えてみせぬ。

その思いで胸が一杯になつた。

改めてシズクは初号機を見る。

シンジくんを…『僕』をよろしく、母ちゃん

「双向回路、開きます」

「シンクロ率、41・3%」

「凄いわね…」

ロツ「の呟きが聞こえる中、シズクは淡々と物事を見つめていた。

(でも今ままじゃサキエルには勝てない…)  
の時、僕がエヴァを口に動かせなかつたのは何故だ?)

少し考える。

そして苦笑した。

簡単なことだ、僕自身、エヴァを信じてなかつたんだから

「ねえ、シンジくん」

シズクがシンジへと声をかけた。

突然の声に振り返るコシノヒロアト。

『え、シズク?』

『そ、わうかな』

「つさ、シンジくさせや、もひー歩を踏み出したよ

嬉しそうな声に混じる、若干の不安。

「せうだよ、それなり一緒に一歩を踏み出してくれる子を信じ  
なきや

『信じぬへ……』のロボットをへ

シズクは軽く頷く。

「やつ、そんなに緊張してちや何事も上手くこかないよ

』で、でもこれからあんな奴と戦つと思ひつて……』

そりゃそりゃ、ヒシズクは思った。

自分も今までこそ慣れたがもしこれが初体験だとすれば取り乱していくに違いない。

…といふか取り乱した記憶がある。

ポリポリと頬を人差し指で搔き、

「大丈夫、シンジくんなら出来るよ。その子を信じると同時に自分も信じなきゃ、ね？」

そのシズクの声にシンジの不安は随分取り除かれた。

「自分を信じる…か…ありがとうシズク、やってみるよ」

「頑張つて」

につこり微笑むシズク。

そんなシズクをシンジはモニター越しで見て頬を染めた。

「シズクちゃん、気持ちは分かるけど、部外者が口を挟まないで」

ミサートの声。

「…すいません」

今は張り合っても仕方ない。

苦笑を浮かベシズクは謝った。

そんなシズクに小むく溜め息をつくヒミサートはすぐに真顔になり、

ゲンヂウと冬円のいる方向へと振り返る。

「構いませんね？」

「勿論だ、使徒を倒さぬ限り我々に未来は無い」

ミサートは頷き、田をスクリーンへと移す。

「発進ーー！」

号令と同時に初号機が射出口から出口へと向かう。

「へーっ…」

体にかかるGに思わず苦痛の声を漏らすシンジ。

「いいわね、シンジくん？」

「ここで駄目って言つても降ろしてくれないだひつこ」

苦笑するシズク。

「はい、僕は…僕を信じてますから…」

シンジが答える。

シズクはシンジが羨ましく思えた。

あの時、あの場所で自分が同じ事を言いたかった。

しかし、それは叶わぬ願い。

ならば今、自分に出来ることを全力でする。

シズクは真顔でスクリーンを見た。

頑張つて…

「いい返事よ、シンジくん」

ミサトはウインクを飛ばす。

そしてキッと田を見開き叫んだ。

「最終安全装置解除、エヴァンゲリオン初号機、リフトオフ！！」  
ガロン、とこう音と共にセーフティが解除され、初号機が地面に立つ。

そういえば…トウジの妹が怪我しちゃうんだ…

シズクの田線は初号機から地上へと移される。

どうだ…どうこころ…？

画面を舐め回すように見て回る。

その様子をリックはじつと見ていた。

初号機を見ていな…？使徒を見ているわけでもない…一体何を見ているの…？

「シンジくん、今は歩く」とだけ考えて

『サルの指示が飛ぶ。

『はー…（歩く）』

一步、初号機が踏み出す。

発令所からわっと歓声が上がった。

シズクと、リツコ以外の。

いなーなあ…もつ歴史と違うのかな…

そう思った時、シズクは自分で自分が可笑しくなった。

変なの、歴史を変えようと思つてゐる僕が歴史が変わつてゐることにガッカリしてゐ

首を静かに横に振ると初号機に目を移す。

途中、リツコと目が合つたがあえて無視をした。

現に『じつち』の僕も以前の僕とはまるで違つ…

と、その時、サキエルが初号機に向かつて突進してきた。

『うわっ』

驚いて立ち止まるシンジ。

落ち着くんだ…！僕は、僕を信じるんだ…！だから…！

バシイ！！

掌底のように打ち込まれたサキエルの左腕を咄嗟に難ぎ払う。

『い…のあお…』

流れるように左足でサキエルを蹴り上げよつとする。

「よつしゃあー！上手いー！」

ガツッポーズを取る!!サト。

…が

初号機の放った蹴りはサキエルに当たる直前、

赤い光の壁に弾き返された。

『うわあー…』

「…A・T・フィールド」

思わず呟くシズク。

その瞬間、リシコのシズクに対する疑いは搖るやうのないものに昇華した。

一体何者なの……？」の子は？

『どうすればいいんですか！？』

発令所に響く焦りとも取れるシンジの声。

「それはA・T・フィールドといって一種のバリアみたいなものより論的にはエヴァにも同じものを張ることが可能なはずです」

分からぬものを考えていても仕方がない、今は使徒殲滅が最優先なのだ、と考えたリシコがスクリーンに振り向き、淡々と述べた。

『か、可能なはずって……』

不安そつたシンジの声。

「シンジくん

重なるようにシズクの暖かい声。

『シズク?』

「信じなきや?」

『…………うん』

Hントリープラグ内、シンジは静かに目を閉じた。

瞬間、発令所がざわめく。

「初号機、シンクロ率上昇!…50%…60%…63・4%…!」

「初号機よりA・T・フィールドの展開を確認!…!」

「なんて子なの…」

思わず呟くロジコ。

今日、初めてHヴァアに乗った少年が使徒と肉弾戦をし、あまつさえA・T・フィールドを張ったのだ。

それは確かにシズクの一言一言をシンジが受け入れた結果なのかもしねれない。

だが操縦しているのは紛れも無くシンジ本人なのだ。

エヴァに乗るために産まれてきた子…なのかもしれません

リツ「はまそつ思いながらも興奮を隠せないでいた。

『レガシイ』

体全体で覆いかぶさるようにサキエルを押し倒す。

「シンジくん、胸にある光球を狙つて…」

ミサトの声がする。

ガギン！！

「目標、A・T・フィールドを展開！」

「初号機からもA・T・フィールドを確認！位相空間を中和していきます！！」

ゴーリー

ア・ト・フィールドを中和されたサキエルのコアに初号機の拳が

発令所に響くシンジの声。

そこにいた大人たちは何も言わず…いや、何も言えずただその光景を見ていた。

何度も、何度もサキエルのコアを殴り続ける。

ピシッといづ音と共にコアにヒビが入った。

誰もが勝てる、そう思ったときだった。

「シンジくん、気をつけろーー！」

不意に走るシズクの声。

刹那、サキエルのコアが不気味に光り、体全体で初号機を包むよう抱きつくる。

「自爆ーー？」

ミサトが驚愕する。

瞬間、激しい振動が第3新東京市を襲つた。

サキエルと初号機のいた場所を中心に十字の光が天へと昇る。

「パイロットは！？」

呆然と見ていたミサトがはつとなつて叫ぶ。

「…初号機の反応を確認！」

「パイロットは健在です！！」

今度こそ、発令所から真なる歓声が上がった。

「よもや…あれ程とはな…」

冬月が呟く。

「問題ない、使徒は倒した、それだけだ」

「しかしな、碇…」

「シナリオの修正内だよ、冬田…」

アーティヒゲンデ。手で口を隠したまま、ニヤリと笑った。

## サキエル戦（後書き）

対第3使徒サキエル戦。

4話で1話分が終わるとか  
ww

「では、MAGI[モード]もトーターがない……と?」

「はい、それともう一つ

「何だ

ゲンジウの聞こえにコロコロは書類に手を落とす。

「DNA鑑定の結果、碇シズクのDNAが碇シンジのものと同一であることが判りました」

若干、冬月の眉が上がる。

ゲンジウは微動だにしない。

「老人たちか……」

溜め息をつくように漏らす冬月。

ゲンジウは表情を変えずに淡々と命令を出された。

「赤城博士」

「はい」

「碇シズクを……」

「わかりました」

- ネルフ病棟 -

シンジは使徒戦の後、軽い身体検査を受けるため、病棟の方へと来ていた。

シズクも何故か呼ばれて、検査を受けた。

これは先のDNA鑑定のためリツコが仕組んだことだ。

シンジが拳を数回、握る。

僕が…あの、化け物を倒したんだ…

シンジは今まで味わった事のない充実感を手にしていた。

シンジが検査を終えて、ドアを開けると先に検査が終わっていたシズクが立っていた。

「シズク…」

「お疲れ様、シンジくん、ちよつと、付き合っててくれるかな?」

「え、あ、うん」

一人はもう三つと病棟の奥へと向かって歩き出す。

「ねえ…シズク、どこへ行くの?..」

シンジの疑問。

「あや…、やつきの女の子の事、気にならない?」

やつきの女の子、ところのが青い髪をした少女の事だというのが直ぐに分かった。

「あ…、気に…なる」

「だから、やつきと、お見舞いに…ね」

やつきは一つの病室の前で立ち止まつた。

ネームプレートには「綾波 レイ」と書かれている。

「でも、よく名前とか分かったね?」

シンジの率直な疑問に冷や汗をかきながら、

「え、あ~、ま、まあね、と、とにかく、入るよ

と、シズクは言った。

「こん、こん。」

控えめのノック。

「綾波、入るよ」

カラッといつ音を立てて、病室のドアが開く。

ベッドには横になつたまま、こちらを見ているレイがいた。

「体は大丈夫?」

シズクが優しく微笑みながらレイに言った。

しかし、シンジの見たところ、とても大丈夫そうには見えなかつた。

先ほどと同じように包帯で何箇所もグルグル巻き。

痛み止めの点滴が効いているのか、それほど辛そうには感じなかつたが、それでも通常の怪我のレベルを超えていた。

「ええ」

レイがそつと答える。

「うう、良かつた」

シズクはそんなレイを見て微笑みを絶やさなかつた。

暫しの沈黙。

「…貴方たち…誰？」

これはレイの尤もな疑問だらう。

先ほど同じことは痛みであまり覚えていなかつた。

「あ、ああ、僕は碇シズク。こいつが碇シンジ、サードチルドレン  
だよ」

「そう……」

そう呟いた後、レイは赤い瞳を一回瞬きする。

「碇…？」

「あ、うん、彼はと…こここの総司令、碇ゲンドウの息子さん、僕は  
同じ苗字だけど関係ないよ」

ここで初めてシンジとレイの顔が合つた。

「あ、あの……初めまして……碇、シンジです……」

「…………」

「そ、そのー、そう、怪我は大丈夫なのかなー……なんて……」

「……ええ、もう何とも無いわ」

そうレイが答えた後、再び病室を沈黙が襲つた。

「……なぜ……」

「「え?」」

口火を切ったのはレイだつた。

「なぜ、私を心配するの?」

レイにとつての疑問。

シズクにとつての愚問。

「それは田の前に大怪我をしてる子がいたら誰でも心配するよ、ねえ、シンジくん?」

「う、うん」

シンジはぎこちなく頷く。

「わからないわ」

思わず腕組してしまうシズク。

「うーん、綾波も大切な人が怪我とかしたら心配にならない?」

「大切な…人…?」

「うん」

少し考えた後レイは淡々と述べる。

「わからないわ」

「うーん、でも、まあ、そんなところだよ、僕らは綾波が大切な人だから心配になつたんだ」

三度の沈黙。

シンジは沈黙に耐えかねていた。

レイの口が開く。

「私が…エヴァのパイロットだから?」

セのレイの間にシズクは静かに首を横に振った。

「違うよ、綾波がエヴァのパイロットじゃなくとも、僕たちはきっと心配している」

一呼吸置いて、シズクは話を続きを続けた。

「僕たちは綾波に友達になつて欲しいんだ、でも友達になつて欲しいから心配してるんじゃなく、純粹に一人の女の子が怪我をしている、だから心配して来てるんだよ」

シズクは少しうつむいたまま、

「ねえ、シンジくん？」

と囁いた。

シンジは少し困惑したように、

「う、うん、わかった、タンカで運ばれてきたときには本当に吃驚したし、心配もした…

あんなに血を出してたし…」

レイはシズクとシンジの答えに一回、目をパチクリさせた、

「…………やっぱり、わからないわ…、でも…嫌じゃなー…………」

レイのセの言葉にシズクは満足そうな微笑みを浮かべる。

「今は、それでいいよ、嫌じゃなこつていうだけで…僕は凄く嬉しい」

「それじゃ、今日はこのへりで帰るよ、わづ面会時間もとひへりへり

過ぎてるしね、

また明日も来るか？」

「…………ええ」

「行け、ひ、シンジくん」

「うん、あ、綾波、それじゃまた…」

病室から出てエレベーターに向かう間、シズクは今後のことを考えていた。

これからどうじうか…なんとかしてネルフに入れないかな…  
はは…流石にそれは無理かな…

「シズク？」

シンジが心配せずにシズクを見る。

「あ、『めん、ちょっと考え方、でも良かつたよ、綾波の怪我も思つたより重症じゃないみたいだし』」

シズクはシンジにそう言って微笑んだ。

「うふ、やうだね」

シンジもその微笑みを見て安心したのか笑顔でそう言った。

セツノ「ひここの間にエレベーターの前に着く。

チン、といつ音を立てて、エレベーターの扉が開く。

…と、そこにリックが立っていた。

「コッコセ…？」

「シズクちゃん、ちょっとといい？」

「は、はい…」

「『めんね、シンジくん、喫茶店でも行つて待つてくれるかしら？会計はこれからで持つから』」

「え、あ、はい、僕は構いませんけど」

「それじゃ、行きましょうか、シズクちゃん」

「はい…（リックさんと僕に用事…何の用だろ？）」

シズクは疑心暗鬼になりながらエレベーターへと乗り込む。

ふと目の前には心配そうなシンジの顔。

シズクは軽く微笑むとすぐ戻るから待つて、と言った。

シズクとリックが暫く歩いて着いた場所。

そこはネルフ本部司令室だった。

用があるのはリックさんじゃなくて父さんか…

「失礼します」

「入れ

リックの礼に重く、冷たい声が返ってくる。

一人はゲンドウと冬月の二人だけしかいない、だだっ広い司令室の中へと足を踏み入れた。

「さて…シズク君といったかね」

ゲンジウの代わりに口を開く冬円。

「はい」

「率直に聞く、貴様は何者だ」

威圧感たっぷりに開かれるゲンジウの声。

サングラス越しで見えないはずの視線がシズクに突き刺さる。

「知りません」

シズクはそう答えた。

「そんな言い訳が通じると思つて居るのかね？」

冬円が諭すよつと云ひ。

「事実です、シンジくんに助けてもらつた以前の記憶がありません」

嘘では無かつた。

ただ、付け加えるとするならば『これから記憶はある』といつこと。

それと『ゲンジウ』と『ゼーレ』の計画を全て知つてゐるといつことだ。

まあ、言つても信じてもらえないだろう……

ふむ、と冬月が顎に手を当てる。

「時に…老人たちは元気かね？」

これは冬月の策だ。

『老人たち』と接触しているならばよほど訓練されていない限り、多少なりとも動きがあるものだ。

「はい？」

しかし、シズクから出た言葉は素つ頓狂なものだった。

よほど優秀な機械で調べてもこの言葉が相手を騙すためだとは判定しないだろう。

しかしゲンドウと冬月の頭はこれを『相当訓練を受けた者』と、勘違いさせる。

まあ、この一人に「未来から来た」と言つてもそれこそ相手にされないだろうが…

尤も、それはこの一人でなくとも同じことが言える。

次にゲンドウの口から出たのは意外な言葉だった。

「ネルフで働け」

冬月とリツコは驚きの表情でゲンドウを見る。

それを聞いてシズクは思わず微笑んだ。

本人は狙つたわけではないが、この行動が更にゲンドウ、冬月、リツコの3人に『老人たち』の手の人間ということを植えつける。

「あの、条件つけてください」

シズクは自分でも驚くほど冷静だった。

あんなに恐怖の対象だった父親。

恨みの対象でなかつた父親。

だが、その行動の理念がただ、自分の妻に会いたい。

ただそれだけのために計画を遂行し、ただそれだけのために全ての人間を道具として見た男。

なんて小さいんだろう。

父さんはこんなにも脆く、弱い人間だったのか。

と、シズクは思った。

「なんだ？」

ゲンドウの威厳を込めた声。

それももう、シズクには通じない。

「僕、多分シンジくんと同じくらいの年なんで学校の手配、それと住む場所を…」

「用意しようつ

「あと

「まだあるのかね」

半ば諦めたように冬用が呟く。

「給料は、ちゃんと貰えますよね？」

「規定分、払おう」

その言葉にシズクは一瞬「っこ」と微笑むと

「あつがとうござります、では、僕はこれで

もう戻つて命令廻りを出で行つた。

シズクが去った扉を見つめる冬月。

「これで…いいのか？碇」

「構わん…利用できるものならば利用する。  
そうでなければ…消せばいい」

「シンジくそ、お待たせ、あ、//サトウさんも」

少し小走りになつて喫茶店へと入るシズク。

アリにはシンジの他に//サトウも居た。

「あらあ？ もしかして一人でデートの約束う？ 私、お邪魔だつたか  
しづく。」

「いや、やしながらシンジを見る//サトウ。

「ちひち、違いますよー。シズクも何か言つてよー、ホーリーから  
の鬱子なんだー！」

真っ赤になつて恥ずかしくなるシンジ。

「残念だけど違いますよ、ミサトさん。  
あ…そつか、ミサトさん上司になるんだ…なんて呼べばいいのか  
な…？」

「何、何の話？」

シズクの話が読めず聞き返すミサト。

「僕、ネルフで働くことになつたんですよ」

ふーん、とミサトは「一ヒーをずっとすると勢い良くそれを吐  
き出した。

「シズクちゃんが！？ネルフで！？なんでえーーーー？」

シズクが微笑みながら右手人差し指を自分に向けて

「あれですか？ヘッドハンティングってやつ」

と言つた。

「ふざけないで」

「やだなあ、ふざけてませんよ、実際、と…碇指令に直接「ネルフ  
で働く」って言われたんですから」

「…寧に「ネルフで働く」の部分は物真似入りだ、ちつとも似て  
ないが…。

「凄いね、シズク…もう、父さんに認められたんだ…」

「ん、それとはちょっと違うかもしないけどね」

シンジの父親に対する思いは良く知っている。

だからこそシズクはそう答えた。

ミサトはどこかへと電話している。

恐らくコソ「わざあたりだらうな、とシズクは思った。

パターン、と携帯電話を折りたたむ音が聞こえミサトはシズクに振り返る。

「確かに…信じられないけど、ナルフスタッフになってるわ」

「そうだ、僕、どこに所属になるんですか？」

ミサトはオーバーに両手を上げて

「パイロット…フォースチルドレンだって、今さつきマルドウックから報告があつたそつよ」

「へえ…、パイロ…ええええええええええええ…!…?」

フォースってトウジだろ!…それが僕になつたつて」とは…  
トウジは…もうチルドレンになることはない?

シズクの顔にふつふつと笑いがこみ上がる。

トウジは3号機に乗らなくてすむへとこり」とせ、トウジは救わ  
れた！？

シズクは思わず両手を天井高く突き上げて笑った。

「ど、どいたの突然、驚いたと思つたら笑に出しち」

シンジはシズクの反応に困惑つていた。

シズクは我に返り慌てて体裁を取り繕つた。

「ふふ、秘密…わ、シンジくん、行こう！」

「あら、ど行くのよ、あんたたち」

ミサトの問いに。

「部屋の申請ですよ、引越してきたばかりですからね」

とシンジが答えた。

「え、シンジくん、お父さんと一緒に住まないの？」

「ええ、一人の方が気が楽ですし、それにお互い一人の方がいいん  
ですよ」

少し、声のトーンを落とすシンジ。

「シズクちゃんは？」

「もちろん、一人暮らしです、これからも…多分、今まで…」

シズクも声のトーンを落とす、が、こちらはシンジと違い半分芝居だ。

「あーーーもう聞いてらんないわーー！若いい一人が、揃いも揃つて暗いーー！」

と、怒鳴ったよつて元気つと/oroサトは携帯電話を取り出し電話をかけた。

「あ、リシ「お？シンジくんとシズクちゃんだけさあ、家で引き取ることにしたから」

『//サトー？あなた、何言つてゐるのーー？』

「だいじょび、だいじょび、流石に中学生や同性相手に手え出さないわよ」

『当たり前ですーー。』

ミサトは携帯を耳から遠ざけて相変わらず[冗談の通じないやつ、と思つた。

「ま、そういうことだから手続き、お願ひね

『うつ、ミサト、まだ話しちゃ…』

ミサトは何の躊躇いもなく電話を切る。

「やつこつ」とだから、一人ともよろしくね

ミサトは一人に向かってウイーンクを決める。

「え？」と呆けた顔でシンジ。

「はいー（上手くいったー）」とパンと手を鳴らすシズク。

ひつじて再びミサトの家での暮らし始まった。

## 新生活（後書き）

ミサトと同母、シズクがチルドレン登録です。

「この世の地獄?」サトカレー（前書き）

ちょっとシリアルから抜けます。

## 「世の地獄?」サトカレー

「碇、シンジ君とあのシズクという娘、一緒に住まわせて良かったのか?」

冬月はリツコから上がってきた報告を田に通してゲンドウに問い合わせる。

「問題ない」

ゲンドウは手を顔の前で組みながら、

「奴がどんな命令で動いているのかは知らないが、まだ行動には移すまい、  
それまで精々利用できるだけ利用させてもらひ」

「そうか…」

「問題ないよ、冬月、全ての事象はリンクしている。  
そう、全ての事象はな…」

そう言ったゲンドウはニヤリと笑った。

「今日は一人が家に来る記念すべき日だからね、歓迎会よん」

そう言い、ミサトはルノーを走らせる。

「あ、ミサトさん」

「なあに、シズク？」

「買出しに行くのなら、コンビニじゃなくショッピングモールに行きたいんですけど…」

「なんで？」

「料理、大したものは出来ないけど、作りますから、色々な材料が手に入るショッピングモールの方が都合がいいんですよ」

「へへ、シズクって料理作れるんだ」

「人並みに、ですけどね」

ミサトはバツクミラーでシズクを見ながら、

「それでも大したもんよ、わったしカレーしか作れなくてさあ」と言った。

あれをカレーと呼ぶのはカレーに対して失礼よつーとかアスカ言つてたな…。

そう思い出してくすりと笑うシズク。

「あ、今笑つたでしょ」

「いや、違う」とやうよ

「やうへなういこんだけど

くくと頬み笑つあるシンジ。

「どしたの? シンジくん」

今度はシズクの隣の席にこむシンジに向かふ。アサリカト。

やうりん、アリ一越しにだが。

「いや、なんか、二人とも本当の姉妹みたいだなあ……と思って」

「あ、やうへシンジくん、妬けちゃつた?」

「や、そんな」となじですよー。」

アサトのからかにに慌てて否定するシンジ。

そんな会話をしながら一行はショッピングモールへと着いた。

「何作る気なの？」

シンジが棚に置いてあつたパプリカをまじまじと見ながらシズクに尋ねた。

「ん、ハンバーグあたりにしようかなって思つてるんだけど……」

「そう、良かった、それなら僕にも手伝えそつだ」

シンジの言葉にシズクはちょっとした顔をして、

「手伝ってくれるの？」

と、聞いた。

「もちろんだよ、シズクは恩人だしね」

「ありがとう」

そう言つとシズクは微笑んだ。

シンジくんじゃないけど……」「して見るとカッフルといつよりは仲のいい姉弟よね

後からつっこむサトは一人を見てそう感じた。

「「」なんとこころかな」

合い挽き肉をカゴに入れてシズクはそつまつた。

「あ

シズクはそこでふと立ち止まる。

「ミサトさん」

「ん、な、にシズク？」

「あの……パジャマとかも欲しいんですけど……」

シズクの言葉にミサトはポリポリと頭を搔いた。

「あー、そつか、シズク荷物何にも持つてないんだっけ」

ミサトはニヒツと笑みを浮かべ

「よひし、心優しいお姉さんが買つてあげましょ」

食料品の会計を済ませると2階にある男物の売り場へと行こうとするシズク。

「シズク?どこ行くの、そつちは男物よ」

あ、そつか、今女なんだっけ

シズクは頬を人差し指で搔くと。

「すいません、うつかりしてました」

と、言つてミサトの後についていく。

「もう、結構おつかよこちよいなところ、あるのね」

ミサトはそういつたと今度は女物の方へと向かう。

「コーナーの入り口でシンジが「僕はここで待ってるよ」と言つて戦線離脱。

シズクはミサトと一緒にコーナーへと入つていった。

「シズク！ こんなのが！？」

そう言つて後ろ手にパジャマを隠しながら含み笑いをするミサト。

「ほら、じゃ～ん」

ミサトが取り出したのはスケスケのモハヤパジャマとも言ひがたいデザインの物だった。

「着ません！」

シズクは真っ赤になつて怒つた。

当然である。

女になつたばかりだ。

「どうかそもそもそんなことすら関係ないぐらいい厭いしこデザイ  
ンだった。

シズクはシンプルな売り場にいた。

うへん…こんなところかな

ピンク色のシンプルなデザインのパジャマを手に取る。

本当は青か薄い緑色の物が良かつたのだが残念ながらこの売り  
場には無かつた。

それで少し恥ずかしいがピンク色にした。

まあ、誰かに寝てるといふ見られるわけじゃーし…いつか

「//サトちゃん、これ、これにします」

そう言つてまだ卑猥なパジャマと呼ぶべきかどつかの物の前に突  
つ立つてゐ//サトの前に行つた。

「あー、そんな控えめのでいいの?」

「いいんです」

「それじゃ、シンジくん恼殺できないわよー?」

「しませんからー。」

「ほいほい、それじゃ、心優しいお姉さんが貰つてあげるから  
ね」

ミサトはケタケタと笑いながらシズクの手からパジャマを取った。

「すいません、給料入ったら返しますんで」

「いいのよ、これくらい」

やう言ひながらミサトはパジャマをレジへと運ぶ。

買い物を済ませ、ルノーに乗った3人は夕暮れ時を走る。

「ねえ、ちょっと寄り道してもいい?」

「あ、はい、どうぞ」

答えたのはシンジ。

その答えを聞くとルノーは大きく旋回した。

街の展望台へとやつてきた三人。

「...」

シズクは感慨深い、何とも懐かしい気分になつた。

「なんか、寂しい街ですね...」

シンジの声が隣からする。

時計をチョックしてミサトが呟く。

「時間だわ」

すると、ミサトの声に合わせて次々と地下からビルといつビルが生えてきた。

「す、じ、ー、ビルが生えてくるーー」

シンジの驚きの声。

「...」

ミサトの言葉の続きをいつにシズクが先を言った。

「君が、守った街だよ...シンジくん」

シズクは懐かしそうに生えてくるビルを見ていた。

「僕が…守った街…」

シンジはミサトとシズクに振り返る。

ミサトとシズクは何も言わずただ静かに頷いた。

ミサトのマンション。』

そこにがっくつと頭をつな垂れるシズク。

その横には顔が引きつたままフリーズして動かないシンジ。

一人は今、葛城ミサト邸の玄関にいた。

あ…前よりも…酷くなってる…

ちなみに『前回』の1・7倍くらい酷い。

ここに…人が、住めるの?

ようやく思考が戻ったシンジが思い浮かんだ言葉、

・夢の島。

小学生のいる歴史の授業で習ったことがある。

セカンドインパクトが起る前に関東地方にあつた「ヨリド」で出来た埋立地だ。

実際に見たことは無いがこんな感じだつたのだろうと一人納得する。

「どうしたの、遠慮しないで入りなさい」

ミサトは、「人の行動をどうやら「遠慮」と受け取つたらしく、田の前でおいでおいでと手を振つてゐる。

「あ、は…はー…」

シンジの返事。

どうやら初めて夢の島を見たシンジより、

その夢の島が1・7倍程に巨大化していたのを

田の当たりにしたシズクの方がダメージが大きかつたようだ。

「お邪魔しまー…」

シンジが止足を中心踏み入れようとする。

「ちゅ～っつか、ストップー。」

〃カトがシンジを止手で制した。

「な、なんですか？」

「ここ～、シンジくん、ここは今旦からあなたの家。  
お邪魔します、じゃないでしょ。」

初め、シンジは何のことをわからないうとこった顔をしていたが

直ぐに言葉の意味を理解すると照れくしゃみ

「た…ただいま」

と、言った。

「お歸りなさい、シンジくん」

〃カトも満面の笑みで迎え入れる。

その光景を見てよつやヶショックから立ち直ったシズクは

少し畠を潤ませながら、しかしあはいつかと笑顔を作りシンジに続いた。

「ただこま、ミサトさん」

「お帰り、シズク」

居間へと呪を運ぶと更に酷い状態だった。

散乱するペールの缶、缶、缶。

つまみらしきものが入っていたと思われる袋、袋、袋。

「セヒ……シンジくん、セヒから仕付けよつか~。」

シズクがやれやれと嘗つた感じでおでこを肘で拭つ。

「セヒがひつて見えるもの全部」「だなび…………」

「あ～あ～、ここのお部屋に、掃除なんて

掌をヒラヒラしながらミサトが嘗つて。

「駄目です」

「これじゃあ、何もある」とが出来ないです」

腕まくつをしながらシズクが前者を、「ミ袋に既に煙草入れ始めながらシンジが後者を言った。

「やべ、わかつたわ、私も手伝つわよ」

「いいですよ、ミサトさんは先にお風呂にも入ってきてください、その間に終わらせますから」

シズクは右手でミサトを制して立つて言った。

「でも……いいの?」

「はい、居ても邪魔ですか?」

「ぐつ……」

ひしゃつと言つ放つシズク。

性格、変わってきたな、と自分で思った。

ミサトはシズクに言われがつづつと肩を落とし、脱衣所へと向かつた。

「シズク……言こ過ぎだよ」

苦笑しながら次々「ミ袋」を出すシンジ。

「「」の部屋の様子じや、更に汚す「」とはあっても  
止付くなないこと、絶対無いよ」

シズクも「」を止付けながら歩いた。

脱衣所から「」がひょ「」と顔を出す。

「」かたわら？忘れ物ですか？」

シンジが言ひ。

「」かたわら？シシシヒコの笑みを浮かべ、

「シーハンちゃん」

「はこ？」

「覗いちや黙田よん」

と悪戯っぽく囁く。

「「」みんな」とつませんよーー。」「

シンジヒシズクの声が重なった。

「なんでシズクも一緒になつて言ひのよ」

「あ、いや……その……」

思わず反応してしまった……

シズクは誤魔化すように部屋の掃除を再開する。

「はつはーん」

「な、なんですか？早く入ってきてください」

言いながらも少し顔が赤い。

「シズク、シンちゃんの」と、好きなの？」

「違いますよ！」

本人は眞面目に言つたつもりだが、先ほどの顔の赤みが抜けているので

ミサトはそれを照れと勘違いしてニヤリと笑つた。

「またまたあ……つてあれ？シンちゃん？」

ミサトがシンジのこる方を向くとシンジは顔をゆでだしにして俯いていた。

あのねえ……

シズクは心の中で苦笑するしかなかつた。

30分後、すっかり綺麗になつた部屋を見たミサトが一言。

「ミサト…誰の家？」

「誰つて、ミサトさんの家ですよ」

笑いながらシンジ。

「ミサトさん、お風呂借りますね」

「遠慮しないで入つてらっしゃい、シズク、疲れたでしょ？」

「ええ、それはもう」

「はう…と溜め息をつくシズク、その後、思い出したよつい、  
「おかげはあと焼くだけですから、絶対に、絶対に、何もしないで  
くださいね」

「はいはい、わかったわよ、入つてらっしゃい」

「絶対ですよー！」

念には念を押して、シズクは脱衣所へと消えていく。

しかし、その念も無駄な努力に終わることをシズクは知らない。

これはもう夕食で掃除のお礼をするしかないわね

「ナト君にも恐ろじに計画を考えていた。

シズクは脱衣所で上着のボタンに手をかけたまま固まっていた。  
落ち着けシンジ……じゃない、シズク……自分の体なんだから、  
見ても全然大丈夫、これからこの体でやつてかなきやならないん  
だから、  
このくらいで動搖してどうする……いや、でも女人の裸を見るな  
んで……

綾波の時……以来かな……って何考へてるんだ！  
よつやく決心を固め、服を脱いだのはそれから5分後のことだっ  
た。

しかしシズクは浴槽に入つてゐる最中も体を洗つてゐるときも

髪を洗い流すときもほほ天井を見続けていた。

「ナト君、駄目ですよ、勝手に調理しちゃ

ぐつぐつと煮立つてこる鍋の前に立つたナトとそれをあらわし

ながら見るシンジ。

「平氣、平氣、私に出来ない」とは無いわ、特にカレーには自信あるよね、

シズクとシンちゃんが作ってくれたハンバーグと合わせて、ハンバーグカレーよん

「

鍋をお玉でかき回しながらサトは叫ぶ。

「部屋はあんなに汚かったのに…」

ぼそっとシンジ。

「あんか言つたあ？」

さわやかな口調に鬼の形相でシンジを見るサト。

「い、いえ、楽しみだなあ…で、サトさんのカレー…」

「でしょ~!~今出来るから座つてて」

お風呂から上がったシズクが見た光景。

それは白田を向いてテーブルに前のめりになつているシンジとすでに酔払いモード全開のサトといいつ地獄絵図だった。

「この世の地獄?」サトカレー（後書き）

怖いもの見たさに一度食べてみたいものです、ミサトカレー W

「フォースチルドレンとして登録…か、思い切つたことをしたな、碇」

パチン、と将棋の駒がなる。

「……」

ゲンドウは黙つて駒を打つ。

「しかし…正に生き[写]しだな…彼女は…」

「外見で私の判断を鈍らせようなどとでも考えたのだひつ…が、どんなに似ていてもあれは別だ」

「全では心の中に…か…」

ぴくっとゲンドウの駒を打つ手が止まる。

「冬円…」

「待つたはなしだぞ、碇」

30秒ほど考えた後、ゲンドウは駒を打つ。

「パイロットとして登録はいいが、肝心の乗り物がないぞ?」

「問題ない、明日にはあれが届く

「あれ…？あれの建造を早めたのか、しかしシナリオが大幅に狂うぞ、

老人たちやネルフ支部の連中も黙つていまい」

「誤差修正内だ、それにもしあれが老人たちの駒なら老人たちにも手は出せまい」

「ふむ…問題ない…か、だがこれはどうかな？」

パチッと冬月が駒を打つた。

「…………」

ゲンドウの手が止まる。

「…投了だ」

「まだ、お前には負けんよ」

そう言つと二人は基盤をしまいはじめた。

シズクとシンジがミサトの家に来てからの日課。

それはレイへのお見舞いだった。

二人は一日置きに交互にお見舞いに来ていた。

しかし、シズクは兎も角、シンジは話題選びに毎回苦戦を強いられていた。

「え…と、綾波はここに来る前とか、何をしてたの?」

「…………何も」

「え?」

「…………

「えへつと、す、好きな食べ物とか何かな?」

「…………特にないわ」

ひとりさじを見合ひである。

シズクの場合。

「綾波、今日はお弁当作ってきたんだ、食べててくれる?」

「…………お弁当?」

「そう、これ」

そういってパカッとお弁当箱の蓋を開ける。

メインは野菜の天ぷら。

そのほかにも肉は一切使われていない非常にベジタブルな弁当である。

「どうかな?結構、自信あるんだけど……」

レイはじつとお弁当を見つめ——。

「…………美味しい」

「そ、そ、食べてみてよ」

レイはアスパラを選んでパクリと一口食べてみる。

モグモグモグ…………暫く咀嚼が続く。

「ゴクン。」

「どうかな？」

「…………美味しい」

「良かった、綾波の好みがよく分からなかつたけど嫌いなものとか入つてない？」

これはシズクの嘘である。

前回の体験からレイが肉を苦手としているのは知っていた。

だから弁当の中身も細心の注意を払つて肉を使わなかつた。

「くくくと首を縦に振るレイ。

「美味しい……シズクの弁当は美味しい……」

何度も「美味しい」という単語を繰り返すレイ。

「良かった、綾波に入つてもらえて」

「…………で」

「え？」

「…………レイでいいわ」

そう言われた瞬間、シズクは余りの嬉しさにその場で飛び跳ねそ  
うになつた。

「レ、レイ、シンジくんも料理上手いんだ、今度お弁当作らせて貰  
るから食べてみてよ」

レイは少し考えた後。

「……………シズクが言つなら」

と呟つた。

「うそ」

そう言つたシズクは満面の笑みを浮かべていた。

かくして、シズクとシンジは二人の田から交互に弁当作りもしなけ  
ればならなくなつた。

しかもメニューを考えるのが一苦労である。

前日のお弁当とメニューが被るといけないので互いのお弁当作り  
も見学する。

だが二人のシズクのお弁当大作戦のおかげでシンジとレイの間柄も  
急速に縮まつた。

「綾波、今日はいいジャガイモが手に入つたんだ、素材を生かそうと思つてシンプルに蒸かしてみたんだけど、どうかな?」

パク、モグモグモグ。

「ゴクン。

レイの喉が鳴る。

「どうかな? やつぱりジャガイモにはバターかなと思つて思い切つてバターを効かせたんだけど」

「…………美味しい」

「そ、そ、そ、はは、やつぱり人に褒めてもうつと嬉しいね」

レイは赤い瞳できょとんとシンジを見た。

「…………褒めてもらつ事は、嬉しい?」

「うん、綾波は違うの?」

「…………わからない」

やつぱりレイは思考モードへと突入する。

「…………でも、碇君や、シズクにお弁当を作つてきてもらつた時のこの感情は……

ひょっとしたら『嬉しい』といふことなのかも知れない……」

それは前回よりも早く、しかも確実に良い方向へとレイが感情を芽生えさせ始めた兆候だった。

数日後。

「学校ですか？」

朝の葛城邸。

シンジは卵焼きを掴みながらそう言った。

「そう、シンちゃんもシズクもまだ14歳なんだから、本業を忘れちゃ駄目よ～」

そう言いながらほうれん草のお浸しをつつべりサト。

「そうですね、いつからですか？」

これはシズクだ。

「今日よ」

「へえ～…今日、つて今日…？」

「せうよん」

「た…大変だー・シンジくん、早くしないと…」

「へ、うん」

ただいまの時刻午前8時20分。

一人は慌てて家を飛び出した。

「そんな慌てなくてもいいでしょ、ひこ」

そう言いながら卵焼きを口に放り込むマサト。

「せう、と…」

そう言つとマサトは自分の部屋へ向かい、机の上にある携帯を手に取つた。

「もしもししじええ、今出たわ、後よろしくね」

「はい、碇シンジ君と碇シズクさんね、この暑さの中走ってきたの」

「ええ… それは、もう…」

どこか抜けた女教師と話して一人はどうと疲れが出た。

何せ家から学校まで全力疾走、休憩無しである。

一人だけでマラソン大会でも開いたのかというくらいの走りっぷりを一人は見せた。

「シズクさんは何で男物の制服着てるのかしら? これに向こうにあ  
る更衣室で着替えて来てね」

そう言つて女教師はシズクに女子の制服を渡す。

「あ、はい、それじゃシンジくん、また後で」

「うん」

- 同時刻、教室 -

「なあ、トウジ、知つてるか?」

そう言つたのはメガネの少年、相田ケンスケだ。

「なんや唐突に」

トウジと呼ばれたジャージ姿の少年は氣だるそうにケンスケの問いに応える。

「今日、転校生が来るんだよ、それも一人」

「はーん、この時期に転校してくるたあ、難儀なやつちゃん」

「ふつふつふ、聞いて喜べ、その内一人は女、それも相当な美少女らしいぜ」

キラーンといつ音を立てて光るメガネを中指でくいっと上げる。

その一言でクラス中の男の視線がケンスケに集まつた。

-更衣室-

「…これ、はくの？」

シズクの手にあるのはスカート。

「女あることには大分慣れたけど…スカート…って…」

はあ、と溜め息をついて、意を決したようにスカートをはいた。

ガチャヤ。

更衣室の扉が開く。

「あ、遅かつたねシズク」

シンジがシズクの方を見ると、顔が真っ赤になつたシズクが恥ずかしそうに俯いていた。

「あ、あの…似合…うかな…？僕、スカートとかはないから…  
はは…」

「う、うん、似合つてるよ」

シズクのスカート姿にシンジの顔も赤くなる。

シズクはシンジの一言でとりあえずほつと胸を撫で下ろした。

- 教室 -

優しそうな老教師が壇上につく。

「では、みなさんに転校生を紹介します」

少し緊張した面持ちのシンジ。

対してシズクはまだ恥ずかしいのか顔が赤い。

「では碇シンジ君から…」

「あ、はい、い、碇シンジです、よろしくお願ひします」

笑いながらペコと頭を下げるシンジ。

「ねえ、結構可愛いいんじゃない？」

「笑顔がチャーミングよね～」

「…とした話し声が聞こえる。

クラスの女子の会話である。

残念なことに（？）シンジには聞こえてはいないが。

「では続いて碇シズクさん、お願いします」

「はい、碇シズクです、よろしくお願いします」

そう言つとシズクはにっこり微笑んだ。

— ८४ —

「うわっ！何！？」

いきなりの男子の大歓声に吃驚するシズケ。

すかわすお涉まいの質問が升る

シカモリは今作合ひてゐるが、

卷之三

卷之三

男子の罵れんばかりの鬨声にトキトキのシスケ

「おこ、見ろよトウジ、当たりだぜ～」

「そらお前がカメラを構えてんなら当たりなんやろな」

その声がシズクの耳に届く。

ケンスケ……

そして田に飛び込む。

……トウジ……！

シズクはふらふらとトウジの方へと歩きだした。

トウジの田の前で立ち止まる。

「な……なんや？ 転校生……」

「シズク……？」

シンジも不思議そうにシズクを見る。

注目を浴びている本人はそんなことお構いなしに  
その場所に座り込み、トウジの足を確かめるように触り始めた。

「お……お、あ……え、な、なにし、しどるんや……？」

思わず行動にこじりこじるトウジ。

ポーズも埴輪のような状態で固まっていた。

足が……ある……

「転校生…ええ 加減にせえ…… む…？」

トウジは我に返り文句を言おつとしたがシズクが微かに震えていふことに気がついた。

シズクは自分の知らないうちに泣いていた。

足があるのは当然だよね、まだあの前なんだから…  
でも転校初日にトウジが教室にいるつてことは、トウジの妹が無事つてことのはず…  
やつぱつ…… 未来は変えられるんだ…！

「おこトウジ、何したんだよ？」

ジト目でトウジを睨むケンスケ。

「い、いや、あの、おい転校生、ワシが泣かしたのか？  
すまん、謝るから、と、とりあえず手離してくれんか？」

「あ…」めん

ぱつとトウジの足から手を離す。

「じつしたのさ~シズク」

シンジも駆け寄ってきた。

「うん、なんか…昔知ってる人に似てる気がしたから…」

「えー記憶が戻ったの!？」

シズクは静かに首を横に振り、

「ううん、そうじやないけど……」

沈黙。

「なあ、碇つていったか」

とケンスケ、これはシンジに対しての問いただす。

「え、うん」

「記憶がどうのってこと?」

「シズク、記憶喪失なんだ」

「お前は彼女のこと知らないのか?」

「知らないよ、最近知り合つたばかりだし……」

「え、兄妹じゃないの?」

ケンスケが驚く。

「違うよ、苗字が同じなのは偶然、一緒に住んでるんだけど……」

これはシズク。

そしてその一言にクラスの大半がにわかに殺氣立つ。

(「の野郎……俺”のシズクさんと（違う）一緒に住んでるだと  
…！？）

（転校早々、裏切り行為とはい一度胸だ…）

「碇シンジ君…一緒に住んでるところは、どうこうことかな？」

メガネをきりつと光らせぽんとシンジの肩に手を置くケンスケ。

シンジの背中には滝のような汗が流れた。

「あ、それはね、僕とシンジくんがネルフの関係者だから…」

よつやく立ち上がると涙を拭きながらシズクは言った。

「ネルフ…？」

「シ…シズク、いいの…？そんな」と聞いて…？

「いいよ、どうせ直ぐこぼれるんだから」

「ネルフってあの…？」

がばっとケンスケがシンジに問い合わせる。

「わっ、寝！」

「何やケンスケ、どないしたん、興奮して」

「これが興奮せずにいられるか！ ネルフだぞ！ 」

今度はシズクの方へと近寄つていいくケンスケ。

「もしかして、」の間、避難したときに闘つてたロボットに乗つてたのって…」

「あ、それ僕…」

ざわつと教室中が沸き立つ。

「えー、碇君つてあのロボットのパイロットなのー?」

「十九」

「ああ、凄い、凄いよーこやー、ホント凄いやつと友達になつたなーー！」

これはケンスケである。

「友達」

シンジはその言葉に少しへーんと来たようだ。

そんなシンジを見てシズクは思つ。

無理もないが、今まで友達らしい友達なんていなかつたもんね

「「ほん」

壇上から咳払いが一つ。

全員が一斉に振り向くとそこにはちりちりといちりを見ている老教師がいた。

「授業…始めてもよろしいですか？」

全員が「こく」「く」と頷いた。

「よのしく、碇さん」

シズクの隣の席は少しご機嫌斜めの洞木ヒカリだった。

見ず知らずの女の子が自分の想い人にベタベタと接触したのだ。

それは不機嫌にもなるだらけ。

しまったな…

シズクは今更自分の取った行動を後悔した。

「よ、よろしく…あ、シズクでいいですよ…それと…」「めんなさい…」

「なんで謝るの？」

「いや、だって機嫌悪そつなの、僕がト…あの男の子に触ったからでしょ？」

ボツという音を立ててヒカリの顔は真っ赤に染まった。

「な、な、なんで…」

「いや、勘つて言つたら…それまでなんだけど…」

無論、嘘だ。

「か…勘つて…」

「もつ、怒つてない…？」

心配そうにヒカリの顔色を窺うシズク。

ふう、ヒカリは溜め息をつき。

「……うん、もう怒ってない、私は洞木ヒカリ、ヒカリでいいよ

「うん、よひしー、ヒカリ」

そう言つてシズクは微笑んだ。

学校もこんなに楽しい…前は義務というだけで通つてたのに…  
少し俯く。

なんて…なんて勿体無いことをしてたんだろう……

そう思つと同時にシズクは自分の人生はきっとこれから始まるのだ  
だといつじとを思った。

老教師の授業をBGMに学校という空間を楽しむ。

シズクはその日一日、二回目となる学校生活を満喫した。

## シズクのヒュア

『田標をセンターに入れて…スイッチ!』

狙い済ましたように立体映像の使徒のコアを打ち抜く初号機。

ネルフでは今田も今田とてチルドレンの訓練が行われている。

今日からはシンクロテストだけじゃなく本格的な訓練を取り入れはじめた。

まずは射撃訓練。。

シンジは言われたことを忘れないように復唱しながら次々とターゲットを撃破していく。

「よく乗る気になつてくれたわね、シンジ君」

リックがコーヒーをすすりながら言った。

「あお? 別に乗らない気満々だったとは思わないけど

返すのはミサトだ。

「報告では随分内向的な子だつて聞いていたから心配だつたのよ

「あ、それはわかるわ、でも会つてみたら意外と、  
そうじやなかつたのよね~、まあ、良くある事なんじやない?」

「 もうかしら…」

リツコはシンジの訓練を見ているシズクをちらりと見てそいつに話つた。

「 」苦勞様、シンジ君、上がつていいわよ

コーヒーを飲み干したリツコがそう言つた。

『 はい』

シンジはふうっと額の汗を拭つ。

「 それとシズクちゃん」

「 ふへ？」

オペレーター席の横でココアを飲んでいたシズクは突然呼ばれたのに間抜けな声でリツコを見た。

「 なんでしょう？」

「 貴方用のエヴァを見せるわ

「 僕用…？」

シズクが少し考え込む。

なんだ？」この時点でヒュアは初号機と零号機、  
あとはドイツにある飛鳥の式号機しかないはずだぞ……？

「ええ、いりますよ」

用件を言つたリツ「は直ぐに踵を返し、スタスターと第7ケイジの方へと歩いていく。

「あ、ねえ…リツ「せん、待つてくださいこよ」

シズクは慌ててその後を追いかけた。

……レイ？

ふと、前から歩いてくるレイ「気付く。

「丁度良かったわ、レイ、いっしけり来て

コソコソがレイを呼び止める。

「はー

「あー、どうしたの？」

丁度、訓練から上がってきたシンジがミサトと一緒に歩いてきた。

「シンジ君も丁度いいわ、彼女は綾波レイ、ファーストチルドレン、零号機のパイロットよ」

もう言つたリツコの言葉を聞きながらシズクは「コーコー、

「知つてます、改めてようしけね、レイ」

「ええ」

「知つてる? ビーで知つたの?」

リツコが不審そうにシズクを見て言つた。

「病院です、シンジくんが包帯姿の彼女は誰だつていうんで探し  
たんですよ、ね? シンジくん?」

「え? あ、まあ…はい」

ホントは違うのだがシンジはシズクの眼力に完全にやられて思わ  
ず頷いてしまつた。

なんだか蛇に睨まれた蛙状態だつた。

「それから学校が始まるまでシンジくんと一田置きにお見舞いに来てたんですね」

「あひ、セウ」

「リツ」は穏然としない顔をしながら呟つ囁ついた。

「シンちゃん、レイのこと狙つてゐるの？」田置きにむ見舞いだなんて

「ち、違こますよー変な事言わなこでくださこー。ミサトさん……」

ミサトはシンジをからかい、シンジはそれに全力で顔を真つ赤にさせじ<sup>付</sup>定する。

こつもの光景だった。

ま、レイに限つてそういうことはないだろ? けどね……

ミサトの心の声、それは今までのレイの性格を的確に捉えて得た考えだった。

「それじゃ、シンジ君も知つてるのね？」

「はい、綾波、改めてようじへ

「ええ」

「それじゃあ行きましょ、シズクちゃんのエヴァはもう少し先よ

そう言つたリツはツカツカと歩き始めた。

ケイジに着くまでの間、シズクはレイと話ながら歩いていた。

尤も、シズクが話題を振つて、それに対しレイが「ええ」とか「…そうね」とか

相槌を打つ程度のものだつたが、これでも//サトは驚いていた。

はじめて見るわ、レイがこんなに喋つているところ…

#### - 第7ケイジ -

「これは……」

シズクの目の前に現れた巨大な漆黒の顔。

それは紛れも無く3号機だった。

「3号機…出来てたの？」

//サトの問い。

「一昨日ね、それから急ピッちで搬入作業を急がせたのよ」

なんで……？ 3号機ってトウジが乗ったエヴァだろ？ そしてそれは使徒に寄生されて… そして…

少し寂しそうでそして悲しい表情になるシズク。

「…シズク、大丈夫？」

レイの心配。

レイが心配してくれたこと、そして3号機が自分のエヴァであるところ」と。

つまりトウジが3号機に乗ることがないこと。

この二つはシズクに微笑みを取り戻せることは充分すぎる内容だった。

「大丈夫、ありがとう、レイ」

少しの沈黙。

「これに…僕が？」

わかつてはいたがやはりビリしても言葉で確かめておきたかった。

「ええ、エヴァンゲリオン3号機、これが貴方のエヴァよ」

良かつた…これでトウジは完全に救われたよね…

「で、早速だけシンクロテストを行いたいの、宜しくて?」

「あ、はい」

・監制室・

コツコ、ミサトヒオペレーター陣の目の前にには  
レイ、シンジ、シズクの3人のエントリープラグ内の映像が映し  
出されている。

「では、いい? 始めるわよ」

コツコの頃。

『『『はい』』』

「シンクロテスト、スタートします」

マヤの声が響く。

シズクは静かに目を閉じた。

「シンジくんは流石ですね

モードを見ながらマヤが囁く。

数値は67・2%を指していた。

「また上がったんじゃない?」

「ええ、そうね、興味が尽きないわ、彼には」

「レイちゅんは…37・5%です」

「シンちゃんの約半分ね…それでも記録更新じゃないの?」

「ええ、あともう少し上がれば安全に起動できるレベルまでいくわ

「今は戦力が一つでも欲しいときだもん、頼りにしているわよ、レイ」

「シズクちゅんは、え?…5…51・7%!?」

「驚いた…、シンちゃんの初搭乗時より高いじゃないー!」

ミサトが感心したように囁く。

「…………」

「どうしたの? リンゴ?」

「いえ…素晴らしいわ…」

シズクは考えていた。

なぜ自分が3号機とシンクロできるのかを。

普通、エヴァは「アにパイロットの肉親あるいはそれに近しいものの魂を注入して、そこにパイロットを守りつとう意思が存在してエヴァが動く。

じゃあ、3号機には誰の魂が入っているのか。

僕の肉親…と、父さん…はは、あるわけない、現に生きてるじゃないか、父さんは…  
となると、やっぱり母さん…でも母さんは初号機の中だから無理だよな…

だとすると、全ての第3者か…でも僕に近い人になると…

シズクの発想はあながち間違つてはいなかつた。

3号機の「アに使われたのは零号機と同じリスト、だった。

尤も、ガフの部屋から無作為に選ばれたレイの「入れ物」にリリスの魂をわずかに注入したもの。

つまりはレイの『3人目』が入っている。

レイの匂いがする…まるで前に零号機に乗ったときみたいだ…

「シズクちゃん、どう、実験とはいえ初搭乗の気分は？」

リツコの問い、これは純粋なる好奇心から来たものだ。

『そうですね…なんか、レイの匂いがします』

「レイの…匂い…？」

リツコの顔が若干曇る。

『何て言つんだらつ…なんか、こう、レイに包まれてるような、そんな感じです』

「…やう」

「どうしたのよリツコ、神妙な顔しちゃって」

「いや、何でもないわ…（まさか気付いた？…まさか、ね…）」

そう言ひ一口、「アヒーを口に運ぶ。

「3人ともお疲れ様、上がつていいわよ」

その一言で3人は今日はお役御免、解散となつた。

「明日からレイ、学校来れるんでしょ？」

「……ええ」

「じゃあね、綾波」

「……ええ」

一人はレイに別れを告げると家路へとついた。

レイは一人の後姿を見えなくなるまで見つめていた。

「おせよひ、レイ」

「おはよひ、綾波」

「……おはよひ、シズク、碇くん」

学校で何気なく挨拶したこの一人が、

再びクラスメートから質問攻めにあつたのは言つまでもない。

## シズクのヒュア（後書き）

シズク用のヒュアです。3号機です。

## シャムシール戦・思い出せない事 -

確か明日だつたな…

「どうしたの？シズク」

考え事をしていたのが顔に出ていたのか、ヒカリに声をかけられハツとする。

「いや、なんでもないんだ」

そう言つて一コラと笑つ。

前回の人生では考えられないことだな、とシズクは自分で思った。

ソレにして自然に笑えるなんてね…

そう思い、シンジの方を見る。

シンジはトカゲとケンスケと談笑していく。

『前』の君からは考えられなかつたんだよ、シンジくん

シズクは目を細めてシンジを見つめた。

それにして…

ふと顎に手を当てるシズク。

何か…大事なこと忘れてるよつた…

結局、『大事なこと』を思い出せないままその日は過ぎていった。

翌日、

一夜明け、シズクはまた考え方をしながら朝ご飯を作っていた。

『前回』の人生の正に今日、第4使徒シャムシェルが来たのだ。

「シズク～？どうかしたの、神妙な顔して」

ミサトがテーブルに頬杖をつきながら声をかける。

「いえ、別になんでもないですよ」

「ふうん、ねえシズク」

「な、なんですか？」

次にミサトの口から出た言葉はシズクにとって予想外の言葉だつた。

てつくり、考え方のことを聞かれると思っていたからだ。

「言葉使い、直した方がいいわよ」

「え？ そ、 そりですか？」

「そりよ、 折角、 そんなに可憐くて料理も出来るのに  
時折男っぽい言葉使いなんて… ふわああ… 勿体無いわあ、 ホン  
ト」

ミサトはまだ眠いのか欠伸を交えながら喋る。

「放つといへ下さ」（自分でだつて欠伸しながら喋つたりしてゐるじ  
るじゃないか…）

少しむくれる。

この頃、 日々のかららヒカリやレイと一緒にいることが多いせいが  
考え方が少し、 女の方に傾いてきているのかも知れない。

「嫁の貰い手が無くなるわよん」

ミサトはミサトに対する

「…ミサトさんにはいつお返しますよ、 その言葉」

と、 シズクは言った。

ミサトは頬杖をついたままピシッといつ音を立てて石化した。

「あ、 尤も、 ミサトさんは関係ないですね」

「どうこうの意味よ？」

「だつてミサトさんは加持さんか…」

と、エリヤシズクは慌てて両手で口を押さえた。

一瞬、ミサト家のリビングが静寂に包まれる。

「…か…かじ…-----?」

ミサトが大声で叫んだ。

「な、なんであんたが加持のこと知ってるのよー。」

ミサトはシズクのエプロンを握り締めながら凄んできた。

「あ、い、あ、ほら、あの、連絡があつたんですよ…内緒にしてる  
つて  
言われたんですけど…つい、今口が…」

「連絡…?何のため?…?」

「し、知りませんよ、加持さんに直接聞いてみたらいいじゃないですか」

シズクはもう自分で何を言つてるのかわからなくなってきた。

「…そう、そうね…で、私と加持について何か聞いてるわけ?」

「え…そ、そうですね…恋人…とか?」

そのシズクの言葉を聞いた瞬間、ミサトの顔が赤鬼のようになつ

た。

「だあれが恋人ですつてへーあの野郎おーーー。」

「へえ…ミサトさん、恋人がいたんですか」

遠くから様子を見ていたシンジが言つ。

「違うー。」

ミサトはその言葉に畳座に反応し首だけを仄轉させぱぱり言  
い切つた。

素直じやないんだから…

シズクは苦笑する。

「せ、そんなことより朝ご飯食べましょーうよ」

ミサトはふつぶつ言つながら席につく。

今日の朝のメニューはポテトサラダ、出し巻き卵、焼き鮭、若布  
の味噌汁、そして白ごはん飯だ。

「あ、うん」

シンジも席につく。

箸を取りサラダを食べ始める。

「あれ？ わつこえば、 今日は」飯なんだね」

とシンジ。

ミサト家では手軽もあつてか朝はパン食が多い。

「これはミサトが料理スキルだからといつ理由も大きなウエイトを占めている。

つまりシズクとシンジが「飯を作ったとしてもミサトの両親の口は決まってパンなのだ。

シズクはそんなミサトの栄養が偏らなことによつて血液の時は出るだけ」「飯食にじよつとしていた。

「うん、 駄目だったかな？」

「そんなことないけど……ミサトさん、 食べないんですか？」

わづ言われたミサトは「加持…殺す…」と「シブシ」と囁くのをやめてね～「え、 あ、 食べるわよ、 うん、 やつぱりシズクの料理は美味しいわ

と次々料理を口に放り込みそつ言つた。

「…ふひ、 あははははは」

そんなミサトのやり取りを見て、 シンジは思わず吹き出した。

「何よ～、シンちゃん、そんなに私が面白い?」

「い、いや、そ、そんなこと…ふつ…ないんですけど…せはせはせは  
は」

そんなこんなでミサト家の朝食は和氣藹々と終了した。

「！」馳走様

「！」馳走様、シズク、美味しかったわよん」

「お粗末さまでした、じゃ、ミサトさん、行つてきます」

「行つてきまく」

「はーい、いつひらひしゃーー」

ミサトは学校へ行く一人を笑顔で見送ると自分の部屋の机に移動  
して

ぱりぱりと一串のノートを捲る。

ノートには「カード&フォース監督日誌」と題されていた。

あのバカ…シズクに接觸して何考えてるのかしり…

ミサトはそんなことを思いながらノートにペンを走らせる。

- 同時刻・ドイツ -

「へーっくしょー」

無精ひげの男が豪快にくしゃみをする。

「風邪ですか？ 加持さん！」

赤い髪をした少女が加持と言われた男の腕に絡みつきながら笑つた。  
言った。

「いや……誰かが噂をしてるな、」つや

加持は頭をぼつぼつと搔くと呟ついた。

「なあ、碇、ちよつと付きましたかね？」「へんか？」

学校に着いたシンジを待っていたのは立派なトウジだった。

「…こじナビ?」

トウジがシンジを教室から連れ出す姿をシズクは横田で追つてい  
た。

トウジの妹は助かつたはずなのに…なんだろう?

・屋上・

シンジとトウジが向き合つて居る。

トウジの横にまっけ面をしたケンスケもいた。  
二人の間にはペリペリとした空気が流れていた。

「…で、鈴原くん、何か用?」

シンジの言葉。

それに対したトウジの返答は土下座だった。

「碇…ありがとー!」

「…へ?」

つきつきトウジのムードからして怒られるんじゃないかと思つて  
たシンジは吃驚して

思わず素つ頓狂な声をあげてしまった。

こきなりの土下座で、お礼である。

頭の中が？でいっぱいになるシンジ。

「あ、ありがと…って？」

「妹から全部聞いたんやーお前がもしあの時、化け物と戦ってくれなかつたら

今の元気な妹の姿は無かつたってなーほんま、ありがと…  
い、いいよ、お礼なんて…僕全然気付いてなかつたし、  
たまたまそくなつたんだから、それより顔上げてよ

これはシンジの本心である。

シンジに取つてサキエル戦でトウジの妹が助かつたことなど知る由もなかつたのだから。

頭を床に擦り付けてこらトウジを起いだりするシンジ。

「碇…いや、碇さんーワシをどつこてくれ…」

「ええ…？で、出来ないよ、そんなこと」

尤もある。

「いや、それじゃ恩人に対しても今まで  
何もしてなかつたワシの気が治まらん…ワシをどつこてくれ…」

トカジがほれつと顔つよつけ顔面をシンジに近づかせた。

- 教室 -

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪...

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪...

二つの携帯電話が同時に鳴る。

「一つはレイ、一つはシズク、それでも一つは現在屋上にいるシンジのものだ。

シズクとレイはバツと携帯を見る。

「え？ どうしたの？」

ヒカリ。

「じめん、ヒカリ、買い物はまた今度」

やつぱりヒシズクは携帯を握り締めたまま立ち上がった。

「レバ、シンジへとこまつてきて、僕は真っ直ぐ向かつかう」

「…」解

・壁上・

「本人もいたずらなだし、殴つてやれば？」

ケンスケが一いや一いやしながらシンジに向つた。

「でも…」

「ここつ、今時珍しこじつ恥ずかしこやつなんだよ」

「恥ずかしいやつとはなんやー。ワシはなんあ…。」

ケンスケの方を向いてムキになるトウジ。

「な? 軽い気持ちで一発ガシンと」

そのケンスケの言葉にてトウジは再びシンジの方を向く。

「そや、はよやつてくれ」

「そ…そんな……」

シンジせどりのよつか本氣で悩んでいた。

そして覚悟を決めたよつて、

「じゃ、じゃあ一発だけ…」

「おひー…」

トウジはビシッと正面立たず。

シンジは拳を握り締める。

と、その時、屋上の入り口から声が聞こえた。

「……碇くん」

三人は一齊に入り口を見る。

そこにはレイが立っていた。

「非常召集…………」

「あ、うん」

そう言つてシンジが入り口へと向かつ。

途中、トウジの方へと振り返り、

「『めん、』この続きはまた今度…じゃあね、『トウジ』、『ケンス  
ケ』…！」

「あ、ああ」

呆気に取られたように呆然としてシンジとレイを見送る一人。

「なあ…ケンスケ」

「なに?」

「あこつ…今、ワシの」と呼んで呼んだな?」

「ああ、俺のことわね」

セウトヒトトウジはケンスケの頭をもみくしゃしながら

「ははーははー。それじゃ、ワシも碇の」と呼んで呼ばんとなー。」

「いじ、痛えよトウジー!」

と叫んだ。

-ネルフ本部 -

「碇指令の居ぬ間に第4の使徒襲来、意外と早かつたわね

セウトヒトセウトセウトだ。」

「前は15年のブランク、今度はたったの3週間ですからね

「うちの都合せの構いなしか、女性に嫌われるタイプね」

「委員会から再び、エヴァンゲリオンの出撃要請が来てています」

「ついわねえ、言われなくとも出撃させるわよ」

・3号機・エントリー・プラグ内・

『3号機、起動します』

『シンクロ率53・1%』

『ハーモニクス全て正常、直ぐにでも実戦可能なレベルです』

『いい、二人とも?』

ミサトの通信が入る。

「『はい』」

『地上に出たと同時にパレットガンによる一斉射撃いいわね』

『はい』

それに答えたのはシンジのみだった。

シズクは右手を何度も握つては開き、握つては開き、を繰り返している。

負けるわけにはいかない…未来を変えるために僕はここに存在してるんだから…！

『…シズク？』

「…あ、は、はい！」

『大丈夫？』

「はい、行けます！」

初陣だものね…やつぱり緊張してるのかしら…

やうやかアサヒが思つ。

でも何もしてあげられない。

唯一してあげられることは少しでもいい作戦を考え、1%でも勝率を引き上げること。

やうやかアサヒに迷いは無かつた。

『H-ヴァンゲリオン初号機、3号機、出撃……』

-避難シェルター内 -

「ちくしょー、まだだ、こんなビッグイベントだつてこの二元…」

ケンスケがハンディカムを覗き込みながら叫ぶ。

「なんや?」

「見るよこれ、報道管制つてこうやつだよ、  
上で起こつてること俺ら一般人には見せられませんつてさ」

半ばヤケクソ気味にハンディカムの画面をトウジに見せる。

「そりや、しゃあないやろ」

「トウジ、ちよつと話が…」

突然声を潜めるケンスケにトウジが何か感じたのか。

「…ああ、ああ、わかつた、委員長…」

「何よ、鈴原?」

「ワシ!一入、便所や」

「 もへ、ひやんと済ませておきなやこよー。」

ヒカリの声を尻田に一人はトイヘヘと向かった。

「 で、なんや?..」

半分諦めたような口調でトウジが言へ。

「 死ぬまでに一回だけでも見たいんだよ、上で行われてる戦闘を。」

ケンスケの皿は正円のお年玉を貰つ子供の様に輝いている。

「 ケンスケ……お前なあ……死んでまつで」

「 トウジもそ、シンジの戦うどいり、見てみたいだろ?..」

「 ああ?…そりゃ、まあ……な」

「 じゃあさ、決まりだろー?..行こうぜよー!..」

そう言つケンスケにトウジは両手を上げて、

「 分かった、分かった、付きおつたるわ、  
ほんまお前は自分の欲望に忠実なやつひやなあ」

と言つてケンスケの後を追つた。

二人を待っていたのはイカのようなそうでないような赤い使徒だった。

両肩と思われる部分から伸びているつねうねとした光る触手が印象的に映る。

「凄い、凄い、来て良かつたーー！」

ハンディカムを片手に大はしゃぎするケンスケ。

「シンジはどうや？」

そうトウジが呟いた瞬間、初号機と3号機が地上から凄まじい勢いで地上へと上がってきた。

折りたたみ式の出入り口が開き、初号機と3号機が姿を現す。

「すっごー！3号機もいる！ということは碇も出撃してるのが、零号機は…ないな、綾波は留守番か」

「お前、なんでそないに詳しいんや？」

呆れ顔で尤もな意見を突っ込むトウジ。

シズクとシンジはまた右手を握つては開き、握つては開きを繰り返していた。

「ア・タ・フィールドを展開、作戦道りに、いいわね?』

ミサトの通信に入る。

一  
はい

た。一人の返事とほぼ同時に初号機が第4使徒シャムシェルの前に出

『レガシイ』

凄まじい数の弾丸がシャムシェルの体へと当たる。

濛々と立ち上がる爆煙でもうほんとんどシャムシールの姿は見えなくなっていた。

『バカ！ 爆煙で敵が見えない！！』

ミサトの声。

「シンジくん、それじゃあ駄目だ！」

シズクが叫ぶ。

『へい……！』かとれど、じつすれぱいこんですねか！？

シンジの声には焦りの色が感じられた。

「接近戦を仕掛けます」

シズクの声が後に続く。

『お願い、シンジくんはその隙を見て態勢を立て直して』

『は、はい。』

「はあああああ……」

ログ・ナイフを右手に装備し、3号機がシャムショルへと突進していく。

50%弱だと少し重く感じるけど……

ビシュッといつ音を立ててログ・ナイフを横に薙ぐ。

シャムショルは片方の触手を伸ばし、ログ・ナイフを受け止めた。

「ちい……」

受け止められたと同時にシズクはログ・ナイフを離し、そして両の足で跳んだ。

シャムシールの触手がログ・ナイフに巻きついたからだ。

空中で回転するとシャムシールの方を向き、着地する。

- 発令所 -

「凄い……」

発令所の人間はそれを見て誰と無く呟いた。

シンジと違い、多少の訓練期間があったとはいっても、初戦でこの動きは驚嘆に値する。

「いいわシズク！その調子よ……！」

ミサトの激が飛ぶ。

しかしシズクにこの言葉は届いていなかった。

「いいつ……予想より全然強い…………！」

以前の時は怪我やエヴァの損傷などを気にしていなかったので腹部に重度のフィードバックを受けながら倒したが

なまじ経験を積んでいる今は出来るだけダメージを受けずに戦おうと体が勝手に反応する。

加えて50%弱という低いシンクロ率が思つた以上にシズクの戦いの呼吸を乱していた。

「はあああー！」

前蹴りから正拳突きのコンビネーション。

だがシズクの意思から一呼吸置いて3号機が反応するためビリしても1テンポ遅くなる。

それがシャムシェルの素早い触手の前では致命的だった。

軽く裁かれて足を払われる。

シズクはそのままブリッジをしてバック転の要領で距離を取つた。

どうする…どうする…？

『Iのつー』

体制を立て直した初号機がシャムシェルへと突っ込んだ。

「シンジくん！？迂闊だー！」

シズクが叫ぶ。

ガキイ！！

右の触手で攻撃を弾かれると同時にしゅるりと左の触手で初号機の右足を絡め取る。

シャムシェルはそのまま初号機を放り投げ、3号機の方へと振り向いた。

『うわああああああああああああああ！！』

『シンジくん！』

発令所に響くミサトの声。

世の上のトウジとケンスケ。

必死にハンディカムで撮影してるケンスケに青くなつて空を見上げているトウジ。

「おい、ケンスケ……」

「何だよ、今いことこうなんだぜ、あの3号機と化け物が戦おいつて時に…」

「紫のロボット……」いつしか来るで……」

「あん？」

二人の間に沈黙が走る。

どんどん空から近づいてくる紫の巨体。

ドスウ ウウウン……

丁度一人は初号機の人差し指と中指の間にいた。

一人は身を寄せ合つて震えている。

あかん……もう駄目や……やっぱ来るんやなかつた……

そんな、まだ全部撮りきつてないのに…

それぞれの考えの中、恐る恐る初号機を見上げる。

そして、シンジも一人に気が付いた。

『な、なんで一人がここに…?』

シンジの叫び声と共に発令所にトウジとケンスケの姿、そして二人のパーソナルデータが映し出された。

『シンジくんたちのクラスメート…?』

『なんでこんなところに…?』

そしてそれを見たシズク。

「…お、思い出した…忘れてた重大なことって…この事だーーー。」

シャムシール戦・思い出せない事・（後書き）

もつシズクつたら思こもよひずアジッ子（何

## シャムシェル戦・決着・

「ハハハハ... ハハハハ... ー?」

シズクは考へながらもどうすることも出来ない自分に苛立つていた。

3号機が一歩出ようとするとシャムシェルが一歩ずれる。

シャムシェルが攻撃してくれば3号機はそれを払い、また同じ体制へと移る。

いわゆる膠着状態だった。

どうする...? 思いつ切つてシンクロ率を上げるか?

だけどそれが発端として既に疑心暗鬼を持たせることになつたら...

一方、シンジは、

「そー...どうしてんだー! むやみに動いてこの一人を潰しでもしたら...!」

想像してシンジの顔から血の気が引く。

「な、なんで動かんのやー?」

「俺らがここにいるから、動きたくても動けないんだ！」

「しまつ…」

シズクがちらりと初号機の方を見たその瞬間、

シャムシェルは突然初号機へと接近を開始した。

「くそ！待て…！」

直ぐに後を追う3号機。

しかしその間にも触手が初号機を襲う。

シンジは地面にいる一人に被害が及ばないようになんでに咄嗟に触手を掴んだ。

「ぐううううううーー！」

触手が発光し、高温により初号機の両手を焼いていく。

- 発令所 -

ミサトは下唇を噛んでいた。

…「れしか、ないか…

「シンジくん…そこの一一人を操縦席へ、一人を回収したら一時退却、いい！？」

「許可の無い民間人をエントリープラグに乗せられると思つているの！？」

ミサトの提案に真っ向から反対したのはリツ「だ。

「私が許可します」

「越権行為よ、葛城一慰」

「全ての責任は私が取るわ、初号機は現行命令でホールド、その間にエントリープラグ排出して！」

「は…はー」

「う、先輩と葛城さん、怖いよ

とはマヤが心の中で思ったことである。

命令の直後、初号機の後頭部が動き、エントリープラグが排出された。

『そこの人乗りなさい…早く…』

「なんや？」

「あそこだ、行こつ、トウジー。」

トウジとケンスケはミサトの声に言われるがまま、エントリープラグへと入つていった。

「がぼつ……なんやー水やないか」

「あー……僕のカメラ……カメラが……」

慌てふためく一人、だがシンジに一人を気遣う暇は無かつた。

「神経パルスに異常発生」

「異物を二つも混入してこれ? 濃いものね、シンジ君」

リツコが褒めるのも無理はない。

シンジのシンクロ率は65%を超えていた。

シンジは二人を回収した直後、触手を自分の方へと引き寄せ、シャムシェルを蹴りで引き離そうとした。

だがシャムシェルはその寸前に初号機の手首に触手を巻きつかせた。

「ぐうづー。」

手首に激痛が走るシンジ。

『シンジくん、何とか後退してー。』

ミサトの指示が飛ぶ。

「シンジ、逃げろ言つとるで」

「わかつてゐ……けど、こいつを何とかしないと……。」

シンジの言葉とほぼ同時にシャムシールの触手が解かれる。

「シズク！」

3号機はシャムシールを羽交い絞めの様な形で押さえ込んだ。

『ナイスシズク！ 今よ、シンジくんーー。』

「で、でもシズク一人残して……」

『シンジくん、今は二人を安全な場所へ、僕は大丈夫だから……』

シンジはそんなシズクの声に少し考え、

「…………わかつたよシズク、直ぐに戻るから」

『ん、待つてゐる』

そう言つと初号機は後退していく。

残されたシャムシールと3号機はお互いに向かい合っていた。

もう四つの言ひてられない……ここを倒すには今のシンクロ率  
じゃ駄目だ……！

「//サテラ...」

『どうしたの、シズク！？』

「ここは強い……戦いに専念するために通信を一回切れます

『ぱつ……それじゃ作戦を伝えられないじゃないじやないのー...』

ミサトは歯を荒げた、しかし時既に遅し。

「3号機、通信を切っています」

「あの、バカ！」

ミサトはぎつと歯を噛んだ。

「これで邪魔者は入らない……行くぞ、シャムシールー！」

「3号機、シンクロ率上昇…え？」

驚きの声を上げるマヤ。

「どうしたの、マヤ？」

「シンクロ率の上昇が止まりません…70…80…90…98…2%…！」

「なつ…！」

一同が一斉に驚いた。

それはそうだろう。

天才児と言われたセカンドチルドレン、

惣流・アスカ・ラングレーでさえ最高シンクロ率は82・4%だ。

それをエヴァに乗つて間もないシズクが軽く超えた数値を叩き出したのだ。

カシュウという音と共に残された一本のプログ・ナイフを右手に装備する3号機。

「たあつー。」

シズクの声と同時に先ほどのまるで別の物であるかのような動きでシャムショルへと近づく。

シャムショルは音速に近い速度で触手を唸らせて3号機の進行を阻む。

ぎりぎりで触手の乱舞を避け続ける3号機。

くつ…本体そのものの動きは…大したことないのに、この触手は厄介だ…！

シンクロ率を上げて、倍近いスピードで動けるようになつたとはいえ、

まだ車で言えば「ならし」状態である。

そんな状態の3号機を音速のスピードまで上げるには出来ない。

「田では…見えてるんだけど…なーー。」

丁度3号機を狙つた触手に対して、絶妙のタイミングでログ・ナイフを切てる。

続ければ来るもう一本の触手に対しては左腕をかざし、A・T・フィールドを張った。

『——人とも、わかっているの?』

静かだがとても威圧のある//サトの声がモニターから響く。

「はい……えらい、すんませんでした」

「……」めんなれ

一人はがつくんと肩を落とし、うな垂れるしかなかつた。

「//サトさん、僕はシズクのところに床ります」

『ええ、急いでね』

「はい」

シンジはやつぱりと伸び初号機の所へと走つた。

「全くもつ、ビハーレー!」

//サトはすっかりお[泡]である。

「シズクは回線を切る。シンジくんの友達は脱走する……。」

シズクとの通信を切断されたままの//サトはやり切れない表情で

文句を言つ。

「落ち着きなやこ、ミサト」

リックは冷静にミサトをたしなめた。

「使徒にエネルギー反応！」

「え？？」

シゲルの言葉に顔を向けるコソコソミサト。

「これは……信じられません！」

「どうしたの？」

「使徒のエネルギーの流れが変わっていきます」

ふとモニターを見ると異様な程に触手が短くなつたシャムシェル  
がいた。

触手といつよりも突起に近いだらう。

「……自己進化したのね……」

リックの歎きは誰の耳に入る」となかつた。

なんだ……？触手が短く……

シズクは発令所への通信を開く。

「3号機との通信、回復します」

『//サトさん…どうなってるんですか、あの形状…』

「わからぬこの、『めんなさい』、とりあえず距離を置いて戦って」

『サトの申し訳なやうな声。

通信回復しても作戦立てあげられてないじゃないの…

『サトは再び下唇を噛んだ。

「了解！」

シズクは距離を取つてバックステップをする。

しかし、次の瞬間、シャムシェルが信じられないスピードで体当たりをしてきた。

突起となつた触手は3号機の方を向いている。

「ちよ…本体の動きが…早…」

ドゴッ…！

素早く反応した3号機の右腕が突進を止めようと前に出すされた。が、

A・T・フィールドが突き破られ、3号機が鈍い音と共に崩れ落ちた。

右腕はまるで踏みつけたアルミ缶のようになっていた。

「……………つ……」

途端に声にならない悲痛の叫びを上げるシズク。

『シズクー、ビリしたのー?』

ミサトは口ならぬシズクの声に慌てた。

「いけないわ、マヤ、フィードバックのレベルを一桁下げて

「は、はい」

「どうこう」とよへ

専門外のことになのでわからないミサトがリツコくと聞く。

「今、あの子は100%に近いシンクロ率で戦っているわ」

「だから…？」

「Hビアがシンクロ制を取っているのは伊達じゃないわ、100%に近いほどパイロットの脳波をいち早く感知して、誤差の少ないレベルで動ける。

でも、それだけじゃない、100%に近いっていうことは肉体にかかる衝撃も3号機が受けた衝撃がほぼそのまま伝わるのよ」

リックの言葉をミサトは理解した。

軽症だつたとしても間違いなくシズクの右腕は折れている。

「シズク…引いて！」

『…ま…だ、やれます』

苦しそうではあるが静かで意思の強い声。

ミサトはその声に呑まれてしまった。

ズダダダダダダダダダダダダ…！…！…！

轟音を轟かせ、シャムシェルに火花が走る。

『シズク！大丈夫！？』

シンジの乗つた初号機がパレットライフルを持ちながら突進してきた。

「…なんとか…ね」

着弾した一瞬の隙をつき、シャムシェルから離れたシズクが言った。

エヴァが一体、揃つたところでもまたシャムシェルの突起が触手へと戻った。

複数相手だと突起よりも触手の方が有利だとでも判断したのだろうか。

こうなつたら…もう、玉碎覚悟で行くしか…ない…か

シズクは右腕の痛みを堪えながら考えを巡らせる。

「シンジくん、これから僕があいつに隙を作るから、その間にナイフでコアを叩いて」

『え、隙を作るってどうやつて…』

『サトさんも僕がどんな行動に取らうと、

大目に見てください、恐らくあいつを倒すにはこの方法しかない

『…………わかつたわ』

少しの沈黙の後、回線からリサートの承諾の答えが返ってきた。

「あらがとうござまわ」

そう言つて3号機はシャムシェルの方を向く。

「行きます」

シズクが言つや否や、3号機はシャムシェルに向かつて真っ直ぐ突つ込んだ。

『ばか！幾ら何でも無謀すぎるわ……』

『シズク……』

一人の声が重なつて聞こえた。

その声とほぼ同時にシャムシェルの一本の触手が3号機の腹に穴を開ける。

もう一本の触手を3号機は左手で強引に絡め取る。

「ぐつ……」

右腕と腹部、そして左腕に痛みが走る。

「シノジベニ、アフ…ベー」

シズクの声にはつとなったシンジがプログレッシブナイフを取り、突進する。

シャムシールは反撃しようと身を震わせた。

だが3号機の左手は触手を離れない。

『 』

初号機のナイフがシャムシェルのコアを直撃した。

少しづつ、ナイフがコアに食い込む。

約30秒：僕の体が持てば

29秒後：

「パターン青、消滅、目標、完全に沈黙しました！」

わあーと上がる歓声、だが次のマヤの一言でまた沈黙が走る。

「3号機パイロット、応答ありません！ー！」

「救護班！急いで！」

ミサトの指示の下、シズクは病院へと搬送された。

シャムシェル戦 - 決着 - (後書き)

シャムシェル戦の決着です。

## レイの元越し（前書き）

14歳での一人暮らしは普通無いですか？

## レイの引越し

目が覚めたら白い天井が見えた。

「つづ…」

右腕と腹部に痛みを感じる。

ここは…病院か…

シズクはそう思つとまた静かに目を閉じた。

なんか…久しぶりだな…この病室も…

見慣れた天井を見ながらシズクは考えていた。

今回は何とか倒せたけどこんな効率の悪い戦い方じや駄目だ…  
せつかく未来が分かつてゐんだから、もう少し要領よく戦わない  
と…

コンコン、ヒドアからノックが鳴る。

「はーい」

シズクの声に静かにドアが開く。

ノックの主はレイだった。

「レイ……どうしたの？」

「…………お見舞い……平氣？」

「あ、うん、右腕は多少痛むけど他はいたって健康だよ」

「やつ…………良かつた」

「…………シズクはある事を言おつかどうか悩んだ。」

それはレイをマサトのマンショントリニティへ引越しさせるとこ——一大プロジェクトである。

シズクは前回の人生でレイの生活を幾らか知っている。

そしてそれはどう McConnell に見ても普通の中学生が送る生活では無かった。

散乱した包帯、錠剤だらけの食事。

尤も、食事の方はシズクとシンジのおかげで随分マシになつたが。

「ねえ、レイ」

「何

「引越しする気、ない?」

「……引越し?」

レイは赤い瞳をきょとんとしたままだった。

「うん、レイのアパート、一回行ったことがあるけど、  
あんな所に住んでいたら衛生面とかでも良くなこと思つんだ」

「……来たなら寄れば良かったのに」

「あ、ああ、その口はまだしおったから、それよりも……」

シズクは言葉を選びながら、

「だから……そつ、ミサトさんのマンションの隣の部屋を借りて、  
食事はみんなで取るつよ、きっと……の方がレイのためになる  
し、樂しこよ」

レイは少し考えた後、

「シズクがそつぽつのなら……」

と答えた。

「ホントー?」

「ええ、でも司令の許可を得ないと……」

「と…碇司令の許可、か…」

シズクが少し考える。

「直談判、しかないかな」

そう言つとシズクは一息おいて、

「まあ、取りあえず僕が退院するまでは待つてよ」

「ええ」

結局、シズクは一週間ほどの入院で済んだ。

父さん、確かに今日はシャムシェルの倒れてる現場に来てたはずだ  
よな…

「シンジくん、使徒が倒れてる現場に行くよー」

「ええ！？退院したばかりで大丈夫なの、シズク？」

シンジは驚いて声を出した。

「大丈夫、大丈夫、このくらい何とも無いって、ほら、それより急  
ぐよ」

「う、うん」

シズクの右腕の包帯が少し痛々しいがシズクが明るくスタッフに挨拶をして回っているとその痛々しさも消えて失せた。

なんか…レイみたいだな

シズクは自分の包帯姿を見て最初に会ったときのレイの姿を重ね  
令わせる。

だがそれはこれからはレイにそんな姿はさせたくないという強い  
心の表れだった。

「シズクー！見てもいいって！」

少し離れたコシコトコシコトのところの場所からシンジの声が聞こえて  
くる。

「うん、今行くー」

やうやくシズクはシンジの元へと走つてこつた。

「コッコセー、ヒカルマ」

「あー、シズク、私には挨拶なし？」

「//カトセニには朝、したじやないですか」

「む」

「ふふっ、//サトたじたじね」

セウ笑「とコソ」「は、

「シンジ君、シズクちゃん、使徒を見るのは構わないけどあまりむ  
やみやたらに触らない様にね」

「は」

「注意事項はそれだけよ、後は好きに見てもいいわ」

「はい、あつがとうござります」

「それじゃあ、行こうか、シズ…」

シンジの声がふと止まる。

目線の先には碇ゲンドウの姿があった。

父さん…！

シンジは瞬時に体が強張った。

それは//サトこも、リツコこも、そしてシズクにも分かる変化だ  
つた。

「こんなにも…こんなにも『僕』は父さんに萎縮していたのか…

シズクは悲しそうな顔でシンジを見る。

「…………、あ」

「どうしたの、シンちゃん？」

〃サトの声。

「いや、父さんの掌、火傷してるみたいだけど……」

「ああ、司令の火傷？今朝の起動実験ね……」

ゲンドウの火傷の顛末をシンジに話すリック。

それを知ったシンジは少なからずショックを受けた。

綾波を救おうとして負った火傷……どうして、僕には冷たいんだろう  
…

そんなシンジの心が負一色に染まろうとしていた時だった。

シズクがレイを呼び止めたのは。

「おはよう、レイ」

「…………おはよう、シズク、碇くんも」

「あ、あ、おはよう、綾波」

レイの姿を改めて見るシズク。

シズクはレイを見て決意を新たにした。

父ちゃん… 碇司令を説得しなきやな…

「よし、善は急げだー行くよ、一人ともー！」

「え？ ど、どこ行くのさ、シズク！」

「…………多分、碇司令のところ……私が、引越し出来る様に」  
レイの引越しについてはシンジもシズクから聞いていた。  
だがその方法までは知らなかつた。

まさかあのゲンドウに直談判だと露とも思わなかつただひつ。

「司令ーーこんなにちばーー！」

元気にゲンドウへと声をかけるシズク。

じつやう「この世界」のゲンドウへの恐怖心は全く無くなつた様だ。

「碇シズクか… 何のようだ？」

不気味にサングラスが光る。

次いでレイとシンジがその場に合流した。

「レイをおサマさんの面のマンションに引越しをさせたいんですけど許可、もらえますか?」

ピクリとゲンドウの眉が上がる…シンジにはそんな気がした。

「何故だ?」

「一つはエヴァパイロットの親睦を図るため、二つ目は作戦本部長の下にパイロット全員が居た方が何かと都合がいいからと、そして三つ目はレイの健康や衛生面の理由からです」

「……」

「駄目ですか?」

「いいだろう、許可する」

「へ?」

「許可すると言った、一度手間を取らせるな、用は終わりだな、私は行くぞ」

これはシズクには嬉しい誤算だった。

正直、これだけの理由でゲンドウから許可を取れるとは思っていないかったからだ。

なので、ひょっとゲンダウの去る後姿をぽかんと眺めたりしてしまった。

「…………シズク?」

「あ、ああ、やったねレイ一郎屋は//サトさんのお隣の部屋でいいよねー?」

「ええ

「シンジベス、//サトさんで報告一行くよー。」

「う、うそ

田まぐれじい展開にちょっと付いていくのがやっとなシンジであった。

「//サトさんー。」

元気なシズクの声。

手を振しながら//サトを呼ぶ。

「あ、もう見てきたの?」

「そんなことより、重大発表がー。」

「はへ?何よ?=?」

シズクのキラキラとした瞳に呆気に取られながら聞き返す。

「レイが隣の部屋に引越ししてきまーすーーー！」

思わぬ発表に思わず後悔せつゝある//ナ。

「だ、だつて、司令の許可は？」

そこでふつふーん、と鼻息を吹かせるシズク。

「勿論、取りましたよ、ついさっきそこで」

「ええええーーーー！」

ニサトは衝撃を受けた。

「ついさっきそこで」、というフレーズよりも「取りましたよ」というフレーズに。

「許…許可してくれたの！？」

「ええ」

「ホントに？」

「ハハ、ホントですか？ ね？ レイ、シンジくん」

「うる

「ええ

「それで、部屋の確保をお願いしたいんですけど…」

「あ…ああ、やつこつりお、〇〇、わかったわ、隣の部屋でここのね？」

よつやく転起動したサブが聞かぬ。

「せこー。」

「やつたね、綾波」

「ええ

三人のせこ様、あ、いのうたむせん学生なんだなあとこいつにをさす。アセ!!

だが

「今日は」走にしなぐちー。」

とこひ、シズクの声に今日せんべりなぐち、とこひの方が強く出たのであった。

「やれじゅ、やられど、また後で」

「失礼します」

…ペー（お辞儀の音）

と、二者三様の挨拶を終え三人はパタパタと去つていった。

「…良かつたの？」

リツコの声。

「良かつたも何も司令の許可が出てるんだもん、私に断る理由はないわ」

「…アリ」

ナウトヒリツコは一口バーを啜る。

「発案者は…多分シズクちゃんよね」

「あ、ええ、そうじゃない？シンちゃんが先導をつけてるのは今回  
は考えずらーわね」

「アリ」

「あ～によ～何か不満があるわけ？？」

「別に無いわ、ちよつと気になつただけよ

「アリ、ならいいんだけど」

「じゃ、ちゅうへり部屋の確保、してくるわ」

リックは短く返事をし、田をパソコンのモニターへと戻した。

「ええ」

葛城邸・リビング -

「結構、買っちゃったね」

じや、と買い物袋を置くシンジ。

「じめんね、シンジくん、腕こんなんじゃなきゃ僕も持つたんだけ  
ど」

そう言いながら軽い荷物を左腕から降ろす。

「いや、いいんだよ」

「ちつこいや肉とか買わなかつたね」

「ああ、うん、ねえレイ、嫌いなもの、ある?」

「……肉」

「へ、へえ、偶然だね」

「？」

シンジは今の会話に若干の疑問を持ったが、大した問題では無かつたのでそのまま受け流した。

そういうお見舞いの時に作つていつた肉じゃがも綺麗に肉だけ残していた記憶がある。

一方、シズクは内心ヒヤヒヤしていた。

計画では買い物の前にレイの嫌いなものを聞いて、肉を除外するはずだったのだが、

許可が出た嬉しさでそれをつい忘れてしまい、  
でもしつかりと肉を買つのは控えてしまつたためである。

シンジがそれ以上追及してこなかつた為、ほつと胸を撫で下ろした。

夕方。

そんな時刻に帰宅できるはずないと思つていたのだが

夕方5時ぴつたりにミサトは帰宅した。

多分、田向マコトあたりにでも仕事を押し付けてきたのだな。

夕食の内容は豆腐ハンバーグをメインとした野菜中心の料理だった。

ちなみに今回まほとさだがシンジお手製のものである。

シズクは右腕が使えないのどうしもやつない。

「ふつはあー」飯を食べながらのえびちゃんまやつぱ最高よねえ……。

「//ナマコ、飲みますなこでくだれことよ」

「わあかってんじて、シンちゃん あ、そだ、ほいレイ、あなたの新しいお城の鍵よ」

ナマコとマコトはレイにカードキーを渡す。

「…ありがとうございます」

「一応、一通りの家業はついてるから、今田からドモもつられるわ  
ナマコの間にふるふると首を横に振るレイ。

「せつか、レイ、パジャマとか持つてる?」

「ナマコ

「何?レイつてパジャマも持つてないの?」

「あー、せつか…今度の休みに買ひに行かなきゃね

シズクの問いかぶるふると首を横に振るレイ。

「ミサトさんも今度、レイの前のマンション行つてみるといいですよ、意味が分かりますから」

「？、そりゃ、今度暇があつたらね」

「」の言葉を聞いたジズクはあー、こりゃ行かないな、と思つた。

夜。

ガチャ。

レイは新しい自分の部屋へと上がる。

新しい部屋独特の匂いがレイの鼻を撫つた。

レイはなんだか自分でもよくわからないが幸せな気分になつた。

しかし、レイは「」の気分が「幸せ」と「」ことがわからない。

ぼふつとベットへと倒れこむレイ。

なんだかわからないが、レイは「」の気分に浸りながら寝たかった。

そんな気分に浸りつつ、レイは引越し第一夜を明かしたのだった。

## レイの元越し（後書き）

段々と綾波レイが綾波レイでは無くなつていへ今日この頃。  
みなさんの反応が怖い件 - - -

## 決戦！第3新東京市（前書き）

レイが原作崩壊を起し始めました。

「レイ、実験開始するわよ、いいわね？」

リックの声が響く。

その場には冬円とゲン・ドウもいた。

『はい』

「シンクロスタート」

「ハーモニクスに若干の揺れ幅があります」

「誤差修正範囲内ね、続けて」

『……』

レイはコントローラー・プラグ内で静かに考えていた。

前は絶対だったはずの存在の司令やリックからの言葉が最近薄らいで聞こえるのは何故だろう…。

//サテのマンションに住んでから日々は充実していた。

食事も錠剤を飲むこと無くなったり、何よりも皆といふ時間がこの上なく自分を高揚させる。

上手く言葉には出来ないけれど、「楽しい」とせめりといひこつ  
事なんだろ。

と、レイは思った。

プルルルル…

冬月が回線を取った。

「…碇、未確認飛行物体が接近中だそつだ、恐らく、第5の使徒だ  
うひ」

「実験中止、初号機と3号機の発進急げ」

「零号機はまだ使わんのか？」

「まだ実戦には耐えられまい」

シズクはケイジに行く前に発令所に寄った。

「//サトにある事を提案するためだ。

「//サトで」

「シズク? 駄目じゃない、ちゃんと自分の持ち場に着かなきゃ

「はい、ちよっと提案したことがあつて」

「提案?」

「僕たちが発進する前に、何かで威嚇攻撃出来ませんかね?」

シズクの言葉に軽く顎に手を当てる//サト。

「もしかしたら、使徒が反撃して攻撃方法がわかるかもしませんし、

そしたら対策も練りやすくなるでしょう?」

「確かに…その通りね」

「もし…あいつが一撃必殺のような何かを持つていいたら…」

「迷闇にエヴァを出すのは危うい…か…」

「サトは手を元に戻すと、

「わかったわ、シズクは3号機で待機、シンジくんともやつれて

「はい」

シズクはそのままケイジへと走っていった。

「第1から13までの自動迎撃システムを作動！急いで！！」

「はい」

地面から自動追尾型のミサイル発射装置が盛り上がる。

青いガラス板のような8面体のその使徒ラミエルは  
一瞬も止まることなく静かに空中に浮きながらエルフ本部の直上  
へと近づく。

「てえ！」

-- -- T<sub>1</sub> T<sub>2</sub> T<sub>3</sub> T<sub>4</sub> T<sub>5</sub> T<sub>6</sub> T<sub>7</sub> T<sub>8</sub> T<sub>9</sub> T<sub>10</sub> T<sub>11</sub> T<sub>12</sub>

ミサイルが一斉に発射される。

ラミエルにミサイルが当たる直前、  
肉眼ではつきりと確認出来るA・T・フィールドが展開され全て  
が防御された。

同時にラミニエルの先端が光る。

「目標から高エネルギー反応！」

シゲルが叫ぶと同時に第1から13までの迎撃システムは融解し

た。

「強力な加粒子砲…ってやつかしら…？」

ロツコは溜め息まじりで呟いた。

「シズクの言つとおりにして正解だつたわね、  
エヴァが出撃直後にあれを喰らつてたらと思ひひとがいとするわ」

「田標、シールドのようなもので地面を掘つてこます

「場所はここの真上…直接攻撃を仕掛けるつもりですね…」

「しゃべりへせい、到着予想時刻までどれくらい?」

「明朝午前04時06分54秒には全ての装甲を破つてネルフ本部  
へ到達する予定です」

「あと8時間あまりか…」

「到達したらあの加粒子砲で100%やられますね」

「エヴァでの近接戦闘も無理…攻守ほぼ共にパーペキ、か

「白旗でも揚げますか?」

「ナイスアイデイア、でもその前にみよみよせつてみたいことがある

のよね

ミサトはアーヴィングと電話を取った。

「では、作戦を伝えるわ」

ミサトは3人を会議室に集めさせた。

「戦自に行ってプロトタイプのポジトロンスナイパーライフルを借ります、  
その役はレイ、あなたにやってもらいつわ、その後は防御担当」

「…」「解

「シズクはそれを使って田標の射程距離外からの砲手を担当、シンジくんは防御役よ」

「あの…いいですか、ミサトさん」

シズクが右手を上げる。

「なに?」

「僕を防御担当にしてもらえませんか?」

「…シズク、この配置にはちゃんと根拠があるのよ、  
シンク口率が高いほど命中精度はアップするの、

だから尤もシンクロ率の高いシズクが射撃を担当するべしなのよ

「わかつてします、でも、お願ひします、ミサトさん」

「自信…ないの？」

「はい、ありません」

シズクの目は真剣だった。

(またこの皿…)

「」の時のシズクの皿にはある種のカリスマがある、といミサトは感じた。

肯定しなきやいけないような、そんな皿。

「…わかつたわ、シンジくん、砲手担当ね」

「あつがとうござまわ」

「いい、シンジくん、あなたはテキスト通りにやつて、最後に真ん中のマークが揃つたら

スイッチを押せばいいの、あとは機械がやってくれるわ、あと一度撃つと冷却やヒューズの交換に時間がかかるから…」

「わかりました」

-深夜-

双子山のエヴァ搭乗タラップでシズク、シンジ、レイが座っている。

シンジは先ほどの質問の意図をシズクに聞いた。

「ねえ、シズク…なんで防御担当にしたの？」

シズクはそう言ったシンジを見て優しく微笑みながら

「射撃が一発目に必ず当たるとほ限らないでしょ？だから防御担当の方が遙かに危険なんだ」

「それをわかつて…自ら防御担当を名乗り出たの？」

「ん…まあ、ね」

シズクは夜空を見上げる。

「シズクは…や、何のためにエヴァに乗るの？」

「…守りたいものがあるんだ」

「守りたいもの？」

「僕には昔の記憶がないってのは話したよね？」

「うん」

「でも一つだけ覚えてることがある」

シズクは夜空を見上げたまま会話を続ける。

「自分が何も出来ずに大切な人たちが自分の目の前で次々死んでいくんだ…」

「気付いたら、残されたのは自分一人だった…周りには誰もいなくなつて、

そして次に目を覚ましたらシンジくんが目の前にいた」

シズクはぎゅっと右手を握り締める。

「もう…誰も零さない、誰も傷つけない、そのためならどんなことだつてする」

シンジはそのままシンジの方を見て微笑む。

「シンジくんが乗るのはやつぱり変わるため?」

「うん…シズクみたいに立派な目標じゃないよね…自己満足のためには、僕は乗ってるんだ」

「変わらないよ

「え?」

「僕の理由だつて結局は自己満足なんだ…

シンジくんは自分の意思で自分が変わりたいと思つて乗つている、  
それは僕と大差ない立派な理由の一つだよ

シンジはその言葉を聞いて恥ずかしくなったのか頬を染めてレイの方を向いた。

「あ、綾波は何のために乗つてるの?」

「絆だから…」

「絆…?」

「私には、他に何もないから…」

「そんなこと、ないよ」

シズクがレイに声をかける。

「他に何も無いなんて悲しい」と言つなよ…レイにはレイにしか出来ない事がある、  
それともレイはネルフ以外での生活、例えば学校生活とかマンションでの生活とか…嫌?」

レイはふるふると首を横に振つた。

「…嫌、じゃない…新しいマンションでの生活は私を不思議な気持ちにさせてくれる。

学校も…シズクやヒカリと一緒にいて、悪い感じはしない…」

「だったら、ここ以外にもレイの存在意義はあるってことだよ

シズクは立ち上がりつてレイに右手を差し伸べた。

「そろそろ時間だ、行こう、レイ、僕たちの未来のために」

「…ええ」

レイはシズクの手を取つて立ち上がる。

「じゃあ、シンジくん、『また後で』」

「あ、うん」

シンジはそれぞれのエヴァに乗る一人を眺める。

そしてパンッと両手で自分の顔を叩き初号機へと向かった。

一発目を外すと最充填まで時間がかかる…外せないってことか…

街の灯が、波が引くように消えていく。

同時に痛いほどの静けさが包み込む第3新東京市。

それは、段々と日本列島全体へと及び、日本は闇へと包まれた。

「ただ今より、23時59分0秒をお伝えします」

- 双子山 14式大型移動指揮車内 -

ピッピッピ、ポーン。

時報が鳴る。

「作戦、60秒前です」

「シンジくん、日本中のエネルギー、あなたに預けるわ」

- H-ヴァ初号機・エントリー・プラグ内 -

『頑張つてね、シンジくん』

「はい」

- H-ヴァ3号機・エントリー・プラグ内 -

『シールドの強度は恐らく10秒弱、危険は高いわよ』

リックの声がプラグ内に響く。

「はい……」

・ H-ヴァ 零号機・エントリープラグ内・

『レイ、もしもの時の防御、頼んだわよ』

「……」

『……レイ?』

「……はい」

わずかに遅れるレイの復唱。

『大丈夫?』

「……問題ありません」

答えるながらレイは先ほどのシズクの言葉と右手の感触を思い出していった。

「初号機はビビッヘ。」

「H-ヴァ 初号機、ハーモニクス異常なし、シンクロ率… 71 · 3% です」

「また上がつてゐるぢやないの」

マヤの背後からモニターを覗き込んだリックが、興奮気味に目を見張る。

「3号機は？」

「Hガバ3号機、シンクロ率、98・7%」

「…やはり、シズクちゃんを射撃担当にしておいた方が良かつたんじゃないで？」

「今更言つても、しようがないでしょ？」

リックは皮肉を込めた視線でミサトを見る。

・Hガバ初号機・エントリー・プラグ内・

『シンジくん、いかが?』

「はい、やれるだけのことはやります」

移動指揮車では設備が足りないために、パイロットの表情まではモニターできない。

だが回線を通じて伝わってくるシンジの声に焦りや動搖といった類のものは感じられなかった。

『頼んだわよ、シンジくん、世界の命運は」の一発にかかるわ』

「……はい」

『もし外しても焦らず行動する」と、  
焦つてシズクやレイを危険に巻き込んだら元も子もないからね』

「……はい、僕も…みんなを守りたいですから…」

『僕「も」?』

「シズクが言ってたんです、エヴァに乗る理由、みんなを守りたい  
からって…」

『いい」と言ひついでない、じゃあシンジくん、  
シズクやレイを守つてあげるためにも頼むわよ』

「はい…」

『おひこに返事、わてはシンぢちゃん、両手に花でウハウハつても  
つかへ』

「な、なに言つてゐるですかー!こんな時に…」

「…問題、なんつね

「そうね、だつたら早く始めてちょうどいい、時間、押してゐるわよ

リツ」「の突つ込みマニアサトはびづと聴つた。

「第1次接続開始！」

「第1から第803管区まで送電開始

マコトの手に従つて、レバーを押し込むマヤ。

一斉モーターの第1ラインが点灯する。

各地に配置された変電施設からうなづが聞こえ始める。

「電圧上昇中、加圧域へ」

「全冷却システム、出力最大へ」

低い振動と共に、氷結作用で白く染まつていぐ冷却装置群。

「温度安定、問題なし」

「陽電子流入、順調なり」

「第2次接続」

・Hゴヴァ初号機・エントリー・プラグ内・

『シンジくん』

「なに? シズク」

『ポジトロンライフルを撃つタイミングなんだけど、ちょっと遅らせた方がいいと思うんだ』

「え? なんで?」

『え、えっと…根拠は無いんだけど…』

『…「じめんシズク、それは出来ないよ、もし遅らせても使徒が攻撃しちゃたら洒落にならないし』

『…そつか、じめん、変なこと言ひて』

「ハハハ」

『もう直ぐ、始まるね』

「うそ」

『シンジへん、焦らないでね』

「……」

もう三つとシンジはバイザーを離す。

『撃鉄、起こしてー。』

ミサトの指示が飛ぶ。

ガコンシと二つ音と共に撃鉄が起こされる。

バイザーの円を真剣に見つめるシンジ。

円がハルを捕らえたその時、ハルに変化が起きた。

『目標に高エネルギー反応！』

ドシュウウウウウウウウ！……

ポジトロンライフルとハルの加粒子砲が同時に発射され  
る。

一つの加速粒子は互いに干渉しあい、力場を曲げてラミールと初  
号機の横を掠めた。

「外した！」

シンジが焦る。

『第2射、急いで…』

『田標から再び高エネルギー反応！』

『なんですって！？』

ラミールの先端が光る。

避けられない…！

シンジが目を瞑ったその瞬間。

零号機がその間に割り込んだ。

シールドがみるみる間に融解する。

『レイ！一〇秒で後退して…』

シズクの声が走る。

『…了解』

シールドが完全に融解したとほぼ同時に零号機の前に3号機が出た。

3号機のシールドが融解を始める。

「ミサトさん！まだですか！」

『もう少し、もう少しかかるわ！』

3号機のシールドが融解し、加粒子砲が3号機にぶつかる。

「シズク！」

3号機と加電子砲がぶつかる光とは別にその間に赤い光の壁が見えた。

「A・T・フィールド…？」

シズクは自身の目の前にフィールドを最大出力で展開して何とか直撃を防いでいた。

「シズクちゃんの高シンクロ率が思わぬ助けになつたわね

リツコの声。

「でも、あの攻撃に長く耐えられるとは思えないわ、第2射、まだなの！？」

ミサトの焦り交じりの声が飛ぶ。

『シズク！』

レイが叫ぶ。

レイは明らかに焦っていた。

自分の心境の変化などもう感じている暇は無かつた。

自分も助けに入らなければ。

その思いで一杯になった。

零号機が両手を前にかざす。

3号機の前に、もう一枚、フィールドが展開された。

「一重のA・T・フィールド…それでも時間の問題だわ！まだなの  
つー？」「

「…来ました！第7次最終接続、全エネルギー、ポジトロンライフルへ！」

「シンジくん…！」

シンジにミサトの声は届いてなかつた。

バイザーサイトに照準表示が出た瞬間、円をラミホールの中心に合わせる。

ガキイイン！！

ガキイイン！！

硬質ガラスが2枚、割れるような音と共に、使徒の加粒子砲が3号機を襲つた。

「A・T・フィールド貫通！」

「シズク！！」

直接、使徒の加粒子砲に晒されるシズクの3号機。

『シズクつー。』

レイの叫び。

「シンジくん！」

ミサトの盾とシンジがトリガーリングを引くのはほぼ同時だった。

ドキュ……ツツツ……！

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオ……

ハミールの加粒子砲と平行するように進むエネルギー弾。

ズキュウ……ツン……！

その一撃がハミールの「ア」、八面体の中心を貫いた。

貫通した背後で起こる大爆発。

「ミハルの体は炎をまとわせ、ゆっくりと、軋みながら倒れていく。

歓声が上がった。

「敵シールド、本部の直上にて停止！目標、完全に沈黙しました！」

ネルフ本部からのシゲルの声が上るとほぼ同時にミサトは指揮車を飛び出した。

「シズクっ」

レイはミハルの撃破を確認した瞬間にエントリープラグを排出。

体の前面が融解して、ゆっくりと前のめりに倒れこんでいく3号機。

そして、その中にいるであつて、シズク。

レイは3号機の背後に取り付くと、頸部の装甲を力任せに外した。

強制イジョクトされる3号機のエントリー・プラグが、盛大に「C・」を放出する。

「綾波、どいて！」

シンジは初号機の手が溶けるのも構わずに、3号機のエントリー・プラグを素早く、慎重に抜いていく。

静かに、力を込めたら砕け散りそうなエントリー・プラグをそっと、地面に寝かせる。

エントリー・プラグを掴んだ右手は完全に融解して3号機のエントリー・プラグと癒着してしまっていた。

残った左手を使って、プラグの非常ハッチを剥がす。

レイは剥がされたハッチ部分から中を覗き込む。

生まれて初めて、レイは恐怖を感じていた。

「シズクっ！」

エントリー・プラグ内に上半身を滑り込ませるレイ。

しかし、そこで動きが止まる。

もし、シズクの身に何かあつたら…

考えるだけでレイの体に震えが走った。

レイの瞳がぐつたりと横たわるシズクを確認する。

シズクを揺り動かそうとして、手を伸ばす。

そこで、また動きが止まった。

このまま、シズクが動かなかつたら…？

そんな考えが頭を過ぎる。

怖い。

……怖い？

初めての感覚だった。

己の死すらも恐怖とは思わなかつた。

胸が高鳴る。

「…シズク

レイは精一杯、擦れるような声を絞り出しシズクの名前を呼んだ。

「…シズク」

「…シズク」

「…シズクつ」

繰り返すたびに恐怖が募る。

田を覚まして、とひたすら願いを込めてシズクの名前を呼び続ける。

「…う」

「…」

シズクが小さく呻いた。

「…」

「…………」

「…………」

「……は、うつ」

シズクはもう一度呻くと、大きく背を反らして息を吸い込んだ。

黒いプラグスースが、大きく上下に揺れる。

シズクはゆっくりと目を開けた。

レイは真紅の瞳を見開いて、じっとその様子を見つめていた。

「…………やあ、レイ……泣きそうだよ……勝ったんでしょ、そんな顔しち  
や……黙れだよ……」

レイは動かない。

「……レイ？」

そのシズクの声と一緒にふわっとレイはシズクにしがみついた。

「……、レイ！？」

小声でボソボソと何か呟いているレイ。

「え？」

「シズクは、無事…シズクは無事…シズクは無事、しづくは、ぶじ…」

レイ…

シズクはポンとレイの頭に右手を乗せる。

「心配かけたね、ありがとう、レイ」

シズクは微笑んだ。

レイの中に感情があふれ出す。

レイはしげみつく腕に力を込める。

「…良かつた、シズク」

一粒の滴が、レイの目から頬を伝つて落ちた。

「シズク！綾波！」

シンジが初号機から降りてきて3号機のコントリープラグ内に顔を出す。

「…やつたね、シンジくん」

シズクが微笑む。

「シズクと綾波のおかげだよ…それより、無事で良かった」

「…シズク」

「ん？」

「あまり無茶するなよ、僕たちもいるんだから、全てを自分一人で守らうとしないで…  
僕や綾波はもちろん、ミサトさんたちだってきっと協力してくれる、だから…」

シンジのその言葉をシズクは左手の人差し指で遮った。

「…わかった、ありがとう、肩、貸してくれるかな？」

「…うん」

「みんな！」

手を振つて、ヘルメットを被つたミサトが救護班と共に駆けつけてきた。

よほど急いでいたのか、服のあちこちに葉っぱや枝がくっついてる。

ちよつび、レイとシンジがシズクに肩を貸してミサトの方に歩いてくるところだった。

「シズク、無事！？」

「…ミサトさん」

ミサトに気付いたシズクは顔を上げて優しい微笑みを浮かべる。

救護班の用意した担架にシズクは乗せられた。

「シズク…前回といい、今回といい、無茶をせじめんなさい」

ミサトが陳謝した。

シズクがもし防御担当じゃなければ、シンジのA・T・フィールドでは一瞬で貫通され、

勝敗がどうなっていたのかはわからない。

結局、シズクの助言通りに動いて、勝利を勝ち取ったのだ。

「//サトさん…勝つたんだから、そんな顔しないでください」

「…シズク」

「僕は大丈夫ですか？」

そう言つて微笑む。

ミサトは改めてシズクの「強さ」を再認識した。

それはシンクロ率の高さやH・ヴァの扱いの上手さと云ふ点ではない。

「意思」の強さである。

「こんな田に会つて、なんでこんな顔で笑えるんだろう…」

ミサトは田に熱いものが「み上げてくれるのを堪えるよ」とレイの方を見る。

レイは、じつとシズクを見ていた。

「ねえ、レイ」

「何？」

「用が…とっても綺麗だよ……」

シズクは担架に仰向けになつたまま、夜空を見上げる。

真っ暗な街の中、柔らかい月の光だけが、全ての地上の生物に、優しく降り注いでいた。

## 決戦！第3新東京市（後書き）

この辺りから原作のレイが好きな方は読むのを止めたほうが懸命かも知れませんww

## 使徒の存在意義

シンクロテストは今日も行われていた。

「各パイロットのシンクロ率、表示します」

マヤがコンソールを呴く。

「レイ・ファースト、シンクロ率、52・6%」

「レイ、記録更新じゃない」

「ナサートは感心したよ! びっくりした。」

「…………」

リックは黙つてそれを見つめる。

リック、正確に言えればゲンダウはレイに高いシンクロ率を求めていない。

最低限Hヴァを起動出来るシンクロ率を保つていればそれで良かつた。

だが……」「最近のレイのシンクロ率は「高すぎた」。

やはり……あの子の影響なのかじる……

「カード、シンクロ率、79・4%」

「シンちゃんも流石ね～」

「… そうね

「フォース、シンクロ率、きゅ、98・8%：ハーモニクス、全て正常値です」

「相変わらず飛び抜けてるわね～、シズクは」

「第4、第5使徒戦で見せたシンクロ率は本物のようね」

リツコが、冷静に評した。

だが心中はそこまで冷静ではなかつた。

実戦上でシンクロ率が瞬間的に高い数値をたたき出す、というの  
はある。

実際、第3使徒戦でシンジが第4使徒戦でシズクがシンクロ率を  
上げたのは記憶に新しい。

今までのデータを参照しても、シンクロ率が個人の感情に左右さ  
れて変動するのは明らかだつた。

だが、これは実戦ではない、まして擬似プラグによるテストだ。

そのテストでシンクロ率が100%に近いといつのは、  
ほぼ完全にエヴァと同期できる、といつこと等しかつた。

リツコが危惧しているは数値ではない。

その数値を叩き出している人物、つまりシズクだ。

シズクにはあまりに謎が多くすぎる。

MAGIにも載つていらない謎の少女。

シンジと完全に一致するDNA。

そして、エヴァの使い方。

どれを取つても疑いを置ける。

シズクは静かに目を閉じて考え方をしていた。

もちろん、議題はこれから、のことである。

田下、当面の目標はダミーシステム開発の阻止だろう。

恐らく、時が立てば3号機はバルディエルに乗つ取られる。

そしてそうなれば立ち向かうのはシンジとレイ、そしてアスカだ。

自分はその時、3号機のプラグ内にいるであらはずなので手出しが出来ない。

自分が初号機に乗っているなら何も問題は無いのに…と少し思つた。

シズクは今の自分ならばダミーシステムを押さえ込む自信があった。

だが、シンジでは恐らく無理だり。

そして、きっとダミープラグは起動される。

ゲンドウのシナリオ通りに。

シズクは静かに首を横に振った。

ダミーシステムの完成は絶対阻止。

これは必須条件だ。

自分が初号機に乗つてバルディエル戦を切り抜けたとしてもダミーシステムの完成はエヴァ量産機の完成を意味する。

ダミーシステムの概要や開発過程はリリスの記憶の混入によって把握していた。

ダミーシステムはリリス（レイ）のパーソナルデータにより、その基礎研究や開発が進められ、

それをゼーレがカヲルのパーソナルデータに応用したにすぎないからだ。

だからこそ、シズクはレイの「ダーリー・システム開発の関」を阻止する必要があった。

とはいって、シズクはそこまで細かい計算の元、考へているわけではなかつた。

純粹にレイを実験材料にされるのが嫌だという思いの方が強かつた。

そういうれば……最後に……アスカは僕になんて言いたかったのかな……

ふと、そんなことを思い出した。

確かにアスカは最後に「シンジ」と言つた。

最後の言葉、あの後紡ぎだされるはずだった言葉は一体なんだつたんだろうつ。

そんなことを思つっていた。

シズクがそんなことを考へていたその時、マヤがびっくりしたような声を上げる。

「フォース、シンクロ率低下…90…80…70…」

「まさか…精神汚染…?」

ミサトがガバッとモニターに手をやる。

「い、いえ、ハーモニクス、神経系統、全て正常です」

「…ビリビリ」と…

リックがモニターのシズクの映像を見る。

その瞬間、ピキッとリックの眉間に青すじがたつた。

なんてことは無い、シズクが集中していないだけなのだ。

「シ、シズクちゃん！」

マヤが焦つてシズクに声をかける。

『あ、はい、何でしあう、実験開始しますか?』

そのシズクの声にマヤは思わず右手で顔を覆つた。

「シズクちゃん、もうとにかく実験、始まつてんんだけど?」

モニター越しのコシコセーイチ「ひとつ微笑んで見せていた。

それは悪魔が笑つてゐるよつて見えた。

『す、す、す、すいません!』

「シズクちゃん、実験終わった後、覚悟しなさいね」

『……』

シズクは蛇に睨まれた蛙のよつな気分になり大きく溜め息をついた。

「また、君に借りが出来たな」

『返すつもりも無いんでしよう』

ゲンドウは電話の男と応対していた。

受話器からは軽薄な感じの男の声が聞こえてくる。

『政府は裏で法的整備を進めていますが、  
近日中に頓挫の予定です。例の計画の方もこりで手を打つてお  
きましょうか』

「いや、君の資料を見る限り、問題はなからつ

ゲンドウは机の上に置かれた書類を眺めながら答えた。

『ではシナリオ通りに…と、そつだ』

突然思い出したかのように話しきり出す。

これは『の男得意の話術だつた。

『『子息とフォースは大層逸材らしいですな』

ゲンドウは黙つて受話器を耳に当てる。

『『子息は何の訓練も無しに使徒を擊破、フォースにいたつてはシンクロ率が95を下らないとか』

「…べたらん」

ゲンドウは舌を捲てゐるよつて呟いた。

『いやはや、興味が沸きますね』

「切るぞ」

やつてヒゲンドウは問答無用に受話器を置いた。

『日本で会うのが楽しみですよ…なん』

ブツッ。

男の言葉が、途中で切れる。

ゲンドウは軽くサングラスを直すと違つ資料を見た。

資料には「A 完成披露式典と書かれていた。

-  
翌日

器用にフライパンを煽り、卵焼きをひっくり返すシズク。

レイはその様子をじつと見ていた。

一  
あふあゝあ

眠たそうに田を擦りながらミサトが起きてくる。

「三井の本屋」の書籍紹介

「...おせむり」を二脚

「おせちりんご」

シンジはサラダを盛り付けながら挨拶を済ませる。

//カトは手をひらひらさせながら洗面台へと向かった。

「いっただつきまーす。」

「いただきまゆ」

「…いただきます」

「はい、召し上がれ

4人で食卓を囲む。

すっかり見慣れた光景である。

「この頃ではレイも日常生活に必要最低限な挨拶や会話などもあるようになっていた。

「あ、今日でしたっけ」

シズクが言つ。

「すみません、忙しいのに」

「いいのよん、別に、3人いっぺんに済ませたほうが楽だしぃ」

レイはまづつと咀嚼している。

シズクに言われた「」飯は良く噛んで食べた方がいい、といつのを忠実に守っていた。

「それじゃあ、ミサトさん、いってきます」

「…いってきます」

「はい、いってらっしゃーー」

笑顔で見送るミサト。3人はマンションを後にする。

「」エル戦以来、レイは随分、日常生活に溶け込んでいた。

シズクはぼーっと教室の窓から外を眺めていた。

外には「」エルの残骸が残っている。

結局使徒って何だろ?…。

何のためにやつてくるんだらうか。

使徒が田指すのはセントラルドグマのアダム。

正確には存在していないのでリリスだ。

そしてその目的。

それはアダムとの融合。

そしてサーディンパクト。

使徒の存在意義がそこに集約されるのならば、自分は使徒が来るかぎり、戦い続けなければいけない。

殺さなければいけない。

第1-8使徒である、リリン、つまりは人間が、生き延びるために。  
そのことにはない。

ミサトを守るため、レイを守るため、シンジを守るため、そして  
アスカを守るため。

そのために使徒を殺す。

必須条件といつやつだ。

しかしそれでも決意が鈍る時がある。

第1-7使徒・渚力ヲルの存在だ。

カヲルが生きる、つまり使徒が生き残るといつことは人間の滅びを意味する。

だがカヲルが死ぬ、ということは果たして幸福なのだろうか、と。

少なくとも、シズクにとつてそれは幸福では無かつた。

最後の戦いで戦っていた自分の相手を思い出す。

あれは使徒じやない、人間の作り出した忌むべき存在。

使徒も結局はゼーレという存在に利用されているだけなのではなかろうか。

裏死海文書といつシナリオにそつてただ殺されるためだけに存在する。

そう考えると使徒も被害者なよくな気がしてならなかつた。

「…シズク」

背後からレイの声がかかる。

「ん」

「…何、考えてるの？」

「…いや、何でもないよ」

「…そう」

「ねえ、レイ…」

「…何？」

「絆つてさ…いいよね」

「……」

「ええ」

レイは少しだけ微笑むと確かにそれを肯定した。

キーッー！

けたたましいブレーキ音を響かせ、ドリフトを決めながら赤い車が学校の駐車場に入つてくる。

ガラツと窓を開けてトウジとケンスケ、そしてシンジや男生徒が顔を出した。

「こひしあつたでー・!! カーナー・」

「おおひー・」

「何ターシンジのやつあんな美人に保護されてんのー?」

「シズクちゃんや綾波だけじゃ飽き足らぬ……」

その前に窓を見ていたシズクやその直ぐ傍にいたレイは、むざゅっと潰されるよつた形になっていた。

「ちゅ・・・みんな……押さないで」

「…へるこ」

しかし、男子全員ガム無視。

とこうよつせカートを見る夢中で声が耳に入っていない。

レイとシズクも押されながら手を振り返す。シンジ。

レイとシズクも押されながら手を振り返す。

「やつせカートを、ええなあ

「うそうそ

「あれでネルフの作戦部長やつのが、またすいこで」

「うそうそ

「…ませ」

シンジは聞きながら家の生活態度を見せてやりたいなんてこと  
を思っていた。

-翌日 -

「3号機の胸部主体部品はどう?」

「中破とはいって、前部を見れば大破と変わりありませんから…  
新作はしますが、追加予算の枠、ギリギリですよ」

リツ「ヒマヤの会話。

内容は先の戦闘での3号機の被害状況だ。

一言で言えば芳しくない、である。

しばらくは実戦では使えないだろ?。

「『めん、一人とも…負担増やしちゃつね

シズクの素直な気持ち。

「なぜ謝るの? シズクは何も悪くない…」

「そうだよ、次使徒が来たつて今度は僕と綾波が何とかする、  
言つたら、一人で全部守り切つとするなつて」

「うん」

一人の気遣いが嬉しく感じた。

「あ、でもさ、これでドイツからボート機が来れば、もっと楽になるんじやない？」

シズクの何気ない一言。

だが。

「」の一言に全員の視線がシズクに突き刺された。

「シズク、よく知ってるわね、ドイツからボート機が来るの、私、言ったつけ？」

ミサトが驚いたように叫んで。

シズクは「」でよつやく自分が致命的なミスを犯したことに気が付いた。

「…誰に聞いたの？」

リツコが冷ややかな表情で聞いてくる。

「あ、その、えっと… セツ、 加持さんですよ」

「加持？ あんたまだあいつと連絡取つてたのー？」

ミサトが激昂した。

「シズクちゃんが加持君と連絡？ 初耳ね

「そりなのよ、あのバカ！機密事項までペラペラ喋つて！！」

ミサトが今にも壁にパンチを繰り出しそうな勢いで話す。

リックはふうっと溜め息をつくと。

「……ヒーヒーあれ、予定通り、明日やるぞうよ

と、視線をミサトに送った。

「……わかったわ」

ミサトはその言葉を聞いた途端、冷静さを取り戻し静かに頷く。

シズクはその会話が何を意味するのかを理解した。

JAの完成披露会。

そして、暴走。

シズクの頭の中では明日のスケジュールが事細かに書き換えられていった。

ガラツ。

「おはよう

「…………おはよー、いざなこます」

「…………」

「…………」

ミサトが朝寝坊することなく、しかも正装で起きてきたのに吃驚したのか

レイは挨拶が遅れ、ペんぺんは嘴をポカンと開け、シンジにいたっては挨拶するのすら忘れていた。

ミサトは驚く面々に構わず、リビングを通過する。

「仕事で、旧東京まで行ってくるわ、たぶん帰りは遅いから、夕食は何か出張つて食べてて頂戴」

「わかりました」

シズクは落ち着いた様子で淡々と話す。

「あ、ミサトさん」

玄関を出ようとしたらシズクは声をかける。

「何?」

「いえ、また後で」

「？…うん、まあ、行ってくるわ」

シズクの言葉の意味が分からず、ミサトは出かけていった。

- J-A完成記念式典会場 -

ミサトとソシコはその式場にいた。

「…先ほどの『J説明ですと、内燃機関を内臓とあります』が

「ええ、本機の大きな特徴です、連続150日間の作戦行動が保障されておつます」

日本重化学工業の権威であるつ人物がリツコの質問に淀みなく答えた。

「しかし、格闘戦を前提とした陸戦兵器にリニアクターを内臓する」とは、

安全性の点から見ても、リスクが大き過ぎる気がしますが」

「五分も動かない決戦兵器よりは、役に立つと思いますよ」

その言葉には、絶対の自信と若干の嘲笑が混じる。

「遠隔操縦では、緊急対処に問題を残します」

「パイロットに負担をかけ、精神汚染を起こすよりは、より人道的と考えます」

リツコの口調は、次第に熱を帯びてきた。

ミサトにしか気付かない、ごく僅かな変化ではあったが。

大人気ないんだから、ヒミサトは思った。

しかし、「パイロットに負担をかけない」とい部分ではある意味ミサトはJ.Aに賛同もしていた。

「人的制御の問題もあります」

「制御不能に陥り、暴走を許す、危険きわまりない兵器よりは、安全だと思いますがね」

ミサトはレイの起動実験を思いだす。

パイロットの意思とは無関係に動き、暴走する零号機。

「…人の心などという、曖昧なものに頼つていいから、NERVの兵器は暴走を許すのです」

IJの言葉に、ミサトはカチンと来た。

自分が侮辱されたのではなく、あの3人が侮辱されたように感じたためだ。

「…その結果、国連は莫大な追加予算を迫られ、某国では一万人の餓死者を出そうとしているのです。その上、暴走などという重要な事件の原因が不明とは…。せめて責任者としての責務は全うしてほしいものですが、良かつたですねえ、ネルフが超法規的に保護されていて。あなた方は、その責任を取らずに済みますから」

ぎりり…とミサトから歯軋りの音がした。

「何とおっしゃられようと、ΖΕΡΒの主力兵器以外、あの敵生体は倒せません」

「A・T・ファイールドですか？それも、今では時間の問題に過ぎません、何時までもネルフの時代ではありますよ」

会場に笑いがこだました。

ミサトとコジロは黙つてその笑いを聞き流す。

「……随分と大人しいじゃないミサト、あなたのことだから、もつと怒るかと思つてたけど」

控え室で、ミサトに向かって呟いたのはコッシ「だ。

「……でもあいつの言つ事も、一理あるかなって」

自分がネルフに入つたのは世界を救つためでもパイロットの人権を守るためにもない。

…父の復讐。ただそれだけのためだ。

その点ではあの男の言ったことはおそれへ止しい。

そのことがアサトの心に引っかかっていた。

「………わづかもね」

「自分を血腫し、褒めてもらいながらてる…たいした男じゃないわ」

そう言つてコソコソはルージュを付け直す。

「でも… A · T · フィールドまで知られているとはね

「極秘情報が駄々漏れね」

「…諜報部は何をやつてるのかしら」

颐々しげに話すアサトに、リックは沈黙で答えた。

ロツ「は知つてゐる。

「Jの後に起るJの惨劇を。

あの自意識過剰な男の顔が青ざめるシマード幕を開けることを。

そしてJ-Aは暴走する。

…全て、計画通りに。

「…あ、田向君? 厚木にナシ付けといたから、シンジくんの初号機F装備でじつに寄り合へ」

「サトは手短に着替えを済ませながら電話を耳に当ててマコトに言つた。

「召集に時間がかかるかもしけないけど、ワイングキャリアーなら、第3実験場まで直でしょ?」

『あ、いえ…シンジくんなら、J-Jにます。他にレイちゃんもシズクぢやんもこまかよ』

「へ?」

電話の向こうから聞こえてきた想わぬ返事で、//サトヤムと云  
とした。

『//サトヤん、呼びましたか？』

シズクの声だ。

「シ、シズク！？何でここにいるの？」

『別に訓練以外のときにネルフに来ちゃいけないってことはない  
でしょ？』

「え、ま、まあ、そうね、かえつて好都合だったわ、じゃシンジく  
んもやることあるのね？」

『はー』

「直ぐに第3実験場まで寄越して、じゃね」

「…どうしたの？」

//サトの電話の様子がおかしかったのか、リシゴが声をかける。

リシゴ//サトの行動には反対だった。

この事故は、初めから仕組まれたものであり、  
Hビアの有用性をえ示せれば、自動的に停止するようになつてい  
るからだ。

「あー、びっくりした、3人ともネルフにいるんだもの」

「3人とも？」

「ええ…まあ、じつに来るのが早くなるから助かったけど…あら、やだ、シズクの言つたこと本当になつたじゃない」

「…？」

「今朝玄関出るときにも、今日は遅くなるつて言つたのにシズクつたらまた後でつて言つのよ、まさか本當になるなんてね、ハハハッ」

ミサトは嘘から出た誠みたいな感じで笑つたがリツコは笑わなかつた。

「本氣ですか…」

「ええ」

「しかし…内部は既に汚染物質が充満している、危険すぎるー。」

「つまくいけば、みんな助かります」

ミサトは凜とした瞳を向け男に言い放つ。

「…」「この指揮信号が切られると、ハッチが手動で開きますから」

「これで、リアクター上部から、内部に侵入できます」

ガシャン、という音に振り向くと、別の管制官たちが、ミサトに協力の意思を示していた。

男は諦めたかのように溜め息をつくと。

「希望…」

「え?」

「プログラム消去のパスワードだ」

そう言つて、ミサトの顔から自分の瞳を外した。

「ありがとう」

「…任せなさい」

ミサトは胸を張つて答えた。

「…」彼らの不始末を押し付けておいて言えた義理じゃないが…頼む

ウイングキャリアーのキャビンに入ったミサトは驚きに目を見張つた。

そこには自分と同じ放射能防護服を着たシズクが立っていた。

「シズク? 何考えるのー?」

「向ひて//ミサトさんと同じですよ、止めるんでしょう? あれを」

もう壊こわったシズクの背後で小走りになつてゐるマコトを発見する。

ミサトは懇こつとマコトを睨んだ。

シズクせ//ミサトを手で制する。

「田中さんは悪くありません、僕が無理を言つたんですから」

「でも……そんな無茶なー!」

「無茶なのは……ミサトさんも、どうもつづく」

「……なつ……」

「ミサトさん、自分を犠牲にしてでもとか、そういうことを考へないでください」

「じれつとミサトは自分の心臓が跳ね上がつた。

「な、なに言つてんの、私がそんな事考えるわけないでしょ?」

シズクは真顔でじつとミサトを見る。

「ミサトさん」

「な、何？」

「これだけは忘れないでください……僕たちは家族です……残された家族の事を思つて……行動してください」

その言葉にミサトは衝撃を受ける。

幼いころ、父と死別したミサトにとってそれは何も言い返せなくなる言葉だった。

「僕にとってもシンジくんにとってももちろんレイにとっても、もうミサトさんは掛け替えのない存在なんです」

「シズク……」

ミサトは自分の任務というやつを想い出した。

自分の仕事は、自らを傷つけることじゃない。

パイロットたちをサポートして、有利な環境に誘導し、パイロットたちの命を守ること。

それが自分の任務ではないだろうか。

まさか、中学生に教えられるとは、思わなかつたわ

「わかつたわよ……一緒に行きましょつ、でも、あなたも無理は駄目  
」

「わかつてます、僕は僕に出来る」と精一杯やるだけですか？

もう言つたジズクを嬉しそうにミサトは見た。

いや、本当に嬉しかつた。

「行くわよー」

「はいー」

『行きますーーー』

ミサトの会図と共に、ウイングキャリアーが高度を下げる。

『Hビュア、投下位置ーー』

「ディングアウトーー」

初号機の右手に身をかがめながらジズクとミサトは降下する。

『投下、確認』

「シンジくん、お願ひねー」

『はい』

着地した初号機が前方を暴走するJAに向かって走り出す。

JAの背中を左手で鷲掴みにし、右手を背面へと運ぶ。

リアクター上部に取り付く一人。

「シンジくん、A・T・フィールドをこここの周囲に展開できる?」

シズクの声だ。

『え…?あ、そうか。フィールドで閉じ込めちゃえば…』

バキイイインとJAの周囲にA・T・フィールドが展開された。

JAは成す統べなくフィールドに向かつて突進をする。

『シズク、ミサトさん…気をつけて!』

そのシンジの言葉にサインをするシズクとミサト。

「行きましょう!」

「はい」

ハッチをこじ開けて二人は奥へと進む。

「…す」こですね

灼熱の世界に身を投じたシズクが呟く。

「じいじで待つてもいいのよ

「行きまわよ

「じゃ、さつあと終わらせますか、あと3分切ってるわ

そう言つて先へ進む二人。

「…じりや、いいダイヒツになるわ

ミサトが放射能防護服の上から汗を拭うような仕草を取った。

「ミサトさん、じい…」

シズクは、目の前のコンソールを見て、ミサトを促した。

「ナイスよ、シズク」

ミサトはそつとコンソールに取り付いてパスワードを入力する。

カードをスリットに通し、キーボードを叩く。

「キ・ボ・ウ」

「希望」

変換された文字を入力する。

…が。

ピ―――ツ

「エーティー」の表示が出る。

「も、もう一度やるわよ」

ピ―――ツ

一度田も結果は同じだった。

「…プログラムが変えてあるんだわ…どうしようつか?」

シズクに心配をかけまいと軽い口調で言いながら、ミサトは焦りを感じていた。

「ミサトさん、これ」

「ん?」

シズクは壁面に突き出している何本もの棒を指差した。

「これ、制御棒ですよね…押したら引っ込むんじゃないですか?」

「ふうん…これ…ね」

パツと見た感じ、女一人で動かせるような代物には見えない。

「引いて駄目なら、押してみな、つてね！」

しかしミサトは棒に取り付くと一気に押し始めた。

シズクもそれに続く。

କାହାର ପାଇଁ କାହାର ପାଇଁ କାହାର ପାଇଁ କାହାର ପାଇଁ

だが棒はピクリとも動かない。

「はあはあはあはあ…憎たらしくりこピクリともしないわね」

「はあはあはあはあ…時間無いですし…やるしかないですよ  
奇跡は自分で起こしてこりゃ、価値があるんでしょ?…」

「いい」と書くじゃない、シズク。せえの……」

「もう駄目だ、時間がない！」

JAと初号機をモニターで見ていた男が、叫んだ。

「限界まであと〇・一！」

「爆発します！！」

「駄目か……！」

「動けや... うるさい奴が何をやっているんだよ...」

'በኢትዮጵያውያን... የወጪው—ኋ..'

その反動で転がる二人。

瞬間、炉心をモニターしている八角形の図が、正常値を示すグリーンに変わった。

同時にシズクたちのいるリアクター内も、緑色の照明で照らされる。

「やつた！内压、ダウン！！」

「すべて、正常位置！！」

壊れたトーチカ内に、上がる歓声。

管制官たちも喜びと興奮で手を振り上げた。

「…バカ」

一人、リツ「は誰ともなく咳いた。

「これじゃ、私だけ悪者みたいじゃない…。」

シズクとミサトはコソソールに寄りかかって息を整えていた。

『シズク…ミサトさん、大丈夫ですか！？』

「ええ、なんとかねえ」

「…」

『…うちも無事暴走は収まつたよ…とりあえず、無事で良かつた』

安堵するシンジの声が聞こえて、シズクもミサトもお互いを見て

笑いあつた。

「……奇跡、か」

一通り笑つた後、ミサトが呟く。

「奇跡は用意されていたのよ、確かにね……」

「……いいじゃですか」

シズクは緑色の照明を眩しそうに見ながらそう言った。

「用意されていた結末だったとしても、僕は僕たちのしたことが無駄だったとは思えません」

「……そうね、本当にそうだわ……」

ミサトはぽんつとシズクの頭に手を乗せた。

## J.A暴走（後書き）

次でやつとこさアスカが登場です。TVアニメの話だから式波ではなく惣流ですよ。

## オーバー・ザ・レインボウ

「ふんふんふ～ん」

長い赤い髪をそよ風にたなびかせて、少女が甲板の上で髪を搔き揚げる。

「随分とじ機嫌だな、アスカ」

咥え煙草をした無精ひげの男が赤い髪の少女・アスカを呼ぶ。

「加持さん！」

アスカは声に振り向き満面の笑みを見せる。

「だつて、やつと私の腕を見せ付けるときが来たのよー！」

ぱつと青空に向かつて手を広げた。

「やれやれ、困ったお姫様だ」

加持はポリポリと頭を搔いて呟いた。

「碇シンジ君や碇シズクちゃんに足元掬われるかも知れないぞ？」

その加持の言葉にピクリと反応するアスカ。

「確か… サードとフォースの名前よね… それ」

「ああ、サー・ド・チルドレン、碇シンジ、初搭乗でいきなりの実戦、使徒を撃墜する」

アスカは手を腰に当てふんっと鼻息を荒くした。

「そんなの、マグレに決まってるじゃないですか！」

「そうかな？ その時の瞬間シンク口率は63・4%を記録したっていつ話しだぞ！」

「63・4%！？」

アスカは驚きに目を見開いた。

「フォースチルドレンのシズクちゃんに聞して言えばもつと凄い」

「へ、へえ……」

アスカが少しドキドキしながら耳を傾ける。

「最近のシンク口率は98%を超えるやつだよ、彼女は」

「さあ……98%……！？」

今度こそ、アスカはホントに驚いた。

よひよひと手すりに手を掴む。

ぱつとりでのやつがシンク口率98%？

嘘でしょ？

私でさえ最高シンクロ率は82・4%だつてのこ、それを上回るやつがいるつていうの…！？

アスカは少し俯くとニヤリと笑い

「加持さん、一人のポートレート、持つてますか？」

と言つた。

「オーバー・ザ・レインボウですか？」

シンジが朝食を摑りながらそつと言つた。

「さうよん センティ弐号機パイロットを迎えてこくわけ」

「僕も行くんですか？」

「シンちゃんだけじゃなくシズクも連れて行くつもりよん」

「……私は？」

レイがまつれん草のお漫じに箸を付けようと見てたところを止め

てそう呟いた。

「『めんね～、レイはお留守番、  
流石にパイロットが本部に一人もいなってのは不味いっしょ』

「…そう、ですか」

レイは少し残念そうにそう呟いた。

シズクは胸が高揚していくのがわかつた。

アスカ…！

アスカに会える…！

会つたら何で言おうか？

会いたつかつたよ？

いや、JETちでは会つたことないんだからそれはおかしいだろ。

やつぱりはじめまして、がいいかな。

初めの印象が大事だから、優しく笑つて。

「…ク、…シズク」

「…はつ、はい！？」

「口まで持つてつてる田玉焼き、食べないの？」

ミサトに指摘され、箸が口元で止まつたことに気がつく。

「あ、食べます食べます」

慌てて口の中に玉焼きを放り込んだ。

「あ、それとシンちゃん、お友達も連れてきていいわよ」

「はい、それじゃあ、トウジとケンスケでも誘おうかな……」

太平洋上。

オーバー・ザ・レインボウ艦隊直上。

軍用飛行機に乗ったミサト、シンジ、シズク、トウジ、ケンスケの5人は大はしゃぎでその戦艦を覗き込んだ。

「おい、見りよートウジ、セカンドインパクト以前の戦艦だぜ……」

ケンスケはハンティカム片手に窓に張り付いている。

「ああ、ああ、さよけ」

「楽しくなかつたかな？トウジくん」

「い、いやいや、『』ひつに樂しつすわー。ミサトさんがいてくれるだけでワシはもう一！」

トウジ君ミサトの気遣いに感激しながら呟いた。

「あれに…四人田のエヴァのパイロットが…」

「正確には『一人田』よ、シンちゃん！」

アスカ…

それぞれの思惑を胸に飛行機は旗艦に着艦した。

甲板へと出る。

強い突風がミサトの髪をたなびかせた。

「ハロー、ミサト…」

その言葉にミサトたちは甲板の上を見あげた。

手を腰に当てて黄色いワンピースを着た赤い髪の少女がそこに立っていた。

アスカだ…！

紛れも無く、そこにいたのはアスカだった。

シズクの頭が真っ白になる。

何も考えられない。

いっぱい、言いたいことがあった。

話したいことがあった。

言葉が出ない。

手足も動かない。

「アスカ！久しぶりね、大きくなつたじゃない！」

「背だけじゃなくて他のところも女らしくなつたわよ」

甲板から飛び降りてアスカは言つ。

ちらりとシンジの方を見る。

「あんたがサード…」

そしてシズクの方へと真っ直ぐ歩いてきた。

「そしてあんたがフォースね、よろしく」

そう言つてアスカは右手を差し出す。

シズクには全てがスローモーションに見えた。

がばつ。

「…………なつ！」

アスカが硬直した。

シズクがアスカに抱きついたのだ。

「……ひくつ……うう……ぐすつ……あう……つか

シズクは号泣していた。

アスカを強く強く抱きしめる。

何？何よー？何なのよ、じいつ……！？

握手をしようとしてきた手を思いつきり跳ね除けて

ちょっとシンクロ率が高いくらいでいい気になるんじゃないわよー

エヴァのパイロットの真のエースはこの私なんだからね……つて言つてやるつもりだつた。

そして呆然としたフォースの顔を鼻で笑つてやる。

そんな計画。

ところがどうしたことか。

こいつはいきなり私を抱きしめてきて囁び泣いている。

…なんなの？

私の計画が全てパーじゃない。

…なんなの？

「…いつは一体何なの…？」

「あんた…いい加減、離れなさいよ…」

アスカは怒鳴つてシズクを突き飛ばす。

シズクの涙は止まらなかつた。

「アスカあ、いきなりシズク泣かせるんじゃないわよ」

ミサトが冗談まじりに言つ。

「ち、違うわよー！」こいつが勝手に泣き出して……！」

アスカが慌ててシズクを指さした。

「と、とにかく、私が来たからにはもう大船に乗つたつもりでいなさい、あんたたち！」

そう言つてビシッと5人に指をさす。

…と、突如突風が吹く。

ブワッヒアスカのワンピースが盛大にめくれ上がった。

パンツ！パンツ！パンツ！

同時になる3つの平手打ちの音。

「いきなりなにするんや！」

頬を押さえながら怒鳴るトウジ。

「私のパンツ見たでしょ、安いもんよ」

「シンジ…俺、こいつ嫌いだ…」

「僕も…ちょっと心配になつてきたかな…」

同じく頬に手を当てながらケンスケとシンジが囁いた。

「……すん……アスカ……よろしく」

ようやく涙を拭いてシズクがそつと話した。

「……ふん」

アスカはそっぽを向いて中に入つていった。

「あ……アスカ……待つてよ……！」

後を追つシズク。

「シズク！」

シンジもそれに続く。

「やれやれ、どうなることやら……」

ミサトは溜め息をつきながらそつと呟いた。

ケンスケとトウジはぽかんと眺めている。

「大変だなあ、葛城」

後ろから不意に声がかかる。

その声ごゑこゑとして、ミサトは後ろを振り向いた。

「よお」

軽く右手を上げ加持が挨拶をする。

「か…か…か、加持――――――!?

ミサトが2・3歩後ずせる。

「な、な、な、なんであなたがここにいるのよー。」

「アスカの随伴さ、聞いてなかつたかい?」

迂闊だつたわ…充分に予測できる事態だつたじやない…

と、口に出す。

シズクと連絡を取つてゐる、といつシズクの言葉を。

すかすかと加持の方へと歩き出すミサト。

ぐわっと加持の胸倉を掴んだ。

「おいおい、何だよ」

両手をあげて勘弁してくれよといわんばかりの素振りを見せる加持。

「あんた!シズクに余計なこと吹き込むんじゃないわよ…。」

「？」

「惚けんじやないわよ！あんたとシズクが連絡取つてることはないってるんだからね！！」

俺が…？フォースに連絡…？

「…恋人とか、勝手にほざいたらしいじゃない！？」

俺のことを知つていた…？

加持はニヤリと笑い。

「何だ葛城、何か不味かったか？」

「不味いわよ！もうあんたとは何でもないんだからーーアスカのことも勝手に言つて！」

機密事項取り扱つてる責任持つてるわけ！？」

アスカのことも知つてたのか…興味深いな…

「悪かった、悪かった、それじゃな、葛城」

ひょいと胸倉に掴まれた手を解き、加持はするりと船の中へと入つていく。

「ちょっと一どこの行くのよーー。」

「シズクちゃんのところだよ、連絡は取つていたが直に会つのは初

めてだからな

「うつむきと軽く手を上げて加持は軽快に走つていった。

「ちよつと付っこになこでよー。」

アスカがシズクに向かつてしゃべつた。

「いや、でも……」

「テモモストライキも無い！あなたの顔見てるだけでいらっしゃんのよーー。」

「ちよ……そんな言い方無いじゃないかー！」

流石にシンジが止めに入った。

「何よあんた、あんたこいつの肩持つのか？」

「そうじやなくて、同じパイロット同士なんだから、もつちよつと仲良くなつよ。」

はつとアスカが右手を振る。

「同じ？私とあんたたちを同列に見ないで欲しいわね」

「お、いたい」

と、そこで加持がやつてきた。

「あ、加持さん！」

途端に笑顔になるアスカ。

「やあシズクちゃん…久しぶり…とでも言ひべきかな…？」

シズクは加持を見る。

「…加持さん」

「まあ、つもる話もあるだらう、ちよつといいかい？」

「…はい」

シズクは静かに頷いた。

「加持さん、何でそんなやつと…！」

アスカが吼える。

「まあ、ちょっと二人だけの秘密つてやつさ、いい子だからアスカたちほっこりで待つてな」

そう言つと加持とシズクは奥へと歩いていく。

それを見ていたアスカはふるふると拳を震わせていた。

「あの…大丈夫？」

シンジがアスカに問う。

ガツとアスカがシンジに食いついた。

「もー…なんのよ、あいつは…！」

「さて…初めまして…でいいのかな…？」

「…はこ、ミサトさんから聞いたんですね」

「ああ…正直、吃驚したけどね」

「ミサトさんには何て…？」

「適当にあしらつておいたよ、別に連絡を取つてないとかそういうことではない」

「… そうですか、すみませんでした」

「別に謝らなくてもいいさ、それより、何で俺やアスカのことを知っていたのか…教えてくれるかい？」

シズクは俯いた。

「… それは」

沈黙が続く。

やがて加持は「ヤツ」と笑うと。

「… 言いたくないな、無理に言わなくともいいさ」

と言つた。

「… すみません」

「どうでシズクちゃん」

「はい」

「俺は今、ある任務を遂行中だ、心当たりはあるかい？」

「…？」

「… ことだ? とシズクは思つ。」

…が、次の瞬間、思い出した。

「この時の加持の任務…記憶が正しければ『アダム』の搬送だ。

それがシズクの顔に出る。

ニヤリと加持が笑う。

「嘘がつけないようだな、君は」

「あ、いや」

「…」で聞いておこうか、俺は『この任務を全うすべき』か?

「！」

加持はシズクに選択権を委ねたのだ。

つまり、アダム搬送と言う任務を放棄してもいいと、言っているのと同義だ。

シズクはかなり悩んだ。

ここでアダムの搬送が行われなければゲンドウのシナリオが大きく崩れる。

確かにそれは大きい。

だが、それは同時に加持の命が危ないことを意味していた。

しばしの沈黙。

そして結論が出る。

「…何の任務か知りませんが、僕に加持さんを止める権利はありませんよ」

といったのは加持の命。

もう、あんな顔のミサトは見たくない。

ゲンジウを食い止めるひと後でも出来るだらう。

そう判断しての結論だった。

加持はその答えを聞くと。

「そうか、わかった…」

加持はそう言つて、煙草に火を点けた。

「…ヒ、わかつてるとま思つがこのことは他言しないでくれよ」

「わかつています」

「俺もこれからは本部に常駐する」となる…と言つても君の「」  
だ、

既に知つていてると思うがね、まあ何か困ったことが会つたら何時  
でも訪ねてくるところ

そう言つて加持はとりだしたメモ帳にサラサラと地図を書き、シズクに渡した。

「そ、そろそろ行くか、わかってると思うが君もあのお姫様には手を焼くと思うぞ？」

「はい」

そう言つてシズクは微笑んで加持の後を追つた。

「よつ、アスカ、お待たせ」

加持が軽く手を上げてアスカに声をかける。

「加持さん！」

アスカが加持に笑顔を向けた、が直ぐ後ろのシズクに気付いて直ぐに不機嫌な顔になつた。

「おいおい、同じパイロットなんだ、仲良くしろよ」

加持はポリポリと頭を搔く。

「…加持さんがそう言つなら…」

アスカがそう言ってシズクの前に立つ。

「まあ、足引っ張りない程度にやつなさよね」

「うそ」

ズ…ズウウウウウン…

船が揺れる。

「な、何！？」

「地震！？」

アスカとシンジが壁に手を付いて同時に叫ぶ。

「いや…ここは海の上だぞ…」

加持が目を細めてそう言った。

「…使徒だ」

シズクが呟く。

「使徒ですって…？何で…こんなところ…」

アスカがそう言って顎に手をやる。

「…加持さん、行ってください、ここは戦場になります」

「お言葉に甘えさせてもらひうよ」

加持はさわやかにそう言つと颯爽と廊下を走つていった。

「シズク…この搖れ、本当に使徒なの…？」

シンジの問い。

「多分…狙いは式号機だ」

シズクはこう言つたが使徒の本当の狙いは違う。

加持が持つアダムだ。

それはシズクも分かつていた。

だから加持を先に行かせた。

アスカがニヤリと笑う。

「どちらにしても、これはチャンスよね」

「え？」

「あんたたち、ちょっと来なさい！」

そう言つとアスカは一人の手を取り式号機がある場所へと走り出した。

## トリプルホントリー

アスカに連れられた二人はエヴァ、式号機がある最深部へと辿り着く。

アスカは式号機の田の前でぐるっと振り返り、手をかざした。

「じゃ、これが私のエヴァ、エンゲリオン式号機、  
プロトタイプな零号機や初号機とも悪趣味なカラー・リングの3号  
機とも違う、  
正真正銘のエヴァ、エンゲリオンよ！」

「…赤いんだ」

シンジがポツコと呟く。

4つの田が一列に見下ろす。

アスカがエントリー・プラグ内に入り、「そ、そ、何かをしていた。

ぱわりとシンジヒシズクに式号機と同カラーのプラグースーツを渡す。

「…何？」「れ？」

「何って、着るのよ、あんたたちが」

そもそも当然ど、こいつによアスカが言った。

「ええええ！？これ、女物のプラグスーツじゃない…それに着るつてもしかして…」

「そりゃ、あんたたち、感激しなさい、私の華麗な操縦テクニックを直に見せてあげるわ」

「…無茶苦茶だよ…」

変わつてないなあ、本当に

シンジは慌てふためき、シズクは変わらないアスカの姿に思わず苦笑する。

「ぶつぶつ、言わなこでさつさと着替えなさい…」

「わかったよ」

そういひとシンジは上着のボタンに手をかけようとする。

その瞬間、アスカの鉄拳が飛んできた。

「あんたバカア…?ビリに女の子の田の前で着替え始める男がいるのよ…」

後の方行つて着替えなさいよ…。」

「い、『めん』

シンジは鼻を押さえながらすじすじと戻る機の後ろへと回り込んだ。

「ほり、あんたも着替えて」

「あ、うん」

シズクも赤いプラグスーツに着替えを始める。

「どう?私のプラグスーツは!」

「ちょっと…胸がゆるい、かな」

当然!

ちょっと得意気になるアスカ。

「あと腰回りも、少しゆるいかな」

ははは…と苦笑まじりに囁きシズク。

ムカチン!

やつぱこいつムカつくわ…

アスカは心の中で呟いた。

「ちょっとサードーあんたも早く着替えなさいよ!」

ムカムカしたまま、ずかずかと式号機の後ろへと行くアスカ。

「ちょ…待つてよ!」

アスカがシンジと対面したとき、シンジは丁度ズボンを下ろしたところだった。

「な、な、な、何で格好してんのよ！あんた！！」

「さあ、君がここに来たんだろーー！」

アスカは真っ赤になつてシスケの元へとタッシした。

早く着替えなさいや!!ハガ!!!

：もうお嬢に行けなし

シノシロ花をなかでハケヌリツに色を色んだ

ドオオオオオオオオオン！！

再び揺れる、艦内。

「近いわね」

アスカが呟いた。

「せり、あんたたち早く乗りなさい」

蹴るように二人をエントリー・プラグへと押し込む。

続けてアスカも滑り込むようにプラグ内へ入った。

「…思<sup>おも</sup>考<sup>かう</sup>言<sup>ごん</sup>語<sup>ご</sup>に支障<sup>しおう</sup>? あんたたち、ちゃんとドイツ語で答<sup>こた</sup>えなさいよつー」

「え? わ、わかったよ…バ、バームクーヘン?」

「いめん、ドイツ語はちょっとわからなによ」

「もう! 使えないやつらね! いいわ、思<sup>おも</sup>考<sup>かう</sup>言<sup>ごん</sup>語<sup>ご</sup>を日本語に切り替え!  
エヴァ、武器機起動!」

七色の光がエントリープラグ内を包み込み、四つの目が光る。

- オーバー・ザ・レインボウ旗艦、管制室 -

「一番、二番艦、撃沈!」

「標的、止まりません!」

じたばたと動き回るクルー。

「何をやつとるーやつをと倒せとかー！」

艦長と思われしき男が叫ぶ。

ロン、ロンと開いてる扉からノックが響いた。

「ちわー、ネルフですが未確認の敵生命体についての情報いつませんかー？」

〃サトが軽い調子で言つ。

「ネルフなんぞに用は無い！太平洋上にいる以上、  
あれは我々の管轄下だー余計な手出しさずのなーー！」

「四番館ー撃沈！」

「おのれー何としても落とせーー持てる戦力を全てぶつけるーーー！」

「…無駄なことを」

〃サトはやつをひき捨てた。

「…何だとー？」

「今を持つてないよネルフの管理下に置きます、艦長には私の命令  
に従つてもらいます」

「ふ…ざれるなー貴様は子供のお守りでもしてこいー!」

「あのねえー！そんなひとに会つてた場合、いやないでしょー！早く式典機を発進させひつて会つてたのよーー！」のまま全滅して

ミサトが凄む。

艦長はぐりとがむしを噛んだ。

一せんは五万円じゃないとなあ……

「せやなあ……」ない骨董品じきらあかんで

ミサチの後ろにいたエウジとケンスケが咳いた。

葛城レム

スピーカーから流れる加持の声。

「加持! ビニにいんのよ! あんたもこの頑固親父説得すんの手伝いなさいよ!」

『悪いなあ、急用あるんで俺先行くわ』

「はつ？」

ばつと窓の外を見る。

戦闘機に乗った加持がコクピット後ろ座席より軽く手を振った。

『やつへくれ

『はー』

やつへくれと加持を乗せた戦闘機は急加速して飛び去った。

「逃げやがったわね…あの野郎おおおおーーーー！」

べつたつと窓に両手と頬を貼り付けさせてミサトはなんだ。

「格納庫よりエネルギー反応！」

「なんだとー？」

クルーと艦長の声に振り返るミサト。

ダンジー

とこひと共に武装機が空中へと飛び出した。

「なんとこひー」とを…

艦長が弦く。

「ナイス！アスカ！－！」

『//サトさん、ケーブルの用意を…』

シズクの声が通信から聞こえる。

「シズクも乗ってるの…？」

『シンジくんも一緒に、それより早くしないと内部電源が』

『ちよつとあんた、私を置いて勝手に話しそうんじやないわよ…』

「OK、OK、わかったから、喧嘩するんじゃないわよ、  
艦長、アンビリカブルケーブルの用意を」

「…しかし」

「あんたねえ！死んだら誇りもプライドも糞も無いでしょ！つが…！  
さつさと出しなさいつつてんのよ…！」

「……わかった」

諦めたかのよつて艦長は呟いた。

「…ケーブルは八番艦だ」

「アスカ、聞こえた？八番艦に急いで」

『了解…』

そう言つとアスカが操縦桿に手を置いた。

式号機が空中を跳ぶ。

…改めてみると…アスカの操縦つて本当に優雅といつか…凄いな…

シズクは感心する。

幼いころから特殊訓練を受けてきたアスカ。

前回と合わせても一年たらずの経験のシズク。

シンクロ率に差はあるけど、シズクにアスカの動きは真似出来なかつた。

『式号機、着艦しまーす！…』

ドンッ！と八番艦の甲板に着地する式号機。

八番艦が大きく揺れる。

『アスカ…来るよ！』

『ふん！』

瞬時にカッター式のログナイフを装備して海中から飛び出した使徒ガギエルを迎え撃つ。

式号機曰掛けて飛んで来たガギエルを掻い潜りながら式号機はガギエルの腹を引き裂いた。

ドッボオオオオオオオオン！

そのまま海へと落ちるガギエル。

『どんなもんよ！』

『今のうちにケーブルを』

『わかつてゐるわよ！一々口を出さないで！』

式弾機は背中にケーブルを差し込んだ。

内部電源から外部供給へと切り替わり、エントリープラグ内のカウントダウンが止まる。

『ケーブル、装着！』

『また来た！』

ガギエルが大口を開けて式弾機を襲った。

『ここのおおおおおおおおおおおおおおおお…』

八番艦から突き落とされながらそのままガギエルの口の横に式弾機は蹴りを入れる。

ドボオン！

ドボオン！

式号機とガギエルは海へと落ちた。

「アスカ、装備は……？」

「標準B型装備よ、いいハンデじゃない」

「ゴポポポポッ」と大きく口を開けるガギエル。

その奥にうつすらと赤い球体が見える。

「コアだ……」

シンジが呟いた。

「あれがあいつの弱点ってわけね……」

アスカが鼻の下を人差し指で擦る。

「……」

次の瞬間、ガギエルは海上の数十倍のスピードで式号機に喰い付いて来た。

ガット口の上下を両手で押さえガードする武弓機。

だがそのまま彼方まで運ばれるかの勢いでガギエルはスピードを緩めない。

八番艦のケーブルはまるでサメに引っ張られた釣り糸のようにぐんぐんと伸びていく。

『アスカ！大丈夫！？』

ミサトの声がプラグ内に響く。

「…」となの…どうして…」といわよ…。」

操縦桿の手に力を込める。

その上からそっとシズクが手を置いた。

「あんた、何すんのよ…？」

「僕も武弓機にシンクロする」

アスカはその言葉にげつと唸った。

「武弓機は私のHガアよ…邪魔しないで…！」

「わかつてゐる、僕はあくまでシンクロを補助するだけ、

実際に武弓機を動かせるのはこの世にアスカただ一人だよ

シズクの言葉に僅かに沈黙した後、ニヤリと笑い、

「自分の立場つてのがわかつてんじゃない…だつたらサードもやんなさいよ…」

「う、うん」

シンジは慌ててアスカの手の上に自分の手を置いた。

「ミサトさん、使徒の口の中にコアを見つけました…作戦があるんですけど…」

『… 言つて見なさい』

ミサトの静かな声が響く。

「武弓機の力でこの使徒の口をこじ開けます、同時にA・T・フィールドを中和、

その後、戦艦一隻による特攻、零射程の砲撃でコアを一気に碎きます」

シズクは淡々と言つた。

『奇遇ね、シズク、私も丁度同じことを思つてたところなん

『戦艦一隻を無駄にしきるところのかー…』

艦長の声がプラグ内の3人とミサトの耳を劈いた。

『どのみち』のままじや全滅するのよ、それしか方法は無いわ』

『……くつ、わかった…五番艦、六番艦総員退避急げ！』

『アスカ、約3分かかるわ、それまでに使徒の口こじ開けられる  
?』

「愚問ね、見てらつしゃい！」

そう言つと3人は手に力を込める。

「いいあんたたち！余計なこと考へるんじゃないわよ！…」

「うん」

「わかつてゐる…」

(開け開け開け開け開け開け開け！)

(開け開け開け開け開け開け！)

(開け開け開け開け開け開け！)

3人の心が一つに混ざり合い、式号機の瞳が赤く光る。

序々にガギエルの口が開いていく。

近づく一隻の戦艦。

式号機の瞳の光の量が上がつた。

ヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ガバツとガギエルの口が上下に開く。

「アヌク、マイケル君！」

「命令すんじゃないわよー！」

位相空間が反転される。

そして、一隻の戦艦がガギエルの口へと突っ込んだ。

一  
脱出！

アスカが叫ぶと戦闘機はガギエルの口の上を蹴り、海上へと出る。

次の瞬間、ガギエルの体が大きく膨らんだ。

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオ...ン

十<sub>サ</sub>の光が波しぶきと共に上<sub>カ</sub>がる。

『お疲れ様』

ミサトの声がプラグ内に聞こえた。

「ま、私にかかればあんなやつ、こんなもんよ」

八番艦に着艦した式号機の中でアスカがえへんと威張った。

「どう? サードにフォース、私の実力がナンバーワンだつてことわかつた! ?」

「流石だよ」

シズクはそう言つて一ヶ ロコと微笑む。

「うん… 空中でのエヴァの操り方とか、使徒の攻撃の避け方とか… 深かつた」

シンジは心底感心したように呟いた。

その一人の言葉にアスカは満足気に笑うと、

「まあ、あんただちも良くやつたわよ、これからも精々、私の足を引っ張らないことね! 」

そう言つてエントリー プラグを放送出する。

出迎えに来るミサトたち。

そして、女物のプラグースーツを着たシンジはトウジとケンスケに思いつきり笑われたのだつた。

## トロブルハンター（後書き）

ほぼ原作通り……だと思います。

確認してないおぼろげな記憶だけで書くといつこいつ文章になる悪い

見本 丶

結局、あの艦隊って何隻いたんでしょうね 丶 丶 丶

## 集つチルドレン

S o u r y u   A s u k a   L a n g r a y

そうチョークで書かれた黒板を背に、自信に満ちた笑みを浮かべる赤い髪の少女。

「よろしくー。」

そう言つてアスカは手を腰にやり胸を張つた。

「おいおこ、よつにもよつて同じクラスかいな……」

「顔はいいんだけどなあ……性格がなあ……」

「ほやほやとはトウジとケンスケである。」

「二人とも……そんな」と言つたら悪いよ……」

やはり小声でシンジが言つ。

机に向かう最中でアスカが三人に気付いた。

「あら三バカじゃない、同じクラスだったの」

さう言つとふんつと顔をそらして自分の席へと付いた。

「よろしくね、惣流さん」

せつ言つて微笑むのはヒカリだ。

「アスカでいいわ、これからじゃもう少ししく」

「じゃあ、私のこともヒカリでいいよ」

アスカは机に身を乗り出すと小声でヒカリに問う。

「とにかく… フォース… ヒカリの隣の席のやつって、どんなやつ?..」

「え? ああ、シズク? ちょっと言葉使い変わってるけど、とても優しくていい子よ」

「ふ~ん、じゃあさ…」

と囁ひながらアスカはレイの方を見た。

「あいつに瓜二つなあれば?..」

「ああ? レイ? そつくりでしょ? あの一人、この世には同じ顔した人が三人いるってことね? ホントなのかもね」

「顔はどうでもいいの、中身よ中身」

「いい子よ、とっても、感情を外に出すのが苦手だけ?.. せつと純粋な子」

「ふ~ん」

アスカは授業内容をパソコンに記録しているレイを見ながらそう呟いた。

「ファースト！」

放課後、中庭のベンチで読書をしていたレイに仁王立ちで話しかけるアスカ。

「セカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーよ、まあ同じチルドレン同士仲良くなつましょ」

レイはその言葉を聞くとパタンと本を閉じすつと立ち上がった。

そして右手を差し出す。

「なによ……？」

「……握手」

「は、あ、ああ、握手ね、OK

ガシッと思いつきレイの右手を握り返すアスカ。

アスカは渾身の力を込めているがレイは顔色一つ変えず握り返している。

「…………頼りにしてるわ」

「当然よ、大船に乗った気持ちでいなさい、あんたの出番なんて無くしてあげるんだから」

「…………ええ」

「じゃあね」

もう言うとアスカとレイは別れた。

思つてたより、素直なやつね..  
ドイツにいた頃の報告じやもつと取つ付き難いやつだつて聞いてたのに

「…………あ、待つて」

不意に声がかかる。

「何よ?」

「あなた…何故髪が金色なの?」

「は?ああ、この髪?私はドイツと日本のクオーターなの、  
だからドイツ語と日本語も喋れるし、それにどうってこの日本人離れしたプロポーション!」

アスカはレイの胸をちらりと見て勝ち誇ったように胸を張る。

「……個人差だから」

むかつ。

やつぱつむかつくやつかも…

「…でも赤木博士の髪も金色…でも赤城博士は日本人だわ」

「あんたバカあ！？リツコは染めてんのー私は地の色よつーー！」

「もう…赤城博士の金色は二セモノ…」

「ぐ、変な子ね、あんたつて…」

納得して頷いているレイに、アスカは不思議なものを見たように首をかしげる。

「でも…綺麗な色」

「ふふ、そうでしょ、まあ私にはあるけどあんたのその水色の髪も中々のもんよ」

「…もう」

「それにその目、珍しいわね、日本人で紅い目つて」

「珍しい…変？」

ぱりくつと瞬きをしてアスカを見る。

「べ、別に変じゃないわよ」

「…そり」

アスカのレイに関する第一印象、よく分からぬ子。

「うしてレイとアスカの第一次接触はどういうかと言ひと無難に終わつた。

-ネルフ本部、司令室 -

「……遅かつたな、加持一尉」

「苦情は使徒に言つて欲しかつたですなあ、あそこで襲われるなんて聞いてませんでしたが」

加持はおどけて肩をすくめると、皮肉な口調で、持つていたトランクを大きなデスクの上に置く。

「教えても教えなくとも君がそれくらいで動じるタマではあるまい」

「さて、どうですか、…そりこねば、副指令をお見かけしませんが

「冬月は上だ」

「また、予算会議ですか、『苦労が忍ばれますな』

少し、皮肉を込めて、加持は笑う。

「それが仕事だからな、それで、君の仕事の方はどうなのかね」

「問題ありませんよ」

加持はそう言つとパスワードを入力し、トランクのロックを解除した。

パシュッ……。

ガコ。

「硬化ベークライトで固めています…が、間違いなく生きています」

ゲンドウは四角い『物』に囲まれた胎児のようなものを見てサングラスのズレを直す。

「これが、人類補完計画の要、ですか」

「そうだ」

ゲンドウが微かに微笑む。

加持は表情を消したまま、その微笑みを見る。

……違うな。

かつて、ゼーレの計画と碇ゲンドウの存在を知ったときに感じた、あの好奇心が薄れている。

今、加持の脳裏に浮かぶのは一人の少女の姿。

彼女の目的、正体、そしてあの容姿、全てが謎だ。

しかしその点ではゲンドウもほぼ同じである。

だが自分が惹かれるのはシズクの方だ。

彼女の行動は、加持に奇妙な高揚感を覚えさせた。

初めて、この稼業に足を踏み入れたときの、何が起こるかわから  
ない、あの高揚感。

加持の興味の対象はゲンドウやゼーレよりもシズクに傾いていた。

<00 - 1st Children>

<01 - 3rd Children>

↙02 - 4th Children ↘

↙03 - 2nd Children ↘

四つの擬似プラグが、モニターに映っている。

アスカにとつては、日本では始めてのシンクロテストである。

「流石、シズクね」

02とナンバーの振られたデータの数値を見てミサトは呟く。

シズクのシンクロ率は96.5%を指していた。

「… そうね、これで3号機が修理中というのが残念だわ、折角色々  
と試したいのに」

「まだ、時間かかるの?」

「あと、3週間は見ないとね」

リツコはノーヒーを啜つて答えた。

作業工程は遅々として進んでなかつた。主な理由としては予算の  
問題だ。

「予算を出し惜しんで自分の首を絞めるのでは本末転倒だわ

「…まつたく、委員会は何考へてんのかしらね」

リックに全くだ、と賛同して頷くリサト。

「…人はエヴァのみにて生きるにあらず、ね」

「まあでも、式号機とアスカも来た事だし、少しほは樂になるわよ、  
レイもいるし」

「やうね…」

リックはバーを飲み干すと皿の上に置く。

「バー、おわり入れてくれる?」

リサトがリックに聞く。

「…リサトが入れるの?」

「やうよ? なんで?」

「…遠慮しておくわ」

リックの遠慮ない一撃にリサトはさつと呟いた。

「で、アスカはどうなの?」

「アスカは〇・〇とナンバーを振られたデータを見た。

アスカのシンクロ率は 84・1% を記録していた。

「流石にやるわね」

「わうね、確かに噂通りの実力だわ」

「素っ気無い返事ねえ」

「そんなことないわよ、ほら、いつのデータを見て

「ん? ……ああ、これってドイツ支部の」

「そりゃ、これまでのアスカの最高値は 82・4%、  
平均で言えば 70% 弱といったあたりね」

リックはそう言いながらアスカのシンクロ率の推移のグラフをめぐる。

30%あたりから、上昇をし続けたグラフは  
70%を越えたあたりでほぼ横這いになっている。

「へえ……新記録つてわけか」

「ええ……」

「これってさ、この前の3人での同時シンクロの影響かしら」

「まあね、そこまでは分からないわ、これからこの数値を見てみないとね」

「シンちゃんは、め、78%超え…シンちゃんの成長の早さは驚くばかりね」

「やうね、あの子には興味が吸きないわ」

「おひ、やつてゐな」

背後のドアが開いて、気楽そうな声がリサートコシロの耳に届いた。

「ちよつと加持、ここは部外者は立ち入り禁止よ」

「固い」とこつなよ、今日はシンクロテストだけなんだろ?.

「なんであんたがそんなこと知つてんのよ」

「アスカに聞いたのひ、見に来いつてゐるわけだね」

そう言しながらモニターを見る加持。

「これが結果か?ほお…流石、シズクちゃんとシンジ君は噂に違わず凄いな、アスカも上がつてるじゃないか」

「ひひひ…勝手に見るんじゃないわよ…」

拳ほ振り上げるミサトに加持はひょいとかわすと両手を田の前に上げた。

「お~怖っ、わかったよ、…にしても、レイちゃんは三人に比べると低いな」

レイの数値は50%を少し超えたあたりで止まっていた。

レイのことはリツコにも気になる点の一つだった。

加持は低いと言ったシンクロ率。

だがリツコに言わせるとこれは高いのだ。

リツコやゲンダウはレイに高シンクロ率を求めていない。

最低限、起動レベルを確保している40%前後のシンクロ率。

それがレイという適正素材に求められる数値だ。

ところが、現在はどうか。

高すぎるといふわけではないが、レイのシンクロ率は確かに上昇傾向にある。

ハーモニクスの方を見ると揺れ幅が確認できた。

ハーモニクスは安定を示す数値だ。

それが揺れている…つまりレイに感情が芽生えている、ここつい  
とになるのではなかろうか。

「どうかしたかい？ 深刻な顔して」

「…」

「きなり耳元で囁かれて、リツ」「せびくつと体を震わせた。

「眉間に皺なんか寄せてると、折角の美人が台無しだぞ」

「あい、お世辞…？」

「俺は、本当のひとしか言わないんだ」

「かあーじーー」

一人の会話に怒りの波動を『アアアアア』燃やし覗む//サム。

「ふふ…恐いお姉さんが睨んでるわよ」

「おつと…」

加持はさう言ひとリシコから離れる。

「ねえ、加持君」

「なんだい、リッちゃん」

「…あの子たち、どう思つ?..」

「もうだな…みんな良くやつてるんじゃないかな?まだ14歳なのに  
な」

リックは自分の問いに違つた答えをわざとびぶつけて来た様な加持の  
答えに僅かにイラついた。

「あなたから見て、シズクちゃんはどう?..」

田標を絞り、簡潔に質問する。

「もうだなあ…」

加持は顎を撫でてしばらく考えたような素振りを見せたあと、

「とてもいい子なんじゃないかな」

と、答えた。

「噂通りの実力、見せてもうつたわ」

シャワーを浴びながら隣で同じくシャワーを浴びているシズクに  
アスカが言った。

「……うん

シズクはアスカの声から明らかに不機嫌なのを感じ取っていた。  
シャムショル戦でシンクロ率を上げた時からこうなることは予想できていた。

だが、シズクはこれで良かつたと思つてゐる。

実戦ではシンクロ率を落として戦うなんて悠長なことは言つてられない。

第一、シンクロ率をわざと落として手を抜いて戦つて、アスカは喜ぶだらうか？

アスカは、他人、それ以上にアスカ自身が思つてゐる以上に多感で敏感な少女だ。

シズクがもし手を抜けば、それに気付くのも遅くない。

そうなつた時、アスカのプライドを考えると結末がどうなるかの想像はそれほど難しいものではなかつた。

だからこそ、シズクは初めから大きな差がついたとしても手は抜くべきではないと考えた。

実際のところ、シズクにとつてシンクロ率

90%台というのは、それほど難しいことではない。

その気になれば100%だらうが200%だらうが、

ヒガアに取り込まれる危険を承知でいけば400%にじだつて持ち上げることができる。

だが100%を超えると安定性に欠ける。

早い話が疲れるのだ。

戦闘の一瞬ならば兎も角として、  
テスト中に100%以上を維持するところのは無意味である。

だからシズクはテスト中はなるべく100%に  
近い数値で出来るだけ長くいれるようこなしてくる。

これはやがて来るであろう長期戦にそなえての備えだ。

「…まあ、いいわ

シズクが黙つているのを横にアスカがキュウヒシャワーの蛇口を  
捻る。

「見てなさいよー絶対にあんたに追いついて追い越してやるんだから  
うー」

そう叫び、アスカはシャワールームを出た。

シズクはシャワーのお湯に全身を浴びせながら

はつきり怒るひのこひのせ、そんなに悪い傾向じゃないよな、  
と思つた。

しかし、このまま良いわけではない。

このままアスカとの差が縮まらなければやがてアスカの精神は不安定になり、そして…。

それだけは何としても避けなければならない。

方法は二つ、アスカのシンクロ率をシズクのレベルまで、どうにかして底上げする方法。

もう一つが、アスカのエヴァに乗るという過剰な執着を取り扱うか、だ。

前者の方法は根本的な解決になり得ない。

現在、アスカの精神的骨格はエヴァに乗ることが基盤となつて形成されている。

それは幼い頃の壊れた母親との記憶。

エヴァパイロットが持つ、トラウマの記憶。

アスカの心をなんとかして解き放つてやれれば…。

シズクはそう考えると、キュウと蛇口を捻りお湯を止めた。

- 数日後 -

シズクはぼんやりと窓の外を眺めていた。

第7使徒イスラフェル、前回の歴史通りに事が進んでいるならば、アスカが来日して数日後、おそらく今日だ。

細かいことは覚えていないが、確かあの時は学校にいるときに非常召集を受けた気がする。

「コアを二つ持ち、分離、合体能力を持つ使徒、イスラフェル。」  
こいつの撃退方法をシズクは模索していた。

恐らく、今回の出撃メンバーはシンジ、アスカ、レイの三人になる。

3号機は修理中で使えないためだ。

と、なるとシンジに先行させて分離前の使徒の二つのコアを同時に叩く、といふのはどうだらう？

だが大きな疑問が残る。

分離前の使徒への攻撃、といふのが果たして有効なのか、という点だ。

そしてそれ以上の大問題があつた。

役割分担の見解である。

どう考へてもアスカが前衛を勤めようとすると違ひない。

ふう…と軽く溜め息を漏らす。

やはり、シンジとアスカでユニークをやつてもうつしかないのだ  
らうか。

結局のところシズクの思考はそこに落ち着いた。

アスカとシンジがどれだけ心を通わせられるのか、が焦点になる  
…が

そこには自分がどんな手を使つてでもフォローする。

ただユニークに持ち込むとなると、一度敗北しなければいけない。

つまり三人に危険な目に会え、と言つてゐに等しかつた。

それがシズクの胸を抉る。

3号機が使えるなら…自分一人の単独出撃といつ手もあるのだが、  
まあ恐らくミサトが許可しないだろ？

そこで、四人の携帯電話が一斉に鳴る。

来たか、とシズクが思つと同時に鞄を取り、携帯を確認もせずに教室を飛び出す。

「シズク…？」

ヒカリが不思議そうに呟いた。

「あのバカっ、勝手に先行してんじゃないわよ！」

アスカが携帯を確認すると、続いて教室を飛び出した。

レイとシンジも続く。

「また…化け物がきたんかな…」

トウジの呟きにクラス中が睡を飲んだ。

-ネルフ本部 -

「3号機は凍結中のためシズクは今回お留守番ね」

ミサトの声が響く。

「はい」

「ふふ、残念だつたわね、フォース、見せ場が作れなくつて」

可笑しそうに笑うアスカ。

「まあ、安心しなさいよ、私がちょっと片付けてやるから、あなたは特等席で私の日本デビュー戦を見物してなさい」

「……うん」

アスカにイスラフールの特徴を伝えたかつたがぐつと堪えた。

「あの……ミサトさん、僕がレイの代わりに零号機で、といづのは無理ですかね」

シズクの発言にミサトにリシリ、アスカやシンジ、当人であるレイも驚いた。

「それは流石に無理よ……、ちやんとパイロットはいるんだし」

「シズクちゃん、何故そんなに戦いたいの？」

「そ、それは……」

今回の戦闘では使徒を倒せないから、とは言えない。

シズクは言葉に詰まつた。

「シズク……無理はしないで、私が……頑張るから」

「うん」

「ファーストの出番なんか無いわよ！私が一人で出れば済む」とだわ！」

「…何故？皆でやつた方が勝率は高くなる」

「足手まといがいた方が勝率は低くなるのよー」

「…私は足手まとい？」

レイが少しうなづれるとそこにシズクが割つて入った。

「レイは足手まといなんかじゃない」

「何よ、フォース、あんたファーストの肩を持つわけ？」

「そうじやない、けどアスカの言い方は良くない、皆、使徒を倒したいだけなんだ」

「……ああーそうーわかったわよ、勝手にすればいいでしょー！」

女の子三人の修羅場にシンジはただオドオドと見ていくことしか出来なかつた。

ズカズカとケイジの方に移動するアスカ。

それに続いて移動するレイ。

シンジもそれに続けたとしたその時、シズクに呼び止められた。

「シンジくん、お願いがあるんだけど…」

「え？」

「アスカが使徒を倒したと思ったたら、直ぐに式号機を使徒から引き離してくれないかな」

「え？ なんで？」

「ごめん、理由は上手く言えない…けど、頼めるのはシンジくんしかいない…頼むよ」

「…わかつた、シズクの言う通りにするよ」

「ありがとう」

シズクはそう言つと微笑んだ。

そしてミサトとロシリの方に振り向く。

リツコは先ほどのシズクとシンジの会話の内容が釈然としないような目でシズクを見ていた。

しかしシズクはそんなことお構いなしにこう告げた。

「ミサトさん、僕も移動指揮車で連れて行ってもらえないませんか？」

- 移動指揮車内 -

「先の戦闘において、第3新東京市の迎撃システムは大きなダメージを受け、

現在の復旧率は19%。実戦における稼働率は実質0と言つてもいいわ」

ミサトの指示が各パイロットに伝えられている。

「だから、今回は上陸直後の目標をこの水際で一気に叩く！各エヴァは交代制で目標に対し波状攻撃、接近戦でいくわよ」

『『』了解』』

ミサトの説明は前回とほぼ同じだ。

あの頃は戦場が選ばれる意味なんかはわからなかつたが今、改めて聞かされるとかなり厳しい状況だ。

上陸を許せば討つ術がなくなるに等しい。

「…ミサトさん

「何、シズク？」

シズクの声にミサトは振り返る。

あまり時間は無かつたがシズクのこゝぞといつ  
言葉は信頼に値する…とミサトは評価している。

だからこそ、意見を聞く気になつた。

「UNICORN爆雷の手配、お願いしておいた方が…良くないですか」

「えつ？」

全員の注目がシズクに集まつた。

「…どうして…」

ミサトはシズクの意見に若干の疑問を感じた。

少なくともこの時点では必要性は感じない、そんな提案だったからだ。

「万が一、とこいつことがあります、上陸されてからじや、後手に回ります」

「こつものシズクらしくなこじやない、戦う前から負ふことを考えるなんて」

「…すいません、でも」

「あの三人を信頼出来ないの？」

「してますよ、してるからこそ、こかつてこいつのことが心配なんです

「…シズク、こんな」とは言いたくないんだけど、

作戦部長は私、あなたはあくまでパイロット、進言は謹んで頂戴

ミサトはあまり使いたくない、職務権限を使って、シズクの提案を却下する。

そうしなければ司令部の権威に亀裂が生じてしまう、そう考えたからだ。

同時にシズクの言葉に若干の不安を抱えている自分がいたことも確かだった。

「…はい、すみません」

シズクはふるふると首を横に振ると回線越しに声をかける。

「みんな…気をつけよ」

『あんたなんかに心配されなくとも分かってるわよー』

『シズク…私は大丈夫』

『シノジくん…頼んだよ』

『いや、うん…』

「今日は彼女の出番はなし、か…」

加持が双眼鏡を片手に降下していくるウイングキャリアーを見つめてそう呟いた。

海岸に武号機と零号機、そして少し後方に初号機が立つ。

武号機の手にはソニック・グレイブ。

零号機と初号機の手にはパレットガン。

『一体相手に三人がかりなんて、なんだか卑怯よね、趣味じゃないわ』

『……来るわ』

水平線に上がる、巨大な水柱。

海面から一見すると埴輪のよに見える、そんな印象の使徒がゆっくりと起き上がる。

イスラフールは海水が雨のように降り注ぐ中、ゆっくりと顔を上げた。

「ミサトさん…あの使徒、コアが一つありますでしたか」

「えつ？」

じつとモニターを見つめていたミサトがシズクの言葉に驚いて振り向くが慌てて確認しようと視線をモニターに戻す。

使徒はモニターから体の向きが正面でなかつたために胸部が確認できない。

「気のせいじゃない？私には見えなかつたけど」

「…今までの使徒とは違いますよ、こいつ」

シズクのモニターを見つめる視線がいつもものあの時の瞳だったためにミサトは言葉を失つてシズクを見つめた。

『ミサトー指示は済みましたのよつ…』

「あつ…、攻撃開始！」

『オーケー！』

アスカからの催促でミサトは慌てて作戦開始を告げる。

「私が先に行くわ、ちゃんと援護すんのよ、一人とも」

見てなさい、私が一番なんだから。

アスカは一方的に宣言すると、残る一機を置いて、疾走を開始した。

レイとシンジは一瞬戸惑つたが同時に前進を開始する。

有効射程に入つたところで初号機と零号機が攻撃を開始する。

弾は全て、使徒のA・T・フィールドに弾かれる。

が、その攻撃は確かに使徒の進行を止めていた。

一  
いけるつ  
！」

それを見たアスカは水没しているビルの頭を足場にして、ソニック・グレイブを振りかぶったまま、宙を跳ぶ。

瞬間。

閃光の様な斬撃が使徒を襲い、真っ二つになる使徒。

シズクは両断される瞬間をじつと見つめていた。

コアは、無傷。

「アスカ、お見事！」

ミサトの歓声に、指揮車内が勝利の雄たけびに包まる。

『まあ、私にかかるばちよろいもんよ』

アスカの得意そうな声が、回線を通して聞こえる。

「シンジくん！」

シズクの声と同時に初号機が式号機をその場から引き剥がした。

『なにすんのよーバカシン……』

アスカの声は途中で止まった。

直前まで式号機が立っていた場所を使徒の攻撃が空振りしていた。

「ううそおうー？」

使徒は一体に分裂していた。

ミサトが、なんてインチキ！と叫ぶ。

「みんな、早く退いて！」

シズクの声と田の前の現象とまるで自分のやつたことが前にわかつていたのかという

この結果に驚いたシンジがいち早く我に返つて、式号機を引きず

ぬよつに海岸へと上がる。

『うふ、うふつとー向すんのよー敵はまだ、生きてんでしょうが  
ーー』

「シズクー越権行為よー二人とも、攻撃を続けてーー」

「効きませんよ…」

「なんですかー!?」

ミサトは耳を疑つた。

今日のシズクはいつもと違う。

なんとこかこの使徒の全てを知つてゐるかのよつな…。

『うひゅうひゅうひゅうてんじやなにわよーでりやああああつーー』

アスカは初号機の腕を振り払つて、ソニック・グレイブを振り上げた。

「アスカ! 駄目だー!」

そして、エヴァは敗北を喫した。

## 重い瞳、似たもの同士（前書き）

活動報告にも書きましたが…

アンポンタン・ポカソさんのレビューを拝見しました。

そのタイトルのものを知らないくて

探して読んでみたら恐ろしいまでに酷似していて吃驚しました。

（特に今回の告白シーン、加持に諜報の知り合いで出てくるところ、修学旅行のくだりは焦りました）

ここまで似てるとパクリと言われても仕方ない気がしますーー；

既に全話書いてしまっているのでちょっと修正は不可能なんですが、見たところその小説は途中で止まっているみたいですし、最後の方までは流石に似ない…と思います。

と、いうわけでEvangelion Hという作品を読んだこと  
があつてそれが好きな方は不快感を持たれる可能性があります。  
可能性のある方は読むのをここで止めてください。

せっかく最終話まで書いてあるので1～2部ずつと思つてましたが  
一機に乗せちゃってしばらく頭冷やします。  
人と違う文が書けるようになるよう… - - -

## 重い瞳、似たもの同士

アスカは苛立ちながらネルフ本部内を歩いていた。

「…アスカ」

「…」

シンジの声にぎりりと振り返るアスカ。

「あんたがあの時余計なことするから、負けたんじゃない…」

「「」、「めぐ」」

レイがシンジとアスカの横に割ってはくる。

「…碇くんがあの時、ああしなければ、もっと早く負けていたわ」

レイの言葉にアスカがかっこと赤くなる。

「つむかこーつむとい！私は負けるわけにはいかないの！  
Hヴァに乗つて勝つことが私の全てなのよーー！」

「…違ひ」

「何がよー？」

「…Hヴァに乗ることがあなたの全てじゃない…

他のところにもあなたがいてそのあなたも全てあなた」

「違う！違う！…あんたみたいな温室育ちに私の何がわかるっての！」

私にはエヴァしかないんだから……」

アスカの言葉にレイは少したじろいだ。

レイの言った言葉は今やレイの行動の根本を成す言葉だ。

それをアスカにも知つて欲しかつた。

だが、アスカはそれを否定する。

シズクはその3人のやりとりを遠くで悲しそうに見つめていた。

どうしたものか…

シズクが溜め息をつきながら歩く。

「よひ、どうしたんだい」

前から歩いてきた加持が声をかけてきた。

「…加持さん」

「暗い顔は似合わないな、折角の美人が台無しだ」

「僕、中学生ですよ」

「はっはっは、そりゃ失礼」

加持はわざとらしく両手をあげるとやつひつて笑った。

「じいじで…シズクちゃんはあの使徒と、じいじ戦つたらいいと思つた？」

「…？」

加持の質問の意図が掴めず困惑するシズク。

「いや、葛城がシズクちゃんが反抗期だとぼやいていたんでね、だが俺はそうは思わない、もしかしたらあれを倒す名案でも浮かんでるんじゃないかと思ってね」

「名案ですか…」

シズクにも案という案は浮かばなかった。

「どうかこうなった以上、一つしかないのだ。」

「あの…」

「うん?」

「あの使徒、一体に分裂した後に、一体のコアをこべら叩いても効果が無かつたですよね」

「ああ

「多分、あの使徒は一体で一体だと想つんですね、だからあいつを倒すには、一発のコアを全く同じタイミングで破壊するしかない…と思います」

しかし、この時点で加持はこの案を思いついているはずだ。

何の進言も出来ない自分が歯がゆかった。

だが加持の次の言葉はシズクの予想だにしないことだった。

「なるほど…気付きもしなかつたな、よし、その案で行こうつか

「…え？」

「葛城の首もつながるかもな、シズクちゃんのおかげで」

そう言つて加持は掌をひらひらさせながら去つてこへ。

「ちよ…ちよっと待つてください…」

「ん？」

「加持さんもこのアイディア…浮かんでたんじゃないですか？」

「いや、俺は何も思いついてやしないよ」「み

これは加持の嘘である。

加持は全く同じことを思いついていた。

これだけ少ない情報で自分と全く同じアイディアが思いつく少女。  
やはつこの子は面白い。

「とにかく…困った」とはあるか?」

「困ったこと…ですか」

シズクは小さく溜め息をつく。

「シンジくんとアスカとレイの問題ですかね…  
シンクロ率の順でいって多分シンジくんとアスカの作戦になると  
思いますが、  
正直な所、現時点での一人が一つのコアを同時にミーリングで  
同時に破壊する」とは…難しいと感じます

「それは君の仕事だな」

「…はい、あ、そうだ加持さん」

「なんだい?」

「…ひ、頼まれてもうえませんか?」

シズクのその言葉に加持は内面だけでニヤリと笑い

「俺に出来る」となり

と言つた。

-翌日 -

ミサトの命令でアスカが葛城邸に引越ししてきた。

命令内容はシンジとアスカのユニゾン、つまりはダンス特訓である。

アスカは別段気にしてないよう

「使徒に勝つためだもの…何でもやるわ」

と言つて承諾した。

アスカの踊りは完璧であった。

シンジはよくついていつている、そつ言えるだらう。

シズクは黙つて二人の踊りを見ていたが内心はかなり焦つていた。

レイも表面上は問題ないようアスカとシンジを見ているが  
先日のアスカに言われた一言がどうしても忘れられないでいる。

武装機パイロットは何故あんなことを言つたのだろう…？

何故自分にはエヴァしかないなんて言つのだらう…？

あの子は昔の自分と同じ瞳をしている。

レイはそう感じていた。

-更に翌日-

トウジやケンスケ、ヒカリが葛城邸を訪れた。

みんなが一人の踊りを見る。

この日もアスカは完璧に踊る。

シンジは汗だくになりながら必死について行く。

「アスカ、この特訓はユニゾンの特訓なのよ、もうちょっとシンジくんに合わせてあげなさい」

アスカの叱咤が飛ぶ。

その言葉にアスカは叫ぶ。

「何でよー? 私は完璧に踊つてるわ! ついでこれないシンジが悪いのよ!」

「はあ……はあ……ごめん、アスカ……」

シンジが汗だくで謝る。

「違うな」

加持の一言が割つて入った。

「! ?」

アスカが驚愕に目を見開いて加持を見る。

「シンジ君は何も悪くない」

「加持さん! ?」

「シズクちゃん、アスカと踊つてみてくれないか?」

「…はい」

シズクはすっと立ち上がり二人の方へと近づく。

「シンジくん、少し休んでて」

「はあ、はあ、うん」

「これはシンジと私の特訓でしょ！？なんでフォースが出てくんのよつーー！」

「いいから踊るんだ」

加持の言葉には肯定せざるを得ない迫力があった。

そして一人は踊る。

シズクの踊りはほぼ完璧だった。

当然である。

前回の時、嫌といつほどの踊った曲だ。

体にリズムが染み付いていた。

「…凄い」

ミサトが呟く。

ただ見ていただけでこれほど踊れるものなのだろうか…？

もしそうだとしたらこの子は天才だ。

誰もがそう思った。

アスカはそれを見て、突き放そうとこわんばかりに踊る。

そして終曲。

アスカが息を弾ませながら膝に手をやる。

「はあ、気が済んだ?ならシンジ、続きをやるわよ」

「なあ惣流、おまえ、もつひょこ碇に合わせられんのか?」

「何よ、あんた!こいつがついてこれないのが悪いんでしょ!?私の踊りは完璧だつたはずよ!..」

「でも、アスカ、何だか凄く無理して踊つてる感じがした…」

「同感だな、あれだけ完璧に踊れるんだ、少し相手に合わせるへりができるはずだろ?」「

「…何よ…みんなして!…私が悪いっての!…?」

アスカは激昂した。

「じゃあ、次はシズクちゃんとシンジ君に踊つてもうおつか」

加持の言葉。

「加持さん…それは…」

シズクはそれは不味いという風に加持を見る。

「いいから」

「…せい」

そしてシズクとシンジが並ぶ。

曲が始まる。

二人の息使い、タイミング、共に完璧なコンビネーションだった。

元々「自分自身」だったのだ。

それに更にシズクがシンジにシンジがシズクに合わせて踊りうと意識する。

やがて完璧に合った踊りが終わり、終曲を迎える。

沸き立つ拍手。

アスカはわなわなと震えていた。

「アスカの踊りは完璧だ、だがアスカとシズクちゃん、シンジ君はコニゾンできない、

そしてシズクちゃんとシンジ君はコニゾン出来る、この意味はアスカなら分かると思つが…？」

「私に…レベルを落とせつて置つんですか…？」

キッと加持を睨むアスカ。

「UJの特訓は完璧に踊りを行つたための特訓じゃあない」

加持がきつぱつと言い切る。

「…なら、フォースとシンジがやればいいじゃないですかーー。」

「それが無理なのはアスカも知っているはずだ」

「…うー。」

アスカはその場を飛び出そうとする。

レイはそれを遮った。

「…特訓、しないの？」

「うるせー、うるせー、うるせー！ あんたなんか大ッ嫌いよーー！  
司令に可愛がられて育つた温室育ちのお嬢様に今の私の気持ちが  
わかるもんですかーー！」

ドンーとレイを両手で思い切り突き飛ばし、アスカは玄関を飛び出す。

「綾波！」

シンジがレイへと駆け寄る。

「……キライ……」

「え？」

俯いていて良くレイの顔が見えなかつたがいつもの雰囲気じゃない」とだけは確かだつた。

レイはとぼとぼとアスカの後を追つ。

「…あ」

「加持さん…」

シズクは加持の元へと走る。

「ああ、これだ」

「ありがとうございます」

「頑張れよ、後は君次第だ」

シズクは返事もせずに走り出した。

夕方の公園。

アスカは一人、ブランコに乗つていた。

何よ、あいつら、私は悪くない。

私についてこれないシンジやフォースが悪いんじゃない。

エヴァに乗つて勝たなくちゃ 意味無いんだから。

そのためには何でも完璧に出来なくちゃ 意味ないじゃない……！

「…アスカ」

その声にアスカは首を上げる。

シズクがいた。

「何よ…笑いにでも来たの？」

「アスカ…」

「気安く名前呼ばないでよ！」

「これ…見てくれない？」

シズクはアスカの叫びに動じず、一枚の書類を見せる。

「…何よ？」

アスカはぴつと受け取ると書類に目を通した。

- ファーストチルドレン・綾波レイの個人情報 -

と記されている。

「「」なんもん、私に読ませてびひつすんのよ~。」

「いいから続きを読んで」

・氏名・綾波レイ・

・年齢・14歳・

・生年月日・不明・

・血液型・不明・

・血縁者・不明・

名前と年齢以外は全て不明で埋め戻された文字。

「何よ……これ……？」

「レイのネルフの公式データだよ」

「ネルフの……?じゃあ一般のは」

「無いんだ、名前も年齢も戸籍さえも……」

無い……?

何も……?

じゃあファーストって一体何者なの……?

「アスカはさ、レイのこと、温室育ちって言ったよね

シズクが静かに語る。

「でもそれはアスカが前のレイを知らないからそう思うだけ、レイに過去は無い、全てはその書類が示すように」

「……だから何だつてのよ！」

アスカがシズクの顔を見る。

と、同時に驚いた。

いつものシズクの瞳じゃない。

暗く、深い、闇の色をした漆黒の瞳。

「アスカはさ……そんなに肩肘張つて疲れない？」

「……それが私の使命だもの、私にはエヴァに乗つて勝つことしか存在する価値がないのよ」

「じゃあ、今のアスカはどうに行つちゃうの？」

「……」

今の私……？

エヴァ以外の私……。

考えたことも無かつた。

「一番じゃなくてもいい、エヴァに乗る以外のアスカがいてもいいんじゃないかな…？」

「そ、そんなもの必要…ない！」

少しの沈黙。

やがて、シズクが静かに口を開く。

「昔、さ、僕は自分だけが可愛かつた。  
みんなに優しくしてもらいたかった。  
でもみんな優しくしてくれないんだ」

何を言つ出してるの…」  
「…。

だがアスカは声が出せない。

シズクのその瞳に吸い込まれるように立ちすくむ。

「当たり前だよね、僕は他人に優しくできなかつた。  
他人に優しくできない自分がどうして他人が優しくしてくれる?  
でも、僕にはそれが分からなかつた、  
だから全てを呪つた、  
誰も優しくしてくれないなら  
いつそ人類なんて滅びてしまえばいいって…そう思つた

「何よそれ！完全な逆恨みじゃない…バカじゃないの…？」

「そうだよ…バカだつた、だから自分の大切な人たちが次々死んで  
いつて

最後に一番大切な人が死んで、そしてようやく気付いたんだ…  
僕は、寂しかったんだつて…」

シズクは今にも叫びたかった。

その大切な人はアスカだということを。

自分は未来から来たシンジで最後は君を守れずに終わってしまったことを。

だが言えない。

だから自分の言葉に出来る範囲で、アスカに何とか自分の意思を  
伝えようとした。

アスカにもそれがわかった。

嘘を言つてる瞳と口調じやない。

こいつは私に本氣で何かを伝えようとしている。

「アスカは使徒に負けるのは…嫌?」

「…当たり前でしょ」

「でも、まだ生きてるよね」

シズクの瞳に段々と力が入っていく。

「たとえ負けたとしても、次に対策を練つて、勝てればそれでいいんじゃないかな」

シズクの言葉にアスカは自分の考えを根本的な所からひっくり返された気分になつた。

確かにその通りだと思つてしまふ自分がどこかにいる。

「無様に這い蹲つて、それでいいわけない、わ……！」

「だから、さ、這い蹲らないために、頑張ろつよ」

「……」

そうだ、とどのつまり、そういうことだ。

こいつは最終的に這い蹲らなければ負けじゃないと言いたいんだ。

それがアスカにはわかつた。

「だから……その何ていうか

シズクの言葉をアスカは右手で遮る。

「……わかったわよ、やればいいんでしょう、やれば

「……アスカ！」

「私が大人気なかつたわよ、バカシンジに合わせて、

それで使徒を完膚なきまでに叩きのめせばいいんでしょう？

「うん、うん」

「それに…ファーストにも、悪い」と言ひかけたわね

「レイなら謝ればきっと許してくれるよ」

「そうかしら」

そうアスカが言ったときじゅりとシズクの背後から音がした。  
シズクが振り向くとレイが立っていた。

「レイ…？」

シズクが微妙なレイの変化に気がつく。

アスカは気づかずレイに近づく。

「さつきは悪かったわね、ファースト、私が悪かつ…！？」

そこでアスカはレイの瞳に気がつく。

光の失った真紅の瞳。

どこを見つめているのかもわからない、虚ろな瞳。

アスカはシズクの言葉を思い出す。

『アスカはレイの前の姿を知らない…』

「これが…ファーストの前の姿…？」

「……ワナイド…」

「レイ…？」

「…キラワナイデ…キラワナイデ…ワタシヲキラワナイデ…」

表情が固定され、機械仕掛けの人形のように繰り返すレイ。

「…ワタシ…ニンギョウ…モドルノハ…イヤ…キラワナイ…」

つうと一滴の涙がレイの頬を伝った。

パンツとアスカの平手がレイの右頬を扱った。

がしつとレイに抱きつくアスカ。

「バカ！本氣で嫌うわけないでしょ…正気に戻りなさいよ…！」

じんじんと伝わる頬の痛みに次第にレイの瞳に光が帯びる。

「…セカン…ド…？」

「私が悪かったわよ！勝手に想像して温室育ちなんて言つて…！だから…そんな顔すんのやめなさいよ…！」

「…いつは…ファーストは…レイは、自分と同じだ。」

似たもの同士なんだ。

そして、多分フォース…シズクも、バカシンジも…。

「…私の」と、嫌いじゃ…ない…？」

「嫌いじゃないわよ！嫌いなもんですか！！  
あんたが私のこと嫌いでも私があんたを嫌いじゃないわよ…。」

「…私も、あなたの」と…嫌いなんかじゃ、ない…」

レイはやうやくアスカの腰に手を回す。

「みんな！」

シンジが息を切らせて公園へと辿り着いた。

「遅いじゃない！バカシンジ、ああ、戻つて特訓よ…。」

「アスカ…？」

「さつきは悪かったわよ、私があんたに会わせるわよ、  
だけどあんたもレベル上げるよう努力は怠らないこと！…いいわね  
！？」

「う、うん…」

「せ、行きましょ、シズク、レイ！」

「…シズク…セカ、アスカが…私のこと嫌いじゃないって…」

「うん、レイのことが嫌いな人なんていないよ」

シズクはそう微笑んで言つてアスカに近づく。

「アスカ、さつきの話、みんなには内緒ね」

「さつきの…？ああ、あんたが実は内気で寂しがりやだって話…？」

アスカがニヤリと笑う。

「い、今は違うもん！」

「ふふつ、真面目な顔して「みんなに優しくして欲しかったんだ」とつて」

「何でそこ強調するんだよ！」

「いいわよ、内緒にしといたげる、その代わり、貸しだからね」

そう言つてアスカは笑つてマンションへと走つて行つた。

シズクはふうっと溜め息をつくと、それでも嬉しそうにアスカに続ぐ。

レイとシンジも後を追つてマンションへと急いだ。

「…大したもんだ」

遠くから加持が呴く。

「あんたも、損な役回り引き受けたわね」

ミサトが隣で囁く。

「俺は何もしあやこないさ、実際やったのはあの子たちだ」

せつまつ加持をミサトはかつこいつかかってと思しながら見上げた。

「いい~シンジ、やるからこな完璧を田端すわよ、  
あんたが出来るよくなつたら少しすげベルを上げていぐから  
覚悟しなさい」

「うそ」

それからイスラフュル戦までの間、一人の猛特訓は続いた。

仕上がりは前回よりも良好。

万全の体制でイスラフュルに臨むことが出来た。

「わかつてゐるわね、シンジ」

「わかつてゐる、アンビリカルケーブル切断後、62秒でけりをつけ  
る」

『発進!』

ミサトの命令が飛び、初号機と式号機が地上へと上がる。

2体の使徒の攻撃をぴったりのタイミングでかわし、上段アッパー  
から踵落とし。

イスラフュルが一つに混ざつ合つて、二つのピアも混ざつ合つて。

初号機と式号機が回転しながら宙を舞つ。

放たれる、二つの蹴りが完璧にユニゾンし、イスラフュルのコアを直撃する。

数十メートル吹き飛びながらはイスラフュルは爆発、四散した。

前回とは違い、着地も完璧だった。

シズクはその光景をただただ満足そうに微笑んでみていた。

## 修学旅行

「これとお、これとお、あ、水着も必要よねー。」

アスカはレイと一緒にショッピング街を歩いていた。

少し離れてシンジとシズク。

シンジの両手にすくいに山のような荷物が乗せられている。

「ア、アスカア、ちょっと待つでよ。」

「早くしなさいよ、バカシンジー！」

「シンジくん、半分持とつか？」

「シズクー！甘やかしたら駄目よーーー。」

そう言つアスカの袖を引っ張るレイ。

「…アスカ…水着、どうするのが、いいの？」

アスカはレイの問いかけにふむふむとレイを品定めして

「さうね、レイはスレンダーだから白のワンピースとか似合にそうよね」

「明後日から修学旅行だからって…気合入れすぎだよ…」

シンジははあつと溜め息をついて荷物を持ち直す。

「仕方ないよ、中学生生活3年間の中でたった1回の行事だから」

そういういつもシズクは少し寂しそうな顔をした。

「この修学旅行には行けない、と知っているからだ。

「シズクー！あんたの水着も選んだげるから早くきなさーいー！」

アスカが元気よく手を振った。

「あ、うん！」

そう言つとシズクはアスカたちの方へと走り、  
シンジを表に残して水着売り場がある店へと入つていった。

呆然と立ち尽くすシンジ。

しかし彼の頭の中はアスカたちの水着姿でいっぱいだった。

ぶんぶんと頭を振り、妄想を振りほどくシンジ。

「じゃーん、見てみて、一人ともーー。」

アスカの提示したのはかなり際どい赤いビキニだ。

「ア、アスカ、それはちょっと大胆すぎじゃ……」

シズクが顔を真っ赤にして慌てふためく。

「……それを着て泳ぐの？」

「レイのも選んだいたわよ」

そう言ってレイに見せるのは白いワンピース。

清楚な感じがとてもレイに合ひ。

女物の水着を探す日が来るとは思わなかつたなあ……

苦笑しながらシズクも適当に水着を探した。

「シーズークー！」

にひひつと笑いながら近づくアスカ。

「何？」

「ほら、あなたの！」

バーンと前に突き出されるアスカの両手。

黒のビキニ（パレオ装備）。

かゝつと全身が真っ赤になるシズク。

「ア、ア、ア、アスカ！こうこうのま、僕には早いで！！！」

「そう？あんた私ほどでは無いけどそれなりに胸あるし、悔しいことに腰もくびれてるから似合つと思つんだけど」

「ほ、僕もレイみたいなのでいいよー。」

「それはダメよ、あんたたち双子みたいにそつくりなんだから同じような水着つけてちゃ面白くないじゃない」

「…別に誰に見せるわけじゃないんだからいいじゃないか」

シズクがそう言つとアスカは人差し指を立ててこう言つた。

「ちつちつ、女捨てるわよ、その発言」

元々女じゃないもん…

結局、シズクは押し切られるよつとその黒のビキニーを買つた。

しかし、女物の水着つて高いんだな…

そう思いながらクレジットカードをスリットに通す。

ちなみにシズクたちチルドレンはエルフからきちんと給料が支給されている。

Hヴァパイロットという危険な職業からかその給料も高い。

アスカは浪費が激しいためにそんなに残つていながら

シズクやシンジ、レイは普段からそんなに使っていないために  
その残高は軽く500万を超えていた。

そんなに残っていない、というアスカでも100万以上はあるのだ。

-夜-

「え――――――！？修学旅行に行っちゃダメ――――――！？」

「そつ」

ぐびぐびとえびちゃんを飲みながら、ナトが端的に答える。

「そんなの誰が決めたのよ！」

「作戦部長である、この私」

「シズク！シンジ！なんとか言いなさいよー。」

「いや……何となくいつなるんじやないかと……」

「僕も」

「最初から諦めるなんてさいつてーー。」

そこでレイが前に出た。

「…何とか、なりませんか…？」

「レイ、頼るのはあんただけだわ！」

がしつとレイの手を握るアスカ。

とん、と缶をテーブルに置く!!! サト。

そしてひらりと一枚の紙を取り出した。

二 何よ、これ？

修学旅行承認の許可証、泊だけどね」

少しの間、沈黙。

そして、シズクの絶叫がこだました。

?

「なによおシズク、そんなんに驚くとこへ今の」

「だ、だつて僕たち全員?」

「そうよ、仲間外れいたら可哀想じゃなー」

「もし使徒が来たら……。」

「A級命令でこいつに引き返せるようにしてあるわ」

「でも……」

シズクが頑なになつてゐるを見てアスカが怒る。

「なんでそんな拒否してんのよー。行つてもいいってんだから行こつ  
じやない、

それともあんた、いやなの?」

「い、いやな訳ないじゃないか、凄く嬉しいよ……でも」

「なら文句言わない!」

そう言つとアスカはミサトの手から許可証をふんだくる。

「えーと、何々、各チルドレンの修学旅行を日数制限を布いて許可  
する、  
尚、護衛は1名、加持リョウジ……」

「加持さんが護衛ですか」

「そ、うよん、あ、こいつ暇だから」

- 5 時間前・ネルフ本部 -

「ですからチルドレンたちに修学旅行へ行く許可を頂けないかと…」

ミサトは必死になつて上層部を説得していた。

「そんなこと、許されるわけないでしょ、

第一パイロットがいない間に使徒が来たらどうあるつもり？」

リツコの冷めた目線がミサトに突き刺さる。

「戦自の沖縄基地からネルフまで1時間で戻つてこれるわ

「大体、パイロットの危険が高すぎるわ、護衛だつて手配するのに  
日数かかるのよ」

「それなら大丈夫」

そう言つてミサトは加持の肩に手を置く。

「え？俺か？」

「どうせ暇でしょ、あんた」

「いや、俺にも俺の都合が……」

「ひまよね?」

「あいつと//サトに睨まれ加持はそんな顔するなよと両手を前に出す。

「わあかつたよ、引率、すればいいんだ!」

「よろしく」

「うーつと//サトは笑つとゲンジウたちの方へと振り向く。

「司令ー・ジウか許可をーー!」

暫しの沈黙。

「… いいだろ?」

「司令ー?」

ゲンジウの「承の許可」と驚くコシロの声が同時に響く。

「ただし、一田だけだ、それ以上は認めん」

その言葉にミサトの顔が明るくなつた。

普段から一般の中学生とはかけ離れた彼らに少しでも中学生らしい生活を送らせてやれる。

「ありがとうございますー。」

「//サトモレシと敬礼するとその場を後にした。

その後は急ピッチで許可証の作成。

第6回中に連絡を取り、加持の護衛の許可を取り付けた。

-そして、現在、葛城邸リビング -

「まあ、もうこりわけだから、一泊だけでも楽しんでらっしゃい

//サトモレシとカーブを飛ばす。

サンダルフォンは確かトウジたちが  
修学旅行に行ってから3日目だったはず……まあ、一泊なら安心、  
かな

そう思つてシズクはやつと微笑み

「じゃあ、お言葉に甘えて

と呟つた。

「あ～あ、それにしても護衛付きか～

「仕方ないよ、でも加持さんと一緒にアスカも嬉しいんじゃないの？」

「べつに～、私、コブ付きの男に何時までも興味ないもん」

もう言つてひびつとミサトを見る。

「なあんでそこで私を見るのよーー！」

ミサトは真っ赤になってアスカを怒鳴った。

「はいはい、いいわね～、幸せそ�で、  
ユニゾン特訓の時、一人でこそこそ私たち見てたのビビのビなた  
でしたつけ？」

「うぐひ…き、気付いてたの…？」

「あつたりまえでしょ、それに、別にミサトなら加持さん取つたつ  
て恨まないわよ」

「アスカ…」

いい方向に吹つ切れたな、とシズクは思った。

先日のシンクロテストでも確か88%をマークしていた。

一つ、心の籠が外れたのだろう。

この調子なら心配は無さそうだ。

レイは床に座り込みトランクケースを開けていた。

「何やつてんの…綾波…？」

シンジが声をかける。

「……準備」

「今から～修学旅行明後日だよー？」

「……旅行、初めてだもの…とても、楽しみ

やうひつとレイは毎晩買ったワンピースをトランクケースに仕舞い込む。

「レイに負けてらんないわ！私も準備するわよー。シンジ、鞄取つて  
きてーー！」

「自分で取りに行けばいいだろ…」

「文句言わないー早くーー！」

「はーはー…」

はあ、と溜め息をつくシンジはアスカの部屋へと入つていく。

「言つとくけど、タンスの中覗いたら殺すわよー。」

「覗かないよーー。」

シンジの怒鳴り声が返ってきた。

そしてあつとこつ間に次の日は過ぎ、修学旅行の朝がやつてくる。

「どうしてこんな大事な日に寝坊するわけえー!?」

「僕だけじゃないだろー。アスカやレイやシズクだって寝坊してんじやないか!!」

「…………あまり、疲れなかつた……」

「とにかく急いでー待ち合わせの時間まであと30分しかないよー。」

バタバタと用意をして、朝食も取らずに出ていく四人。

「よつ、四人とも、遅かったじやないか

加持が軽く手を上げる。

「はあ…はあ、今日は…すいません、加持さん」

シズクが汗びっしょりでそう言った。

「いや、いいんだよ、パイロット護衛も立派な仕事の一つだからな

「アスカ、レイ、はい、これ」

ヒカリは四人を見つけて駆け寄ってきてドリンクを渡す。

「シズクと碇くんにも、はい」

「ありがと、委員長」

と、そこできょろきょろと辺りを見回すシンジ。

「あれ…?トウジとケンスケは?」

「何か予備のバッテリー買つてくるとか言つてやつて商店に行つたわよ

「やつ

「ふふつ、ヒカリー」

後ろからアスカがヒカリに抱きついた。

「きやつ、何よアスカもっ！？」

「修学旅行よ、チャンスじゃない、決めなさいよ

ひそひそと耳元で囁く。

途端に朱に染まるヒカリの顔。

「な、な、な」

「あんなジャージのどこがいいのか知らないけど、応援してあげるわ」

「アスカ！！」

ヒカリはアスカの腕を振りほどきながら真っ赤なトマトのような顔をして怒鳴った。

「…何の話？」

レイがひょっこりと顔を出す。

「ヒカリはねえ」

「わー！わーーーー何でもない、何でもないから…」

「平和だねえ…」

出しあげた煙草を「おつと」とポケットにしまって加持は呟いた。

「それだけみんな、楽しみにしてたんですよ…」

シズクも嬉しそうに呟く。

「そうだな、君も含めて、みんなまだ14歳だもんな、  
クラスメートと一緒に旅行出来て嬉しくないわけないか」

「はい」

そう言つてシズクは微笑んだ。

飛行機が空を飛んだ。

「投機は第3新東京市空港から沖縄空港行き…」

アナウンスが流れれる。

「アスカ、太るわよ」

アスカは朝食べてこなかつたのがよほどお腹に堪えたのか  
売店で買ったお菓子をバカみたいに食べている。

「らつて、あさほん、はへへ、んぐ、来なかつたんだもん」

「だからって、お菓子で空腹満たしてたらダメじゃない」

ヒカリがじゅりとアスカを見る。

全く、この食欲でどうやってこのプロポーション維持してんのか  
しり…

そんなことを思いながら右の席へ田をやると  
同じように黙々とお菓子を食べているレイの姿があった。

この子もね…

はあ、と溜め息をついて年頃な14歳。

シンジとトウジ、ケンスケはトランプに興じている。

シズクは加持と隣り合わせの席だつた。

「何してるんですか?」

「ん?ああ、行動予定表のチェックだ、一応ナイト役だからな」

そういう加持の手元にはしおりに書かれた一日の行動一覧表があつた。

10：30、セカンドインパクト以前の歴史を振り返る～戦争博物館見学～

12：00、昼食

13：00、ビーチにて自由行動

16：00、ホテルにチェックイン

21：00、消灯

と書かれている。

「シズクちゃんは何が楽しみだい？」

「そうですね……」

シズクは自分のしおりを見ながら考える。

「海もいいですけど、やっぱり戦争博物館ですね、  
セカンドインパクト以前のことってあまり授業でも習わないですね  
」

「あまり、気持ちのいい話じゃなこと思ひやが」

「ええ、でも知らないよつは知つてゐぬがここと思ひます

そして、10時丁度、飛行機は無事到着する。

「くぅ～…長かったわね～」

結局アスカとレイは一人で20袋ものお菓子を平らげていた。

「見てたこっちが胸焼けしそうだわ…」

げつそりとヒカリが続いて降りる。

「…………満足」

ぽんっとお腹を叩き、レイが降りる。

「くつそ～、あそこでババを引かなければワシの勝ちやつたのにな  
」

「ふふん、あんな単純な陽動に引っかかるなんてトウジもまだまだ  
だな」

「はは、でもあそこでババを引くのがトウジらしいよね」

続いてシンジ、トウジ、ケンスケのトリオ。

最後にシズクと加持が降りた。

【めんそ～れ、沖縄！～よつ～】そ第3新東京市第壱中学校のみな  
さん】

と書かれたのぼりが田に付いた。

クラスメートたちは一斉に走り出す。

バスに揺られて一行は戦争博物館へと田指す。

「セカンドインパクト以前は日本で一番の暑さを誇っていたこの沖縄ですが

今ではみなさん知つてのとおりどこもかしこも真夏ですので魅力は半減かと思います、

それでも折角いらしたので楽しんでいってくださいね」

バスガイドの声が心地よくシズクの耳に残る。

「間も無く、戦争博物館です、ここはセカンドインパクト前に起きた戦争、

つまり第一次世界大戦などの資料の展示や説明などが行われております」

「ねえねえ加持さん」

「どうした、アスカ？」

「なんで沖縄に戦争博物館が出来てんの？」

「そりや、残った土地の中で一番の戦地だったからじゃないか？  
セカンドインパクト後に残ったありつけの資料を集めて作られ

たらしいぞ、

俺も入るのは初めてだけどな

「ふうん…何だかつまんなそうね、早くビーチに行きたーい」

「……歴史、私の知らない世界…楽しみ

そういう顔でソレに向こうと手を置いて、

「まつ、レイの勉学のために付き合ってあげますか」

とアスカは言った。

- 戦争博物館内 -

物々しい雰囲気に囚われたその建物は元は別の地方に  
あつたらしい原爆ドームというものを模して作られたらしく  
細部にいたる傷まで再現されていた。

中にあるのは戦争中の写真、泣き叫んでいる赤ん坊や血だらけの  
看護師など。

その圧倒的な存在にクラス一同、言葉を失つてただ資料を眺めて  
いた。

「なんか暗いところねー」

アスカが退屈そうに腕を頭の後ろに組んで欠伸をする。

「…人って何で争いを繰り返すんでしょうね」

シズクがぽつりと呟く。

「それが、人間ってやつなのさ」

加持はシズクの肩に手を置いてそう言つた。

「みなさんお待たせしました、これより、特別攻撃隊のガイダンスを始めます」

ブーっとブザーが鳴る。

巨大スクリーンが中央より下りてきて特攻のシーンが映し出される。

全員、息を呑んでそれを見る。

「当時、関大尉他6機による4度目の出撃で1機のアメリカ海軍の護衛空母セント・ローを撃沈しました。日本政府はこれに対し彼らに最大の賛辞として二階級特進を与え  
…」

「ふざけんじやないわよーー！」

ガイダンスの声を途中で遮つて大声を張り上げたのはアスカだ。

「何が最大の贅辞よ！何が一階級特進よ！！死んだら何も意味ないじゃない！！

全部終わりなのよ！！そんなの狂ってるわよ！！！」

アスカは今にも爆発しそうな勢いで捲くし立てる。

奥の方に座つていた館長らしき老人が立ち上がり、アスカに近づいた。

「な……なによ？なんか私、間違つたこと言つた！？」

「チムジュラサン」

「はつ？」

意味不明な方言を囁かれアスカは目が点になる。

ガイダンスのお姉さんはくすりと笑みを零しこう言つた。

「沖縄の方言で心の美しい、優しい子だつて意味ですよ」

その言葉を聞いてアスカは途端に赤くなつて俯く。

「あ……いや……その……どうも……」

「確かに日本政府のやつたことは非人道的なことかもしれません、でもここから学べる多くのこともあるはずです、

みなさんに「はやの」とを学んでもらいたいのです

もう言つてガイダンスは締めくくられる。

アスカはもじもじしながら館長の田からヒカリの後ろに隠れてい  
た。

戦争博物館の見学を終えた一行は昼食を取り終えて次の目的地、  
ビーチへと向かった。

「はーっ、やつと泳げるわねー！」

博物館でのやりとりから今ひとつ調子が出なかつたアスカがん  
つと伸びをして話す。

「ビーチか…」

「どうしたのよ、シンジ？ 浮かない顔して

「な、なんでもないよー。」

そのシンジの慌てふりにアスカの目が光る。

「ははーん、さてはあんた、泳げないんでしょー？」

「お、泳げなくて何が悪いんだよー。」

「別に悪いなんて言つてないわよ、いいわよ、私がコーチしてあげ

る

「えー? い、いいよー。」

「遠慮すんじゃないわよ、  
私にかかるばあんたでも1時間で100kmは泳げるよ! こにして  
みせるわ」

「…………それは楽しみ」

ぱつりと呟いたのはレイだ。

レイの思わず突っ込みにバス中が爆笑の渦に巻き込まれた。

そんな中、シズクがそつと手を上げる。

「あ、あのぞ、アスカ」

「なによ?」

「僕にも泳ぎ方…教えて欲しいなあつて…」

「はあ? あんたも泳げないの? 仕方ないわねえ、  
帰つたらハンバーグ作りなさい、それで手を打とうじゃない」

「うん、ありがとう」

そう言つてシズクは微笑んだ。

和やかなムードでバスが走るその光景を一人のショートカットの少女が見ている。

トランシーバーを顔に当てた。

「目標のバスを発見、これよりネルフのチルドレンに接触します」

『本来の目的を忘れるな』

「分かつています、室長」

そう言つて少女はトランシーバーを切る。

「行くわよ、ムサシ、ケイタ」

『いつでもいいぜ』

『いつもまだ、マナ』

そう言つた少女の背後から一體のロボットが姿を現した。

## 第1-3番機械工作隊

ザワザワ・・・

男子生徒たちがにわかに色めき立つ。

「あ、アスカたちかな？」

シンジがビーチボールを膨らませながらそう言った。

「やつほー、待つた？」

「…………風が気持ちいい」

「ア、アスカ、やっぱり恥ずかしいよ……この水着…」

と、右方向に髪を結つて赤いビキニを着たアスカが

左方向から浮き輪を持つて白いワンピースを着たレイが

中央からかなり恥ずかしそうに黒いビキニを着たシズクが

シンジたちの方へと向かつて行った。

「うはー、うちの中学生の三大美女の水着姿…これは売れるぞーーー！」

カメラのシャッターをきりまくらながらケンスケが囁く。

ぱつとそのカメラをアスカが奪うとレイへと渡した。

「レイ、それ、海に投げちゃつていいわよ」

「…………」「了解

アスカの言うとおり、ぱつと海へとデジカメを投げるレイ。

「ああ～、お前らーそれいくらしたと思つてんだ！！」

ケンスケが頭に手を抱えて海の中へと入つていく。

「私たちの『真売つて金儲けなんて100億万年早いのよー』

ふふん、とアスカが鼻で笑つてそう言つた。

「難儀なやつちや

トウジは溜め息をつきながらさつと言つた。

「す、鈴原」

そのトウジの横から大人しめのピンク色のワンピースを着たヒカリが声をかける。

「わ、私、変じや……ないかな……？」

「こや……元氣だね」

「ほ、ホントに?」

「ああ、ワシは嘘は好かん」

ヒカリはその言葉を聞くと嬉しそうに、そしてその倍以上恥ずかしそうにシズクたちの下へと呟流する。

「ア……アスカ、鈴原が似合ひてるって……」

「やつたじやない、1ポイントゲットね」

小声でひそひそ話すヒカリとアスカ。

トウジも大変だな、とシズクは苦笑した。

その様子をクエスチョンマーク全開で見てるトウジ。

「…………碇くん」

レイがシンジの前へと立つ。

「あ、何?綾波」

「…………特訓」

「へ?あ、いや、僕は別に泳げなくても……」

「何言ひてゐるよー。折角沖縄に来て海に来て、泳ぎもしないなんて終わつてるわ！」

ほり、こゝち来る！」

アスカもシンジの手を強引に取つて海の中へと引きずり込む。

「ちょ、アスカー待つてよーーー！」

「怖いと思つから怖いのよ、使徒相手に比べたら水なんて蟻みたいなもんよ」

シズクは使徒と海を比べるのはどうかと思いながらアスカの講義を聞いている。

「あ、まづは水に顔をつける練習よーーか、この…さん…！」

勢い良くアスカはシンジの頭を海の中へと押さえつけた。

「がつ…がぼぼぼぼつーーーアズ…ーーー」

「アスカー！」

慌ててシズクが止めに入る。

が、時既に遅し。

シンジはうつ伏せのまま、ぷかりと海面を漂つた。

「あら、浮けるじゃない

「そうじゃなくって氣絶してない！？」シンジくん、大丈夫！？」

シズクが慌ててシンジを海面から引つ張りあげる。

「……ふはっー、げほっ、げほっ、何すんだよ！僕を殺す氣なのか！？」

「何よ、人が親切で教えてあげようつてのに！」

「考え方つてもんがあるだろー！」

「だから、今浮けたでしょ！」

「もういいこよ！綾波に教えてもらひうからーーー！」

やうに言ひうとじゅ、まじゅ、まとレイの方へとシンジは向かう。

「何よ！綾波、綾波つてー私よりレイの方がいいくてのー？」

さーと足を海に叩きつけて悔しがる。

「いや、そうじゃなくて教え方が悪いんだけど……」

シズクは苦笑しながらそう答えた。

「綾波、泳ぎ方教えて欲しいんだけど」

レイは浮き輪に乗つてぶかぶかと浮いていた。

シンジの言葉に気がつきつつと頷く。

「…全身の力を抜いて、海に漂つイメージをして

「うん、何だか、難しいな…」

「…そのまま、仰向けになつて海に浮いて」

シンジは脱力したまま、海の中に仰向けになつた。

ぷかり、と浮力でシンジの体が海面に浮かぶ。

「あ、浮いた」

「…そのまま足を動かして」

シンジは言われたとおりにバタバタと海面を叩く。

「…力を入れすぎなこで」

「あ、うん」

そのまま足の運動量を減らし、静かに海面を叩いた。

すると、シンジの体がすーっと動き出す。

「あ、今もしかして…泳げ、た…?」

「…………ええ、 基本はそれで充分だから」

「ハハして」ともあつさつと背面泳ぎを覚えてしまったシンジ。

シズクとアスカはぽかんとその光景を見ていた。

「ふ、 ふん、 中々教えるのが上手いじゃない、 レイも」

「アスカの教え方とは天と地との差があつたよくな…」

「負けてらんないわー！ シズク、 あんたも私の一番弟子として早くマスターしなさい！ …」

「む、 無理だよ、 そんな急に言われたって…」

みんな、 楽しんでるよつだな…

加持は浜辺でシズクたちの様子を見ながらそつと思つた。

「この分だと、俺の出る幕はない…かな。

そう思つた次の瞬間、 シンジの周辺の海面に違和感を感じる。

波紋が… 少し違う…？

加持は思つと同時に飛び出した。

「シンジ君ーそこから離れるーー。」

加持の叫び。

「え？」

シンジが聞き返すと同時にシンジのすぐ真下から巨大なロボットが一体、浮上した。

「な、なんだ?」「イツ……?うわっ!ーー。」

ガシッと一体のロボットの右手にシンジが捕らえられる。

「碇くん!」

「あのロボット……シンジを運ぶつもつよーー。」

レイとアスカが同時に叫ぶ。

シズクはもう一体のロボットの左手に乗る少女を捕らえた。

「…………マナ?」

間違えない。

前回の人生で自分たちの中学校に転校してきた少女。

霧島マナだ。

正体は戦自のスパイ。

そのマナが何で沖縄に…？

「シズク！」

アスカの声に我に返るシズク。

「追うわよーーー！」

「う、うん」

シンジを捕らえたのはネルフの情報を聞き出すため…？

マナはこゝな直接的なやり方はしない子だ…

シズクは走りながら答える。

「三人とも、乗れ！」

加持がどこから持つて来たのか、小型のトラックに乗つてやつてきた。

「さっすが、加持さん！」

アスカとレイが荷台に乗り込む。

シズクも続いても乗り込んだ。

あのロボット、細部はちょっと違つけど間違になくトライテント

だった。

といふことは乗つてゐるのはマナの友達か…

シズクは首をぶんぶんと横に振る。

今は何より、攫われたシンジを助けるのが先だ。

マナは拷問の類はしない、と思う、が

マナの上句はさうとは限らない。

シズクは手段は選んでられない、と思つた。

レイの耳元へと口を近づける。

「レイ…あのロボットの前方にみんなに気付かれないよう A - T フィールドを張れる?」

レイは驚いてシズクの方を見た。

質問の内容に違はない。

自分が A - T フィールドを張れるといつ「事実」を知っている  
シズクにだ。

シズクはそんなレイの考え方を見抜いたよつこ

「理由は全部、後で話す…今はシンジくんを助けないと…」

少しの沈黙。

その間にモトラッシュとトライデントの距離は広がつてこぐ。

「加持さん…離されてるわ…！」

「パワーが違う…せめて奴らの動きが少しでも止まれば…！」

レイがトライデントの方を見た。

そう…今は碇くんを助けないと…！

レイの瞳が大きく開かれる。

紅い瞳が若干光を帯びた。

離れていく二体のトライデントの動きが急に止まる。

「なんだ…？」

「止まつた…？ 加持さん…チャンス…！」

「わかつてる…！」

加持はハンドルを切る。

進路は真っ直ぐトライデントへ。

ジープが猛突進した。

「どうしたの！？」マサシ、ケイタ……」

『わ、わかんねえ……急に前に進まなくなつて』

『いっちゃんだ！』

「前がダメなら上に飛びまじょ、とつあえず基地に戻らないと  
マナがそう言ひと、一体のトライデントは上空高くと舞い上がつ  
た。

「跳んだ……？」

「ちつ……せめてやつらの行き先さえ分かれば……」

アスカと加持が同時に言ひ。

「加持さん！」

シズクの声。

「シズクちゃん、名案でもあるのかい？」

「…多分、あいつらの本拠地は戦自です！」

「戦自…？ そうか、最近出回つた『足歩行型の機兵』の話は本当だつたのか…！」

そう言つと加持はハンドルを急激に切りなおし、戦自基地の方へと進路を取つた。

- 沖縄・戦自ベース基地 -

「手荒な」招待、「めんなさい、碇シンジくん」

マナはシンジに握手を求める。

「あなたたちは何者ですか…」

マナを睨みつけてシンジはそう言った。

「私は戦自、第13番機械工作隊所属、霧島マナ、あつちはそこで作られた『足歩行型』『トライデント改』のパイロット、ムサシとケイタよ

そう言つてマナが紹介すると一人は軽く手を上げる。

パイロット……同年代くらいだな……。

シンジは一人を見てそんな感想を抱いた。

「それで、僕を攫つて、どうするつもりですか？」

「だから、強引に招待したのは謝るつてば、私たちの上司があなたに会いたいっていうから」

「上司……？ 戦自の人に知り合いなんていませんけど……」

プシュッとその時、ドアが開く。

「久しぶりだね、碇シンジ君」

30代中、いろだらうか……その男はそう言つてシンジに挨拶をする。

「あなたは……確か、ＪＡの時の……」

「そう、元ＪＡ開発責任者、今は戦自第13番機械工作隊室長、時田シロウだ、よろしく」

勇美はそう言つてシンジに握手を求める。

「その時田さんが……僕に何の用ですか？」

「そう怖い顔をしないでくれ、ＪＡの件では君たちネルフに借りがある、邪険にはしないよ」

そう時田が言つたとき、地面が揺れる。

「…何だ？」

『Bブロックより侵入者を補足、繰り返すBブロックより』

けたたましいサイレンと共に非常用のアナウンスが流れる。

「もう来たのか…早いな

「室長、迎撃しますか？」

ムサシが言ひ。

「いや、大事なお客様だ、上に何を言われようと手出しするな」

「はい」

「マナ

「はい」

「迎えに行つてあげなさい」

「わかりました」

そう言つてマナはドアを開けて外へと出て行つた。

「一口に戦自の基地と言つても広いわ、どこを探せばいいのか！」

アスカが叫ぶ。

「黙つてろー！」のまま内部へ突っ込むぞ！！」

加持がアクセルを更に踏み込もうとした時、扉からマナの姿が現れる。

「加持さんー止まってー！」

シズクが叫ぶ。

加持は反射的にブレーキを踏み、マナに横付けする形でトラックは止まつた。

「そつちから出でてくるなんていい度胸じゃないーシンジはビーー？」

アスカが荷台から飛び降りる。

「アスカ、不用意に近づくな

加持が懐に手をやり、運転席から降りた。

マナは静かにお辞儀をすると

「室長のところへ案内します、私について下さること

と言ひた。

「……君、霧島マナだる……？」

シズクが呟く。

驚いたようにマナがシズクの方を見た。

「私を知ってるの？」

「知ってる……いや、知つてた、と言つぱうが正しいかな。  
どうも僕の知つてるマナと今ここのマナは違つ気がする」

「？」

「君は……この査問部の諜報委員じゃないのか……？」

そのシズクの問いにマナはクスリと笑い。

「確かに、あなたの言つてる私とはちよつと違つまづね

マナは自分の胸に手を当てて、

「スパイ稼業は2週間前に引退したわ、今は別の部署で働いてるの」

ナウトヒトマナは再び背を向けて

「全部答えてあげるから私にきてきて」

と言った。

「どうすんの？」

アスカの問い。

「行くしかあるまい、どうせ行かない」とシンジ君は返してくれないだろうし、な、  
但し、絶対に俺の側から離れるな」

「「「了解」」

四人はマナの後についていく。

プシュッシュドアが開くとシンジと時田、それにムサシとケイタがいた。

「シンジ君、無事だつたか

「加持さん、みんな……」

「JRに来て、ほつとしたのかシンジの顔によつやく笑みが戻つた。

「JRのバカシンジー心配かけさせんじやないわよ……」

「じめん」

「よつJRA、チルドレンのみなさん、そして、加持一尉」

時田がそう言つて会釈をする。

「あなたは……JRAの……？」

シズクが驚いたように言つた。

「覚えていてくれて光榮だな、フォースチルドレン、碇シズクさん」

「で、その時田さんが俺たちに向の用だい？」

加持は懐に手を入れたまま静かに問つ。

「あの時のパイロットが来ると聞いたんで御礼をしようと思つただけですよ」

「それであんな兵器まで持ち出したのか？」

「仕方なかつたんですよ、戦自だつて一枚筋じやない、  
ネルフを快く思つてない上の連中だつて五万といます」

「礼を言つだけなら海岸であんたが出てくれればいいだけじやない！」

アスカが叫ぶ。

「それも出来なかつた、  
室長とこつ立場は『えられているが私はほぼ軟禁状態の身だから  
ね』

やう言ひとパチンと指を鳴らす。

スクリーンが降りてきて先ほどのロボット、トライデントが映し  
出される。

「これはエヴァを参考にして作られたトライデントとこつ兵器です。  
私はそれを更に改良してパイロット負荷が  
ほとんどかからない状態まで仕上げることに成功しました」

「…で？」

加持が僅かに目を細める。

「恐りく近い未来、これを使って戦自はネルフへの侵攻を開始しま  
す」

シズクの肩がぴくつと上がった。

「私は反対した、ヒューマンパイロットは命がけでこの世界を守つて  
いると言つてね  
でも、上の連中は納得しないんですよ」

「それを俺たちに話してどうあるつもつだい？」

「別に何も…信じるも信じないもあなたたち次第ですから…  
私に出来るのはただの忠告です」

「加持さん…」

シズクの弦。

「この人の言つ事は…信じられます…」

加持はその言葉に少し沈黙すると手を懐から抜いて

「わかった…君がそう言つなら信じよつ、  
そろそろホテルのチェックインの時間なんだ、帰つてもいいかな  
？」

と言つた。

「はい、ただあなたたちは私の元から脱走した、という事にして頂  
きたい」

「了解だ」

さう言つと加持たちはドアを開ける。

「あ、シズクさん

？」

時田の言葉に振り返るシズク。

「これだけは信じて欲しい…私は本当にこの世界を憂いでいる…  
そして戦自がどんな行動を取ろうとも、私は君たちの味方だ…」

時田のそのままの言葉に無言で頷くシズク。

「…人の意思が割れるなんてどこの組織でも同じですよ、  
僕たちは僕たちの戦いをします、時田さんも頑張ってください」

「…ありがと」

そう言つと時田は後ろ姿のシズクにそっと頭を下げる。

「シンジー無事やつたか！…」

ホテルのロビーでシンジたちをトウジが出迎えた。

「心配わせねがつて」

「いわん」

ケンスケの言葉に素直に謝るシンジ。

「何にしても、無事で良かったわ」

ヒカリがほつと呟いた。

「あ、飯や飯！」

やうやくトウジは先頭をついてレストランへと移動する。

夕食はバイキングだった。

イタリアン、中華、フレンチ、和食、色々と並べられる。

アスカとレイはあまり食事が進んでいない。

「食べないの？」

ヒカリが心配そうに声をかける。

「うん、なんか味いまいちなのよね~」

アスカがパスタをフォークでぐるぐる回しながらちりめん。

「…シズクや碇くんの料理の方が、美味しい」

セウ吉つてレイはエビチリを口に運んだ。

「二人とも、普段から恵まれすぎなのよ」

ヒカリはセウ吉つてハマグリのお吸い物を飲んだ。

「はは…でもいいのも美味しいよ?」

「あなたが作ったのと比べちゃうといひついしても落ちるのはねえ」

アスカがシズクに対しがふつせりまつてしつ答えた。

「…………」駆走様

レイはセウ吉つて席を立つ。

「あら?レイ、もう部屋に戻るの?」

アスカが尋ねるとレイは

「…うよつと、用事があるの」

と、言つてシズクの耳元で

「毎晩の理由……聞かせて、中庭で待ってるから……」と呟いて去つていった。

シズクはドキドキとなる胸に手を押さえつけて

ふうっと溜め息をつくと、覚悟を決めたように席を立つ。

「シズクももう終わり？」

「うん、ちょっと散歩してくる」

そう言つてシズクもレイの後を追つ。

「…変な二人」

アスカがパスタをちゅるりと食べてそう言つた。

- 中庭 -

月が熱帯の植物を淡く照らす。

その中央にレイが立っていた。

「レイ」

静かに近づくシズク。

「…………座つて」

そう言つとレイは丁度いい大きさの石に腰掛けた。

「理由…話すけどさ、突拍子の無いことで…もしかしたら信じても  
られないかも知れない」

「…………私はシズクを信じてる」

「うん」

シズクは肩を見上げる。

レイはそんなシズクの横顔をじつと見つめた。

やがて、シズクはレイの顔を見る。

黒い瞳が紅い瞳と重なり合つた。

「僕の本当の名前は…碇シンジ、今より未来の…  
サーデインパクトが起こった時代から来たんだ」

時が、止まつた。

レイの瞳孔が開く。

シズクが…碇…くん…?

「僕のいた世界はそれは悲惨な結末を迎えたよ…」

「…サーード、インパクトが…起つたから…?」

何とか気持ちを静めながらレイは言葉を搾り出す。

「うん」

「…私は…私は何をしていたの…?」

「レイは…正確に言つと『今』のレイは、第16使徒…アルサミールと戦つて、死んだ…」

「…………！」

レイが直立不動になる。

死ぬ…?

「でも直ぐに…『次』のレイがやつてきた…」

「…つ、その…?」

「ガフの部屋」

「……」

レイの瞳が震える。

「知ってるだろ……当然、レイの器がある場所だ……」

シズクは一呼吸、置いてから。

「3人目のレイは……レイであつてレイじゃなかつた、別人だつたよ……」

「でも、最後は……最後のレイは、「人」としての意思があつたと思う……」

無音の中、レイの喉が鳴る音だけが響いた。

「最後の私は……どうなつた……の

「リリスと一つになつて初号機ごと僕を包み込んだよ、  
その時、流れ込んだ、大量のレイの記憶、父さんの計画、ゼーレ  
の思惑……」

シズクの瞳が悲しく揺れる。

「そして、その記憶の波に押されて僕は耐え切れなくなつて、世界  
は崩壊した……」

「僕とアスカを残して……ね」

「……私が原因で……サードインパクトが起きたの……？」

シズクはゆっくりと首を横に振る。

「僕が臆病者だったからいけなかつたんだよ、レイは悪くない」

「…アスカは、残されたアスカは…どうなつたの？」

「…サードインパクトが起きてから何日かたつた後に…」 C・Lに  
還つたよ

最後にシンジ…って言つて

シズクが俯く。

「僕は自分を呪つたよ、何でこんなに情けないんだって、  
好きな人一人守れやしない…そして一人ぼっちになつて何もする  
気が起きなくて、  
そのまま死のうつて思つて目を瞑つたんだ…」

そこまで言つてシズクは再びレイの瞳を真つ直ぐに捉えた。

「気付いたら、田の前にシンジくん…自分自身がいて、自分は女になつて、  
この時間に飛ばされてた…何が起きたのかは自分でも分からい…  
だけど、僕はこう思つことにした…これはチャンスだつて、だか  
ら…」

シズクはレイの両手を握つた。

レイはびくつと震える。

「レイ、これから先は君の協力が必要だ…父さんの…

碇司令の計画を止めるにはダミーシステムの開発を阻止しなきゃならない

「…………ダミーシステムの阻止…？」

「レイに何て説明してるかは知らないけどリックさんから実験、させられてるだろ？」「

レイの瞳がまた震える。

脳裏に浮かんだのはあの時のリックの冷たい視線、自分を道具として扱う視線。

「それを、やめて欲しい…リックさんや父さんに逆らうのは至難の業だと思つ…けど、

今、ダミーシステムの開発を止められるのはレイ、君しかいない……」

沈黙が一人を襲つた。

突風が吹いた。

レイの唇が微かに動く。

その動きを見たシズクは優しく微笑むと

「ありがとう」

と言つた。

「じゃあ、部屋に戻るつか」

そう言ってシズクはレイの手を引っ張る。

「…………シズク」

「ん?」

「次の使徒は……いつ、来るの? 対策は……?」

シズクは少しレイに近づき。

「明後日、浅間山の火口内で使徒が発見される……火口に潜るのはアスカだ、注意すべき点は……」

それをレイの耳元に囁く。

やがて、ゆっくりと耳元から顔を離した。

レイは静かに頷いた。

部屋に戻ったシズクたちを待っていたのはアスカとヒカリだ。

「遅かつたじゃないーー！」行つてたのよーー？」

「ちゅうと、散歩だよ、ね、レイ？」

「…え、ええ」

「レイ、顔色悪いわよ、大丈夫？」

「…………大丈夫……」

そう言つとレイは微笑んで見せた。

「やつ、じゃ、行きましょーか

「ビニーハー？」

「男子の部屋」

「アスカ、私は反対だつて……！」

「鈴原もいるわよー」

アスカがヒカリの耳元で囁く。

ヒカリの顔が熟れたトマトのように赤く染まる。

「決まりねーほら、行くわよーー！」

ぐいぐいとヒカリの手を引っ張つてアスカは部屋を出て行つた。

「僕たちも行こうか？」

「…ええ」

そう言つと、レイはシズクの手を取つた。

…そう。

私もまた、知つてしまつた。

未来を守る義務がある。

カードインパクトは起こさせない。

司令の思い通りにはさせない。

ミサトさんは、アスカは、碇くんは…シズクは…私が守る。

レイの紅い瞳に強い意志の光が灯つた。

## マグマダイバー

つかの間の修学旅行を楽しんで帰ってきたシンジとアスカを待つていたのは

ミサトの差し出した学校の補習教材だった。

「学生の本分も忘れちやダメよん」

「シ、シズクとレイはどうなのよー!？」

「あの一人は成績いいのよ

「…ぐつ」

-ネルフ内・プール-

「こんちくしょーつ！」

アスカが思いっきり水に飛び込む。

プールサイドの脇で真面目に教材と格闘している  
シンジのところまで水しぶきが舞つた。

「アスカ、やらないと!!カトさんに怒られるよ」

「眞面目ねえ、シンジは」

アスカがプールから上がりシングジに向づいた。

「で、今どこやつてるのよ?」

「ん、ここだけど…」

そう言つてシンジはパソコンを描ます。

「何よ、ここの程度の数式が解けないの?」

アスカがマウスを数回クリックする。

「はい、とけた」

「え…?こんな難しい数式とけるのに何で学校の成績悪いの?」

「問題読めないのよ」

「それって日本語の問題が読めなかつたつてこと?」

「やつ、向こうの大学じゃ習わなかつたし」

「大学!…?」

「あ、去年卒業したの、で、こいつのこれは何て書いてあんの?」

「熱膨張のことだけ…」

「熱膨張？幼稚なことやつてんのね～、  
どこのつまり、暖めれば膨らんで大きくなるし、冷やせば縮んで  
小さくなるってことじゃなー」

「そりゃやうだけど…」

アスカは自分の胸に手をあてて

「私のおっぱいも暖めれば大きくなるかしら」

シンジは顔を真っ赤にして

「や、そんなこと知らなによつー」

と黙つて顔を背けた。

「アハハ、あんたからかいがいがあるわ、ミサトの気持ちもわかる  
わね～、  
ま、勉強頑張んなさい、私はもう一泳ぎしてくるから」

「う、うん」

やう言つてシンジはパソコンに向ける。

「シンジ、シンジーー！」

アスカの声の方に目を向ける。

「見てみてー、バックロールエントリーーーー！」

そういってアスカはパールサイドからぐるっと回転してパール内へと潜つた。

気楽でいいよな…アスカは…

シンジは溜め息をつきながら苦笑した。

「これではよくわからんな」

「しかし、浅間山地震研究所の報せにはなるが」

「もちろん、放置するわけにはいくまーー」

「MAGIの判断は？」

「ファイフティーファイフティーです」

「現地へは？」

「すでに葛城一尉が到着しています」

- 浅間山 -

「もう限界です！」

技術員が叫ぶ。

「あと600お願ひします」

「壊れたらうちで弁償します、あと200

「葛城さん！」

「ペーッ」と音が鳴る。

「モニターに反応」

「解析開始」

更に潰れる音がして、観測機が完全に圧壊した。

「何とか間に合いましたね、パターン青です」

「解析は？」

「間違いない…使徒だわ」

ミサトは部屋の中央へ振り返る。

「これより当研究所は完全閉鎖、ネルフの管轄となります。一切の入室を禁じた上、過去6時間の情報は完全極秘事項とします」

ミサトは電話を手に取った。

「碇司令あてにA-17を依頼して」

「気をつけてください、これは通常回線です」

「分かってる、早く守秘回線に切り替えて」

「使徒…これがですか?」

「そう、まだサナギの状態だけど…この状態の使徒を出来るだけ現状を保つまま捕獲することを優先します」

リツ「が呟く。

「出来なかつたときは?」

「即時殲滅」

「そんなの楽勝じゃない、はいはーーー私が出ますーーー」

アスカが手を上げた。

「…私は何をすれば？」

「プロトタイプの零号機は換装出来ないのよ、今回レイは待機」

「…現地で援護くらいは出来ます、発進を許可してください」

リツコはレイの発言に少なからず驚いた。

レイの目が今までとどこか違つ…？

「わかつたわ、零号機も現場、火口付近で待機、これで文句ないわ  
ね」

「…はい」

「いや―――つ、何よこれ―――つ――！」

ふくーっと風船のように膨れ上がったプラグースーツを身に纏った  
アスカが絶叫する。

「…ふふつ」

「シンジイ…今笑つたでしょー…?」

「わ、笑つてない、よ」

ぽんぽん跳ねてアスカはシンジに体当たりした。

「うわっ、何すんだよ」

「あははは、あんたなんかいつやって転げまわってるのがお似合い  
よー。」

といとレイが高笑いするアスカに近づいた。

「ん? 何よレイ」

とん、と軽く両手でプラグースーツを押した。

「ぐるるるるるるるる。

どん。

思いっきり転げまわって壁へと激突するアスカ。

「や、やったわね~」

よりよろと立ち上がりバウンドしながらレイへと近づく。

「ぐるるるええええ!」

トウツヒレイに体当たりをかますがレイはヒラコとそれをかわし

た。

アスカはそのまままた勢い良く転がって壁へと激突する。

「二人とも…何してんの…？」

シズクは苦笑しながらそのやりとりを見た。

「…出撃前の緊張をほぐそうかと」

レイがぽつりと呟く。

「緊張なんてしないわよつー。」

アスカがゼーゼー息を乱しながら叫んだ。

「Hガア 各機、到着しました」

「各機は現場で待機」

「はー」

待機するシンジは空の上に微かに光る物体を見つける。

「何ですか……あれ？」

「CINの空軍が空中待機してゐるよ」

「この作戦が終わるまでね」

リツ「とマヤの声がシンジの間に響く。

「手伝ってくれるのー?」

「いいえ、後始末よ」

「私たちが失敗したときにCIN爆雷で使徒」と「」を焼き払つたの

「何それ! ? ひつどい」

シズクは静かに目を開く。

「司令の命令ですか」

「そうよ」

「父ちゃんが……」

クレーンに吊られた武号機が所定位置へつぶ。

『アスカ準備はいい?』

「いっでもどうぞ」

『…アスカ』

「何、レイ?」

『…プログナイフの位置、見直したほうが…』

「え? でも今身動き取れないわよ」

『…レイ? どうしたの、急に』

『… いえ、なんど、なくです』

ミサトの問いにレイは静かに答えた。

『… セイ、発進!』

ミサトの命令に武号機が段々と火口へと迫っていく。

「うわあ、あつつきー」

アスカが火口を見て呟いた。

「あ、そうだ、見て見てシンジー!」

『え？』

ガシヤ「コンヒキ呼機の両足が開く。

「ジャイアントストロングヒントリーー！」

セツナ「ヒカル式呼機はマグマの中へと潜つてこつた。

「現在、深度170、進行速度20、視界はゼロ…何もわかんない  
わ、  
CTモニターに切り替えます」

式呼機のプラグ内がCTモニターへと移り変わる。

「これでも…透明度120か…」

・浅間山、仮設本部・

「…？」

「どうしたの、マヤ

「いえ、3号機と零号機のシンクロ率が上がっています」

「3号機じゃなくて……？」

「はい、間違いなく、3号機と零号機です」

「シズク……？ レイ……？ どうしたの？」

- 3号機プラグ内 -

個人回線が繋がっている。

『……シズク』

「わかつてゐ……タイミングは、外さないよ

3号機がログナイフを抜いた。

「3号機、ログナイフ装備！」

「何してるの！？ シズク！？」

『サトが叫ぶ。

『机はログナイフを思いつき火口へと投げ込んだ。

「何してんの…あの子…」

「あ…」

マヤが驚きの声を上げる。

「今度は何?」

『いえ、机…ログナイフをロスト…』

「なんですか!?

『目標発見しました』

『え、ええ、それでは捕獲作業開始して』

『了解』

机がゆっくりとサンギへと近づく。

キヤツチャ―が使徒を囲んで捕獲した。

「捕獲完了」

『お疲れ様アスカ』

『アスカ、大丈夫?』

「あつたりまえでしょ、案ずるより産むが安しつてね」

そうアスカが言つた時だつた。

使徒が変化を見せたのは。

『何!?』

『不味い、羽化を始めたんだわ! 予想より早すぎる! ...』

『捕獲中止、使徒迎撃を最優先!』

『武器が無いわよ!』

『アスカッ! 落ちてきてるだろ! 使え! ! !』

『シズク! ?』

アスカが上を見ると3号機のログナイフが落ちてきた。

「助かったわ! サンキュー! ! !」

式号機がログナイフを掴み、迎撃体制へと入る。

式号機が渾身の力を込めた一撃は軽く弾き返された。

『この中で活動してゐるような物に…プログラマナイフじゃダメだわ…』

リックが呟く

『シンジくん、今何の勉強してた!?』

シスケ!? 何たよ今それと……『

： 破くん  
いしかひ答えて』

熱臍強たけど、あそこがアラカ！」

利も受けたれよ！シノク 頭良いしやない！！

式号機は冷却パイプを掴んで第8使徒サンダルフォンの口の中へ押し込む。

「冷却液の圧力を全て3番に回して！早く！！」

マヤの指がアスカの指示とほぼ同時に動く。

過度の冷却液が使徒へとサンダルフォンへと流れ込み、大きく形  
が崩れる。

止めと言わんばかりにアスカがナイフを突きつけた。

使徒が爆発、四散する。

「やったー！」

そう言つたアスカの言葉とほぼ同時にガクンと弐号機が下がる。

二〇一九・二〇二〇年版

そのまゝ、ゆりくじと下降する飛行機。

「おいかくせうたの『元』までなの？」

アスカが悔しそうに咳いた。

僅かな振動を感じる。

初号機が式号機の腕を掴んでいた。

大丈夫っ！？アスカー！！

苦しそうなシンジの声にアスカはふつと微笑んで

「無理しちゃって……でも、助かったわ、ありがとう」

「はー、温泉がこんなに気持ちいいなんて」

シンジはペンペンと肩まで温泉に浸かって一人呟いた。

「シンジーー」

「…？何ーー？」

「ボディーシャンパー、投げてくんない？」「うの無くなつたのーー」

「わかった、今、投げるよ」

「おーらー」

シンジは軽く、ボディーシャンパーを放った。

「あーたつ、どこの投げてんのよーバカシンジーー！」

「どれどれ、お姉さんに見せてみなさい」

「あーーアスカ肌スベスベ…羨ましいわあ

「あん、どこの触つてんのよー、

でも肌はシズクやレイの方が綺麗なのはねー、悔しここと

「ア、そんなことなによつ」

「どれどれシズクへ、お姉さん」確かめやせなやこ

「//カトセー・やめてください……」

「何やつてこのよ、レイ」

「…………確かめな」の?」

「「「「ふつ、あせせせせせせ」」」

女性陣の会話にぽかんと立つたままのシンジ。

シンジのある部分を見てペンペンが不思議そうに首を傾げた。

『ぱはつ』と温泉に勢いよく沈む。

「……膨張してしまつた……」

シンジは恥ずかしそうに眩いた。

## 死角が下にしか存在しない使徒

「お断りします」

レイは強い口調でさつぱりと呟いた。

「…何故?」この実験の命令は司令からの絶対なのよ」

リツコが冷ややかな目でレイを見る。

「…誰の命令でありますか、もつ私はこの実験には参加しません」

「…それはあの子…碇シズクの意思かしら」

そうです、と出かかった言葉を一口、飲み、

「…私自身の意思です」

と言つた。

「」の実験が成功しなければ、世界が守れないかもしねいのよ」

「…私は私のやり方でこの世界を守ります」

リツコがその言葉を聞いてかつと手を上げる。

パシャインと響く、乾いた音。

右頬を赤く染めながらもレイの瞳は揺るがない。

「…何をされても、私の意志は変わりません…では

そう言つてレイは入口進化研究所のドアを出て行った。

「…レイの謀反、か…」

冬月が呟く。

「間違いなくあの娘…碇シズクに何か吹き込まれています…」

リツコが荒々しく声をあげた。

「…ふむ、まさかとは思うが…こちらのシナリオが読まれているわけではあるまいな…碇」

冬月に問われたゲンドウはサングラス越しに不気味に笑うと

「問題ない、確かに今のレイは使えない…が、代理を用意すればいいだけのことだ」

「代理…しかし、魂が今のレイにある以上、安定しないぞ」

「ダミーの開発に支障をきたさなければ問題あるまい」

そう言ったゲンドウの言葉に軽く顎を擱て冬月は考え込む。

「ふむ…赤城博士」

「はい」

「至急、『3人目』の用意を…もちろん全てに内密にな」

「了解しました」

「以後の実験は全て3人目を使って行え、データの入力書き換えも忘れるな」

「はい」

そう言つとリツコは司令室を出て行く。

「…しかし、やはり只者ではなさうだぞ、あの少女は…」

「構わんよ、どうせ後もつ少しの命だ」

冬月が巨大な窓の外を眺める。

「…例の3号機のシナリオか…予定ではシンジ君の級友を使うのではなかつたのか?」

「あの娘も今や級友だらう…

ダミーの起動、使徒の殲滅、そしてあの娘の処理、全てが一度に

行える

ナウト言つてゲンドウは手をサングラスに当たった。

「…シズク」

昼休み、レイはシズクへと声をかける。

「何? レイ」

シズクはお弁当のマートボールを飲み込むとそう答えた。

「…話があるの…屋上につきあって」

レイの真剣な表情を汲み取るとシズクはお弁当箱を包み、

「わかった」

もう言つてレイと共に屋上へと向かった。

「…私、断つたの」

「何を…？」

「…例の、実験」

その言葉にシズクの顔が明るくなる。

「ホントー?」

「…ええ

「良かつた…ともかく、これは大きな一步だよー。」

シズクは大はしゃぎでレイの手を取りぴょんぴょんと跳ねた。

「……シズク」

「ん?」

「……未来での私は…道具だったの?」

シズクはレイの問いかにはしゃぐのをやめて真顔になる。

「…父さんやリツ「さん」に…とつては、もしかしたらそうだったかも  
知れない…

でも、僕の中では綾波レイはれつきとした1人の女の子だったよ

それを聞いてレイの顔に微笑みが宿る。

「…そう、でも『今回』の私は司令や赤城博士の道具にもならない

わ

「うそ、レイはレイだよ、道具じゃない」

レイの言葉に満足そうにシズクは頷いた。

「…やうだ

思い出したよにシズクが呟く。

「何?」

「明日、使徒が来る」

「明日…?」

「うん、なんか蜘蛛みたいな形をしたやつで…

確かネルフ本部の電気系統が全部落ちる事件も同時に発生したはずだ

「…電気系統が、全部? エヴァはビヤヒで出撃したの?」

「父ちゃん… 司令が手作業で準備を進めてた、パレットライフルの射撃ですんなり倒せたから

そんなに強くないとは思ひナビ、万全の体制はどうしておきたい

「…ええ」

「レイは明日アスカとシンジくんを早めに本部へと連れて行つて…  
僕は今から遠出をする『振り』をする」

「…………？」

レイがシズスクの意図を掴めないで首を傾げた。

「ちょっと離れたところで使徒を発見したって言つて本部に戻るよ  
上手く行けば、停電前にエヴァが出撃出来る」

「…………わかったわ」

一人は頷くと屋上を後にした。

・翌日

レイは朝から学校へ行かずシンジとアスカをエルフ本部へと連れ  
出した。

「ちょっとレイ、どうしたのよーー？」

「綾波…学校、行かないの…？」

「…………いいから、今日は本部にて待機してて」

「訳わかんないわね……大体シズクはまび」に行つたの?」

「そういうやesterから姿見かけないけど……」

「…………多分、もう本部にいるわ」

「……あんたたちさあ、修学旅行かうじつち、変よ、何かあったの?」

「別に何も……ただ、覚悟と決意が固まつただけ……」

アスカの問いにポーカーフェイスを保つたままレイは答えた。

「覚悟と決意……か

シンジがぽつりと呟いた。

「ねえ……使徒って何なんだらう?」

「はあ……? あんた何言つてんの?」

アスカがシンジを見て溜め息を漏らす。

「使徒……天使の名を持つ、僕らの敵……じゃあ、使徒は何でこいせんてるの?」

「知らないわよ、そんなの、向かつてくるんだから倒すしかないじゃない」

「…………アスカの言つ通り……私たちの目的は使徒のネルフ侵入の絶

対阻止…

「うん、それはわかつてゐるよ…でもさ、何で使徒はネルフ本部に向かうの？」

シンジの問いにレイは一瞬、躊躇した。

そして、その次に出でてきた言葉はシンジとアスカに驚愕を与えるものだった。

「…使徒の目的はサーダインパクトを引き起こすこと、自分が選ばれた種であることを認識するために…だから、本部地下にあるセントラルドッグマにいるアダムを日指すの」

「アダムー？」

二人は同時に叫んだ。

「そう」

「最初の使徒の名前よね？なんでそいつが本部の地下にいるわけ？」

「…そこまではわからない…司令は考えがあつてやつているんだろうけど、私はその考えを止めたい」

「父さんが…最初の使徒を、本部の地下に…？」

「なんでレイはそんなこと知ってるわけ？」

「…私が産まれたのは、母親のお腹の中じゃなかつたの」

「は…？」

「…気が付いた時には私はここにいて、司令や赤城博士の側にいたわ…だからあなたたちより深い事情も知つてゐる」

レイは立ち止まって一人の方に振り向いた。

「…………一人とも、約束して、私が今言つた事は絶対に誰にも喋らないで」

「誰にもつてミサトさんやリシコさんや父さんにも…ってこと?..」

「…ええ」

「…シズク…にも?..」

そう聞くシンジにレイは少し頬を緩めると

「シズクは、もう…知つてるわ」

と言つた。

「癪にさわるわね…」

アスカがぽつりと呟いた。

「…何が？」

「あんただけが自分の秘密を明かすことがよー。」

アスカがそう言ってレイを指差す。

「私たちは仲間でしょ！？ならあんたも私の秘密を知る権利…義務があるわ！」

そう言つとアスカは自分の胸に手を当てる。

「私は…昔ママに首を絞められた…！」

フラッシュバックする記憶。

人形に向かつて「アスカ」と微笑む自分の母親。

自分の首を絞める母親。

洪水のようにアスカは自分の昔のことを言い放つた。

とても、苦しそうに。

全てを言い終わつたあと、アスカは溜め息をつく。

「…アスカも、辛かつたんだ…」

シンジは俯いて呟いた。

「だから私のところにエルフが来て、選ばれた者だつて言われたときには本当に嬉しかつた。

ママにも見捨てられた私が唯一存在できる場所があるつて分かつたから……」

レイはアスカの肩に両手を置く。

「……何よ？」

「…………アスカのお母さんはアスカを見捨ててない」

「慰め? 別にいいわよ、今更……」

「…………武装機を信じてあげて」

「はあ?」

レイはそう言つて微笑むとわからないと言つた顔をした  
アスカとシンジの手を引っ張り、本部へと急いだ。

「三人とも、タイミングいいじゃない

発令所につくとミサトが待っていた。

シズクが傍らにいる。

「今、シズクに未確認物体を見たつて報告受けて確認、急がせてるのよ、使徒の可能性もあるわ、各自エントリープラグで待機して頂戴」

「…………」「了解」「」

そう言つと四人は着替えに向かう。

「……で、確認出来た?」

ミサトはモニターを見てマコトに言つた。

「はい、3時間後に第3新東京市圏内になります、間違いありません、パターン青、使徒です」

「シズクの遠足が役にたつた、か…エヴァ各機、発進準備急いで!」

ミサトの喝令と共に、エヴァが次々に地上へと打ち出される。

- 3号機・エントリー プラグ内 -

『シズク』

モニターに式号機エントリー・プラグの内部が写る。

個人回線でアスカがシズクにコントラクトしてきた。

「何? アスカ」

『あんたにもその内事情、話してもらひつわよ』

「事情?」

『わかつてゐるんでしょ、あんた、私のこと…』

シズクはモニター越しにアスカの表情を見る。

怒っているわけではなさそうだ。

極めて冷静に、アスカは話している。

『今、言えないなら別にいいわよ…でも、いつか必ず話してよね』

「…わかつた、約束するよ」

そういうとシズクはモニターに向かって軽く微笑んだ。

「田標……そろそろ圈内に……？」

そうマヤが言おうとした時だった。

発令所が突然、真っ暗になった。

「……何！？」

「電気系統が……落ちた……？」

「ダメです、モニタリング全てダウンしています」

「モニタリングどころか全部の機能が麻痺しますよ！」

シゲルがコンソールを叩きながら大声で叫ぶ。

「……ただの停電なら主・副・予備がある本部の電源は1～2秒で復帰するはずよ、

それが復帰しないのはおかしいわね」

リツコが顎に手をあてて呟いた。

暗い司令室から冬月とゲンドウがその様子を眺める。

「所詮、人類の敵は人類……ということか」

「Hガアは出撃している…何が狙いだったのかは知らんが徒労にす  
る」

- 初号機・エントリープラグ内 -

「…発令所との連絡が途絶えた?」

シンジが呟く。

『私もダメだわ!』

『…私も』

『僕もだよ』

見ると3号機が指をさしてこちらのが見えた。

『あっちの方から使徒がやってくるのを見た、  
ミサトさんの指示が無い以上、僕らで迎撃するしかないよ』

『卅、やうよ、やつてやひじやないのー』

『…始機…武装は…?』

「パレットライフルとプログナイフ…何時も通りだよ

『じゃんだけあれば上等! どつからでもかかつてきなさい!』

来了！

シズクの叫びとともにオレンジ色の溶解液がエヴァ各機を襲つた。

『散開するわよ！四方を囮んで射撃！！いいわね！？』

## アスカの指示。

「『了解！』」

四機はそれぞれ第9使徒マトリエルを囲んだ。

『てえ！』

卷之三

四方からの攻撃に全く怯むことなく前進するマトリョル。

全身をA・T・フィールドに包み、銃撃をものともせずに本部直上へと移動する。

四機は時折飛んでくる溶解液をかわしながら、絶えず撃ち続けた。

おかしい……前回の時は一撃で沈んだのに……

シズクは溶解液をかわしながらパレットライフルを撃ち、疑問を抱いた。

あの時と何が違う……よく考えろ……

『……シズク』

レイからの回線。

「……わかつてゐる、こんな頑丈なやつなはずじゃなかつた。何か見落としが……」

そこでシズクは前回との違いに気付いた。

「やつが……ここ……下が弱点なんだ……」

『……下?』

「うそ、多分、だけだ」

やつがシズクは全機にコンタクトを取った。

「みんな、作戦があるー。」

『作戦……?』

『「」のまま撃ち続ければ意味なしかったが、乗つてやるつもりにな  
ー』

「僕とシンジくん、レイド「」に接近、溶解液を受ける覚悟でや  
つの半身を浮き立たせる」

『私はどうすんのよ..』

「アスカは今「」が地面を向いてる側、お腹つて言つのが正し  
のかな…

それが向いたらそこを攻撃するんだ」

『……それで倒せるの?』

シンジが不安そうに咳こいた。

「多分…ね」

『あなたが言つたならきっと倒せるとしよう…  
どのみちやらないこと本部に向つ着くわよ、「」…』

「うん、みんな…やるよー」

『『『』』解』』

式号機がバックステップしてパレットライフルを構える。

残る三機がその前に立ち、マトリールの長い足を一本ずつ持つてそのまま力任せに持ち上げた。

三機に降りかかる溶解液。

A・T・フィールドを中和しながら持ち上げてるために自身のフィールドも張れず、三機はまともにそれを浴びた。

「ぐ……うううううううう……」

『…………』

『負ける……もんかああああ……』

三機は両腕を下口下口で溶かしながら、マトリールを押し上げた。

「アスカ!」

『諦らうことよおおおおおおおお……』

シズクの掛け声と共にアスカはパレットライフルの弾倉金を絞った。

マトリールの腹を貫通して、銃弾は轟音を轟かせる。

やがて、マトリールから溶解液の噴出が無くなり、ゆっくりと地面に沈んだ。

『あんたたち！大丈夫！？』

「はあ……腕はぼろぼろだけど、なんとか、ね」

『……私も、無事』

『僕も大丈夫だよ』

三人はそう言ひつゝ両腕をだらりと下げた。

## 昇進パーティー

朝の葛城邸 -

いつもの様に朝食を用意するシズク。

アスカが加わってからメニューを余分に考えなければいけない分手間がかかつてはいたが（アスカの好物は肉全般、レイとは反対なのである）

シズクは苦に思わなかつた。

むしろメニューを考えるのを楽しんでいる節さえある。

珍しく、ミサトが早くから起きてテレビを見ていた。

アスカと雑談しながら朝のコースを眺めている。

レイとシンジはシズクの手伝い。

先日からレイが私も料理を覚えて見たい、という真摯な意見にいたく感動した

シズクは何回も頷いて、基本的なことからレイに教えている。

興味を持つ、といつのは本当にいいことだ。

と、シズクは思つ。

アスカやミサトさんにも見習つて欲しいのに

そつ思つて談笑する一人を見て苦笑する。

ピンポーン。

不意に、玄関のチャイムが鳴った。

「誰かしら、こんな朝早く？」

「アスカー、こつち手離せない、お願一一」

「はいはい、わかつたわよ、もつ誰よ、全く」

ブツブツと文句を言いながらも特別嫌な感じを覚えることもなく  
アスカは立ち上がった。

「はーい」

ガチャリとドアを開けるとそこには

トウジとケンスケ、ヒカリが立っていた。

「なしたの……？あんたら……」

「何つて、迎えに来たのよ、ちょっと早かつたけど…」

「あほ、いひこうんはな、何事も早い方がええんや」

「やうやう、あ、惣流、シンジは？」

「誰か呼んだー？」

台所の方からシンジの声が聞こえる。

「誰も呼んでないわよ」

アスカが声を返す。

「おいおい、惣流」

「何ぼせうと突つ立つてんのよ、上がりなさいよ」

「あ、うん、お邪魔します」

アスカに促されると三人は葛城邸へと足を踏み入れた。

「あら、三人とも、いらっしゃい」

「つほーーー!! カトさん! 朝から会えるなんて自分、感激ですー。」

ドスッとアスカの肘打ちがトウジの腹へと決まつた。

「ぐほつ、な、な」「するんや…惣流…」

「あんた、ヒカリの前で一度とその台詞吐くんじゃないわよ」

「なんでイインチヨがそこで出てくんねん?」

二  
は  
あ

アスカが思いつきり溜め息をついた。

ヒカリはいいから、と言った顔でアスカに微笑んだ。

「ん？」

ケンスケがミサトの襟元に注目した。

コンマ数秒の沈黙。

そして、ケンスケの絶叫がこだました。

「な、何々？」「したのーー？」

あまりの叫び声に料理陣も「さう」とビングへと集まつてゐる。

ミサトはきょとんとケンスケを見た。

「どないしたん？ケンスケ、そない大声だしあつて」

「しょ、昇進おめでとう！」  
「ますー！」

そう言つてケンスケはミサトに敬礼をする。

「昇進…？」

「へえ…ミサト、偉くなつたんだ」

「うか…今日だつた、か

「ん、あらがとう」

そう言つてミサトはケンスケに微笑みで応える。

「なあ、明日学校休みだし、お祝いでもしようぜー！」

「そり、ええなあー！」

「いいじゃない、眼鏡のくせに中々良ここと思つてくじやなーの」

ケンスケ、トウジとアスカはノリノリであつた。

「で、でもかわいいのか？」

「明日ね？いいわよ、別に」

「…………いいんですか？」

「何よレイまで、別に特に差し迫つた仕事はないし、明日の夕方に帰つてこれると思つわ

「それじゃあ、明日、場所は…」ソーリーでいいですね」

シズクが纏めに入る。

ついで、葛城ミサト一尉 三佐昇進パーティーが立案された。

翌日、ネルフ本部。

ミサトは自動販売機の前で立つて自分の襟元の階級章を見る。

昇進：か

ガコンと自動販売機から「一ヒー」が落ちてくる音がした。

「まじ」

差し出したのは加持だった。

「加持くん…」

「昇進、おめでとう、これからはタメ口聞けないな」

「何よそれ、嫌味?」

「いやいや、本心だ」

「…まあ、素直に受け取つておへわ、といひで加持くん、夕方から空いてる?」

「お、デートのお誘いかい?」

「馬鹿ね、子供たちが私の昇進パーティー開いてくれるって  
言つからあんたもどうかなつて思つただけよ」

「あー、行きたいんだけどな、残念だが生憎仕事があるんだ」

「あら、珍しい」

「使徒が来る気配は無いんだろう? リツちゃんやオペレーターの面々を誘つたらどうだ?」

「ううね、そりするわ」

- 発令所 -

「と、いうわけなんだけどみんな、来る？」

ミサトの問いにオペレーター三人は目を輝かせた。

普段、ミサトからシズクの料理の腕前は聞いている。

プロ顔負け。人生に一度は食べなければ損な味。

特にマヤはもう既にどこか別の世界へとトリップしたような顔をして両手を組み、天井を眺めていた。

「…料理を作るのは…シズクちゃん、ですよね？」

そう聞いたのはシゲルだ。

「多分ね」

「…行きます…！」

ミサトの返答とほぼ重なるように三人は即答した。

- リッシュの研究室 -

「昇進パーティー？あなたの？」

「そう、子供たちが張り切っちゃつてさ」

「それに私も参加しようと？」

「嫌なら別にいいのよ」

「別に断つてないわよ」

「なら来るのね？」

「時間が合えば、ね」

そう言つとリッシュはコーヒーを一口すすつた。

- タ方・葛城邸 -

食卓には全員分の料理が乗り切らないのでリビングにある大きなテーブルに次々とシズクの渾身の手料理が運ばれる。

その一品一品を運ばれてきては「おー」と喜び歓声を出し、唾を飲み込むオペレーター三人組。

シンジとレイはシズクの作った料理をせつせと運んでいる。

アスカ、ヒカリは飲み物を買いに出ていた。

ケンスケは記念すべき口だと何とかブツブツ言いながらハンデイカムのチックに余念がない。

トウジは一人腹を鳴かせながら「まだかあ？」と言つてゐる。

そして、全ての料理が出来上がったとき、一度アスカとヒカリが到着。

ついでにヤード缶つたとリッシュとヒカルも会流していた。

「//カトセ... セのお酒、ビリあるんですか...？」

「エーハー、飲むに決まつてゐじやないの、シンちゃん」

「... そんなに？」

「私だけじゃないわよ、リッシュもいるから今日は」

「リッシュさんも飲まれるんですか？」

「//カトに付かれてると肝臓の機能が強化されるみたいなの」

リッシュはやつぱりと冷蔵庫を開けて次々に飲み物を閉まつていいく。

「えー、」ほん、では、葛城ミサト三佐承認を祝つて、かんぱーい！」

ケンスケの音頭が高らかと響き、みんなのグラスが高く上がった。

「お…美味しい…」

そう言つて唐揚げに手をつけたマヤが至福の顔をした。

ああ、シズクちゃん、本当にこんなに料理が上手だなんて。うひに来てくれないかな。

マヤが箸を口に入れたままじっとシズクを見る。

シズクはマヤの視線に気付くと微笑みを返した。

料理も出来てしかも可愛いい！

ああん、もう、葛城さんばかり独り占めなんですねーーー！

-夜-

みんな、寝静まつたころ、ミサトはちびとえびちゃんを煽つていた。

「…昇進、か…」

「嬉しくないんですか？」

そう不意に声をかけられた。

「…シズク…寝てたんじゃなかつたの？」

「たまたま、田が覚めたんですよ」

「…そう、…丸つきし、嬉しくないわけじゃないのよ、  
そりや、私の努力が認められたってことなんだからわ」

そう言つてミサトはベランダに出た。

「ね、こいつら、来ない？」

「はい」

そう言つてシズクもベランダへと出る。

「私、別に偉くなりたくてネルフに入ったわけじゃないのよ

「…なら、どうしてネルフに入ったんですか？」

「使徒…」

ミサトの顔は微笑みを崩さない。

シズクはそんなミサトの顔をじっと見つめていた。

「私から全てを奪ったセカンドインパクト、その原因である使徒に復讐するため、

そのためだけに私はエルフに入つて、あなたたちに常に危険と隣り合わせの目に遭わせているの

私の父はね、自分の研究、夢の中に生きる人だったわ、そんな父が嫌いだつた、憎んでさえいたわ

けど…最後は私を庇つて死んだ、セカンドインパクトの時に、ね…結局、私はセカンドインパクを起こした使徒への復讐を果たしたい、それだけなのよ」

ミサトはそう言つとシズクの方を向く。

「…失望したでしょ、こんな個人的な理由でエルフに入つてる私に」

「そんなことあるわけないじゃない

声が聞こえたのは部屋の中からだった。

アスカとレイ、シンジが立っていた。

「誰だって個人的な理由が最初の動機です、僕だって自分が変わるためにエヴァに乗つてゐる。

それってミサトさんの復讐…と何か変わりありますか？」

「……私も、失望なんかしません」

その三人の言葉に続くようにシズクがミサトに右手を差し出した。

「僕も三人に同意見ですよ、ミサトさんがどんな理由で使徒と対峙してようとそれは関係ありません。大事なのはミサトさんが命を預けることに信頼が置けるかどうかですから」

「あんたたち…」

ミサトは田頭が熱くなるのをぎゅっと我慢した。

そして笑顔でシズクの手を取る。

「これからも…よろしく頼むわね、みんな」

「まつかせなさいよー」

「…はー」

「はー」

「ミサトさんも…ですよ」

そう言って四人も微笑んだ。

- 数日後・元南極大陸海上 -

「いかなる生命の存在も許さない死の世界、南極、いや地獄だな」

冬月が呟く。

「だが我々人類はここに今立っている、生きてな」

「科学の力で守られているからな」

「科学は人類の力だよ」

「その傲慢が15年前の悲劇を産んだのだ… 結果、この有様だ」

「だが現在の穢れなき浄化された世界だ」

「罪に犯されていても人類が存在する世界を私は望むよ…」

ブーツ。

艦内にアナウンスが響く。

『ネルフ本部より入電！インド洋上空に使徒発見！…』

- ネルフ本部 -

「映像を補足」

発令所のモニターに使徒の姿が浮かぶ。

「こりや…凄い」

「常識を疑うわね」

使徒の幾何学的な姿を見て呟くスタッフ。

「接触します」

サーチシステムが使徒に接近したその時、ベコッという音がして  
システムは破壊された。

「A・T・ファイールド！？」

「とりあえず第一射は太平洋に大外れ」

モニターを見て、リツコが呟く。

「爆弾みたいなのですかね…」

「とんでもない威力ですね」

「さうすがA・T・フィールド」

「で、第一射ははい」

モニターが確実に日本へと迫る。

「確実に近づいてるわね」

「次は来るわね」

「本部に、本体」と、ね

「その時は第3芦野湖が誕生かしら」

「富士五湖が一つになつて太平洋と一つになるわ、本部」とね

・作戦司令室・

「落ちてくる使徒をエヴァで受け止めるうーん」

「やつ」

「落ちてくる場所を誤つたら……？」

「その時はアウト……」

「そんなの作戦って言えるの？」

「言えないわ、だからあなたたちは放棄する」とが出来る

暫しの沈黙。

誰も放棄はしなかつた。

「…いいのね？」

「当然でしょ！」

アスカが腕を組んでそう言った。

「」の前、僕たちが言ったこと…忘れたんですか？」

シズクもアスカに続いてそう言った。

「…ありがとうございます、」れ終わつたら、ステーキ奢るから

「本当っー。？」

「わあい！」

「期待してて」

そういつとアスカトは発令所へと戻つた。

ミサトの姿が完全に見えなくなるのを確認してアスカが肘でシン

ジをつんづん突く。

「何が、わあい、よ、もつちょつとマシな演技出来ないの？」

「そ、そんなこと言つたって」

「さて、と」

「」アスカは鞄から「東京グルメ」と書かれた雑誌を取り出した。

「折角、ご馳走してくれるっていうんだから、いいところ探さないとね」

「……ラーメン」

レイが呟いた。

「ラーメン？」

「……私、美味しいラーメン屋さんを知ってるわ

「じゃ、そこにしてしましょー！」

「後は、止めるだけだね、使徒を」

「ええー！」

やつぱりアスカは両手をパンッと合わせた。

・武装機・ヒントリープラグ内・

…武装機を、信じてあげて、か

アスカはふと先日、マトリール戦の時にレイに言われた言葉を思い出していた。

「とほとほ、ロボットのあなたに心なんてあるわけないし…ねえ？」

そう言つて操縦桿をこじれると呟く。

『作戦、スタート!』

その時、ミサトの即命令がかかった。

一斉に駆け出す、三機のエヴァ。

アスカが思考していたために一瞬出遅れる。

「……なに、やつしるのよ……私は……」

焦つて武吼機を走らせるアスカ。

「急ぎをなさいよ……私はあなたに命預けてるんだからね……あんたも、私の言う事くらい聞きなさこよつ！！！」

そう言つて操縦桿を握り締めた。

ドクン…

アスカの脳裏に見覚えのある光景が浮かぶ。

一面のひまわり畑。

そして、優しく微笑む自分の母親の姿だった。

…ママ…？

武吼機の、シンクロ率が跳ね上がった。

音速を超える、落下予測ポイントへと駆ける。

シンクロ率は95.6%をマークした。

## アスカ覚醒

ママ……間違いない、この感じはママだ！

アスカの顔に笑顔が満ちていく。

ここにずっといた！

ママは私を見捨ててなかつた！

ずっとこの場所で、H・ザ・アの中で、私を守ってくれたのね！――！

式母機はビビどんとスピードを増す。

待つて、ママ――今、私がママと一緒に活躍してあげるから――！

アスカは操縦桿を強く握った。

3号機は田もぐれず、前回落ちてきたポイントを田畠す。

今回はスピード勝負だ。

求められるのは対定したシンクロ率じゃない。

爆発的なスピードとパワー。

それだけだ。

シズクの中のスイッチが入る。

『や……3号機、シンクロ率……168%……!』

回線越しにマヤの驚愕する声が聞こえる。

シズクにその声は届かない。

見えているのは遙か上空より迫つてくる使徒の影。

初号機、シンジは予測落下ポイント3箇所を見つめながら、自分に一番近い場所へと全速力で駆ける。

「僕がしつかりしないと……他の3人に迷惑だけは、かけたくない……！」

初号機はA・T・フィールドを足元に展開するとその衝撃をバネ

にして一気に目的地へと飛んだ。

零号機、レイは冷静にしかし、真っ直ぐな瞳で事前にシズクから聞いていたポイントへと走る。

「…………みんなは…私が守る…」

だから、そのためにも、

力を貸して。

私の分身、もう一人の私、リリス、零号機。

レイのシンクロ率もまた70%を超えた。

四機のHガアがほぼ同時に同じ場所に着いた。

「シンジ、フィールド全開！」

「わかつてゐ！」

式号機と初号機が同時にA-1'フィールドを真上へと張る。

二つのエヴァから発せられるA・T・フィールドと使徒のA・T・フィールドがぶつかり押し合つ。

あなたなんかに負けるわけにいかないのよーママが…見てるんだ  
かっらあーーー！」

初号機と式号機から発せられる光量が跳ね上がった。

使徒が僅かに浮かぶ。

「レイン！」

シズクはA・T・フィールドを左手で展開して、右手にログナ  
イフを装備する。

3号機のフィールドが加わったことにより更に上昇する使徒。

「…………ええ」

レイは張られた4つのフィールドの中央。

使徒の目玉の部分だけを確実に侵食、中和してフィールドを剥がした。

「はあああああああ！」

3号機のログナイフが使徒の目玉に突き刺さる。

「とじめええええええええええええええええええええ！」

武装機が手を真上に折りたたむように振るった。

武装機のA・T・フィールドが使徒の目玉へと凝縮する。

パアアアアアアアアアアアアアンといつ音と共に、使徒の体が二つに裂けた。

そのままゆっくりと垂れ落ちる使徒。

使徒は十字の光の柱となつて虚空へと消えた。

「お疲れ様」

「　　」…………「　　」

ミサトの効いの言葉に沈黙する四人。

「…どうしたの？」

「ミサト」

「なに、アスカ？」

「私、わかったの、A・T・フィールドの意味。エヴァの本当の意味」

アスカの言葉にリックの眉が僅かに上がる。

「ママは私を見捨ててなかつた！もう、私は誰にも負けない、ママが守ってくれるから！！！」

「??」

ミサトはわからない、といった顔をしたが、ふと笑うと

きつとアスカが今回で「何か」を掴んだんだひとつ、そう思つこととした。

それにして驚かされた。

作戦の成功に、ではない。

今回の四人のシンクロ率に、である。

アスカの95.6%

シンジの94.8%

レイの74.3%

そして、シズクの168.2%だ。

「本当にありがとうございます、あなたたちにはいくら感謝してもしきれないわね」

ミサトがそう言つとシズクは静かに首を横に振つた。

「それは違います、僕たちが頑張れるのはミサトさんたちを信頼しているからです」

「やうですよ」

シズクとシンジがそう言つた。

「…信頼、ね」

ロツ「が一人聞こえない声で呟いた。

「南極の碇司令より通信が入っています」

「繋いで」

モニターに「SOSSENDON」の文字が浮かび上がる。

『… 良くやつた、葛城三佐』

「いえ、褒めるのは私じゃなくパイロットにしてあげてください」

『… そうだな』

少し、沈黙を置いて。

『初号機パイロット』

「は、はいっ」

『… よくやつたな、シンジ』

「… も… も」

シンジは若干戸惑いを覚えつつも、素直にその言葉を吸収取った。

- ルノー車内 -

「 も、約束なんだから、奢つてもいいわよ」

「わかってるわよ、大枚下ろしきたからフルコースにだって耐えられるわよ」

…給料日前だけど

ミサトは内心うずうと唸つた。

「あ、いい、右ね」

「はいはい」

ルノーが右に曲がる。

「いいよ、いい」

「いいひて…ラーメン屋？」

「レイがここラーメンすうじく美味しこうじやうのよ」

「いや、でもラーメンなんて何時でも食べれるわよ。」

「じゃあ、ミサト、シズクの料理以上の店にでも連れてってくれる

わけ? 「

「うぐい」

シズクの料理以上、となると間違いなくそれは5つ星がつく超級レストランになるだろう。

はつきつ言いついサリテ「そんな金は無かつた。

「……私、にんにくラーメンチャーシュー抜き」

「私はふかひれチャーシュー! 大盛りでね! 、シンジとシズクはどうする?」

「あ、僕は普通の醤油ラーメンで」

「何よ、ミサトの奢りなんだから遠慮すること無いわよ、シンジ

「す、好きなんだから仕方ないだら、醤油ラーメン」

「ま、いいわ、シズクは?」

「あ~、僕も醤油ラーメンでいいかな、あ、ネギ大盛りで」

「へい、まずはふかひれチャーシュー、お待ちね!」

アスカの前に豪勢なふかひれが器に乗ったラーメンがやってくる。

「どれどれ」

豪快に音を鳴らし、ラーメンを啜るアスカ。

「うん！確かに美味しいじゃない！良くこんな店知つてたわね、レイ

イ

「…………ええ」

レイも次に出でてきたにんにラーメンを音を立てずに入食ながら  
そう言った。

「……ハサトさん」

「うん？」

「今日、父さん…褒めてくれましたよね」

「そうね」

「今まで、シズクに会つてから、  
結構色んな人に褒められたけど今日のが一番嬉しかったです

「あんたバカア？」

アスカが横に割つて入る。

「な、なんだよ、僕、何か間違つたこと言つた！？」

「違つわよ、逆よ逆」

「…逆?」

「身體に褒められるのが嬉しいの決まつてゐるじゃない、あなたそんなことに今まで気付かなかつたわけ?」

「…うん、そう…だね、氣付かなかつた、確かにアスカの言つ通つだ」

「これから、もっと褒められるよつとすればいいのよ、簡単なことじやないの」

「そう、だね、うん、そうだ」

「もちろん、だからと言つて手を抜いたりはしないわよ、私だつて見てもらう人がいるんだから」

「え…?」

「いいの、どうせ言つたつて信じるわけないし、私だけが納得してればそれで」

二人の会話を聞いてシズクとレイは顔を見合させる。

そしてくすくすと笑い出した。

「何よ、一人して、私、何か面白っこと言つた?」

「ううん、違うよ、ただ良かつたなつて」

「……信じられたのね、式号機のこと」  
レイの言葉にアスカがラーメンを啜るのを止めて、少し沈黙した。  
後に微笑を漏らした。

「… わあ、どうかしら、私、捻くれ者だもの」  
そう言つと五人は楽しい夕食を終えた。

## 第一回 シズクを女らしげじょつの金

とんとんとん。

日曜。朝の葛城邸。

シズクは何時も通りに半袖ジーパンといつ格好で包丁を握り、器用にネギを刻んでいた。

「ふあ～あ…おはよ～、シズクウ…」

アスカが欠伸をしながら椅子へと腰掛ける。

「あ、おはよう、アスカ、今、朝ご飯できるか？」

「シンジたちは？」

「シンジくんなら顔洗つてるよ、レイはもうすぐ来るんじゃないかな？」

ミサトさんはまだ寝てる

「相変わらずの寝ぼすけなのね」

アスカは肩肘をテーブルに乗せて顎へと手をやるとほんやりとシズクを眺めた。

「…シズクウ」

「何？」

振り向かず包丁を動かしながらアスカの声に反応するシズク。

「あんたさあ、何でいつもそんな男っぽい服着てるわけ？」

「…はつ？」

予想だにしなかつた質問を受けて思わず手が止まってしまう。

「べ、別に何を着ようと僕の勝手だろ？」

「あんた、いい線行ってるんだから、勿体無いわよ」

「そ、そんな」と言つたつて…

「さうだー今日付き合になさこよ、買い物行くわよーーー！」

「え？」

「……贊成

と、どこから入ってきたのかいつの間にかアスカの側に立つていたレイがぽつりと呟いた。

「うわあー？ レイー何時からいたのー？」

「し、心臓に悪い登場の仕方、やめてくんないーーー！」

二人は胸を押さえながらレイに向かつてそう言つた。

「…………早べり」飯食べて、行きまじゅう

「…ホントに行くの？」

「…………ええ」

わうはいといしはシズクの耳元まで口を這ひ、

「あなたは女であることにきつ少し自覚を持ったまづがいい

と言ひてのけた。

ちなみにレイも最近はお洒落をするよくなつてきている。

もつかお氣に入りはネコの小物と淡い青のワンピースの収集である。

アスカにいたつてはもつと派手だ。

ネルフの給料をほとんど洋服やアクセサリーに使はんでこるのはなかろうか。

「うー…わかつたよ、行けばいいんだろ、行けば

「よひしー、じゃ、わつと朝食にしてしましょ」

そうアスカが言つた所でシンジが洗面所の方から出ってきた。

「何?どつか行くの、みんなして?」

「女同士の話よ、シンジには関係ないでしょ」

「な、なんだよその言い方、酷いなあ」

「アスカとレイが服買いに行ひつて…」

ははつと笑いながらシズクが言つた。

「服か…いいんじやない?三人で行つて来なよ」

「言われなくつたつてそうするわよ」

そうアスカが言つたときガラツとリビングの扉が開いた。

「ふつふつふ…聞かせてもらつたわ、今の話」

「ミサト…寝癖、直したら?」

アスカに指摘されて、ミサトは手櫛でぱぱりと頭に手をやると一ほん、と一つ咳払いをした。

「その作戦、私たちネルフサイドも参加しようじやない!」

「ミサトはあ…?」「」

突然意味不明なことを言ひ出すミサトに呆れ顔で答える。

昨日のお酒がまだ残つてるのかもしれない。

シズクがそんな失礼なことを考へていると、ミサトは携帯を取り

出して電話を掛ける。

「あ、リック？今日暇？え、ダメ？何よ、けち」

ブツツと電話を切つて次のところへ電話。

「あ、マヤちゃん、今日暇よね？え、仕事？口向君にでも押し付けなさい、大至急頼みないことあるの、ええ、30分後、家に来て頂戴、お願ひね」

そう言つてピッシュと携帯の電源を切るミサト。

そしてシズクの姿をまじまじと見つめる。

「いや～、前からシズクにその服は似合わないと思つてたのよ」

「でしょ～どんなのが似合つかしい」

「…………少し思い切つたのとか」

女三人寄れば姦しい。

ミサトとアスカとレイの会話を聞いてシズクは頭が痛くなつてき  
た。

30分後、玄関のチャイムが鳴る。

「……大至急頼みないことつて……これですか…？」

「マヤは急いで来たのが馬鹿らしくなつて大きくなつため息をついた。

「ナリよ、それにマヤがやんこもむかさんと恩恵あるわよ」

「恩恵？」

「シズクが一番いいと思つた服を選んだ人は、なんとい日朝、晩、シズクが手料理を振舞つてくれるわ！」

次の瞬間、がしつとマサトの両手をマヤの両手が包み込んだ。

「やりますー。」

キラキラと皿を輝かせて、もつ氣分はちつ星レストランの展望台に立てる気分のマヤ。

それってマヤさん以外は全員毎口やつてもうりつてゐようつな……

シンジは單刀直入に突つ込んでいいのかわからず、苦笑いしながら女の戦いを見守つていた。

- 第3新東京市・ショッピングモール、ブランド品売り場 -

ネルフの職員ともなると高給取りである。

ブランド品の値段などいろいろのセール品と変わらない感覚で貰え

てしまつ。

と、いうわけでシズクを引き連れた  
アスカとレイ、ミサト、マヤゴ一行はブランド品売り場へとやつ  
てきた。

「勝負は3時間、それまでにシズクにこれだーって言わせた人間の  
勝利よ、いいわね？」

アスカがひそひそと話す。

「…………了解」

「OK!」

「わかりました」

三者三様の答えを出して四人はそれぞれ四方へと散つた。

ぽつんと残されたシズクは仕方ないので大人しめのワンピースあ  
たりを見て回る。

「シーザークッ！」

一番手に名乗りを上げたのはミサトだ。

「どう、これ！？」

シズクに突きつけられたのは何ともサトウのことをつかまつ、  
アダルティな感じが  
ふんふん匂つてくる衣装だった。

「中学生にこの服は似合いませんよ…」

はあ、と溜め息をついてシズクはマスクを出す。

「次々、私ね！」

一番手、アスカが登場。

「れまた、中学生にしては飛びゅぎでくる、といつかなんといつか。

「一人とも…真面目に選んでくれてる？」

流石に突っ込んだ。

「露出が高いく…」

「！なんで高ことか言つてるよひじやダメよ」

「ねー」

アスカとミサトは一人できやこきやこ笑い合しながらもつ話つた。

「ほり、試着、試着」

どんどんとシズクの背中を押して試着ルームへと誘つアスカ。

「もう、強引なんだから…」

ぶつぶつ言いながらシズクは試着ルームに入った。

「じゃなの…似合つわけないじやないか…」

露出狂のサンタにでもなるのかといつその赤い衣装をとりあえずは着てみるシズク。

文句を言しながらも着てしまつのはシズクだからといつたといつだらう。

「出来たー？」

「うん」

シャツと仕切つていたカーテンが開けられる。

「へえ、やっぱ似合ひじゃない」

「やうかな…派手すぎるよつな飯がするけど…」

「キヤーー。」

そのシズクの姿を見て叫んだ者がいた。

マヤだ。

「な、なんて格好させてるのー・アスカーー！」

顔を真っ赤にしてマヤは試着ルームのカーテンを閉めた。

「直ぐに脱ぎなさい、シズクちゃん！」

「は、はい」

余りの勢いにちょっとたじろぎながらシズクは返事した。

「やつぱり私が来て正解だつたわ、あんな格好、不潔よ」

マヤは一人うんうんと頷きながら手に持つてゐる服をカーテンの奥にこむシズクに渡す。

「脱いだらこれに着替えてね」

「……はい……って、えええええーーー？」

マヤから受け取った衣装を見てシズクは驚愕した。

正直、こんな服着て歩いている人見たことが無い。

何と言えばいいのだろう、

まるで漫画やゲームに出でてくるキャラクターのフリフリとした服がそこにあった。

嫌な予感しかしないが一応試着するシズク。

どこまで行つても律儀である。

「あ、あのあ……着ましたけど……」

「どれどれ？」

シャツとカーテンを開けるマヤ。

「キャーーーせっぱじゅ思つてた通り似合つわー・シズクちゃんー。」

「あの……マ、マヤさん、本當にこれ着て、表出るんですか?」

「えー、何か変かしら」

「変に決まつてゐじやないこの…ビーンのラップフレヨ、この服は…」

「えー、可愛この」

「……次

四人の後ろにまたもいつの間にかレイが立つていて両手に抱えきれないほどの服を持っていた。

「レイ…それ、全部着るの?」

「…………ええ

「はあ、わかつたよ」

そう言つとシズクは服を受け取つて三度、カーテンを閉める。

レイの選んだのはどちらかと言つと機能美が優先されたデザインのもの多かった。

色は淡いものが多い。

自分に重ねるのだろうか、心なしかワンピースが多めだった。

その中で少し、シズクの目に留まったのが大人しめの淡いピンクの水玉の  
シフォンワンピース。

胸元にリボンは付いていたがそれ以外にはそんなに装飾品は付いてなく、  
着心地も悪くない。

うん、これで…いいかな。

シャツとカーテンが開いた。

「」「これにするよ、レイの選んでくれたこの服に」

「えー……」

一番がつかりしたのは当然マヤだ。

シズクの作ったあの料理もこの料理も泡となつて消えたのだ。

膝からがつくりと崩れ落とよよと泣いてい。

「マヤさんも選んでくれてありがとうござります、お礼と言つてはなんですけど今晚、家でご飯食べませんか？」

そのシズクの言葉にがばつと涙を重力に引かれさせながらマヤが起き上がつた。

「い、いこのー？」

「ええ、ミサトさんが強引に付き合わせたんですからそれくらいしたこと悪いですしお」

マヤは一人夢の世界へとトロッパしていく。

ああ、神様ありがとうー

前に食べたシズクちゃんの料理の味が忘れられなくて、自分でも散々勉強してみたけど、どうしても美味しいかなくて半ば諦めかけてたあの味にもつ一度ありつけるなんて……！

マヤは一人夢の世界へとトロッパしていた。

「んじゃ、会計済ませて帰りましょうか」

アスカがそつとレイの持つてた服を全部カゴの中にぶちまけた。

「ちょ、アスカ、それ全部買ひとは…」

「何言つてんの、あんた、マトモな服ほとんど持つてないんだから、このくらいパーツと買つたほうがいいのー。」

そうアスカはシズクからカードをふんだぐる。

「これ、お願いしまーす」

「せ、全部でいざりますか?」

店員の顔が若干引きつっているのがわかつた。

普通の中学生に買える金額ではない。

当然の反応だろ?

「そ、全部よ、こへり」

「は、はい、少々お待ちください…」

そうと高速でレジを打つ店員。

その死闘は20分に及んだ。

「合計で42万6570円になります」

「カードで、お願ひね

「費まりました」

「シズク、暗証番号」

「ちょっと、待つてよ、約43万だよー?」

「いいじゃない、あんた、今いくら残ってるのよ?」

「うう…5~600万、だと思つけど…」

「何の問題もないじゃない」

結局、アスカに強引に丸め込まれてシズクは泣く泣く暗証番号を押した。

こうして第一回「シズクを女らしくしようの会」はレイの勝利で幕を閉じた。

しかしシズクは知らない。

この直ぐ後に第二回「シズクに女らしい小物を集めさせようの会」がレイから提案されるのを…。

そして、小物なのに何故か20万を越す出費を捻出される…ことを…。

といあえず、シズクの今考へてこることだ。  
「の服、どこで舞おつか…であった。

第一回シズクを女らしへしゆつの念（後書き）

完全なお遊び回です^ ^ ;

## 加持、動く（前書き）

ここもレビューにあつたパクリに近い内容になつてます。  
人と違う文章を書きたいorz

## 加持、動く

「あれ? シズク、出かけるの?」

アスカたちに半ば強引に買わされた洋服を身に纏つてシズクが出かける準備をしていた。

「うん、ちよっと本部に用事があつて」

「ふうん…あんた、まだ一人で何でも解決しようと思つてゐるんじゃないでしょ? うね」

アスカがテレビ画面を見て横になつたままぼつと呟いた。

「…違つよ、みんな信用してゐる、大丈夫だから」

「なら…いいんだけど」

「じゃあ、行つてくれるから」

そう言つてシズクはドアを開けた。

空は快晴。

今日も30度を越す真夏日。

歩いてこるだけで汗が滲み出る。

女の子の服つて通気性いいんだな…

そんな呑気なことを考えながらシズクは道を歩いていた。

- ネルフ本部・加持の部屋 -

こんじん。

控えめにノックの音がした。

「開いてるよ」

加持はそう言つたが反応が無い。

葛城ならノックしないだらうし、ロツちゃんなら今ので入っていくはずだ。

…誰だ？

加持はそう思つて扉を開けた。

立つていたのはシズクだった。

「やあ、シズクちゃん、今日は随分と可愛い格好をしているね

取り立てて驚いた素振りを見せる」となく加持はやつぱつと。

「加持さん……お話があつます」

「なんだい？」

「その……」「いやでも、ちよつと……」

「……」

加持は自分の机に向かつと上着を取つて再びシズクの方へと向かつた。

「よし、じゃあドートでも行こつか、お姫様」

「……すこません」

「別に謝る」とじやあない

なんか……加持さんの前だと「シンジ」に戻っちゃうな

謝つてばかりの自分。

レイと同じ素直になれる存在、お兄さんの存在。

それがシズクにとっての加持だった。

一人は加持の車に乗って海辺を走っていた。

「…で話つてのはなんだい？」

「…あの、盗聴とか…大丈夫、ですかね」

「ああ、それなら問題ない、その類のものは事前に全て外してあるし、追つ手も撒いたからな」

やつぱりこの人凄いんだな…

シズクは呆けて加持の顔を見る。

「なんだい？ 恍れ直したかな？」

「ち、違いますよ…大体、加持さんにはミサトさんがいるじゃないですか！」

「はははっ」

そして沈黙。

車の走る音だけが車内に聞こえた。

「加持さんは…………S2機関つて、知つてますか？」

「…タバコ、吸つていいかな？」

「あ、はい、どうぞ」

加持は軽く窓を開けるとタバコに火をつける。

「ソレノイド・パワー・ジェネレーター、  
葛城博士が提唱したスーパー・ソレノイド理論に法づて開発が進め  
られている機関だな」

「かつ、アリ...博士？」

「そう、葛城の父親だ」

シズクは驚きに田を見開いた。

同時に加持はそんなシズクを見てちょっとだけ安心をした。

「君でも知らないこともあるんだな」

「...知らないことだらけですよ、僕なんて」

「で、S2機関がどうかしたのかい？」

「近々、アメリカの第一支部でS2機関を使用した実験があるのは  
知っていますか？」

「ああ、何でも向こうのお偉いさんが駄々を捏ねたらしい、まあ良  
くある権力争いつてやつさ」

「...加持さん」

「なんだい？」

「…S2機関は、危険です…」

シズクはきゅっと手を握つて自分の膝元に当てた。

「こんな、断片的な情報しか提供できなくて…すいません、  
ただ、この実験は放つて置くと何千人という死人が出かねない、  
そんな実験です」

「…そうかい、いや、シズクちゃんが謝る必要なんて無いさ」

そう言いながら加持の頭の中では今後のスケジュールが綿密に書き込まれていった。

アメリカ、か…

「」の子の言つとおり確かにS2機関の実験の噂は聞いた。

確実な安全性を売りにしていたのも聞いている。

だが…と加持は思つ。

シズクが意味もなくこんなことを言つとは思えない。

加持は自然と笑みが浮き出ていた。

碇ゲンドウやゼーレの面々と初めてやり取りしたときの高揚感。

シズクに出会つてからトンと消えていたそれが再び浮上してきたからだ。

「シズクちゃん、もうトートはいいかな？」

「あ、はい、すみません、お手数取らせてしまって」

「いや、礼を言つのはじつちの方を」

「は？」

「何でもない、じつちの話だ」

そう言つと加持は車のハンドルを切つた。

-夜・葛城邸-

「ただいま

「…………おかえりなさい」

「あれ?レイ一人?」

「ええ」

「みんなは?」

「近くに出来たスーパー銭湯に行くって、私は留守番

「そっか、気を使って残ってくれたんだ、ありがとう」

「……………」

レイはシズクの手を取る。

と、そこで手が止まった。

「どうしたの？」

「…………タバコの匂いがする」

「あ、加持さん……かな」

「…………加持さんのところに行っていたのか？」

「うん、ちよっと、ね」

レイの瞳が真面目なものへと変わる。

「……未来のこと？」

「……うん」

「教えて」

レイの瞳に自分の皿を見据えてシズクはゆっくりと頷いた。

それからゆっくりと一瞬に説明する。

アメリカでのS2機関起動実験。

そして……第13使徒、バルディエルについて……だ。

第12使徒レリエルのことも話しておきたかったが  
対処方法が見つからない現在は保留しておいた。

「……3号機が、乗っ取られる……？」

「うん」

「パイロットは……？」

「乗つたまま、だよ」

レイの瞳が凍りついた。

3号機のパイロット、つまりシズクだ。

シズクが乗つたエヴァが、敵になる……？

「レイ」

「…………あ、ええ」

困惑の表情を隠せないままレイはあやふやな返事をシズクに返した。

「前回はトウジがパイロットだった、僕はそのことを知らされていなかった。

でも人が乗ってるものと戦うなんて嫌だから拒否したんだ、そしたら…」

シズクの脳裏にあの時の映像が鮮明に蘇る。

「父さん… 司令はダミーを発動した

「…」

「ダミーは…強かった、完膚なきまでに3号機を叩き潰したよ、最後にはエントリー・プラグを握りつぶし…た」

「…鈴原くん…は…？」

「片足が無くなっていたよ」

「…………」

シズクも…シズクもそつなるの…？

レイは立ち去っていた。

そんなレイを見てシズクは優しく微笑んだ。

「大丈夫、今はあの時と随分状況が違う、レイもアスカもシンジくんも強くなってる。

何よりレイはダミーの実験に参加していない、三人で力を合わせればきっと勝てるよ」

レイはその言葉に黙つて頷いた。

「……シズクは傷つけさせない、絶対に」

「ん、ありがとう」

「さあ、そろそろ『飯の用意』しようか、みんなもそろそろ帰つてくれるでしょう」

「……ええ、私も手伝うわ」

そう言つて一人は台所へと向かつた。

-翌日・ネルフ本部 -

シンクロテスト中。

四人の数値は今日も順調である。

アスカとシンジ、シズクがほぼ横ばいで95~6%前後。

追つてレイが78~82%を行つたり来たりしている。

「非常にいい傾向だわね」

ミサトが嬉しそうに呟いた。

「やつね、ここ最近の四人の成長には田を見張るものがあるわ」

リックもローハーを一口啜つてそう答えた。

「それにしても、前回のシズクちゃんのシンクロ率はマグレだったんですかね？」

マヤがコンソールをなぞりながら呟つた。

「多分、本物よ」

リックは端的に言つた。

あの子はシンクロ率をコントロールしてゐる、そんな節がある。

何者なのだらう。

ゼーレの人間は何も言つてこない。

かといってそれ以外の組織にあれだけの「物」は作れない。

だとしたら、一体彼女は何者…？

無駄だとは思つけれど、もう一度MAGIで演算させてみようか  
しぃ。

そう、リックが思つたときたった。

急に警報がなったのは。

「ビ…ビウしたの…？」

「M…MAGIがハッキングを受けています…」

「なんですか…？」

「とんでもないスピードです！既にメルキオールが乗っ取られた模様…！」

「相手の特定、急いで…リツコー…！」

「分かってるわ、マヤ、パターンAの防御プロテクトを開発、急いで」

「は、はい」

「ピピッ」という音と共にMAGIに記されたハッキング状況の進行速度が鈍った。

「特定元…判明、本部内、サブコンピュータです…」

シゲルが叫ぶ。

「本部内…？誰がやつてるの…？」

「人の反応はあつま…なつ…？」

シゲルの目が大きく開かれた。

「パターン…青…？」

「なんですかー！？」

「パルタザールに進入！M A G Iが本部の自爆を提案、賛成1、反対2で否決です！」

「自己進化して防御プロテクトを突破したのね…」このままじゃ時間の問題だわ…」

「いけない！直ぐにエントリープラグを打ち出して…」

「は、はい」

言われるがままにマヤがコンソールを叩く。

バシュッという音が四回なり、エントリープラグは人造湖へと打ち出された。

-ネルフ本部・作戦司令室 -

「対処方法は…？」

ゲンドウは地面に映し出される現状況を問いただした。

「現在、パルタザールの三分の一が乗っ取られた状況です」

「恐らく使徒の目的は本部の無力化」

「パルタザールが占拠されれば自爆が可決…か」

「一つ、方法があります」

「言つてみよ

「使徒は自己進化を繰り返してMAGIC内部へと侵入しています、だから進化促進プログラムを投与して進化を逆に促進させます」

「…進化の終局か」

「はい、恐らく最終まで進化を遂げれば、自壊する…と」

「間に合つかね?」

「間に合せます」

「赤城博士」

「はい」

「頼んだ」

「わかりました」

- MAGIメインコンピュータ内部 -

「ふわあ…凄いですねえ、MAGIに関する裏コードがびっしり

「母さんね…これで思つたより早く終わりそうだわ」

そう言つてロシコはMAGIの「ネクタにキーボードを繋げて手で弾き出した。

「流石先輩…片手なのに凄いスピードです」

「その内、マヤもいづなるわよ

「や、そんな私なんてどうも…」

ぶんぶんと首を振つてマヤは全力で否定した。

- 同時刻・某所・和食レストラン -

「よーー。」

加持が近づいてきたカップルに軽く手を上げる。

「加持…こきなり呼び出してなんだ?」

「私たち、この稼業からそろそろ足を洗うんだけど」

「ああ、結婚するんだってな、おめでと！」

長髪の男は加持の向かいの椅子に座る。

「……何のようだ？ ただお祝いするのに呼び出すお前じゃあるまい！」

ショートカットの女が男の隣に座る。

「そうよね、加持くんにそんな醉狂があるとは思えないわね」

「酷いな二人とも」

そう言つと加持はメモを一人に差し出した。

「何だこれ…？」

「一度だけ誰にも気付かれずに読んでくれ、読んだ後は完全に処分してくれ」

そこには加持の考察がこと細かに書かれていた。

ゼーレによる人類補完委員会の全体像。

碇グンドウによるシナリオの補完。

「これは… 真実か？ 加持」

「顔が笑つてゐるぜ、比井」

「ヤリと笑みを零したまま比井タケルはメモを燃やした。

「最近、連絡よこさないから何やつてるのかと思えば……こんな危ない橋渡つてたなんてね」

そう言ひ木佐木ナオもメモを燃やす。

「……」の結論に達するのに数年を費やした……がそれだけの価値はあると思つている

そこで加持は店員に注文をとつた。

「だが……若干14歳の少女が何の後ろ盾もなしに俺と同じ……いや、それ以上の情報を得ていてるとしたら……どうする？」

タケルとナオはお互い顔を見合させる。

「それは非常に興味深い話だが……在り得ないだろ」

「俺が取引で嘘つくほど詰問して見られるか？」

「……残念だけど見えないわね」

「その少女が言つには、だ……数週間後に行われる  
アメリカ第一支部で行われるS2の実験があるな？」

「ああ……実験的にS2機関を搭載してやるって例のあれだろ？」

「そこでどうやら事故が起きる、らしい。死人も出る……と言つていたな」

「それを信じているのか？」

「わからん……だが、嘘をついている田では無かつた」

「あらあら、随分買つてるのね、その子のこと」

「俺の人の見る田は確かにつもりだ」

「あら、じゃあそのお眼鏡に適つたのかしら？ 私たちは

くすぐすと笑みを零すナオ。

「そういうことだ、この業界、何人も知り合ひはいるが  
俺が真に信用を置けるのはお前達二人だけだよ」

「……そこまで言つて断つたら俺の立つ瀬がないじゃないか」

そうタケルが言つと。

「それが狙いだからな」

と加持が言つてニヤリと笑つた。

「……で、何をすればいいわけ？」

「アメリカに飛んでちょっと情報操作の方を、な」

「被害を必要最小限に食い止めればいいんだな?」

「話が早くて助かる、彼女は実質被害を〇〇したいんだろうが、それは流石に無理があるからな」

「…わかった、早速取り掛かろう」

「慌てるなよ、まだ料理が出てきてない」

「そう言つてタケルが席を立とつとする。」

「慌てるなよ、まだ料理が出てきてない」

「そう言つて加持はタケルを制止した。

ナオがタケルの腕を引つ張る。

タケルはぱりぱりと頭をかくと

「わかったよ」

と言つて再び椅子へと座つた。

「間に合つたのー!?

- MAGI・メインコンペター内 -

「大丈夫、0・1秒も余裕があるわ」

「0・1秒って…！」

「マヤ、準備は？」

「OKです」

「いくわよ」

リツコの顔面でマヤとリツコが同時にエンターキーを押す。

瞬間、十分の九くらこまで埋まっていたハッキング状況が見る見るつりに治つていった。

「MAGI、回復しました」

「再ハッキングの兆候も見られません」

「お疲れ様、リツコ」

さう言うとミサトはリツコにコーヒーを手渡す。

「ありがとうございます」

リツコは「コーヒーを受け取って一口啜つた。

「これ…サトが？」

「ええ」

「カトのコーヒーが美味しい感じなんて、ね。

## -人造湖・四つのエントリー プラグ-

「モルヒーネの魔術」

アスカの絶叫が高々とこだました。

## 母親たち

・シンクロテスト・プラグ内部  
アスカは静かに目を閉じていた。

意識をプラグの底へと集中させる。

そこに確かに感じられる「母」の意識。

今やこれを感じたいがためにアスカはシンクロテストを受けていた。

『アスカー』

と、心地よい流れを遮つて入るミサトの通信。

少し不機嫌になりながらアスカは通信に答えた。

「何よ、ミサト？」

『シンクロ率98%突破、おめでとう。』

98...?

「ほ、本当ー?」

『嘘つこていいやるのよ』

やつた…やつぱりだ！

やつぱりママと一緒にいると私の調子は鰻上りなんだわ！

『それからシンちゃんとシズクも98%ね』

「やるわね、二人とも」

『アスカこそ』

『はは…マグレマグレ…』

『…………私は？』

『レイも新記録よー、82・2%！』

『…………そう、ですか』

何やら残念そうな声が響いた。

「何落ち込んでんのよ、大丈夫よ、その内私たちに追いつくって

シズクはこのアスカの言葉を聞いて、  
ああ、アスカは本当にもう大丈夫だ、と心の底から思った。

もうアスカはエヴァで一番になることに執着していない。

当面の問題は次の使徒…レリエル、そして、バルディエルだ。

アメリカの方は加持に話しておいたからきっと何とかなる…

シズクはレリエルについて考えはじめた。

第1-2使徒レリエル。

ゼブラ模様の丸っこい形をした使徒。

だがそれは本体ではなく、地面にある影が本体。

球体の方に攻撃をしたら影に取り込まれて何やらこととは別の次元へと行ってしまう…

さて、どうやって迎撃したものか…

シズクが顎に手をやり考えていると警報が鳴り響いた。

「状況は？」

「パターンオレンジ… MAGIは判断を掴みかねてるようですね」

ミサトの問いに日向が答えた。

「とりあえず、Hヴァア各機の出撃用意を」

「はい」

『サテの合図と共に一斉に出撃するHヴァア。

アスカが一番に地上へと出ると近くの兵装ビルからライフルを取つた。

「ふん、どんな奴が来ようと今の私が負けるもんですか！」

遅れて三機が地上へと出る。

『アスカっ！？迂闊だ！』

シズクが叫んだとき、既に武島機はライフルの引き金を絞つていた。

そしてライフルの弾はシズクの予想通り、レリエルの球体をすり抜けていく。

『パターン変化！ 青です！！』

発令所からの通信が四人に聞こえた。

「何よ？ 今の一？」

『アスカつー下だーー。』

「トツー?」

まつとなり見下ろすと黒い影がボン機の下を包んだ。

「な……なによ、これダーハー。」

ずぶつと埋まつてこくボン機。

「ちよひ……離しなむよー。」

影に向かつてライフルを乱射するボン機。

だが銃弾は跡形も無く、影に吸い込まれていぐ。

ガシッとボン機の右腕が持ち上げられた。

『アスカつーー。』

初号機が沈んでいくビルを足場にしてボン機の右腕を掴んだのだ。

「シンジつーー。」

『…………私たちもー。』

そう言つてボン機に近づけりとした零号機を3号機が止めに入つた。

『……シズク! 何故、止めるのー?』

『あいつは……あの使徒は普通のやり方じゃ倒せないんだ……  
あの一人に、懸けるしかないんだよ……』

シズクは、ぎりっと唇を噛んだ。

じわりと血の味が口内に広がる。

不甲斐ない……情報はあるのに普通にやつて倒せる自信がない自分に憤りを感じた。

「シンジ……もひ離しない、あなたまで巻き込まれるわ……」

『嫌だつ……』

「…………あなた」

とふうとこいつ音がして弐号機と初号機は影の中へと消えた。

『一田、帰還して、対策を練るわ』

『サートからの通信』

「了解」

『…………』

帰還したシズクとレイを待っていた報告は  
シズクにとっては予想通りのレイにとつてはかなり衝撃の。

「虚数空間…ですか」

「ええ、ディラックの海、とも言つわね」

リツ「がシズクを見下ろしながらそう言った。

「あの使徒の本体は恐らくあの影、ね…使徒のA・T・フィールド  
が内部に形成されていて  
それによって支えられている厚さ約3ナノメートルの実体がある  
使徒の正体」

「…………一人を助ける方法は？」

「一つだけ無い、二とも無いわ」

そう言つとリツは再びシズクを見る。

「あなたはどう思つかしら？ シズクちゃん」

「え…？ 僕…ですか？」

シズクはリツの問いに少し頭を捻る。

どう思つたって…前回取り込まれて僕このときの作戦知らな  
いんだよな…

「あの、 じつこいつのせじりでひょいり…？」

「言ひて見なせー」

「僕とレイもあの、 ディラックの海でしたつけ、  
あの中に入るんです、 そして四機の力で内側から使徒を殲滅」

「現実的じやないわね」

「はあ…」

「それとも、 何か必ずそうなると言ひた根拠でもあるのかしら?」

「い、 いえ、 せうじやないですけど…」

何かリシコせん、 やけに突つかかるな…

シズクは目を瞑わせびらくなつて視線を伏せる。

すつとシズクの前にレイが立つた。

それを見てリシコは小さく溜め息をつくと、 シズクから視線を外した。

「で、 シンジくんとアスカが持つ時間は?」

ミサトの問い。

「さうね、 生命維持を最優先にしていればあと一六時間は持つはず

「よ

「それまでに何とかして一人を助け出す」とを考えなことアウト…  
か

### ・デイラックの海 -

「一体のエヴァが並んで浮かんでいた。

生命維持モードに切り替えてお互いをモニター出来ないので  
手を握って直接通信で話をしている。

「シンジ…何で手を離さなかつたのよ

『別に…そんなの当たり前だろ?』

「当たり前って…それであんたまで取り込まれりやつてんのよー。」

『大声出すなよ、酸素消費するよ』

「うう…とにかく、軽率な行動だわ」

『アスカ、仲間を助ける行動ってそんなに駄目かなあ……？』

「……」

アスカはパシッと両手を打ちつけた。

違う、シンジが軽率なんじゃない。

私が軽率だつたんだ。

「……めん、シンジ、謝るわ」

『……いいよ、別に……ただ、生命維持モードに  
移行しても後16時間以内に助けが来なかつたら……』

「アウト、ね。二人ともこの変な空間でお陀仏よ」

それから長い沈黙が続いた。

「……シンジ、生きている？」

『……うん』

「私さあ、今までエヴァが一番だつて言つてたじゃない？」

『うん』

「あれさあ……間違いだつたわ、エヴァに乗るのは確かに大事よ。ママがいるもの、ただそれよりも大事なものもあるつてこと……最近気付いたんだ……」

『ママ……？』

「気付いてないの？よくエヴァの内部を探つてみなさい。式号機の中には私のママがいるのよ」

『へえ……』

シンジは田を瞑る。

『…………ははっ、ひだだ、何も感じられないや』

「いいわよ、別に、この状況でそんなの感じなくとも……」

アスカは操縦席に横たわつたままふうと溜め息をついた。

「で、それからの話の続きだけど」

『あ、うん、エヴァより大事なものだっけ』

「やうやく、それってさ、結局のところあんたたちだったわけなの  
よ」

『僕たち…?』

「あんた風に言つなら仲間つてやつ?  
まさか私が仲間意識に田覚めるなんて夢にも思わなかつたわ」

『……』

シンジは黙つていた。

アスカも今の状況がわかつている。

もしかしたらこれが最後の会話になるかもしれない。

だからこそ…告白。

「レイもシズクもミサトも加持さんもリツコも  
学校の友達もネルフのみんなもみんな、大事な仲間」

『……アスカ』

「もちろん、あんたもね」

生命維持モードでモニターは表示されないが  
確かにシンジには笑みを零しているアスカが見えた。

『僕も…みんな大切だよ…もちろん、アスカも…』

「それはどうも…」

再び少し沈黙。

沈黙はまたアスカが破つた。

「シンジ…シズクの」と、ビタ思ひしるの?』

『……え? ビタ? へ?』

「鈍いわねえ…好きなのかついとよ」

『え、え? す、好きついでいや、そりや、好きだけど、やつじやなくつて…』

『……』

「…なによ、ハッキリしなやこよ」

『…うん、憧れ…かな、シズクは』

「憧れ…?」

『うん、あんな風になりたい、目標とかそういうのに近いと思つ。確かに好きだけどそれはそういう意味であつて恋愛とかそういうのとはちよつと違うかな…』

通信越しにアスカの溜め息が聞こえた。

「やうやうか…」

『アスカじゃ…“やうなのや?』

「へ? わ、私?」

『うん…僕のことばかり聞いてズルイよ』

「わ、私は今まで十分…これ以上何か望むのはちょっと贅沢よ…」

『加持さんは…?』

「加持さんは…そうね、あなたにとつてのシズクみたいな存在だったのよ、

大人の男に憧れてただけ、別に恋愛感情なんて今は無いわよ」

『……………なんだ』

「……………やうなのよ」

少しづつ息が苦しくなつてるのをアスカは感じた。

「はあ…やうやうかばくなつてきたわね」

『……………シズクや綾波はどうしてるかなあ…?』

「なんとかしてくれんでしょ…とは言え…ちょっとやっぱいわよね…」

『……死んじゃうのかな……僕たち』

「……何、弱気になつてんのよ」

『……「め……ん?』

「どうしたの?』

『……いや、今、なんか変な感じが……』

変な感じ……?

ドクン。

「……なに?これ……?』

『アスカも感じた?』

「ええ……でもこの感じ、不快では無いわね、むしろちょっとと安心で  
あるつていうか……」

『あ、それは分かる、包まれてゐるって言つたわ』

「……ママ、それよ、何か包み込んでくれて私を守つてくれるような…

……ママ…?』

『えつ…?』

「ママー、ママよ…!』

式号機の体が動き出す。

四つの目は光に包まれ顎が外れ、大きく咆哮を上げた。

『これが…アスカの…母さん…?』

ドクン。

続けて、初号機に変化が起きる。

シンジが見たのはシズクに良く似た大人の女性の姿。

かあ…さん…?

シンジ

「母さん!」

ワタシガママツテアゲルワ…

初号機の目が光る。

顎が外れて生命維持モードが強制的に解除される。

生命維持モードが解除されたのに関わらず内部電源に切り替わらない。

これも母さんがやつてるの…？

初号機と二号機が同時に前方の空間に手を伸ばした。

- ネルフ作戦司令室 -

「リツ」「…あんた本気で言つてゐるー…？」

「やつよ、最優先されるべきは初号機と二号機の奪還」

「そのためにはシンジくんやアスカは犠牲になつてもいいっていふのー…？」

「もうは言つてないわ、あくまで優先事項の確認よ、生命維持モードで待機してるので

上手くいけばパイロットも助かるわ」

「あの子たちはつこでつてわけ……？」

「サートは勢い余つてリツコの胸倉を掴む。

「リツで討論している暇にも時間はどうぞん進むわよ」

「ぱつとサートはリツコを突き放してシズクとレイの元へと向かつた。

「…………つー」

「ズン爆雷で『ティラックの海』にじき開ける……？」

「アーフアーフ

「…………それで一人は助かるんですか？」

「残念だけど……可能性は、低いわ

「……やつましょく、やつて後悔するよつもやうないでする後悔の方  
が大きい」

シズクが立ち上がりつてそう言った。

「そう、ね……もし一人が出てきたときはシズクとレイ、サポート、  
よろしくね」

「…………わかりました」

配置についた零号機と3号機。

シズクは再び歯を嚙んだ。

こんなのは……作戦じゃない……

こんな強行作戦じゃ下手すれば一人の命が危ない。

…母さん。

シンジくんとアスカを守つてあげて……

そう、シズクが思つたときだった。

『シズク……』

「……？」

バ  
ギ  
ツ

バギギイイツーー

球体にヒビが入る。

「何だ…? ミサトさん! ?

『わからな  
いわ！』

レリエルの球体から血飛沫が舞つた。

夥しい量の血が第3新東京市を染める。

3号機と零号機は返り血を浴びながらその光景を見守っていた。

## やがて出てくる一本の腕。

それは、初号機と式号機の腕だった。

力任せにアライラックの海をこじ開けて外の世界へと戻つてくれる一  
体のエヴァ。

『…………シズク、これ、は…？』

「母さん…だ…守ってくれたんだ…シンジくんをそして、アスカの  
母さんもアスカを…」

その光景を田にしてリツコは震えていた。

「私たちは…なんでもものをヒューしたの…」

ミサトも同様にその光景から田が離せない。

「これが…エヴァの本性…？」

何故かしら…これで二人は助かったはずなのに…

あの一体のエヴァを見ていると私たちがどんなことをして  
いる気がしてくる…

ヲヲヲヲヲヲヲヲオヲヲヲヲヲヲオヲオオオオヲオオヲ  
！！！！  
ヲヲヲヲヲヲヲヲオヲヲヲヲヲヲオヲオオオオヲオオヲ  
！！！！

二体のエヴァの咆哮が重なり合い、レリエルは崩壊した。

## 墓参りとアスカのトーク

「ただいま」

「おかえりなやー」

帰ってきたアスカを出迎えたのはミサトだった。

「シンジたちは?」

「夕飯の買出し」

「あ、そ」

玄関に靴を放り投げてアスカはリビングへと上がる。

「あーあ、メンドクサイなあ……」

「なしたの?」

アスカは自分の部屋に行き、私服に着替ながら一の句を告げる。

「ヒカリから知り合ことトーントーしてつて頼まれたのよ、私そんな気ないのに」

「あー、いいじゃないトート」

「“ど”の馬の骨とも知らなこやつなんて願い下げよつー」

「あんた以外に男いないでしょっがつ

「え、僕が？」

「ちょっと明日、付き合こなさいよ

荷物をテーブルに置いたところでシンジがアスカの言葉に反応する。

「へ、何？」

「あ、そうだ、シンジー！」

続いて夕飯の買出しからシンジたちが帰ってきた。

「おかいりー」

「お帰りなさい」

「…………ただいま」

「ただいま」

「ただいまー」

「話が飲み込めないんだけど……」

「実はや」

アスカは明日ドーターることを告げる。

そのためにシンジに彼役を貰つてもう一休よくお断りしちゃうといつ算段だった。

「あ、でも僕明日は墓参つが……」

「墓参つ?」

「うそ、母さんの命日なんだ」

「やうやくあなたのママの

死んでたアスカは顎に手を当ててへんと念った。

「…………ドーターの時間は?..」

「くつ~ああ、午後1時だけど」

「…………碇くん、お墓に行く時間は?..」

「午前9時…だけど」

「…………午前8時40分、ここを出発、速やかにお参りを済ませたら帰宅、多分11時には帰つてこられるわ」

「綾波？」

「…………碇くんはアスカが他の人とデートするの、いいの？」

レイにそう問われてシンジはアスカが知らない男と一入きりで歩いていいる姿を想像した。

……？

何故だろう。

胸のあたりがちくりと刺されるような感覚があった。

何だ…、この感覚…。

「だつたら時間的には何の問題もないわけねつ、シンジ、明日お願  
いね！」

「あ、う、うん」

シンジは胸の棘のようなものを必死に振りほどきながらそう言葉を返した。

・田嶋

「こつてきめく」

「いっへりあけはしあひとお參りしたひ直べで歸つてゐるのよ。」

「わかつてゐ、じやあ行つてくわ」

「あ、待つた」

「何や?..」

「やつぱ、私も一緒に行くわ」

「へ?..」

やつぱとアスカは靴を履き始める。

「なんで」アスカが一緒に?..

「つるやこわねえ、すつまかされたら困るから、予防線を張つておいてくれ

「やだな」としなくておひやごと帰つてくわ?..」

「いこから、行くわよ」

「へ、うふ」

「うじてー一人は連れ立つてシンジの母親、碇ゴイの墓標を田指し

た。

「シンジのママってどんな人だったの？」

「…知らないんだ、顔も覚えてない」

「写真とかは？」

「さあ…父さんなら持ってるかも知れないけど、僕は一枚も見たこと無いなあ…」

「ふうん」

墓地へとつぐ。

ユイの墓前の前に一人の男性が立っているのが見えた。

「…父さん?」

「司令?」

「…シンジと惣流・アスカ・ラングレーか」

ゲンドウは顔だけをシンジたちの方に向けるとそう言つてまた墓

前を見た。

「…父…父…父…」

「コイは、私の心の中にいる、ソルジャーではない」

わうじやなくって…

Hガガの中にはあの母さんは…何者なの?

そう聞いたかったがシンジは言葉が出てこなかつた。

「しゃ…写真とかは残つてないの…?」

何とか搾り出した台詞がこれだ。

「全て処分した」

「アハ…」

「あの、司令」

「何だ」

「司令の奥様つて司令にとつて大事な人じゃないんですか?・写真も残さないなんて」

「コイは私にとつて唯一無二の存在だ、  
私の中にいるコイ、それで十分だ、写真など必要ない」

「 もうですか……」

何か……どうも隠してゐるっぽいのよね……

」のサングラス親父…

「 嘸りすぎたな……私はもう行く、シンジ」

バラバラといつ音を立ててネルフのヘリが降りてきた。

「 何?」

「 ……」

ヘリの轟音で何を言つてゐるのか聞こえない。

「 父ちゃん、今何てー?」

ゲンドウは振り返ることなくヘリに乗つてそのまま去つていった。

「 最後……何を言いたかったのかな……」

「 ああ……ね」

一人はゲンドウの去つた後を呆然と眺めていた。

「 なんか……どうも隠してゐるくさこわねえ……」

ぱつりとアスカが呟く。

「え…？隠してるって何を…？」

シンジが疑問に思つてアスカに問う。

「「」にあんたのママが眠つてゐわけないじゃん、エヴァの中にいるんだから、それを私たちには言わないと」とか、なあんかきな臭いつていふかぞ！」

「……」

「あ、「」めぐ、あんたの父親の「」と懸べぬつてもつじやないんだけど…」

シンジは小さく首を横に振る。

「いや、いいんだ、父さんは昔からああだから…自分の考えを人に言わないんだ」

シンジはヘリの飛んでいった方向を見上げ目を細めた。

「多分…ネルフの中でも父さんの「」と完全に分かつてゐる人なんていないんじゃないかな…」

アスカも同じ方向を見上げる。

「なんか…それはそれで寂しいわね」

シンジは地面に視線を落として、直ぐにアスカの方を向いた。

「あ、もう行け、待ち合わせに遅れちゃうよ」

「あ、ええ」

下りの電車に乗つてシンジたちは遊園地へと向かう。

「で、どんな人なの、今日の相手……？」

「知らないわよ、ヒカリに頼まれただけだもん、顔も知らない」

「ふうん……」

「まあ、あんたと付き合つてゐるフリしてひとつと諦めてもいいから少し我慢してよね」

「う、うん」

- P M 1 : 0 0 ・ 遊園地 -

「待ち合わせはま」の辺なんだけど……」

アスカがキョロキョロと辺りを見回す。

「惣流さん、こいつちつかー。」

威勢のいい声が聞こえてきた。

あいつか…

顔はまあまあね…まあ、断るんだからどうでもいいんだけど。

「アスカ、呼んでるよ」

シンジがアスカに声をかけると男の表情が途端に険しくなった。

「惣流さん、それ、誰？」

「ああ、ここ…じゃない、この人は私の彼よ、  
だからあなたとは付き合えないの、悪いわね」

「彼氏…？」いつが…？惣流さんの…？」

ジロジロと男がシンジを見る。

「ああ、はい、そ、そつなんです、ははっ」

シンジは後ろめたた全開の声でさう言った。

男はふうっと溜め息をつく。

「やめなよ、惣流さん、」んなやつ彼氏にすんの、別れて俺と付き  
合おうぜ」

ムカ…

と、平常心、平常心。

アスカは一、二度深呼吸をすると。

「いえ、私、こいつの事が好きですから」

と、きつぱり言った。

「うわ、アスカ、演技とはいへ、よくそういうことをズバズバ言えるな…

「だから別れろって、そんな何も取り得の無さそうな奴、相手にするだけ無駄だつて、なあ坊主？」

「…………ははっ」

シンジが言われたい放題言われて乾いた笑いを残した時だった。

アスカの方からプチッという小さな音が聞こえたのは。

どすん！と地鳴りが起きそうな勢いでアスカの右足が男の前に置かれる。

右手人差し指をビシッと男の鼻先に指差して早口でアスカは捲くし立てた。

「ちょっとあんた、黙つて聞いてれば何調子に乗つてんのよ！  
シンジに取り得が無い！？あんたにシンジの何がわかるつてのよ  
！！

シンジはバカでマヌケでおっちょこちよいだけがあんたの1億倍  
は遙かにマシよ！！

あんたに命がけでマグマの中に飛び込む度胸ある！？  
あんたに命がけで訳の分からない異次元空間の中に入る勇氣ある  
わけえ！！？」

アスカは鼻息を荒くふーふーと息を弾ませながら言った。

「ア…アスカ、僕は別になんとも思つてないから…」

「シンジもシンジよ！  
こんな顔だけの大馬鹿野郎にここまでコケにされて何で怒らない  
わけ！？」

アスカの顔がシンジの顔にぐぐつと接近した。

「アスカ…顔が近いって…」

そうシンジに言われてはつとなり顔を真っ赤にさせてアスカは後  
ろを向いた。

「と、とにかく、私、人を小ばかにするような男となんて付き合いつ  
きないから、バイバイ！」

そう言つてアスカはシンジの手を取つてずかずかと去つていった。

取り残された男は呆然と一人の後ろ姿を見送つていた。

帰りの電車の中、シンジは椅子にすわりアスカは手すりにもたれ掛かつてた。

「…………ねえ、シンジ」

「何？」

「あんた、ホントに何も取り得無いの？」

アスカは外の景色を向いたまま、その表情は読めない。

「取り得…か、強いて言つなら料理だけど料理ならシズクの方が上手だし…」

腕を組んでうへん…と考え込むシンジ。

「あつ」

「何があるのーー？」

アスカが途端にシンジの方へと振り向いた。

「齧つた程度だけど…チエロが少し弾ける…かな」

「チエロ? いいじゃない!」

「5歳の時からやつてるんだ、確かに引越してきたときに持つてきてたと思つたけど…」

「継続は力なり、か…ねえ、帰つたら聞かせてよ、あなたのチロ」

「ええ！？いいよ、恥ずかしいし…」

アスカはシンジの隣にぼすつと座ると意地悪そうな笑みを浮かべて肘でシンジを突いた。

「いいじゃない、減るもんじやないし！」

「わ、わかつたよ」

-夜・葛城邸-

即席でシンジのチロコンサートが開かれた。

シズクは自分も出来ることを黙っていた。

アスカがとても楽しみそうにしていたからだ。

演奏が始まり、そして時が流れ、終曲に終わる。

終わったシンジが小さな動作で弦を置いた。

四人から割れんばかりの拍手が起きた。

「シンジちゃんやるじやない！」

「……素敵な演奏だった」

「うん、とっても良かつたよ」

「全然いいじゃない！何が取り得が無いよーぜまあないわ、あの男  
！－！」

「は…ははまつ

シンジは頭をポリポリと書くと嬉しそうに笑って

「みんな、ありがとう」

と照れくさそうに咳いた。

## シズク対リック

ふあ～あ…

アスカは欠伸をしながら両手を伸ばし、リビングへと続く廊下を歩いていた。

「あ、シズ…」

と、そこで立ち止まる。

シズクとレイが真剣な顔をして話をしていたからだ。

アスカは思わず壁を背にして隠れてしまつ。

何？何で私隠れてるわけ？

ドキドキとなる胸を必死に押さえながらアスカはそーっと一人の方を見た。

「…………赤城博士のところへ？」

「うん、今、リックさんを説得しておかないと……」

「危険だわ」

「うん……わかってる、つもりだよ」

「……あの人も司令と同じ、田的のために手段を選ばないタイプの人間…

一步間違えればシズクも殺されるわ」

殺される? シズクが? リツコに?

「アスカ…? 何やつてん…」

シンジが向こうから歩いてきてアスカを呼ぼうとしたのをアスカは咄嗟に振り向いて両手を伸ばし自分の方へと引き寄せた。

「何すん…！」

「いいから静かにしてなさい」

シンジはアスカの胸に蹲る様に抱きかかえられて顔を真っ赤にして反抗しようとしたが妙に真剣なそのアスカの一言にただ黙ってしまった。

そしてアスカが見ている方を見る。

シズクと…綾波…?

「大丈夫、リツコさんも僕を殺したりはしないよ、  
多分、シナリオ上、殺さなくても時期に死ぬと思ってるはずだか  
ら」

「…万が一という場合があるわ」

「アスカ…一人は何の話をしているの?」

「知らないわよ… ただシズクがリツコに何か話をしにいくとか、  
それでリツコがシズクを殺すとか何とか…」

ひそひそ声で話すシンジとアスカ。

「その時は仕方がないよ、とにかく…  
計画の阻止にはリツコさんの計画遂行を阻止する必要がある。  
そして今、その時が来た、それだけだ」

シズクは一步も引かずにレイを見た。

レイもまた、引かずにシズクを見る。

「…わかつたわ、私も一緒に行く」

「レイ？」

「…私が貴方を守る、私はシズクから色々なものを貰つた。まだそれを返していないうちに死なれるのはとても困るもの」

レイの瞳は揺るがない。

ただ真っ直ぐにシズクの目を射抜いていた。

「…わかつた、でも無茶は駄目だよ？」

「…ええ」

「ちょっと待つたあああああ！」

アスカがシンジを抱えたまま、一人の前へと立ちはだかる。

「ア…アスカ…？」

「何だか知らないけど、あんたまた一人で何かやるつもりね！？言つたでしょ！？抜け駆けは無しだって！！」

「げほっ、アスカ、絞まってる…」

「あ、ごめん」

ぱつとシンジを離すアスカ。

「じゅつ、でも、アスカの言つとおりだよ、シズク。  
前に言つたろ？何でも一人で守るつとするなって」

シンジは咳き込みながら笑つてシズクを見た。

「シンジくん……」

「そーいつ訳だから、私たちも一緒に行くわよつ。」

「でも……もしかしたら危ない田に遭うかもしれないよ？」

「尚更だよ」

「…………行きましょう、みんなで」

「みんな……ありがとひ」

シズクはそういふと静かに頭を下げた。

- ネルフ本部・廊下 -

四人が歩いていると前方から加持が歩いてきた。

「よ、揃つてど」へお出かけだい？」

「ちゅうとや」まで

ははは…と笑ってシズクは答えた。

「そりかい、ところど」

と加持はそつとシズクの耳元へ顔を近づける。

「例の事故だが…被害者は百数十人だそうだ」

「…そ、ですか」

「まあ、」の数字が多いか少ないかを取るのは君次第だ

「…少ない、と思います…ありがとうございます」

「いや、俺は何もしちゃこないさ」

そこまで会話すると加持は顔を上げた。

「何よ？何の話？」

アスカがシズクと加持を交互に見ながら言った。

「シズクちゃんを『テート』に誘ったのさ」

「加持さんにはナリサトがいるでしょ？…？」

「はは…」少々失敬、まあ断られたよ、葛城でも誘つか

そう加持は言ひつと片手をひらひらさせて廊下の向い側へと消えていった。

「ホントにデートの誘いだつたわけ？」

ジト目でシズクを睨みつけるアスカ。

「うん、加持さんも駄目だよね」

そう言ってシズクは微笑んだ。

「あんな軽い男には見えないんだけどなー、ちょっとシヨック

「アスカ、やつぱり加持さんの」と…」

「ち、違うわよ！ 前にも言ったでしょ！ 加持さんは憧れ…！ 恋愛対象とかじゃないんだから…！」

「じゃあ何でショック？」

「シツコイ男ね、あんた、憧れの男の人があ  
ほいほい女の尻追い掛け回してたらショックに決まつてんじやん」

「あー…」

「あなたはそうならないでよね」

アスカのぼそつと呟いた言葉にシンジはきょとんとした。

「え? 何か言った?」

「な、なんでもないわよっ!」

そんな二人を見て思わず吹き出すシズク。

「何笑つてんのよ!」

「いや、仲いいね、最近」

「そ、そんなんじやないんだからねーってこらレイー先行くなつー!  
聞いてんの! ?待ちなさいってば! !」

顔を真っ赤にしながらアスカはレイの後を追つ。

「行こうか、シンジくん」

「う、うん...」

訳がわからない、といった顔をしたシンジに  
優しく微笑んでシズクもアスカたちの後を追つた。

「んこんと比較的短いノックが鳴った。

「誰かしら? 開いてるわよ」

プシュッといつ音と共にドアが開く。

左から順にシンジ、アスカ、シズク、レイが立っていた。

「…揃いも揃つて何の用事かしら?」

「单刀直入にお話します」

口火を切ったのはシズクだ。

黒い瞳は真っ直ぐにリツコに向けられている。

…遂にこの時が来たわね。

「」の子が行動を起こすときが。

リツコは思いを顔に出さないまま、静かに椅子へと腰をかける。

「何かしら?」

「司令の計画への手伝いを止めてください」

その言葉にリツコはゆっくりとコーヒーを啜つた。

「…計画?何のことかしら?」

「司令の進めてこる人類補完計画のことです」

「…それは貴方の意思かしら?それとも貴方の上の意思かしら?」

「…僕に上司なんていませんよ、これはゼーレも委員会も関係ありません、僕の意思です」

「私、貴方の上…とは言つたけど『ゼーレ』や『委員会』なんていふ単語は発していないわよ、

どうで知ったのかしら、その言葉」

「今話すべき」とせりふぢやありません

「重要なことよ、前から聞きたいと思つていたのよ、貴方、一体何者なの?」

「…僕は碇シズクです、それ以上でもそれ以下でもありません」

レイは一人の会話をじつと見つめている。

アスカとシンジは一人の会話についていけず、ただ流れる無音のプレッシャーに

息を呑むのも忘れて見入っていた。

そこでコソツ「は机の引き出しから小さなポリ袋を取り出した。

中には一本の毛髪。

「これ…貴方の髪の毛よ、シズクちゃん」

「それが何か?」

「貴方が初めてネルフに来た時に採取させて貰つたわ、当然検査もした、結果を知りたい?」

「…別に」

「私は知りたいわ、だつてそりでしじょう? 貴方はある人物に似すぎている、あまりにも、ね」

「…碇ユイに、ですか」

「わかつてるじやない、自分が何者なのか言つ氣になつた?」

「僕は僕です、碇ユイじやない」

「そうね、貴方はユイさんじやないわね、MAGIもそれを証明している。」

そして、もう一つの答えもMAGIは出したわ

そういつとりソ「はポリ袋から髪の毛を地面に落とす。

「貴方のDNAが100%、そこにはいのシンジ君と同じだつていうことをね」

「…え？？」

今の発言に驚いたのはシンジだ。

シズクのDNAが僕と…同じ？

「今、議論したいのはセイじゅあります、司令の計画に加担するのをやめてください」

シズクは動じず口を開いた。

「私は」とを議論したいのよ、貴方は誰に作られたのかしら？少なくとも私たちネルフじゅない…でも貴方ほどの物を作れる組織となると

かなり限られてくるのよ

「僕には昔の記憶があつません、気付いたらシンジくんに助けられていた、それだけです」

「そんな子供みたいな言い訳が通用すると思つてこのかしい？」

「事実です」

シズクが一步前へ出た。

レイも静かにそれに続く。

「リツ」「さん、リツ」「さんは司令を愛していますか？」

「あー、急に何を言に出すのかしら?」

「だけど司令はリツ」「さんを愛してなんかいない」

「—」

リツ」「の眉が若干だが上がった。

「あの人ガ愛してるのは世界でただ一人、碇ユイだけです。息子であるシンジくんですらその対象には入っていない。いや、シンジくんは息子だからこそ碇ユイの愛情を受けたことに対し嫉妬すらしている」

「何が言いたいのかしら…？」

「リツ」「さんはレイが何でこの姿なのか想像したことありませんか？」

「……」

リツ」「は黙つて机の引き出しを開ける。

中にちりつと見えたのは一丁のハンドガン。

「あー」

と思わず声が出たのはアスカだ。

「レイと碇コイを重ねたんですよ、司令は、  
リツコさんはどんなに頑張っても碇コイの代わりにはなれません」

「…黙りなさいつ！」

リツコはバッと右手でハンドガンを取つてシズクに銃口を向けた。  
銃口を向けられてもシズクは微動だにしなかつた。

眼差しはリツコの目を捉えたまま動かない。

「…脅しだとでも思つていいのかしら？」

「リツコさんは司令と世界とどちらを取るんですか？」

「……私はエルフスタッフである前に一人の女なのよ」

「それ以前に一人の人間です」

「もう、貴方と議論を交わす氣は無いわ」

パンッと乾いた音が一発鳴つた。

リツコは当然、シズクの脳天に撃つた…つもりだった。

が、弾丸はシズクの手の前で止まっていた。

レイの目が若干の光量を帯びていた。

「A・T・フィールド……」

「何……？ レイがやつたの……？」

驚きを隠せないアスカとシンジ。

「…………シズクは殺させない」

「レイ、思つたよりずっと愚かになつたようね、  
こんな所で正体を曝け出して、アスカやシンジ君に受け入れられ  
るとでも思つているの？」

「…………拒絶されても構わない、それでシズクが守れるなら」

「そう、なら教えてあげる、よく聞きなさいシンジ君、アスカ」

リツコはハンドガンを持つた腕を下げ、一人の方を向いた。

「ここの子、レイは人間じやないわ、第2使徒リリストの『ペリー』よ」

「 「 」 」

「 ネルフの持つクローン技術で碇ヨイによく似た肉体を作り出し、そこにリリスの魂を注入した人であらざる者、それがレイよ」

「ほんと…なの？」

シンジが恐る恐るレイへと聞いた。

「…………ええ」

「驚いたでしょ？でもシズクちゃん、貴方は驚かないのね」

「レイはレイです、例え何者でもその事実に変わりはありません」

「そ、う、でも貴方たちもそう思えるかしり？」

そう言つた所でアスカがリツコの白衣を強引に鷲掴みにして自分の元へと引き寄せた。

「あつたりまえでしょ！そりやちよつとはびっくりしたけどね、シズクの言うとおりよ、レイはレイよ、シズクも同じ！正体がどうのとか計画がどうのとか、そんなの良く知らないけど私たちの仲間なのよつ！！」

白衣を持つ手に力がこもる。

「その仲間に對して、銃を向けられて、私が平氣でいるとも思つたわけ！？」

そつちの方が誤算じやないのー？」

「…………」

リツコは黙つたまま、ハンドガンを床に落とした。

そつとアスカの手に自分の手を置くと静かに引き剥がす。

「悪かつたわ、ちよつとシズクちゃん語つてみたかったのよ」

「同令の計画に加担するの、やめてもらひますか？」

「…約束はしないわ」

「…わかりました、帰らつか、みんな」

「う、うん」

「ちよつと待つなといつて、一発殴らせなさい。」

「…………アスカ」

レイが静かにアスカの肩に手を置いた。

ふーふーと肩を上卜下せながらアスカは最後までリツコを睨んで部屋を出て行つた。

四人が出て行つたドアをリックは見てから足元のシズクの髪の毛を見る。

髪の毛にシズクの姿とヨイの姿が重なつて見えた。

司令は私を愛していない…

そんなの、わかっているわよ。

でも、今更どうしていつの?

私は、貴方たちみたいにもう若くないのよ…

-ネルフ司令室 -

「松代で起動実験? 3号機の?」

「ナサトが何故、とこづよづひでゲンダウとタリ元に書つた。

「ナサトだ、実験は極秘裏に行つ」

「しかし、現状3号機は普通に稼動しています、何故今更起動実験なんて…」

「答える必要はない」

「なら、何故二二二ではなく松代なんですか！？」

「葛城三佐、先の使徒との戦闘は記憶にあるかね？」

冬月が静かに口を開いた。

「はい」

「あの時の初号機と式号機のような状態に3号機もなる可能性がある」

「…」

「もしそうなつて二二二で暴れられたら少々面倒だ、

つまり保険だよ、起動実験では無く実際には暴走しないかの実験

だ

ミサトは冬月の言葉に少し俯いた。

確かにあの時の初号機と式号機の姿…

思い出しただけでも寒気が走るものがある。

制御できるものならば……。

だが、もし制御できないものだったとしたら……？

「……わかりました、日程は？」

「明後日だ」

ゲンドウがやつぱりサトは一礼をして、司令室を出て行った。

「……それで良かったのか？ 確」

「ああ……もうあの娘に用は無い、それなり退場してもいいことじつ

ゲンドウの視線にはモニターに写ったリックの部屋があった。

「仕上げたダメーを試す頃合にもなる、何よりチルドレンたちの中であの娘は大きな存在のようだしな」

「……自分たちの大好きなものを自らの手で壊させるシナリオか……何時聞いても嫌な気分になる」

「全ではシナリオ通りに……だ」

モニターの中での垂れるコツコツの姿を見るとゲンドウはニヤリと笑つてそう言った。

## 乗つ取られた3号機

「松代で起動実験、ですか？」

「ええ、それとこの」とは……」

「シンジくんたちには内緒にしておくんですね?」

「よ、よくわかったわね」

「まあ……僕だけ呼び出して伝える意味がそれしか考えられませんし」

「せうね、お願ひね

//シズクはマジンションへと帰る途中にふと空を見上げた。

シズクはマジンションへと帰る途中にふと空を見上げた。  
「よいよ、か。

恩りぐ、いや、100%と言つてもいい。

3号機はバルディエルに寄生される。

自分が乗つた状態のまま。

戦うのはあの三人だ。

シズクは小さく首を横に振る。

「大丈夫。

あの三人ならやつてくれる。

僕は一人じゃない。

一人、頷くとシズクは再び歩き出した。

-後日・松代実験場 -

「いい? シズクはいつも通りにやつていればいいから

『はい…あの』

「何?」

『リックさんは、そこにいますか?』

「…何かしら

『…考へてもらえたでしょうか』

「…さあ、ね…もしこれが無事に終わつたら…  
これを引つくり返す程の度量が貴方にあるなら…考へなくも無い  
わ」

「何? 何の話?」

ミサトは一人蚊帳の外で話がさっぱり飲み込めない。

「女同士の話よ」

「あのねえ、リツコ…私だつて女よ?..」

「失礼、恋人がいない女同士の話よ」

「なつ…」

ぽふつといつ音を立ててミサトの顔から湯気が立つた。

「起動実験、開始します」

「あ、え、ええ、お願ひ

「シンクロスタート…98・3%…安定…えつー?」

「どうしたのー?」

「神経ノイズに異常発生！」

「パイロットとの通信、途絶えました！」

- 3号機・エントリー・プラグ内 -

「…つー！」

全身が粟立つような感覚にシズクは身震いした。

始まつたか…

- 松代実験場・施設内 -

「3号機のプラグ壁面に粘着状の物質を確認！」

「これは…パターン青…つー？」

「まさか…使徒…？」

ミサトがそう言ったとき、3号機は無理やり拘束具を引き剥がし

て施設を破壊した。

- ネルフ本部 -

「使徒が出たつて！？」

「アーヴィングのよ、どんなやつか知らないけど！」

シンジとアスカが一枚のカーテンに仕切られた着替え場でプログ  
ースツに着替えながらそう言った。

「もう、シズクはまだどつか行っちゃうし！」

「……」

アスカの言葉にレイは何も言わずプログースツの空気を抜いた。

- 発令所 -

「Hウェア 各機、位置につきました」

「田標の映像、出ます」

マコトがそいつとメインモニターに田標の映像が出力される。

「これ、は…」

「まさか…」

「3号機…？」

- 初号機・エントリーブラグ内 -

「あれは…まさか…3号機…？」

『そりだ、あれが目標だ』

ゲンドウの通信に入る。

「何言つてんだよ、父さん…そんなの、出来るわけないだろ…あれにはシズクが乗つてるんだつ…」

『やらなければお前がやられるぞ』

「それでも……嫌だつ！」

『碇くん』

二人の通信にレイが割つてはいる。

「綾波……綾波は平氣なの……？」

『…………現状シズクを助けるにはあの3号機を止めなければいけない』

更にアスカから通信が繋がる。

『…………要するに、なるだけ怪我させずにエントリープラグを引っこ抜けばいいわけよね？』

『…………そう』

「でも、シズクと戦うなんて……」

『…………同じことをシズクも考えているわ』

「……」

『…………』

例え自分の意思では無くても僕たちと戦つところひとつを一番嫌がるのは、シズクじゃないか……

シンジは両手で頬を叩いた。

「…行くよ、アスカ、綾波！シズクを助けるんだ！！」

『『了解』』

- 3号機・エントリープラグ内 -

モニターが死んでいるわけではないのか外の景色が見える。

見えるのは三機のエヴァ。

戸惑いを見せるような動きをしていた各機だが  
やがて戦闘体勢に入るのがシズクには確認できた。

…頼んだよ、みんな。

瞬間。

3号機が跳んだ。

それはとてもないスピードで。

バルディエルの寄生によつて強制的にシズクのシンクロ率は上げ

られていた。

モニターはそれでいいが、恐らく一五〇%前後、と言った所だ  
れい。

宙を飛んだまま3号機は右腕を在り得ない長さに伸ばしてボウ機  
へと迫る。

「IJのうー。」

武号機は反射的に前転してその腕を回避した。

瞬発的に零号機が3号機の右腕を捕まえる。

「…………碇ぐんつー。」

「うわああああああああああああああー…………。」

初号機が飛んだ。

3号機は残った左腕で初号機を迎撃しようとする。

その左腕をA・T・フィールドが包んだ。

「大人しくしてなさいよー！」

武号機が宙にA・T・フィールドを張ったのだ。

「シンジシード」

ガシツと3号機の背中に取り付く初号機。

一  
これかづ！？

白い糸のようなもので粘着されたエントリー・プラグを見つけると初号機はそつとそれに手を伸ばす。

刹那

3号機を取り巻く光の量が跳ね上がり、たゞ

「うああああああああああああああー!?」

— 1 —

爆発的に広がるA-2バイルドが二機を吹き飛ばす。

式号機がいち早く体制を立て直した。

「…やつてくれるじゃない、流石はシズクのシンクロつ！」

アスカが呟くと3号機は3号機へと再び突進した。

レイもシンジもそれに続く。

三人はよく戦っていた。

純粹な力で言えばジズクの乗った3号機の方が圧倒的に上だった  
うつ。

だが絶妙とも言えるコンビネーションで三機は3号機を翻弄して  
いた。

- ネルフ発令所 -

「頃合だな…」

「ああ」

冬月とゲンドウがそつ脱ぐとゲンドウはマヤに指示を出  
す。

「初号機のシンクロをカット、ダーリー[切り替える]」

「…?」

マヤは驚いてゲンドウを見上げる。

「な……なんですか?三人は善戦しています、ダニーを使つ必要は無いかと…」

「善戦しているからだ、下手に苦戦しているときに未完成のものを使つわけにはいくまい」

「……しかし…」

「これは命令だ」

「…………わかりました」

マヤが唇を噛み締めながらコンソールを叩いた。

次の瞬間、初号機の動きが止まる。

『シンジー?何してんのよつ…』

「わからないよつ、急に動かなくなつて…」

プラグ内の景色が七色に光り輝き、また外の景色が映る。

初号機の顎が外れ、大きく雄たけびを上げた。

「何だこれっ！？勝手に動いて……！」

・3号機・エントリープラグ内

「ダニーが起動した…？」

シズクは唇を噛んだ。

レイを実験に参加させなければダニーは開発されない、そう思つていたからだ。

甘かつた

器があるんだ、今のレイが使えないなら他のレイを使えばいい。

だからと言つて人間一人を簡単に消したり増やしたりするなんて…

### ・零号機・エントリー プラグ内

…これが、ダミーシステム…？

あんなものを作る実験に協力していたの私は……

猪突猛進する初号機を目の当たりにしてレイは身をすくんだ。

両手で体を押さえ、ほいほいと息を弾ませた。

二二九

何とか操縦桿を握りしめ、アスカへと通信を送る。

『何よつ、あれ、どうしちやつたのよ！？』

「今初号機を操つてるのは碇くんじやないわ、  
私が3号機を抑えるから、アスカが初号機を抑えて……！」

『アーティストの世界』

「…説明は後でするから、急いで！」

『ああ、もうわかつたわよ、とにかく、今初号機を使ってんのは  
シンジじゃないのね！？』

「……ええ」

『そ、う、よ、ね……あの、バ、カ、が、あ、ん、な、行、動、す、る、わ、け、　ない、も、ん、ね、つ、！』

式号機は後ろから初号機を羽交い絞めにする。

対して3号機の目の前には零号機が立つた。

「……シズク、今、助けてあげるから」

レイの瞳に赤い光が宿つた。

初号機は力任せに式号機を引き剥がすとそのまま宙へと放り投げる。

「！」のつ……バカシンジーなんとかならないのつ……？

『無理なんだー。ヒーヒーもこの事効かない…父さん…？父さんの仕業なかつー…』

両手を合わせて力比べをする武号機と初号機。

「リツ！」も司令も…どこにも！」こつも、勝手なのよつ…これだから大人は……」

武号機の目が光る。

瓶が外れ、顎を開き、初号機に押されかけてた腕を盛り返した。

「シンジッ…ちよつと半荒くさせてもいいからね…」

『いいよ、父さんたちの勝手でみんなを困らせるよつずつといつ…』

武号機が後ろ回し蹴りを初号機の顔面へと決める。

そのまま飛び、蹴りを放つ。

初号機は蹴りを放つた武号機の腕を途中で掴むとそのまま地面へと呑きつけた。

「…つー…？」

『アスカ！』

「…」とくつ…なによおおおおおおおおおおおお…」

式号機はそのままブレイクダンスのよう回転すると  
力任せに初号機の手を解きそのまま腹へと両足で蹴りを叩き込む。

一方。

3号機と零号機も熾烈な戦いを繰り広げていた。

とてもじゃないがレイに3号機の動きはついていけない。

それでも踏みどじまっていたのは、レイの強い思いと、特殊な体质。

…つまりA・T・フィールドだ。

零号機がA・T・フィールドを張つて3号機の動きを止めようと  
しても中和され動かされてしまう。

そこにレイ自身のA・T・フィールドを更に展開しワンテンポ、  
3号機の動きを鈍らせていた。

結果、両者の差が縮まる。

だが、これは賢い戦い方では無かつた。

ヒュアの操縦には非常に高い精神力を要する。

そしてA・T・フィールドを開拓することにも、だ。

その一つの作業を同時にこなしているレイの肉体はもうボロボロ  
だった。

シズク：私はシズクを助けるんだ…！

レイの瞳の光量が一層増した。

## シズク

- 3号機エントリープラグ内 -  
シズクは焦っていた。  
ダミーの起動。  
式哨機と初号機の戦い。  
そして、レイの負担。  
全て自分の認識不足のせいだ。  
どうすればこの状況を開拓できる?  
…どうすることも出来ない。  
今、3号機は自分の制御下にない。  
シンクロ率をコントロールすることは出来ない。  
シズクは静かにだがプラグ内に確実に聞こえる音で自分の頭を操  
縦桿にぶつけた。

【簡単なことだよ】

気付いたらそこは電車の車内だった。

前回の時にも嫌というほど見た自分の内部の光景。

田の前には碇シズク自身が立っている。

「…簡単なこと？」

シズクの問いに田の前の「シズク」が優しく微笑む。

【そう、自分を解き放てばいい】

「自分を…解き放つ？」

【疑問に思わないようにしていったことがあるだろ?】

「何を…？」

【何で過去に来て性別までもが変わっていたのか】

「…」

シズクの目が見開かれた。

「…確かに、そうかも知れない、でも、今はそんなこと言つてる場合じゃないだろ?」

【違うよ、今だから、それを思つた】

「どうして?」

【発想を逆転させてみよう】

「…?」

【誰かが碇シンジを過去へと導いたんじゃない、碇シンジが自分自身の意思で過去への回帰を望んだんだ】

「…どう…こう…?」

【君は後悔しただらう? アスカの最後を見て、ミサトさんの最後を見て、人類の最後を見て】

シズクは押し黙つて俯いた。

「シズク」は構わずに言葉を続ける。

【だからさ、君は思つた、過去に戻つてやり直したいって、でも躊躇もしたね】

電車が僅かに揺れる。

【その結果が性別の変換、そして別の碇シンジの形成だ】

「… それじゃ、まるで僕が神様かなんかみたいじゃないか」

【だから、「セツ だつて言つてるだろ?】

「…………？」

【僕は選ばれし存在なんだよ、リリスと一緒にになって、アダムから産まれなかつた唯一の使徒、

第1-8使徒リリンを超えた存在、第1-9使徒、それが僕だ】

「嘘だつー！」

シズクは思わず立ち上がり叫んだ。

「シズク」はぐにゃりと形を変えて橢円形に曲がりながらシズクの顔へと迫る。

【本当は気付いているんだろう?自分の性格が前とは微妙に異なつていてることに】

「シンジ」だった時とは明らかに違う強さが自分の中にあります

【兀】

くすくす、くすくす、と笑い声がそこら中からこだました。

【だけど困ったな、アスカやシンジを助けるということはリリンを生き延びさせるということだ、知つてると思うけど使徒は別種の使徒とは存在できない、僕もレイも結局はリリンのために滅びるしかないんだ】

「違う、違う違うーみんな、みんな幸せになる未来があつたっていいじゃないか！」

だから僕はっ！！

そこまで叫んでシズクは気付いた。

だから僕は『過去』に還ることを決めた…？

【答えは出た？じゃあ僕の手を取つてよ】

シズクは静かに目を閉じる。

そして数秒、シズクの中では数時間に感じたかもしない。

シズクはゆっくりと目を開けた。

「受け入れるよ、だけど僕もレイも滅びはしない…そのための力がいるから…」

【…いい答えた、確かに君は僕たちの結晶だよ】

最後に放った「シズク」の言葉は渚カラルと綾波レイ、そして碇シズクの声が入り混じった声だった。

シズクは「シズク」の手を取る。

目の前に光が開いた。

気付いたら、目の前で零号機がボロボロになっていた。

だが決して膝をついていない。

3号機の動きに必要最小限の動きでA・T・フィールドを展開し続けて動きを封じている。

式号機も限界に近い。

ダミーの初号機とほぼ互角の戦いを続けてはいたが、ダミーと違いアスカはスタミナと精神を消費する。

シズクの黒目の部分が小さく凝縮される。

刹那 -

3号機から光が走った。

あまりの眩い光にシンジもアスカもレイも、発令所でモニターしていた人間も全員が目を瞑つた。

「何つ！？」の光…レイ！大丈夫！？」

『……私は平氣、だけビシズクは…？』

『……初号機が……いう事を効く……？』

そのシンジの発言に初めて動搖を見せたのが発令所にいたゲンドウだった。

ガタツという音とともに机に手を当てて立ち上がる。

何だ……何が起こっている……

あの娘は一体何者だ……？

『……ザ……みん……ザ……な』

ノイズに混じってシズクから通信が入った。

「……シズク！？」

『……無……ザ……事……？ザ……ザ……』

「あんたこそ、平氣なの！？」

『僕は……ザ……大丈……ザ……夫』

「…………一体、何をしたの？」

『使……徒の……ザ……寄生……能……ザ……力……を一時……封……た』

三機はだりりと立ちぬく3号機の方を見た。

『殲滅はザ流石に無理だザからHントリープラグ引きザ抜いて』

シズクの通信が最後まで入り終わる前に三機は行動を起こしていった。

零号機と二号機がしっかりとだが、優しく3号機を抱える。

「シンジー」

「…………碇ぐん！」

「わかつてゐる」

初号機は丁寧に粘着性の糸…つまりはバルティエル本体を剥がしていく。

全て剥がし終えると、イジエクトボタンを押してプラグを放出した。

「バシャアツーと」・・・・が大量に放出される。

「シズク！」

初号機のエントリー・プラグを放出してシンジは外に出た。

そして、はつきりと確認する。

プラグから出てくるシズクの姿を。

「……ただいま、シンジくん」

「おかえり、シズク」

「少し、初号機を借りていいかな?」

「え? うん、別に構わないけど…」

そう言つとシズクはシンジと一緒に初号機のエントリープラグに乗り込んだ。

「あの白い糸みたいなのが使徒の正体だよ…自身ではほとんど何も出来ない。

せめてA・T・フィールドを張るくらいかな…エヴァに寄生して初めて活動を開始できるんだ」

そう言つとシズクは操縦桿を握った。

「さあ、目標はあの使徒だ… A・T・フィールド展開」

初号機が空へ向かって大きく手を広げる。

初号機の頭上に巨大なA・T・フィールドが展開された。

フィールドは僅かに、少しずつ、少しずつ凝縮され、一本の槍と化す。

「はああああああああああ！」

シズクの叫びと初号機の動きが完全に重なり  
バルディエル本体に向かつてA・T・フィールドの槍が発射される。

バルディエル本体が些細な抵抗とばかりに張られた  
A・T・フィールドはいつも簡単に砕け散り、

槍はバルディエルの本体を貫いた。

「シズク…今のは？」

シンジが呆然と見つめながら聞いた。

「別に…フィールドの流れを少しいじっただけ、それよりもありが  
とうシンジくん」

「え？何が…？」

「僕を助けようとしてくれたでしょ？」

そう言つてシズクは優しく微笑んだ。

「いや…でも初号機が急にいう事効かなくなつたりして…ダメだよ、  
僕…」

「そんなこと無い、シンジくんは僕を助けてくれようとした、その

『気持ちが僕は嬉しいよ』

『もううん、この会話を聞いてる一人にも感謝してる』

「もちろん、この会話を聞いてる一人にも感謝してる」

『『――』』

『あ、あ……別に礼なんていいのよ、結局あなたが自分で何とかしてんだから』

『…………シズクが無事なら私は別に何もいらない』

アスカは聞き耳を立てていたのがばれていたのが相当焦つたらしく少しどもりながら、

レイは純粋にシズクの帰還を喜んだ。

「レイ」

『…………何?』

「僕は決めたよ……レイもアスカもシンジくんもみんな、みんなが幸せになれる未来を目指す」

『…………』

その中に……何故貴方は入っていないの……?

レイはそう問おうとしたがきっと入れるのを忘ただけだ、と思

い込むことにした。

シズクは私に未来へと案内をしてくれた。

なら、私もシズクにとっての未来への案内人へとなるつゝ。

心からそう思つた。

『ぐ〜……』

式号機の方から大きな腹の虫が鳴つた。

「ふつ……あははははは！」

『わ、笑わないでよつー安心したらお腹空いたの！  
シズク！今日は』馳走い／＼ぱい作つてよね！』

「うん、任しといで」

そう言つと四人は本部へと戻つた。

「碇…シナリオが大幅に狂い始めたぞ」

「…まだだ、こちらにはまだ切り札がある。

あの娘が何をしようと…結果は変わらんよ」

そう言ひついでゲンドウは小型のアタッシュケースを開ける。

中にはベースライトで固められたアダムが小さく梱づいていた。

**最強使徒ゼルエル（前書き）**

破の影響受けまくつてます（・・・、）

## 最強使徒ゼルエル

「大体…ダミー・システムつてのが気に入らないのよ、何よ、そんなにシンちゃんが信用できないわけ…？」

居酒屋でドンッ！と空になつた中ジョッキを置いて呟ぶふニサト。

「飲みすぎだぞ、葛城」

「ハイペースね、ミサト」

「あによつ…加持もリツ！」も何とも思わないわけ！？」

そう言いながら追加で出された中ジョッキを「じきゅ」「じきゅ」と飲み干す。

「結果、シンジ君はダミーに打ち勝つた、それでいいじゃない」

そう、このシナリオもあの子たちは超えていった。

後から見た映像記録からしか推測出来ないが

使徒に寄生された3号機から放たれた光の直後に初号機のコントロールがシンジに変わっている。

これが…あの子の力…

司令のシナリオをも覆す力。

「…約束は、~~守ら~~ないとな」

「あん？ 何ですかって？」

「独り言よ」

セツナはソラジロもグラスのビールを飲み干した。

「大体や、ヤーレって何よ？ 委員会がネルフの上じゃなかつたの？」

「ゼーと委員会は基本的に同じものよ、  
ゼーが行動するときに委員会の名を語っているだけ」

「補完計画つてのは何よ」

「そこまでは知らないわ、私は司令の命令を聞いてただけだもの」

「今更隠し事してんじゃないわよ」

「しないわよ、神に誓つてもいいわ」

ソラジロの言葉にむうと隠るとソラジロはジー田で加持を睨む。

「あなたも何か掘んでんでしょう？ 教えなきことよ」

「俺が言えるのは、このことにあまり首を突っ込まないほうがいい、  
それだけだ」

ソラジロになつた中ジョッキを静かに置くと、

「せうこうわなこいかないでしょ、あの子たちの命預かってこのよ、  
こつちね」

と呟いた。

翌日

シンジはナルフ本部の自動販売機の前にいた。

「やあ、シンジ君

「加持さん」

「どうだ？俺ヒートアームも

「…僕、男ですよ」

「愛に性別なんて関係ない」

「愛に性別なんて関係ない」

「えつ…ちょつ」

ゆづくつと近づいてくる加持の顔。

「あー—————」

シンジの絶叫が本部内をじだました。

「冗談だよ」

加持はシンジの耳元でくくつと笑った。

「か、加持さんはもつと真面目な人かと思つていきました

「大人はこのくらいの方が丁度いいんだ」

シンジは加持と本部の外にある畠へと赴いた。

「これって…スイカ、ですか？」

「やうだ、可愛いだらう。俺の趣味さ」

「へえ…」

「物を作るのってのはいいぞ、シンジ君」

「…僕もやう思こま」

やう言つてシンジは雑草を引つて抜く。

「時にシンジ君」

「はー?」

「シズクちゃんやアスカやレイ…それに葛城の」と、好きかい?」

「え?…まあ、はい」

「みんな女性だ、男の君がやうてやらないとな」

「…………はい」

真面目な顔で返答するシンジを見て加持は満足そうに笑った。

「いい返事だ」

その時、凄まじい爆音と共にジオフロントに大きな穴が開いた。

「なんだ…！」？

「おいでなすつたようだ、シンジ君、行つてこい、好きな人たちを守るために」

「…はい！」

シンジは畠から一直線に本部へと走った。

『1-8もある特殊装甲を一撃で溶解せらるなんてただいいじゃないわ、  
アスカ、レイ、シズク、頼んだわよ、  
シンジくんも到着しだい直ぐに上げるわ』

『『「了解」』』

ジオフロント内に配置される二機のH・ヴァ。

それを見たシンジは歩幅を広げて走った。

「喰らいこなせよおおおおおーー。」

両手にライフルを装備し、次々に撃ち出す武斗機。

しかし使徒・ゼルエルは全くそれを意に介せず空中を浮遊しながら近づいてくる。

「なんて奴っ！？A・T・フィールドが壊すさるーー。」

『……アスカ、遠距離が駄目なら近距離か？』

レイからの通信。

「わかつてゐわよーー、サポート頼んだわよーー。」

『……』解

武斗機が跳んだ。

片手には新型の剣付きのロケット砲を携えている。

バキイイイイイイイインツー！！

ゼルエルが張る幾重ものA・T・フィールドに阻まれながら一枚ずつ中和して、接近する。

「ハシの糸を紡ぐのは...」

もう一步、式号機が近づこうとしたその時、ゼルエルの帯状の腕が展開されて式号機を襲った。

ドオオオオン！！

式哨機に当たる直前に零号機がロケットランチャーでその腕を撃つ。

僅かに軌道が逸れて式号機を掠めるようにカッターのような腕は  
宙を切り裂いた。

残ったもう片方の腕が再び式号機を襲う。

『はああああああああーー!』

ズガシイツ！！

カツター状の腕の平らな部分を3号機が蹴り落とした。

「ナイスサポート・シズクフー！」

武装機のロケット砲の剣の部分がゼルエルのコアに密着する。

「貰つたつ！」

引き金を絞るアスカ。

ドォン・ドォン・ドォン！

3発、コアに直接ロケット弾を撃ち込む。

が、それも堅牢なA・T・フィールドによつて弾かれた。

「嘘でしょつ！？」

そのA・T・フィールドに武装機も弾かれできりもみしながら地面へとバウンスする。

「…つ！？」

『アスカ！』

「大丈夫よつ！…やばつ！？」

武装機が立ち上がりうとした瞬間にゼルエルの伸びた腕によつて武装機の右腕が吹つ飛んだ。

「くあつ！…」

アスカは激痛に右腕を押される。

『……』

3号機の右踵落としがゼルエルの頭部に当たる、その瞬間。

また幾重ものA・T・フィールドが展開されて3号機が弾かれた。

弾かれた3号機は空中で回転してログナイフを抜き、そのままゼルエルのコア目掛けてナイフを投げる。

ナイフが接近してくるのをゼルエルは目視すると田と思われる部分が光を放ち。

ナイフ」と3号機の両足を吹き飛ばした。

『…………かつ！？』

『…………シズクっ！』

「まだまだあああああ……」

アスカが叫ぶと右腕を失った3号機が四つの目を光らせ大きく口を開けた。

数百メートル離れた間合いを一瞬で詰めて残った左腕を渾身の力で振り下ろす。

7・8枚、A・T・フィールドを碎いたところで左腕が止まった。

「…んな奴に…今更…負けるもんですかああああ…」

式号機は再び左腕を振り下ろす。

瞬間、ゼルエルは式号機の方を見て光を放つ。

今度は式号機の左腕が飛んだ。

「…………あくつ！！」

『…アスカ、離れて』

アスカは激痛に耐えながら零号機の方を見た。

N2爆雷を片手に持ち、ゼルエルの方を凝視している。

『レイ！？よせ！』

シズクの通信。

アスカもレイのしようとしていることが分かった。

『…………大丈夫、エヴァが、守ってくれるから』

そう言つと零号機はゼルエルに向かつて突進した。

N2爆雷を持った右手をゼルエルに向かつて伸ばす。

ゼルエルからA・T・フィールドが展開され、阻まれる。

『A・T・フィールド…全開…!』

零号機からもA・T・フィールドが展開された。

『…これだけじゃ足りない、私のも…!』

レイの瞳に光が帯びる。

一重にA・T・フィールドが展開されて若干、  
押し返すもそれでもゼルエルの優位に変わりは無かつた。

『……ダメ、届かない』

そうレイが呟いた瞬間。

式号機が大きく口を開けてゼルエルのA・T・フィールドを噛み  
千切る。

『…アスカ?』

「!」めんね、ママーでももう少しだから、我慢してつ…!』

アスカが叫ぶと式号機は再びA・T・フィールドを噛み千切る。

「あと…一枚つ…!」

首を振り、両手で両肩を押さえながらアスカは絶叫した。

そして最後の一枚のA・T・フィールドを噛み千切る。

自由になつた零号機の持つN2爆雷がゼルエルのコアへと迫る。

当たる直前、コアの外から瞼のようなシールドが張られたのをシズクは確認した。

『レイ、アスカ、離れろっ！』

シズクが叫んだ直後、大爆発が起きた。

「遅れました！」

シンジが息を切らせながらケージへと入った。

『シンジ君、急げ！三人が危ない！』

シゲルの声が響いた。

「はい！」

スースにも着替えずエントリープラグに滑り込むように乗ると初号機が起動した。

ドオオオオオオオオオオオオオン！ーーー

ゼルエルの放つた光によつてネルフ本部の外壁が大きく崩れ落ちる。

発令所が丸見えになつたところにゼルエルが侵入してくる。

光り輝きだすゼルエルの目。

その時、隣の壁を壊して、初号機がゼルエルを殴り飛ばした。

そのまま蹴り上げて、両手で押し出す。

押してゐる最中にゼルエルの目が完全に光を放ち、初号機の右手が

飛んだ。

血飛沫が舞い散る中、初号機は怯まず、残った片手で強引に昇降機にゼルエルを追いやる。

「カタマリ」

「ロック、全部切り離して！急いで！！」

シンジの声に力がこもる。咄嗟に反応して命令を下した。

全てのロックが解除されて昇降機が射出される。

だ。

空中に飛んだシンジの目に飛び込んできたのは、両足を失つた3号機、全身が丸焦げになつた零号機、そして両腕を失つて倒れている式号機の姿だつた。

ふつん、とシンジの中で何かが切れた。

空中にいるうちにゼルエルの体に馬乗りになつて左手で何度も口

アを殴る。

「 よくもみんなを……！」

地面に激突するゼルエル。

「 よくも綾波を……！」

殴る。

「 よくもシズクを……！」

殴る。

「 よくも、アスカを……！」

そう叫んで殴りつとした時、突然モニターが死んだ。

内部電源の残量を示す液晶には00・00の文字。

発令所より外に出たミサトたちもそれを目の当たりにする。

「 初号機……活動限界です……」

「 シンジくん……」

動かなくなつた初号機をゼルエルは腕を伸ばして胴体を突き刺し

空中へと放り投げる。

引き裂かれた胴体は初号機のコアが露出した。

地面へと叩きつけられる初号機に尚もゆっくりと接近する。

ガチャツ、ガチャツ、と何度も何度もシンジは操縦桿を引いた。

「動いてよ、動いてよ！ 今動かなきゃ何にもならないんだ、加持さんと約束したんだ！」

みんなを守るって、大事な人たちを守るって！ 好きな人たちを守るって！！」

ドクン。

「だからつ…動いてよつ…母さんつ…！」

ドクン。

初号機の目が赤く光った。

全身が淡く赤い光を放ち、ぐぐつと起き上がる。

「…そんな活動限界はとっくに超えています、動けるはずがあります！」

「暴走つ！？」

ゼルエルの腕が初号機に向かって伸びる。

初号機は左手を前に出すと、まるで裂きイカを裂くようにゼルエルの腕を裂いた。

そのままゅつくりと立ちあがる。

『やめろ…シンジくん…戻れなく、なる…』

シズクは3号機の腕を地面に立たせ、逆立ちのよつな格好をして立ち上がらせた。

「僕はどうなつたつていい、

みんなを酷い目に遭わせたこいつを今倒せるなら他に何もいらない

いっ！！」

シンジの叫びと共に初号機が跳んだ。

ゼルエルの展開した幾重ものA・T・フィールドを軽々と左手一本で引き裂く。

その衝撃波でゼルエルの体も引き裂かれた。

初号機が無くなつた右腕を前へと突き出す。

すると、瞬時に生身の人間の右腕のようなものが無くなつた所から生えた。

「信じられません…初号機のシンクロ率が400%を超えていきます…！」

「いけない…シンジ君は人の垣根を捨ててシンクロしている…こちらに戻つてこられなくなるわ…」

マヤの言葉にリツコが初号機を見て呟いた。

初号機が倒れたゼルエルに馬乗りになると、そのまま乱雑にゼルエルの体を千切つてそのまま捕食する。

「使徒を…食つてる…？」

「S2機関を自ら取り込んでるところの……？初号機が……」

ヲヲヲオヲツヲツヲオヲオヲヲヲヲヲヲヲオオヲオヲオ！

! !

ゼルエルを捕食し終えた初号機が空に向かって高らかに吼えた。

『シンジくん……！』

両足を失った3号機が初号機に取り付いた。

【僕はこいつを許さない……！】

これは…シンジくんの心か…

【みんなを酷い目に遭わせたんだ、絶対に許すもんか、それで僕がどうなつたって構わない…】

シンジの心の叫びだけを聞いてシズクは同じよひに心で叫ぶ。

僕が構うから…人じゃなくなる僕を見るのはもう沢山だから、だから…

『戻つて来い！シンジくん』

3号機の腕が初号機のコアに入つた。

そのままシズクの精神が初号機の中へと入つていく。

中にはいるのはシンジとそれを守るように抱くユイ。

【…シズク？】

【シンジくん、帰るわ、みんなのところへ

そう言つて右手を伸ばすシズク。

伸ばした右手の皮膚が剥がれ落ちる。

【シズク……】

【ミサトさんもレイも、アスカも、みんな待ってる、だから……】

叫んだシズクの顔の皮膚も剥がれ落ちた。

【みんな、待ってるから】

皮膚が剥がれ落ちて赤く染まるシズクの顔はそれでも慈愛に満ちていた。

シンジは制止するかのように抱くユイの手を振りほどき、シズクの右手を取る。

シズクはそれを確認すると、思ひつきシンジを引っ張り上げた。

初号機は急速に目の光が失われて活動を停止する。

「初号機、活動を停止……パイロット……無事です……！」

マヤが泣きながら叫んだ。

『…今度は僕がお帰りつて、言ひ番かな…』

エントリープラグ内で氣絶しているシンジをモニターしながらシズクが呟いた。

**最強使徒ゼルエル（後書き）**

特殊装甲の数が間違ってるかもです

## フィフス・チルドレン

ふう…と加持はタバコを吸うととんとん、と灰皿へと灰を落とした。

呼び出しを受けている。

相手も誰だか分かっていた。

そして、自分が何をされるのかも。

「俺が納得してもあの子は納得してくれないんだろうな…」

そう呟くと、加持は自分の部屋を後にした。

- 某所 -

加持は呼び出された人物を待っていた。

不意にかかる声。

加持は振り向くとニヤリと笑つて答えた。

「よお、遅かつたじゃないか」

パンツ。

乾いた銃声が響いた。

倒れたのは、加持ではなく、声をかけた男の方。

加持の目は倒れた男の後ろにいるタケルを見ていた。

「遅かつたか？」

タケルがニヤリと笑つてそう言つた。

「いや、何なら早すぎたくらいだ」

加持もくくつと笑みを零すとそつと言つ。

「助かつたよ、俺は本来ここで退場すべきだったんだろうが、俺が死ぬと困る人がいるんでね」

「何だよ、良く話に出てくる大学時代の恋人か？」

「いや……そいつもそうだが、一番はやはりあの少女さ

「随分と夢中だな、恋人に逃げられるぞ」

「その心配はない、や、葛城もその少女のことが大好きだからな」

リツ「はノートパソコンに向かって田を通す。

ディスプレイにはここ最近の活動記録が載っていた。

- 使徒との交戦記録

第15使徒・衛星軌道上で確認。

アスカが単独で出撃。

使徒に心理攻撃、精神に搖さぶりをかける攻撃を受けるも

動じることはなかつた。

肉体的ダメージはなし。

衛星軌道上への使徒への通常攻撃の方法が不可能と判断され、

零号機によるロングギヌスの槍の使用が許可。

放った槍によつて第15使徒は殲滅。

第16使徒・第3新東京市郊外にて確認。

四機全て出撃。

零号機に侵食、汚染を試みるも

またも3号機から謎の光が発光。

侵食が止まる。

その後、全エヴァによる一斉攻撃により殲滅。

リツ「はい」まで読み終えると「ヒー」を一口啜る。

第15使徒との戦いは特に問題はなかつた。

アスカの精神は予想以上に頑強だったのか精神汚染の類も見つか  
らず

今日も元気に過ごしている。

問題は第16使徒との戦い。

3号機が使徒に寄生されたときにも見せたシズクの能力だ。あの光にはどうやら使徒が保有する特殊能力を封じる力がある、とリックは推測した。

「……」れがもし本当なら、あの子は本当に世界の切り札となり得るわね

リックはコーヒーを飲み終えると、ノートパソコンの電源を落とした。

-朝・葛城邸-

「あら、おはよう」

「おはようって何やつてんの? アスカ…」

シズクが目を覚ますとアスカが台所に立っていた。

「何つて、見りやわからんでしょう、料理よ、料理」

「へえ……なんでまた急に？」

「そりゃシンジに……じゃなーいっしーレイモーの頃作れるよつになつて  
きたし、  
私も一端に作れるようになつとかないと面子つてもんがあるでし  
ょ」

アスカはそつまつとお玉でスープを掬い一口飲む。

「うーん……もうちょっと薄味の方がいいかな、シズク、味見してよ

「いいよ」

シズクはアスカからお玉を受け取ると一口スープを飲んだ。

「うん、基本はいいよ、もうちょっと薄い方がいいけど、  
水で薄めたらちやんと出汁を調節するのを忘れないでね」

「あ、そつか、ただ薄めるだけじゃ駄目なのね」

「何なり今日のシンジくんのお弁当、アスカが作る？」

シズクの言葉にアスカの顔が紅潮した。

「え、でも、あいついつもシズクの弁当食べてるから、  
私の弁当なんて食べても美味しく感じないわよ」

「そんなことないよ、アスカが作ってくれたっていうだけできつと喜んで食べてくれる」

「そり…かしら」

「そうだよ」

「そう、よね、よしつ！私も女よ！一度言つたことは曲げないわ、シズク、手は出さないでよね、実力で美味いって言わせてやるんだから」

「わかつてゐつて」

シズクは微笑むとアスカの弁当作りを見守った。

- 昼休み・教室 -

アスカが弁当箱を持ってシンジの前へと立つた。

手には無数の絆創膏が貼られている。

「シンジ、これ、食べない？」

「え…これ、アスカが作ったの？」

「そ、そ、うよ、ち、ょ、と練習がてら作つたの、折角作つたんなら食べなきゃ勿体無いでしょっ！」

シンジはしばらく呆けた顔をしていたが

「ありがとう、有り難くいだぐよ」

と呟いて笑つた。

シズクもレイもヒカリもその様子を見てくすくすと笑つた。

「何や、センセ、今日は新妻からの愛妻弁当か」

「新妻とか言つなーー！」

トウジの言葉にアスカが怒鳴る。

「綾波やら碇やら惣流やら、羨ましいなつ、お前はつー」

「痛いつ、離せつてケンスケ」

ケンスケはシンジにヘッドロックをかけると心底羨ましそうにうつした。

トウジとヒカリ、ケンスケはトウジの妹が退院して口が浅いといひ」ともあり

トウジの家へお見舞いぐ。

シズクたちも行きたかったがシンクロテストの田だつたために三人  
人とは別れ、  
本部へと歩いていた。

「あれ…誰か、いる」

湖から突き出している瓦礫の上に銀髪の少年が座つて空を眺めていた。

銀髪の少年はシンジたちに気付くと微笑みを絶やさず瓦礫から  
降り、

シンジたちの方へと向かつてきた。

「やあ、お揃いで」

「あんた、誰よ？」

アスカはジト目で少年を見る。

「渚カラル… フィフス、だよね」

シズクの眩暈に二人は驚愕の表情をしてカラルとシズクを交互に見た。

「よく知ってるね、いや、当たり前か、碇シズクさん」

「カラルくん！」や、何で僕の名前を？」

「正氣かい？ 君は自分の今までやつてきたことがどれほどのことか理解しているかい？」

有名なんだよ、君も、もちろん、他の君たちも

「…………私たちのことも知っているの？」

「もちろん、君は綾波レイさん、君が惣流・アスカ・ラングレーさん、で…

君が碇シンジくん、だろ？」

「う、うん」

「カラルくん」

「なんだい？」

「僕は君とは戦いたくない…」

シズクの眩暈にまたも頭が混乱するアスカとシンジ。

「戦いたくないって…逆でしょ逆、こいつがファイフスなら仲間つて  
ことじやん」

カヲルは満足気な笑みを浮かべると

「何でも知ってるようだね、シズクちゃん、  
その話はまた今度にしよう、今は新しい仲間として迎えてくれないかな」

「…わかった、よろしく、カヲルくん」

そう言って差し出された右手をシズクは握り返した。

「ファイフス？ 初耳よ、それ」

ミサトはシズクお手製の弁当を摘みながら呆けたように言った。

「昨日、マルディックから報告が上がってきたわ」

リシコがさう言つて箸を口に咥えたミサトに書類を渡した。

「…マルディックたつて、単なるお飾り機関でしょ、  
裏ではどうせまたゼーレが絡んでるんでしょうが」

書類を片手でヒラヒラさせながらハサクハサ。

「もうこいつと、あまつこの場所で発言しない方がいいわね、ビヒ  
で聞かれてるかわからないわよ」

「でも乗るヒヴァアが無いわよ」

「必要ないわよ、彼にヒヴァアなんて」

「じつこひ」とへ。

「あくまで推測に過ぎなこけれどね…シンクロテストをやってみれ  
ばはつきすると思つわ」

-シンクロテスト-

五人のモニターがシンクロ数値と共に映し出される。

レイ・89・1%

アスカ・98・8%

シンジ・99・2%

シズク・99・7%

カラル・100%

「嘘…」

思わず呟きが出たのはマヤだ。

「これで、彼の正体がはっきりしたわね」

「どうこう」とよ?

「うーんでは色々と問題があるわ、後でそうね、加持君の部屋でも

話しましょうか、

出来ればシズクちゃんも呼びたいわね」

「シズクも？」

「感心くは、あの子も気付いてると思つわ、渚カヲルの正体に」

- 加持の部屋 -

「いらっしゃい、三人とも」

加持はやうやくホールドを注いで三人へと差し出す。

「加持、この部屋、本当に盗聴の恐れ無いんでしょ？」

ミサトの問い。

「大丈夫さ、なんなり」の命を賭けたつていいぞ」

「ぐつにあなたの命なんていらないわよ」

「やう言つなよ、葛城以外には賭けたりしないぞ」

「二人とも、独り身には田の毒だからそういうの、やめてくれないかしら？」

リツコの言葉にミサトは真っ赤になつてそっぽを向いて、加持は飄々とした顔で両手を上げた。

「……で、話題戻すけどフィフス…渚カヲル、何者よ？」

「――からの話は全て憶測に過ぎないわ、それでも構わないかしら？」

「勿論」

ミサトが頷くと、リツコは淡々と語りだした。

「多分…彼はゼーレが送り出した最後の使徒よ」

「使徒…彼が…？」

「ゼーレが描いてる人類補完計画、そのシナリオが大幅に狂い始めてる今、

早急に手を打つ必要がゼーレにある。その依り代が渚カヲル。

狙いはセントラルドグマの侵入、そしてサードインパクト、かし

らね

「前から思つてたんだけどさ、何で使徒つてサードインパクトを起こしたい訳？」

「それは、私よりシズクちゃんの方が詳しいんじゃないなくて？」

そう言つてリツ「はシズクを見た。

以前のような冷たさは無い。

どちらかといえば知的好奇心が疼いている、といった目だ。

「シズクが？ 何で？」

「あら、言つてなかつたかしら？ 彼女、シンジ君と同じなのよ」

「何がよ？」

「DNA」

「へ…？」

「つまり、シズクちゃんはシンジ君のクローランである確率が高いのよ  
本人も思い出せないようだから、あまりその事で議論を費やす時  
間は無いけどね」

「リツ」さん、僕はクローランではないですよ」

「そうね、例えクローランだつたとしても、今や完全に別人、失敗作  
よ」

「褒め言葉として受け取つておきます」

「で、シズクちゃん、使徒がサードインパクトを起こしたい目的、  
わかるかい？」

加持が話を元に戻す。

「使徒というのは人類とは別の進化の可能性を秘めた、いわば別種の人間です。

使徒の肉体構成が人間に限りなく近いのは三人とも知っていますよね？」

「そうね」

「使徒は自らが生き延びるためにサーディンパクトを使って単独の種となることを目指します」

「ちょっと会話についていけないんだけど、生きたいならどうかで勝手に生きればいいじゃない、

どうして人類を滅ぼす必要がある訳？」

ミサトの質問にシズクは静かに目を閉じて答えた。

「人間も使徒だからです、使徒は別種の使徒と共存できません

「人間も…使徒…？」

「そうです、第18使徒リリン、人間は遙か昔アダムの手によって産まれた使徒

一種一体の使徒と違い、不特定多数が存在するいわば未完成の使徒なんですよ」

シズクの答えにミサトは驚愕した。

「なんで…シズクはそこまで知っているわけ？」

「僕も、使徒だからです」

シズクは目を開けずに答えた。

「なん…ですって…？」

ミサトは尚も驚愕する。

リツコと加持はある程度予想していたためか、それほど驚いた様子は無かった。

「でも、僕は人類…リリンに生き延びて欲しい、だからもしカヲルくんがサードインパクトを引き起しそうなら戦いますよ、彼と…」

少し沈黙を置き

「仮にセントラルドグマにあるのが本当にアダムなら、の話ですか？」

と言った。

「違うのかい？」

加持が聞く。

「加持さんが聞きますか？」

「やれやれ、手厳しいな」

加持は肩を竦めると口を開いた。

「確かにセントラルドグマにあるのはアダムじゃない、リリスだ。アダムはアスカを運んできたときに司令に渡したから今も司令が持っているはずだ」

「あんた、何で今までそんな大事なこと黙つてたわけ?」

ミサトがジト目で加持を睨む。

「もう怖い顔するなよ、あまりこの件に関して首を突っ込んで欲しくなかつただけだ」

「とにかく」

シズクが話を元に戻す。

「カラルくんは近日中に行動を起こすでしょ?。多分、どれかのエヴァと同期してセントラルドグマを狙はねます。カラルくんもそこにアダムがあると、そう思つてゐるはずです

から」

「エヴァと同期……?」

「カラルくんの能力ですよ、エヴァとほぼ同じ体組織を持つ使徒ならではの能力です。

13使徒：バルディエルも使っていましたがカラルくんは遠隔で

行うことが可能です

「貴方の力ならそれ、封じる」ことが可能じゃなくて？」

リツ「の問い。

力、とはあの光のことだ。

「出来なぐはない、と思いますが、意味がありません。  
そうしたらカヲルくんは単独で向かうだけですから」

そこで一息つくよびに「コーヒーを啜った。

「…ちよつと、苦いですね」

そう言って微笑む。

「ああすまない、砂糖とミルク入れるの忘れてたな」

「はあ…人生生きてきた中で今日が一番驚いたわ…」

「とにかく、彼の今後の行動には十分な注意が必要ね」

「…そうね」

- ネルフ・大浴場 -

「風呂はいいねえ…体の疲れが癒される」

「そうだね」

カラルとシンジは体についた「…」を洗い流すために風呂に入っていた。

「あの…カラルくん、何でチルドレンに…？」

「理由が必要かい？」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど」

「僕も君たちと同じく仕組まれた子供なので、一番近い存在はシズクちゃんだろうね  
綾波さんも似たような存在だけだ」

「シンジくん」

「なに?」

「君はこの世界が好きかい?」

カラルの質問にシンジは少し考へると

「正直言つと、前、ここに来る前までは嫌いだつた、無くなつても  
いことやえ思つてた。

でも、今は違つ、毎日が楽しくて仕方ないんだ、僕はこの世界が  
好きだよ」

「そりゃい」

「いいね、君は、好意に値するよ」

「いって…何が？」

「好きひじ」とね

カラルはそりゃ言つて微笑んだ。

「え、あ、いや、どうもありがと…」

シンジは顔を真っ赤にして俯く。

「面白い反応をするな、君は、とはこゝで君を取つたら惣流さんに怒  
られてしまつかな」

「ア…アスカが何でここに出でてくるのか…」

「気付いてないのかい？面白いな、君は」

カラルはそつとシンジの耳元へと顔を近づける。

「惣流さんも僕と同じ気持ちを持っている、君に好意を抱いているんだよ」

吃驚した表情でカヲルを見るシンジに対し、カヲルは絶えず微笑みを浮かべ続けた。

フィフス・チルドレン（後書き）

アラエルとアルミサエルに関してすつ飛ばしすぎた感がww

## 最後の使者

「… ネルフは我らが手を離れつつある」

無数のモノリスが円卓上に並ぶ。

「左様、だからこそあれを送り込んだ」

中心にはバイザーを被った白髪の老人がいた。

「我らが悲願を成就するために…」

「我ら人間が神に対して贖罪するために…」

「もしあれが失敗したらどうする?」

「裏死海文書による使徒の出現は全部で17体…  
これ以上の使徒でのネルフ侵攻は不可能だ」

「心配はいらない、使徒がダメならば人間がある、  
それに保険のためのエヴァシリーズとそれを動かすための根源も  
既に完成しつつある」

「… では、全ては我らがゼーレのシナリオ通りに」

老人がそう呟くとモノリスは一斉に消え去った。

夜・葛城邸。

カヲルの歓迎会。

ミサトの提案で開かれた催しが行われていた。

聞こえはいいがミサトから言わせればこれは観察である。

シズクから聞いた情報、カヲルの正体。

そしてサーディンパクトの真実。

全てを踏まえ、ミサトはカヲルの存在を危険と判断した。

それに、シズクのことも、だ。

語弊の無いように言つておくがミサトは心からシズクを信頼している。

シズクに自分が使徒だと聞かされたときは確かに驚愕したし  
それ以上に自分たち人間が使徒だということに一番ショックを受けた。

まさか仇だと思っていた使徒と自分たちが別の可能性というあや  
ふやな表現だけで

同じ素体だとは思つていなかつたらだ。

だが、ミサトはそんなことを言つていられる立場ではないし状況  
でもない。

なんとしてでも人類の滅亡は防がなければならぬ。

そうしないと今まで戦ってくれたチルドレンたちにも申し訳が立  
たないからだ。

だが同時にミサトはシズクやレイも一緒に生き残る方法も模索し  
ていた。

これはミサトのスタンドプレーではなく、加持とリツコも協力し  
ている。

ミサトはテーブルを挟んで会話している五人をえびちゅを飲みな  
がら見つめた。

信じられないわね、この五人のうち二人も人間じゃないなんて。

そう思つたところで小さく首を横に振る。

馬鹿な考えはよそ、シズクもレイも今まで自分たち人間のため

に頑張つてきた。

何より信頼の置ける仲間だ。

「大丈夫ですか？」

そこまで思慮していたところで不意にミサトに声がかかる。

銀髪の少年はこっやかに微笑みながらミサトに話しかけた。

「あ、ああ、大丈夫よん」

ミサトはさう言つと一気にえびちゅを煽つた。

そのカヲルの笑顔からはセントラルドグマに  
侵攻する気配が微塵も感じられない、とミサトは思った。

深夜。

カラルはベランダで手すりに背を持たれながら月を見上げていた。

カラツという音が鳴つて、窓が開く。

カラルはこちちらに近づく人影を見て「やあ」と声をかけた。

「…カラルくん」

「どうしたんだい、こんな時間に」

「いや、別に」

「早く寝たほうがいい、何せ明日はきっと朝が早い」

カラルの言葉にシズクは思わずカラルの目を見た。

穏やかな赤い瞳は月を映し出している。

「明日… やる気なんだ」

「そうだね、それが僕がここに存在する理由だから」

「…誰も人形みたく縛られる必要なんてないのに」

シズクが悲しそうに咳くとカヲルは笑つてシズクの頬に右手を添える。

「君は優しいね」

「そんなこと、ないよ」

シズクは悲しそうに微笑んだ。

「予告しておいたが、君と綾波さんのエヴァを使わせてもらいつよ、惣流さんとシンジくんのは魂の存在が強すぎて介入できないからね」

「…止めて見せるよ、カヲルくんを」

そのシズクの言葉にカヲルは満足そうに微笑むとベランダから中へと入る。うつする。

途中シズクと擦れ違こざまじまつづと。

「楽しみにしてこるよ」

と呟いた。

翌日。

-ネルフ本部・ケージ-

「さあ、行こう、アダムの下に

カラルが3号機と零号機の前で両手を広げると  
3号機と零号機が拘束具を解除して自動で動き出す。

そのままカラルは一機を伴いセントラルドグマへと侵攻を開始し  
た。

サイレンが鳴り響く。

モニターに映し出されるカラルの姿。

「カラル…くん…？」

Hントリープラグの中でシンジが呟いた。

『//サト、どうこう」とよつて…なんであいつが…?』

『彼は使徒よ、現在セントラルドグマに侵攻中』

アスカの問いにミサトは直球で答えた。

「使徒…カラルくんが！？」

『渚カラル…いえ、目標は現在セントラルドグマへと降下中、3号機と零号機を遠隔操作で操つて中央にいるアダムと接触するつもりだわ』

「…そんな」

『仲間のふりして近づくなんて随分卑怯なことやつてくれんじやないっ！』

『一人とも、すぐに追つて、何としてもサードインパクトだけは避けなくてはダメよ』

「でも…カラルくんと戦うなんて…」

『あんたね！このままじゃ人が滅びるのよっ！…やるしかないでしうがっ！…?』

回線越しに話しているアスカの声もどこか納得のいっていない、という感情がこもっていた。

初号機と式号機が出撃する。

追つてくる一体のエヴァを見てカラルは微笑んだ。

『シンジ、3号機をお願い、私は零号機を抑えるわっ！』

「…」解つ！

初号機と式号機はプログラマを同時に構えてそれぞれナイフを振り下ろした。

「ここで足止めしていくれ、いい子だから」

カラルは一体のエヴァにそう言つと一人、スピードを上げ降りていぐ。

『不味い！逃げられる！』

ミサトの通信が響いた。

『…この…』

式号機が零号機を蹴り飛ばすと持っていたナイフをカラルに向かって投げた。

カラルに当たる直前にA・T・フィールドによつてナイフは弾かれる。

「A・T・フィールド…！」

シンジはここでよつやく、カラルが使徒であることを思い知られた。

「何をそんなに驚いているんだい？君だつて持つていい、心の壁、

絶対領域。

別に不可思議な現象じゃない

そう言い残すとカラルは真っ直ぐ下に下りていった。

『逃がすもんですかつ！』

式号機が追おうとしたところを思いつき零号機が蹴り飛ばす。

『…くあつ！？』

「アスカ！」

初号機も3号機の両腕を掴んだ状態で膠着していた。

セントラルドグマの底へと辿り着き、そのまま十字架に貼り付けてされた巨人を目指すカラル。

その巨人の目の前に二対の人影があった。

「やあ、随分、早かつたね」

「…昨日、忠告してくれたからね

「……」

シズクとレイがカラルの前に立つた。

「どうしても邪魔をするのかい？」

カラルの声にシズクは巨人を指差すと。

「あれはアダムじゃないリリスだよ、カラルくん」と言った。

カラルは目を見開く。

「……」

ふわり、と空に浮かびリリスへと手を伸ばす。

「……確かに、君の言つとおりだ、これは計られたな」

シズクはカラルに向かつて右手を振った。

「だから……サーディンパクトは起こせない、僕たちが戦う理由は無いんだよつ！」

「戦う理由？それは確かに消滅したね、でももう一つ消滅したもの

もある「

「…………何？」

レイがカヲルに厳しい視線を送りながら聞いた。

「僕の存在意義だ」

カヲルはそう言つと地面へと降り立つた。

「僕はここアダムと同化してサードインパクトを起こす、そのためだけに作られた運命の子だ、それが無くなつたならいなくなるのが道理だ」

「違う」

シズクは右手をぎゅっと握り締めて呟く。

「何が違う？どうせ生き残つたって後に待つのは滅びのみだならば、せめて自分の死に方くらい、自分で選ばせてくれ

「違う、違う…違う…！」

「可笑しいな、シズクちゃん、何をそんなにムキになる？」

「だつておかしいよ！誰がカヲルくんを滅ぼすつて決めたの！？誰が使徒同士は存在できないつて決めたの！？」

僕もレイも使徒だけどシンジくんやアスカと一緒に生活出来てる！…！」

シズクは握り締めた右手を前方に振り払って叫んだ。

「それだって一時的なものだ、僕たちはリリンが生き残るために滅びるしかない」

そういうカヲルの表情に変化はない。

「…………でも、滅びの時が来るまで自分の意思で生きる」とは出来るわ」

レイが一步前に出てそう言った。

「…………確かに何時か私たちは滅びる運命なのかも知れない、でも、だからと書いて死と生が等価値とは思わない」

「それは君の思想だろ、綾波さん、僕にとっては死と生は等価値なんだよ」

「だったらそれをこれから変えていけばいいだろっ！」

「僕は綾波さんとは違う、そう簡単に変われない」

「そんなの……やってみなくちゃわからないじゃないかっ！？」

ドボ――――――――――――――――――

四体のエヴァが同時に着水した。

カラルはシズクとレイに軽く微笑むと初号機に向かつて歩き出す。

「ああ、シンジくん、君の出番だ」

「カラルくん！」

シズクの叫びを無視するよつにカラルは続ける。

「僕は退場する時間だ…殺してくれ、君の手で」

初号機と二号機は動かないまま沈黙だけが過ぎていった。

『…………いやだつ』

シンジから聞こえるか聞こえないかといつ声量で返答が返つてくる。

「…何故？」

『カラルくん、僕のこと好きだつて言つてくれたつー…?あれは嘘だつたのかつー!?』

「嘘じやない、君のことが好きだ、だから頼んでる」

『僕だつてカラルくんが好きだ、まだ余つて口が浅いけど、

それでもカラルくんを、好きな人をこの手で殺すなんて出来ないよー。』

「それを僕が望んでいるとしても？」

『……出来ないよっ……』

突如、武甲機のHントリープラグがイジエクトされる。

ザバアッといつ音と共に「・し・」が放出されてアスカが怒りの形相で出てきた。

滑り降りるよひに地面へと立ち、カラルの下へと歩幅を上げて歩んでいく。

カラルの胸倉を掴み、自分の方へと引き寄せた。

「あんたバカア！？シンジに何残酷なこと頼んでんのよっ……死にたきや自分で死ねばいいでしょー自分の都合に人様巻き込んでんじや無いわよっ！！」

カラルはそう怒鳴ったアスカを見てふと微笑むと

「やっぱり思つたとおりだ」

と囁つた。

「何がよっー？」

「君もシンジくんが好きだと囁つ事をぞ」

「なつ……！？」

「照れなくてもいい、今の言葉を聞けば分かる。  
でもそれなら僕の気持ちも理解してもらえないかな、せめて最後  
は好きな人の手で死にたい」

「だからっ！何でそこで自分が死ぬ結論に達するわけっ！？」

アスカの問いにカヲルは少しだけ驚いた顔をすると。

「どうせ僕は死ぬんだ、これに失敗すればゼーレは黙つてはいない。  
全力で僕の存在を抹消しにかかるだろう、どうせ死ぬなら好きな  
人の手で死ぬのがいい」

「だったら！あんたを！私たちがつ！守ればいいんでしちがつ！  
！」

アスカがガクガクとカヲルを揺さぶりながら一言一言にアクセントをつけて怒鳴り散らした。

「使徒なら絶対滅びるべき！？だったらレイはどうなるのよつ！？  
レイも何時か滅びるとでもいつの……？」

「その通りだ、僕も綾波さんもシズクちゃんも、  
君たちリリンクが生き延びるためには滅びなければならない

『シズクも…つじづくこと？』

「シズクちゃんも使徒という意味だ」

シンジの疑問に答えたカヲルの答えはシンジとアスカに少なからず衝撃を与えた。

だがアスカの怒りの沸点は今、そこにはない。

”そんな些細な問題”はアスカにとつてどうでも良かつた。

「私はねつ、そんな未来絶対に認めないわっ！」

レイもシズクも勿論あんたも、そして私たちも全員生き延びる未来を選んでみせる！－！」

「強情だね、惣流さん」

「あつたり前でしょっ！？人の生き死にが懸かってんのよ－！」

「僕は人じやない、使徒だ」

「そんなこと関係ないっつてんでしょうが－！」

アスカの堪忍袋の尾がぶつんと切れて勢いのままカヲルを殴り飛ばした。

はあ、はあ、と息を乱しながらアスカがカヲルに近づく。

再度カヲルの胸倉を掴むと今度は自分から顔を近づけた。

「いい？物分りが悪いよつだから何度でも言つわよ－」

私はあんたを、仲間として迎えたのつ－！シンジだつてそうよ－！だから、私もシンジもシズクもレイもあんたを殺さないし、殺さ

せない！……」

カラルは呆けたようにアスカを見ると。

くくっと笑い出して遂にはセントラルドッグマガカラルの笑いで包まれるんじゃないかといつぶらに笑った。

「何がそんなに可笑しいのよつー？」

「いや、失礼…一口にリリンと言つても色々な思考の持ち主がいるものだと思って、老人たちは実に対照的な考え方をするな、君たちは面白い、實に興味深いよ、君もシンジくんも」

「カラルくん」

そう言つてシズクがカラルに近づく。

「なんだい？」

「…これから、かつて無い戦いが起きる…分かるだろ？ゼーレがこれに失敗したら次にどんな行動を起こすかくらい。それに司令の計画だつて全て防げたわけじゃない、だから…さ」

シズクは右手を差し出す。

「…カラルくんが飽きるまで構わない、手を貸してくれないかな？人類が…リリンが正しく生き延びるために…」

「…僕が惣流さんやシンジくんに飽きたままでこいつ意味かい？」

「別にそつ捉えてもらうてもいい」

「…途中でリタイアするかもしれないよ?」

「構わない」

「…アダムを見つけたらその場でサーディンパクトを引き起こすかもしれないよ?」

「それはさせない、けど…お願いする」

レイもシズクのすぐ側まで立つてそっと右手を差し出した。

沈黙が辺りを支配する。

暫く経つとカラルの口から溜め息が漏れた。

胸倉を掴んだアスカの手をそつと解くと、カラルはシズクとレイの方を向く。

「シズクちゃん」

「何?」

「君は僕が質問している間もずっと右手を差し出したままだね」

シズクはちらりと自分の右手を見た。

「うん」

「……まあ、自らに好意を抱いて差し出された手を振りほどくといつのは僕の趣味では無いし、それにシンジくんの気持ちも少し、理解できた」

「…………じゃあ」

レイがそう呟くと。

「……ああ、僕が飽きるまで、という条件の下、進化への可能性を拒絶した三人組結成といつことだ……」

そう言つてカヲルはシズクとレイに右手を伸ばす。

三人の右手がそれぞれこつん、と触れ合つた。

シンジが初号機から降りてこちらへ向かつてくるのが確認できた。

「アスカッ！」

「……ま、成るよつに成るんじゃない？  
生きるための理由はなんか気に入らないけど、だからと言つて仲間だったら使徒でも殺す、なんて真つ平ごめんだし……」

満更でも無む邪じやな微笑みを浮かべてアスカはやつ笑いた。

「……やう、だね」

シンジもシズクたちを見て呟く。

「やつ……言えば、や」

「何よ?」

「僕の」と…好きつ、て…」

真つ赤になつて俯きながら口に出したシンジの台詞に  
アスカも顔を真つ赤にしてシンジから顔を背けると

「か、勘違いするんじゃないわよ、友達としてよ、友達としてつー。」

と呼口で捲くし立てた。

「……やつか、そうだよね」

そう言つてシンジは、はははと笑つ。

「…………」の超鈍感男つ」

アスカは明後日の方向を向いたままぼそつと誰にも聞こえない声で呟いた。

## カヲルが加わった日常

「えー、今日から転校してきた、渚カヲル君です」

老教師がそう言つとカヲルを紹介する。

色めきたつ女子の声。

「よひしへ」

そう言つとカヲルは軽く微笑んだ。

「けつ、なあんかいけ好かないやつちやのぉ」

トウジが両手を頭の後ろに組んで足を机に投げ出してそう言つた。

「そんなこと無いよ、僕たちの仲間なんだから」

シンジが苦笑してトウジに言つ。

「仲間って、じゃあ、あいつネルフのバイロット！？」

「え、うん、そり…なるのかな」

「く〜、いいなあ、俺も乗りたいなあ、エヴァー！」

ケンスケは両手を握つて羨望の眼差しでカヲルを見た。

「面白い所だね、こじは

カラルがシズクに向かつて話しかける。

「死なないで、良かつたろ？」

「さあ、それはどうかな」

意外にカラルくんつて強情だよな。

そんなことを思つてシズクはくすりと笑みを零した。

「いいね」

シズクを見てカラルも笑みを零す。

「何が？」

「やつぱり君は笑つところが似合つよ」

カラルにそう言われてシズクの顔が赤面する。

「そ、そんなこと、ない、よ」

「……貴方は碇くんが好きなんじゃなかつたの？」

若干、不機嫌そうにレイが呟いた。

「僕はシンジくんは好きだけど同時に惣流さんも好きなんだ。  
だからシンジくんは惣流さんに譲る、そしたら次に好きな人は?  
答えは君だ、シズクちゃん」

「な、な、な」

シズクはカヲルの言葉に思わず口が回らなくなる。

「どうだらう? 同じ人で有り難い者同士、仲良くしてくれないかな」

そう言ってカヲルが目を細めて微笑んだ。

シズクはちょっとだけ視線をカヲルからずらすと、

「か、考えさせて」

とだけ呟いた。

「…………シズクは渡さない」

嫉妬心を丸出しにしてレイがシズクとカヲルの前に立つ。

「いいだろう、勝負するかい? 綾波さん、シズクちゃんを賭けて」

「…………望むところよ」

レイは至極真面目に、カヲルは実に楽しそうに会話をする。

両者から火花がバチバチ、というよりは一方的にレイから火花が奔つており

カヲルはそれを真正面から平然と受けている感じだった。

シズクはそんな二人を見ておろおろと両手を右往左往していた。

「さいつてえ！シンジに振られたからってすぐにシズクに行くの？  
節操ないわけあんた？」

しかも何？そもそもあんたホモなの？普通なの？」

アスカがジト目でカヲルを睨みながらそう言つと別段気にした様子もなくカヲルは

「僕は使徒だよ、惣流さん、使徒に性別の概念は無い。  
それ単体が完全な生命体へと昇華しているわけだけらね。  
君らリリンのように無意味に増えることもなければ生殖行動を行うことも無いよ」

「せ……生殖行動ってカヲルくん……」

「じゃあ何でシズクな訳？シズクが女だからじゃないの？」

「別に、単純にシズクちゃんに興味を持つたからさ、もちろん君にも興味がある。

まあ君一人じゃない、もう少し言うと君とシンジくんが一緒にいるところを見ることに興味があるんだ」

カヲルのその言葉にアスカとシンジは同時に赤面し  
「あ…「つ…」とか咳きながらモジモジとお互いを見合せた。

- 放課後 -

「歓迎会? 僕のかい?」

「うん、ミサトさんが前のは本当の歓迎会じゃないから  
今度は本当の意味で歓迎したいって…何か今日用事あった?」

シンジの言葉にカヲルが微笑む。

「いや、何もないよ、そつだな、お邪魔をせてもらおひ

「当然よー。あんたの歓迎会なんだから主役が来ないとお話にならないでしょっ!」

そんなアスカを見てカヲルは

「ああ、でも惣流さんとシンジくんの邪魔はしたくないな」

と若千、意地悪そうに言ひ。

「な、何であんたが来ることと私とシンジがどうとかと関係があるのよー！」

アスカが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「冗談だよ、本当に見ていて飽きないな、君は」

からかわれた、というのが分かつてアスカの頬はますます赤みを帯びる。

「何よー、何でも分かつたような顔してさー」

そう言ひとアスカはふんっとそっぽを向いた。

- 夕方・葛城邸 -

「言つておくけど、私、シズクたちほど貴方の事、信用してる訳じやないからね」

ミサトがえびちゅを飲みながらカヲルだけに聞こえるように呟いた。

「構いませんよ、僕もその方がやりやすい」

「何かやる気…？」

カヲルは肩を竦めると

「別に何も、今はシズクちゃんのやる事に付き合ひ」と、シンジくんたちの未来を見てみたいこと、それだけですよ」と言った。

「おまたせー」

シズクがそう言つと料理を運んできた。

「これがシズクちゃんの料理かい？とても美味しそうだ」

カヲルはそう言つて微笑むと箸を掴んで唐揚げに箸を伸ばした。

「あ、いらっしゃんたつ！その唐揚げ私が狙つてたんだからねつ…！」

アスカがそう言つてカヲルの掴んでた唐揚げに自分の箸を伸ばした。

「アスカ、二人箸はしたらダメだよ、まだ沢山あるから」

シズクが苦笑しながら残りの唐揚げを2・3個小皿に取り分けるとアスカの前に置いた。

「一人箸? 何よ、それ」

アスカがカラルの唐揚げから箸を離して自分の目の前の唐揚げを口の中へと放りながら聞く。

「箸のマナーの一つだよ、二人一緒に料理を挟んじゃダメっていうやつ」

「そんなマイナーなマナーなんて知らないわよ、楽しく食べれればいいじゃないの」

納得いかない、といつた顔でそれでも唐揚げの美味しさに思わず顔が綻びながらアスカが呟いた。

「郷に入つては郷に従え、日本にいるんだから日本の仕来りを守りなさい」

ミサトがそう言いながらどれにしようかな、とか言いながら料理を探つた。

「…………ミサトさん、迷い箸もマナー違反」

ぼそっとレイが呟いた。

「あ、あら、やだ、レイ、わかってるってばーほほほ……」

ミサトは焦つて近くにあつたサラダを掴みひょいと口の中に入れ

た。

「ふつ……」

「あ、シンちゃん、今笑つたでしょ？」

「い、いえ、笑つてませんよ、別に」

シンジは慌てて両手を前に出してブンブンと手を振つた。

カヲルはそんな光景を楽しそうに眺めていた。

-深夜-

「楽しかつたかい？」

みんな眠りについたころ、まだ起きていたシズクがカヲルに向かつてそう言つた。

「そうだね、こんな愉快な気持ちは生まれて初めてかも知れないな」

カヲルは微笑んでそう言つた。

「カラルくん、死んでたらこんなこと味わえないんだよ、生きてるから楽しいとか愉快とかそういう気持ちになれる。それは人も使徒も変わらない、と僕は思つてゐる」

「… そうかもしないね」

「だけど、楽しかった日々もきっと今日まで、明日はきっとネルフ本部は

今まで一番の地獄を迎えることになる…」

シズクが悲しそうに呟いた。

「老人たちは恐らくリリン同士で潰しあわせる気だらうね、でも君たちのエヴァがあれば他の兵器なんて問題ないよ」

「… 戦自だけが介入してくるだけなら確かに問題はないよ」

「君が危惧してるのはエヴァシリーズのことかい？」

カラルの言葉にシズクの瞳が揺れた。

「… さうだよ、たぶん乗っているのはカラルくん、君のダニアだ」

「S2 機関搭載のエヴァシリーズ9体を戦線に送り込んでくると確かに厄介だ」

「それに、司令もまだ何をするかわからないし、ね

「全部明日になればわかるよ、シズクちゃんは自分の思つたとおりの行動をすればいい、

僕は、君との約束を守る…シンジくんと惣流さんが幸せになる世界を作る。

あの二人はいいね、見ていて飽きない、決心が鈍りそうだ」

カラルはそう言つと微笑んでリビングで寝ているシンジたちを見た。

「そう、だね…カラルくんの言つとおりだよ」

シズクもシンジたちを見て薄く微笑んだ。

## 戦自突入

「了解、これより突入を開始する」

重装備に身を固めた男たちが通信をしている。

直後、巨大な爆発と共にネルフ本部の外壁に穴が開いた。

揺れる本部内。

遂に… 来た。

戦自がネルフへの侵攻を開始した、とシズクは確信した。

「ミサトさん」

「わかつてゐるわ、状況は！？」

「既に第4地区まで占拠！ 狹いはケージの模様！！」

「…しゃらへせい… エヴァが狙いつつわけね」

ミサトがちりと舌打ちをするとチルドレンたちの方へと振り向い

た。

「各パイロットはすぐにエヴァに乗り込んで一生身のままだったら殺されるわよ……」

「INの…される…? なんで戦自が僕たちを…?」

「ゼーレが裏流しでもしたんじやないかな」

シンジの問いにカラルが答える。

「ゼーレが…?」

「そう、多分、ネルフの真の目的はサードインパクトによる人類の抹消…とかね」

「そんな…」

「戦うんだ、シンジくん」

「でも…相手は使徒じゃない、人間だよ…」

「じゃあ、君は僕が相手だつたら戦っていたのかい?」

「…それは…」

「シンジくん」

シズクがシンジの肩に手を乗せた。

「何が正しいのか何が正しくないのかなんて、後で考えればいい  
とりあえず、今は生き延びる…それだけを考えるんだ」

シズクの言葉に少し俯いた後シンジは静かに頷いた。

「それじゃあ、僕は行くよ」

「…頼んだよ、カラルくん」

シズクの言葉にカラルは軽く手をあげると

「嘘つきは、嫌いだよ」

と言つて発令所を出て行つた。

-エレベータ前 -

「フィフス発見！これより排除する…！」

カラルの前に5・6人の男が立ちふさがつた。

手にはライフルを持っている。

男たちのライフルが一斉に火を吹いた。

ガキキキイイイイイイイイイン！！

カルの目の前でライフルの弾が全弾、弾かれる。

「なつ！？」

男の一人が動揺を隠せずたじろいだ。

悪いけど、これから先へは進まれないよ」

カラルが軽く手を前へと出した。

吹き飛ぶ男たち

次々来る増援もカラルは紙ぐずを千切る子供が戯れるかのように  
増援を吹き飛ばす。

式号機・エントリー プラグ内

ママ…私を、みんなを…シンジを、守つてね…

式号機が静かに起動した。

- 零号機・エントリープラグ内 -

シズクの話では、"これ"が最後の戦い。

たとえ私は消えてもいい、滅んでもいい。

碇くんとアスカ、それにシズクが生き残る未来を掴むために……！

レイの瞳に強い意志の力が宿った。

- 初号機・エントリープラグ内 -

まさか人間同士で争うことになるなんて……

シンジは懸命に首を横に振った。

シズクの言つとおり、今は生き延びることを考えないと。

シンジはそつと操縦桿を握った。

- 3号機・エントリープラグ内 -

遂に…といつべきか。

やつと、とこつべきか。

この時が来たな、とシズクは思った。

本部の中はカヲルが抑えてくれる。

なら、外の侵攻、そしてやつてくるあるいはHガア・シローズとの戦い。

それを抑えるのは自分の仕事だ。

シズクは静かに目を閉じた。

「Hガア 各機、発進…」

ミサトの号令と共に四機のHガアがジオフロント内へと飛び出した。

『あれは…?』

周りを囲んでいたのは戦車や戦闘機が大多数を占めていたが

その中に見覚えのあるロボットが何体かいた。

『トライデント改…』

シズクが呟く。

『……あの時田とかいうおっさんの話の事がドンピシャしたってわけかっ！上等じゃない…』

『アスカ！くれぐれもケーブルの断線には気をつけろ…』

『わかつてゐるわよつ…』

もうひとつ式号機は空中で一回転してそのまま戦闘機に墜落としを喰らわせる。

砕け散る戦闘機を確認する間もなくそのまま右手を戦車大隊に向けて振るつた。

展開されるA・T・フィールド。

その強靭なフィールドの前に次々と戦車は砕け散つた。

「ぐつ…ケーブルを狙え…！」

指揮官らしき男の言葉が轟く。

『…………やせなー』

零号機が式号機の横に着いた。

レイのA・T・フィールドが式号機のケーブルを守り、零号機のA・T・フィールドが零号機自身を守る。

『綾波つ！』

『…………平々々』

『助かつたわつ、レイー！』

初号機に三機のトライデント改が襲い掛かる。

シンジは初号機の身を捻りせてそれらを回避し、一機の攻撃をA・T・フィールドで防いだ。

『……何で、何で、僕らが戦わなきゃいけないんだつ……』

そのまま回し蹴りを一機のトライデント改に加える。

更に、初号機の足からA・T・フィールドが展開されてトライデント改は完全に圧壊した。

「Ｚ２爆雷を準備しろ！…出し惜しみをするな…」

指揮官の指示が飛んだ瞬間、上空から無数のＺ２爆雷が投下された。

3号機が黙つて空高く腕を上げる。

『A・T・フィールド、全開…！』

3号機のシンクロ率が瞬間に200%を越す。

上空に張られた巨大なA・T・フィールドが全てのＺ２爆雷を遮断した。

「空が駄目なら多方向から攻めろ！…ってえ…！」

3号機に向かつて全方向より発射されるＺ２爆雷。

避けるわけにはいかない…

爆発した余波で本部がやられてしまつ。

両手を左右に伸ばしA・T・フィールドを両面へと展開する。

「左右だけじゃ…足りない…！？」

シズクがそう思った瞬間。

前後のZ2ミサイルが急に沈静化して、地面へと落ちた。

『なんだ…？』

「な、何が起こった！？」

『はーい、碇シズクさんと他のチルドレンたち、元気してた？』

エヴァ各機に通信に入る。

霧島マナの声だった。

『…マナ？』

『正解、私たち第13番機械工作隊は室長命令により、ネルフへ

と協力します』

マナの通信と同時に後方にいた一機のトライデント改が別のトライデント改を襲う。

『覚えてる?シンジくん、あの時は強引に誘つてごめんね、これでチャラつてこと』

『う、うん、助かった、ありがと』

『いいのよ、私はトライデント改の操縦を出来ないから後方支援に回るけど、

お礼は改めてムサシとケイタにも言つてあげてね』

そう言つと通信が切れた。

『あのおっちゃん…自分の立場が危うくなるでしょうに…全くお人好しなんだからっ!』

そうアスカがどことなく嬉しそうに叫ぶとムサシとケイタが乗つているであろう

トライデント改の前にA・T・フィールドを展開する。

攻撃を受けそうになつた一機への攻撃はそのA・T・フィールドによつて無効化された。

「忌むべき存在エヴァンシリーズ…そして戦自も一枚岩では無かつた」

「やはり毒には毒を持って制さねばなるまい」

黒い空間にモノリスだけが浮かび静かに言葉が響いた。

「IJの感覚は…？」

ほぼネルフ内部を鎮圧したカヲルが呟いた。

「流石だな、渚カヲル君、これが使徒の力か」

加持が拳銃に弾を込めながらそう言った。

「大したことじやないですよ、不完全な生命体に負ける要因が見当たらない、

それよりも… 来ましたよ」

「…何がだい？」

「ゼーレが完成させたエヴァ 量産型… 流石にみんなもこいつらには苦戦…？」

そこでカラルの言葉が止まつた。

「どうした？」

「！」の感覚は… アダム…？ 場所は… 地下か、  
… 加持さん、すみませんがこの場は任せますよ」

加持は何も聞かずマガジンの交換を終えると

「任せろ」

とだけ言った。

- 人口進化研究所 -

「始まつたか…」

ゲンドウは硬化バークライドで固められたアダムを解放する。

「…人に必要なのは贖罪などではないという事を教えてやろう」

そう言つとゲンドウは右手でアダムを掴み自らの口の中へと放つた。

ジオフロント上空に九機のグロテスクな容貌のエヴァが空を円に描く。

『エヴァシリーズ…完成していたの?』

アスカが廻る量産機を見てそう呟いた。

『あれにも…パイロットが?』

これはシンジだ。

『……いや、ダミーシステムによる無人操作だ』

シズクが答える。

『手加減はいらないってわけね、上等つ！』

『…………アスカ、気をつけて』

『わかつてゐつー』

降りてきた一機の量産機の攻撃を避けながら  
式号機はそのまま両手でその量産機の首を掴む。

『はああああああああああつーーー』

式号機が力を込めるど「キッ」という音がして一機はその場にだら  
りと両腕を下げた。

『みんなーあの剣はA・T・フィールドで受けんなーロンギヌス  
の槍だつー！』

『ロングニスの槍！？』

『…………了解』

『ちつ、厄介なもん、持つてきてくれちやつて！』

迫り来る槍を避けながらアスカが吼える。

式号機の隙間を縫うように零号機が接近してプログナイフで量産機の左即頭部を刺した。

『…………一休目！』

3号機が一機の量産機の腕をへし折つてそのまま槍を奪い取る。

奪い取つた槍を真横に振るつてその量産機の首を薙いだ。

ガインガインガインガインガインガインッ！

それを見て接近してきた別の量産機と槍同士で打ち合つ。

『シンジくん！』

シズクの声に初号機が反応して3号機と敵対していた量産機の頭を蹴りで潰した。

『シンジくん、これを使って』

そう言つて3号機は初号機に槍を渡す。

『ありがとう、シズク』

『ん、でも槍をただの武器とは思わないで…持つてる時も油断しないでね』

『わかつた』

そう言つと一機は襲い掛かってきた一機の量産機の方へと振り向いた。

瞬間、一機の量産機の腹部が横から飛んできた槍によつて串刺しになる。

ボケア…と苦しそうにのた打ち回り一機の量産機は沈黙した。

シンジとシズクは同時に槍の飛んできた方向を見る。

先ほど倒した量産機から奪つた槍を放り投げた式号機の姿があった。

- 人口進化研究所 -

「さて…上手く行くといいが…いや、上手く行かないはずが無い」

そう一人呟くとゲンドウはおもむろに”レイ”的姿をしたそれに右手を伸ばす。

右手には一つの皿が浮き出ていた。

「何をする気か知らないけどそこまでだ、碇司令」

ゲンドウが声のする方に静かに振り向く。

そこにはカラルがいた。

「まさか、アダムを自身の体内に取り込むとは思わなかつた」

カラルが肩を竦めてそう言つた。

「……渚カラル、タブリスか」

「これでサードインパクト起こせるのはエヴァシリーズとそして、貴方といふことになる」

「…私を止めるつもりか」

「それが彼女との約束なんでね」

両者の間に沈黙が奔る。

同時に人口進化研究所全体を覆うほどのA・T・フィールドが展開された。

- ネルフ発令所 -

「今度は何つ…？」

「ミサトが焦燥氣味にマコトに聞きだす。

「セントラルドッグマより直上の位置から一つのA・T・フィールドを確認。

どちらもパターン青、一方は渚カラル…もう一方は…え…？」

「どうしたの？」

「あ、その…碇…司令です」

「なんですか…？」

「碇め…自らの手でシナリオを完結させる気か…」

冬月の呟きは誰にも聞こえることなく響き渡った。

司令…貴方はこれで本当に良かったんですか…？

リツコの右手がぎゅっと握られる。

訳が分からず震えるマヤの肩にそっと手を置くと

「大丈夫よ、マヤ、あの子たちがいるんだから」

と言った。

やれやれ…何時からこんな人に氣を使う性格になつたのかしら…  
ね。

リツコはそんなことを思いながらもこんな性格も悪くはないわね、  
と思つた。

福音が鳴り響く（前書き）

最終話です

『これで…ラストオオオオオオオオオオオオオオ…』

式号機が左腕を思い切り振るつて最後の量産機の頭を潰した。

『はあ、はあ…大したこと、無かつたわね』

アスカが額を拭うとそう咳いた。

『アスカ！後ろに跳べつ！！』

不意にシズクの通信に入る。

アスカは反射的にその場から後ろへと跳んだ。

空を切る頭を碎かれた量産機の攻撃。

『そんな……倒したはずなのに……』

シノジの歴史。

こつちもだわ

零号機が3号機と背中合わせになると  
グジュグジュと音を鳴らし復活する量産機を見てそつ言つた。

「S2機関でほぼ半永久的に活動するエヴァシリーズ…正に、神をも恐れぬ行為ね」

リツコがその光景をモニターで見ながら呟いた。

「何か方法は無いわけ？」

ミサトがリツコに問う。

「…残念ながら今のところ、無いわね。四人がどれだけ持つか…それだけが焦点よ」

リツコの答えにミサトはモニターを見て唇を噛んだ。

何が作戦部長なのか、何が保護者なのか。

今、現実にあの子たちを救う術が見つからない。

そう思つた時シゲルの叫び声が発令所内に轟いだ。

「ち…地下の司令が、昇つて来ます！パターン青のまま…！」

そう言つた瞬間、発令所の底に穴が開きそこからゲンドウが飛び出した。

追う様に力ヲルが飛び出してくる。

A・T・フィールド同士が激しくぶつかり合いながら尚も上昇していく二人。

「行くんだな…碇」

冬月の咳きにゲンドウは微かな咳きを持つて返す。

「…世話になつた」

冬月には確かにこう咳こたように聞こえた。

ネルフ本部のペラリニアード上の天辺からゲンドウとカヲルが飛び出した。

『何…あれ…！？』

式町機が量産機の攻撃を避わしながらそう言った。

各エントリー・プラグ内に一つの影がモニタリングされる。

『…父さん！？』

シンジの言葉とほぼ同時に空中に浮かんだゲンドウが右手をかざす。

右手の甲の目が開き、黒い光を発した。

グルエ…グルア…

『何…？』

光が発せられたと思ったその瞬間から量産機たちが一斉にもがき苦しみだす。

一体、一体が順番に行動不能に陥つて、そのまま地面へと崩れ落ちた。

黒い空間にモノリスが浮かぶ。

「碇め……まさか、アダムと融合するとは……」

「！」のままでは我々の計画が…

「…問題あるまい、目指す所は違つても結末は同じだ。

人類は全て等しく一つに混ざり合い、究極の生命体として永劫に生き続ける

「左様、我々の代わりをあの男が為そつとしているのだろう」

「では…最後の時を見届けよう

そう言つとモノリスは空間から消え去つた。

ガゴン、と初号機の顎が急に開いた。

『何だ…！？僕は何もしてないぞっ！？』

ヲヲツヲオヲオツヲヲヲオヲツヲオヲヲオオヲヲ…！…！

初号機が吼えるとアンビリカブルケーブルが強制的にイジエクトされてゲンドウを睨む。

『いけない！アスカッ！初号機を止めろ！…！』

シズクが叫ぶ。

『またダミーなの！？』

ゲンドウに向かっていつた初号機を式号機が追う。

『いや、この感じはダミーじゃない…碇ユイの意思だ…！…！』

シズクの答えを聞く暇も無くアスカは式号機を解放した。

式号機の四つの目が金色に光り輝き、シンクロ率は250%をオーバーした。

顎が大きく裂けて、初号機へと跳ぶ。

ガシッと初号機の右腕を掴む式号機。

初号機はそんなことはお構いなしに式号機を引きずるよつにゲン  
ドウの元へと向かつ。

「来い… ュイ…」

ゲンドウが右手を差し出す。

ズンッ！！

と右腕がA・T・フィールドによつて切断された。

ゲンドウは右腕から迸る返り血を浴びながら発信源を静かに睨む。

そこにはカラルが両手を前に突き出していた。

「油断したね。これでもうサードインパクトは起こせない」

「…油断？そんなものをした覚えはない」

ゲンドウがやつぱり腕が瞬時に再生される。

「なつ…？」

カラルが驚愕に目を見開いた。

「私はアダムと一つになった、このくらいの血口修復など容易いことだ」

やつぱりゲンドウがカラルに向かつて目を見開く。

刹那。

カラルにA・T・フィールドが襲つた。

「…くつ…？」

空中で回転しながらなんとか止まるカラル。

ゲンドウは再び初号機に向けると右手を差し出す。

『父さん、何で空に浮いてるんだよー？ 初号機をどうみつけて  
んだよー！ ……？』

シンジの絶叫がジオフロント内に響き渡った。

「シンジ、少し黙つていろ」

そういつたとゲンドウの右手の皿が黒く光る。

シンジはその光を見ると急速に意識が遠のいた。

『シンジッ…ちよつと、返事しなさこよつ…シンジ…』

初号機に引きずりながらアスカが叫ぶ。

『…レイ』

食い入るようにその光景を見ていたレイの零号機に個人回線が割  
つて入った。

『……なに、シズク』

『 わよなじだ…今まで、ありがといへ』

セイハチツヒ、三号機が零号機の横を駆けた。

『…………シズクッ…』

いや、いや、イヤ、イヤ、イヤッ！

私を置いていかないで…！

レイは無我夢中で三号機の後を追う。

初号機は式号機を乱雑に振り払つと、一枚の翼を展開してゲンダウの元へと跳んだ。

式号機が地面へと落ちる。

『…………ヘン、シン…ジ…』

初号機に向かつて左手を伸ばす式号機。

その横を3号機が跳んだ。

「シズク！？」

ゲンドウの右手と初号機の「アガ重なる。

「さあ……神の誕生だ、今こそ、全人類に復讐する時が来た、  
その為の力をユイよ……私に与えてくれ」

ケンドウが駆くと初回機の「ア」の中、「ア」ぶつと右手を差し込む。

3号機から眩い光が発せられた。

呼応するかのよつて、ゲンドウの右手が初号機のコアの中からドス

黒い光を放つ。

「結局、最後まで立ちはだかるのは貴様か…」

『サードインパクトは起こさせないつーもつあんな世界は沢山だ  
つー!』

3号機が初号機の背中を掴む。

3号機は光に包まれて一見すると薄い繭の様にもなっていた。

「人知を超えたその力…だが、私の勝ちだな、碇シズク」

『負ける…もんかああああああああああああああああああ…』

3号機の光の光量が増す。

ゲンドウの右手の黒い光の量も同時に増す。

その時、そつと3号機の肩にカラルが手を触れた。

「僕の力も全て貸そう、君の願いは僕の願いだ…」

カラルがそう言つと肩に乗せた手に力を込める。

僅かに3号機の光がゲンドウを押し始めた。

「……無駄だ、私は全ての使徒の始まり、アダムとなつた、どれだけ貴様らが力を合わせたところで話にもならんといつ」とを忘れるな「

ゲンドウの右手が更に初号機のコアの中へと沈む。

ダンッ！

後を追つ様に跳んだ零号機の両手がゲンドウを掴んだ。

そのまま初号機から剥がすように渾身の力を込める。

『……人類が生き延びるためには、私たちは滅ぶしかない……なら、せめて司令、貴方は私と一緒に！』

「…レイ」

『……私は碇くんにアスカに渚力ヲルにシズクに色んなものを貰つた、

貴方はくれなかつたものを……貰つた！！』

両手に力を更に込める。

『…………だからっ！今度は私がみんなにあげる……』

ゲンジウの目が怪しく光る。

瞬間、零号機の右腕が吹き飛んだ。

『…………っ！』

宙を舞つ零号機の腕を見ながらレイは左腕を離さない。

『…………シズク！零号機の腕を取つて……』

『レイ……？』

シズクは言われるがままに零号機の右腕を掴む。

掴んだその瞬間に3号機の取り巻く光が膨れ上がった。

『何よ……何みんな私を置いてけぼりにしてんのよ……私も、私も仲

間でしょうがっ！…』

アスカがその光景を見て絶叫した。

式号機は何度も何度も宙へと跳ぶ。

しかし、その度に3号機が放つ光によつて跳ね返されて地面へと叩きつけられる。

まるで、側に寄るなと言いたげに。

『私だけが生き残るなんて結末…認めないんだからあつー…』

『…………シズク』

『君の力は想いを光にして形にする」と、願うんだ、ありつたけの想いを込めて』

レイとカラルの声がシズクの心に届いたとほぼ同時に3号機の光が全身から初号機を掴んでいる手だけに集中していく。

僕は…サーディンパクトを防ぐ…！

「の未来を…人類を守つてみせるから…！」

シズクとレイとカヲルの思考がシンクロして驚異的な光が初号機  
ごとゲンドウを包む。

バシュッヒー音と共に初号機のエントリープラグが強制イジエ  
クトされて地面へと落下する。

『…シンジッ…』

アスカが式号機を慌てて立ち上がりさせて  
エントリープラグの予測落下ポイントを割り当て、急行した。

光が急速に縮む。

3号機と零号機とゲンドウと初号機を圧縮しながら。

式号機がエントリープラグを優しくキャッチした。

光の方に振り向く。

式号機が振り向いたとほぼ同時に光は消滅した。

ゲンドウも初号機も3号機も零号機もカヲルも全て飲み込んで。

『…………何よ…………何でも、自分一人で……やるなつて……あれほど、言つたのに……』

アスカの頬に一滴の涙が流れた。

バカツ

! ! ! !

その口を持つて、ネルフは閉鎖。ゼーレも裏舞台から姿を消し、シンジとアスカは日常へと戻った。

シンジは数日後に目を覚ました。

事の顛末をミサトに聞くと壁に何度も手を叩きつけて泣き叫んだ。ミサトとリック、加持が止めに入つてようやく落ち着きを取り戻して、ベッドに塞ぎ込む。

アスカもまた、自分の部屋に閉じこもりつきりになつていた。

人は思い出を忘れることで生きていく。

辛いことを忘れることで一種の精神が壊れることを自動的に避ける構造になつている。

だが、シズクたちが残した思い出はあまりに深く、シンジたち生き延びた人類の心に爪あとを残した。

そして、学校が始まる。

「…よひど

シンジは器用にフライパンを返すとオムレツがひっくり返った。

「ちゅうじんじ、まだなの？」

「ちゅうじんじは黙つて見ててください」

「私は食べる専門なの」

「シンジちゃんが手伝ってあげてもここによへ」

「//」

「ひぐ…へ、口調が段々あの子に似てきたんじゃない？」

「えいですか？」

ナウトヒー・シンジはテーブルに料理を運んだ。

「行つてやめや

「いってきまーす」

「こいつらがしゃい

学校に着くと、トウジたちが待っていた。

「なんや、おまいら、ゴッツい久しぶりやなあー。」

「うん、ちょっと…ね

「それにしても夫婦揃つて登校とは仲睦まじいことだ

「そんなんじゃないわよっ」

ケンスケの言葉にふんつとせっぽを向くアスカ。

誰も三人のことには出れない。

出すと全てが壊れてしまいそうな気がするから。

ガラツと教室のドアが開く。

老教師が入つてくると、壇上へと上がる。

「ほん、と咳払いを一つして、

「えへ、みなさんに重大なお知らせがあります」

と言つた。

「重大なお知らせ……何かしら、進路相談とか……？」

ヒカリがアスカに耳打ちする。

「知らないわよ……どうせ大したことじゃないでしょ……」

アスカはつまらなさうに頬杖をついてそう呟いた。

「入つてきなさい」

老教師の言葉に三つの人影が姿を表した。

銀髪の少年、水色の髪の少女、そして、それに瓜二つの黒髪の少  
女。

思わずシンジとアスカは立ち上がった。

三人はシンジとアスカを見て軽く微笑む。

「み、んな……？」

シンジが泣きそうになりながらなんとか言葉を振り絞った。

「ただいま…シンジくん」

そう言つてシズクが微笑むと同時にアスカが三人に抱きついていた。

「でも、どうやって…？」

放課後、五人で歩いていたシンジがシズクに聞いた。

「うん、僕の力は願いを叶える光を発すること…」

あの時、僕はサードインパクトを防ぐ、それだけを願った

「…………それを私が干渉したの」

「綾波が？」

「…………そう、私たちも生きていきたい、碇くんやアスカたちと暮らしたいって」

「気が付いたら赤城博士に拾われてた」

カラルが続ける。

「じゃあリツコは知つてたの！？」

「そういうことになるね、検査が終わるまでは内緒にしておくって  
言つてたから」

「何の検査よ？」

アスカがジト目でカラルを睨んで言った。

「それは、僕たちの身体検査さ、綾波さんの願いが叶つたかどうか

…のね

「綾波の願い…僕たちと一緒に暮らしたいっていつやつ?」

「そう、検査の結果が出て僕は思わず驚愕したね、三人ともリリン、人間と全く同じ肉体構成になっていたんだから」

「何それ…じゃあ三人とももう使徒じゃないの?」

「……………そう、使徒と使徒は共存出来ない、だから私は願ったの、みんな人間になれますように」

「じゃあ…」

「うん、僕たちはもうどこを調べても他の人と変わらない人類、人間だよ」

シズクがそう言つて微笑んだ。

「あ

カヲルがポツリと呟く。

「どうしたの、カヲルくん?」

「いや、リリンに成ったのなら男女としての垣根が出来たことになると思つて」

そう言つてカラルは自分の顎に手を当てた。

カラルの考えを読んだのかレイがシズクの前に立ち塞がる。

「…………シズクは渡さない」

カラルは暫くきょとんとした表情をしてレイを見ていたがやがて  
静かに微笑むと

「面白い、第2ラウンドを開始するかい？」

今度は人間として、どちらがシズクちゃんを幸せに出来るかを

「…………望むところよ」

「ふ、二人とも、止めてよーっーー！」

シズクが真っ赤な顔で叫んだ。

じーわ、じーわ。

電柱に止まつた蜩が鳴く。

その鳴き声は永久に続く。

これから始まる新しい人類の未来へと向かつて。

（完）

## 福音が鳴り響く（後書き）

後書き。

初めはシンジが時代逆行した話を書こうとだけ思つてて  
それだけじゃ捻りが無いからシンジをいつその事性転換させちゃえ、  
という行き当たりばつたりな発想で出来上がったのがシズクでした。  
途中レビューで某小説に酷似していると言われ確かめたら  
本当にどうしようもないくらい似ていて  
全部削除しようかと考えましたがもう既に全話書き終えた後だったので  
せっかく書いたので掲載しておいつと想つて一気に掲載といつ形に  
踏み切りました。

次回、何か書くことがあれば事前にちやんと調査して一度と  
パクリのようなものにならないように努めたいと思います。

最後の最後にみんな人類になつて終わつてます。  
基本的にハッピーエンド。  
これを崩さず書けてたなら幸いです。

では、最後になりましたが、  
新世紀エヴァンゲリオンへ未来への案内人へ  
そろそろ幕引きの時間です。  
このむやみに長い文章を読んでくれた皆さん、本当にありがとうございました。

心から感謝の念を込めて…… 謝。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8253l/>

---

新世紀エヴァンゲリオン～未来への案内人～

2011年5月23日10時00分発行